好きです。さっぽろ

札幌観光協会50年記念誌

好きです。さっぽろ

札幌観光協会50年記念誌

50年記念誌刊行にあたって

札幌観光協会が、幾多の困難や障害をのり越えながら、今年で創立五十周年という大きな節目を迎え、ここに記念誌を発刊する運びになりましたことは、関係者のひとりとして誠に喜びにたえません。顧りみるにつけ、五十年という歳月の蔭には、観光協会をつくりあげた多くの先人の労苦が刻み込まれ、これらの人々の努力を讃えずして五十年の記録をひもとく事は出来ません。

本協会が設立された昭和十一年は、観光が産業の一部門であると高唱され、観光客受入機関が数年前から徐々に整い、また第五回のオリンピック冬季大会が札幌市開催に内定するなど、内外観光客の誘致ムードが盛り上り観光がにわかに脚光を浴びはじめた時であり、このような動きに呼応して本協会が設立されたのであります。

その後半世紀、本協会は、札幌市を国際観光都市として、また市民の健全な憩いの場としてさらには四季を通じた美しい観光地に育て上げ、今や年間一千万人の国外、国内の観光客が訪れるように発展したことは、大きな喜びであります。

八十年代は、新しい「札幌の観光元年」であります。多くの企業の複合体ともいわれる観光事業に、関係機関や各事業体ならびに市民各位と緊密に提携しながら、五十年の歴史を築いたことを思い、事業推進への新たな責務を痛感しております。

五十年を迎え、札幌創建の人びとの雄図を再認識し、次代に継承させてきた先輩市民の郷土受意識を我々のものとして、大札幌建設に力強く歩みたいと念願致します。

会員各位と関係諸団体の今後益々のご支援、ご協力を心からお願い申し上げ、発刊のことばと致します。

社団法人　札幌観光協会会長

50周年に心からのお祝いを

昭和十一年の創立以来、札幌市の観光振興のために一貫してご尽力され、この度、記念すべき五十周年を迎えられた(社)札幌観光協会の皆様に、心からお祝いを申し上げます。

この半世紀の歩みは、まさに本市の観光の歴史そのものであり、協会を抜きにして今日の隆盛は考えられないと申しても過言ではありません。現在、本州方面から本道へ来る観光客の三分の一は札幌を訪れると言われ、道内の他の地域に比べても、断然優位を誇っております。これも、皆様の長年にわたる様々なご努力の積み重ねによるものと存じ、敬意を表するとともに、深く感謝申し上げる次第でございます。

私自身も仕事柄、協会とは長いお付き合いになりますが、中で一番忘れ難い思い出は、やはり「雪まつり」のことでございます。戦後間もない頃、市の経済部長をしていた私や協会の皆さん方とで相談して、試みとして始めた「さっぽろ雪まつり」が、今や札幌を代表する、国際的なイベントに成長しているのを見ますと、誠に感慨無量のものがございます。

最近は道内観光も、雪まつりを始めとする各種の催しやスキーブームの影響で、かつての夏中心の観光から通年観光へと変化しつつあるとのことでございます。そうした意味で、観光事業は将来的にも大きな可能性をもっており、皆様には今後とも広範なPRや、本市の特色を生かしたユニークな企画で、観光さっぽろのために、かわらぬご協力を賜わりますように期待しております。

今井会長始め皆様のますますのご健勝、ご活躍と、札幌観光協会の一層のご発展を心からお祈りいたします。

札幌市長　板垣武四

目次

あいさつ

50年記念誌刊行に当って……㈳札幌観光協会会長　今井　道雄　…2

50周年に心からお祝いを……札　幌　市　長　板垣　武四　…3

写真で見る札幌観光協会の50年

ロマンの故郷さっぽろ　ポプラ並木が影を落とす緑の羊ヶ丘　百余年の歴史を刻む時計台　大通公園は都会のオアシス　ネオン輝くすすきの街　開拓時代の熱い息吹き　緑のキャンパス　石狩平野の大パノラマ　ホワイトイルミネーション　さっぽろ雪まつり　姉妹提携現在四ヵ国　こぼれる笑みが札幌をPR　ポスターで見る雪まつり　ロマンのイメージ　鮮やかに焼きついた1972冬　青空に高らかに響く笑い声　定山渓温泉

札幌観光協会50年のあゆみ

一、札幌の〝観光元年〟……51
陸軍大演習がきっかけ　初代会長には橋本市長

二、公会堂で創立総会……55
役員は公職者が独占　会員は会費で区別　多彩だった事業計画

三、案内所と観光PR……60
観光案内所は大繁昌　『観光の札幌』を発行　幻の札幌オリンピック

四、戦中戦後……64
紀元二千六百年事業も　食糧確保と健歩の会　進駐軍の土産品捜し

五、旅館とホテル……68
明治末期には五十余軒　山形屋と丸惣が双壁　国際観光ホテルが16も

六、さっぽろ雪まつり……73
最初は二日間の催し、中、高校生が雪像を作る　会期を二月上旬に移す

七、国際化した雪まつり……78
自衛隊の協力で大雪像　オイルショックで苦労　外国へも雪像の出前

八、さっぽろ夏まつり……82
初めは中島公園中心、定山渓、すすきのも加わる　納涼ビアガーデン大好評

九、ライラックまつり、菊まつり……86
札幌の木に選ばれる　菊まつりは地下街に

十、トウキビと啄木……91
明治時代からの風物詩　観光協会の直営事業に　詩人の住むべき都会

十一、大通公園……96
最大のイベント会場、防火帯が公園になる　札幌方式の大通花壇

十二、札幌オリンピック……102
ローマ総会で「われ勝てり」　街づくりに約二千億円　世界にサッポロの名が
十三、地下鉄と地下街……107
馬鉄から地下鉄へ、地下街は突貫工事で　二百億円を越える商店街
十四、時計台……112
もとは屋内軍事教練場　もっぱら図書館の役割　ビルの谷間でも生き続ける
十五、羊ヶ丘開放……117
ジンギスカンの発祥地　観光協会が新名所作り　結婚式場としても繁昌
十六、博覧会・博物館……121
博覧会は開拓政策推進策　〝人間大砲〟思い出に残る　望まれる博物館の充実
十七、狸小路と薄野（すすきの）……126
あいまいな狸小路の起原　勧工場で栄える　共同精神で独特の街に
十八、ネオン街……130
開拓使が作った歓楽地　官公吏相手のカフェー街　いまや若者が主人公に
十九、年輪をへて法人化……135
阿寒国立公園の恩人　民間主導の観光協会に
二十、好きですSapporo……139
六十人のミスさっぽろ　国際親善にも力を入れる　ホワイトイルミネーション

座談会

一、観光の国際化を目指す……145
二、雪まつり・あの日の証言（再録）……153
前期編・戦後の冬の暮しに一条の光求めて
中期編・家族連れに人気の真駒内会場
後期編・雪像は大きく、舞台は世界へ

資料編

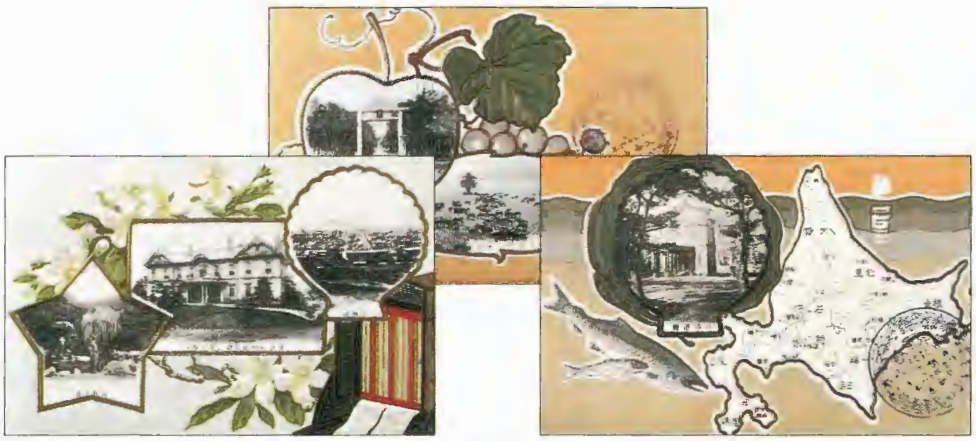
一、札幌観光協会設立趣意書……175
二、札幌観光協会会則（設立時）……176
三、役員、顧問、相談役、評議員、職員（設立時）……179
四、会員名簿（設立時）……181
五、札幌観光協会昭和十一年度収入支出予算……184
六、役職員名簿（昭和31年5月1日現在）……185
七、会員名簿（昭和31年5月1日現在）……186
八、札幌観光協会定款（現在）……190
九、社団法人札幌観光協会役員名簿（昭和61年6月1日現在）……195
十、社団法人札幌観光協会会員名簿（昭和61年6月1日現在）……198
十一、さっぽろ雪まつり一覧……214
十二、札幌観光協会関係年表……216
あとがき……㈳札幌観光協会副会長　薩　一夫……223

いまもむかしも変わらぬ、ロマンの故郷、さっぽろ

▲北大植物園（能勢真美画・「観光の札幌」から）

▲札幌観光主要案内図（昭和11年）

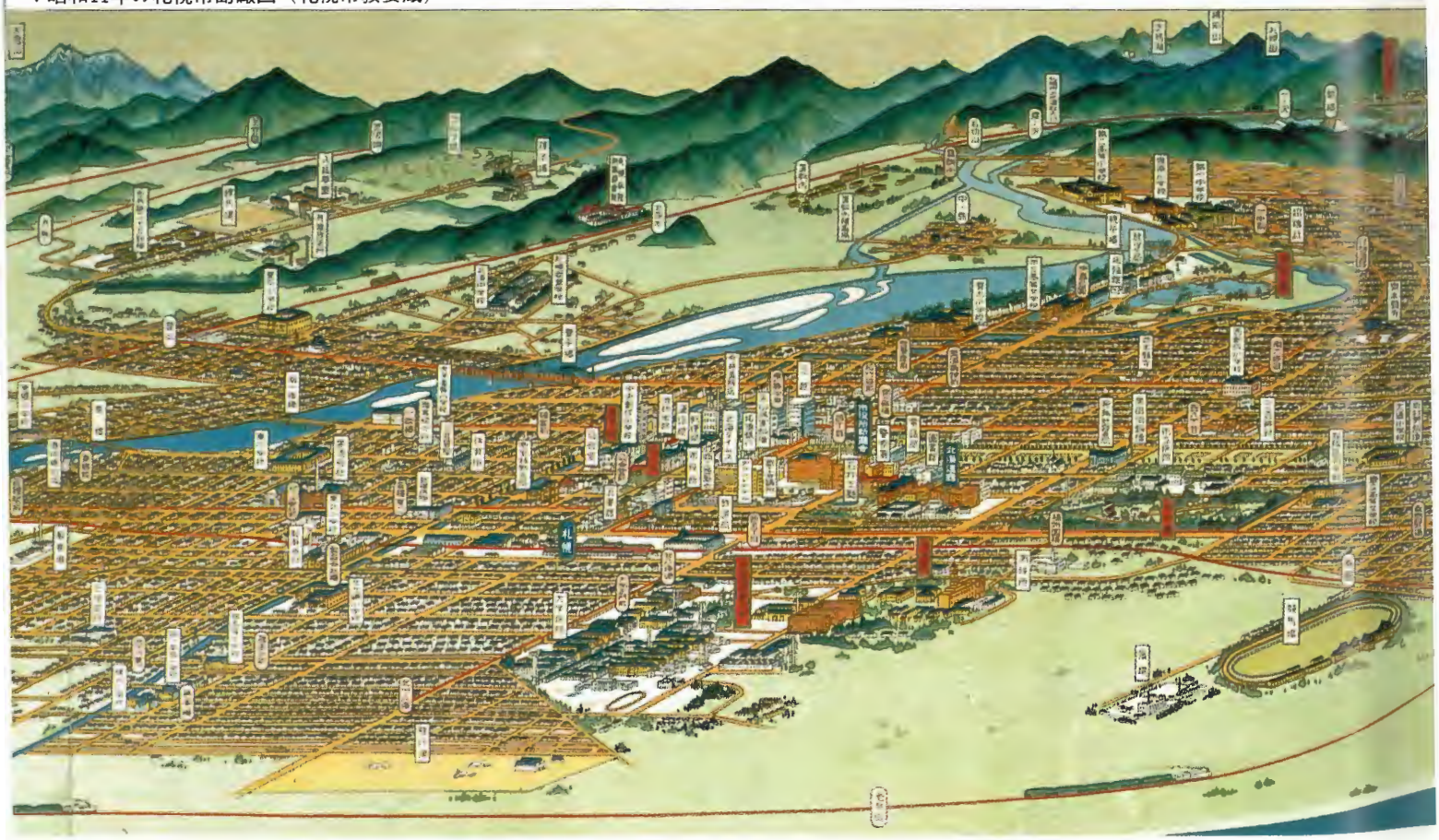
▲雪の創成川（能勢真美画・「観光の札幌」から）

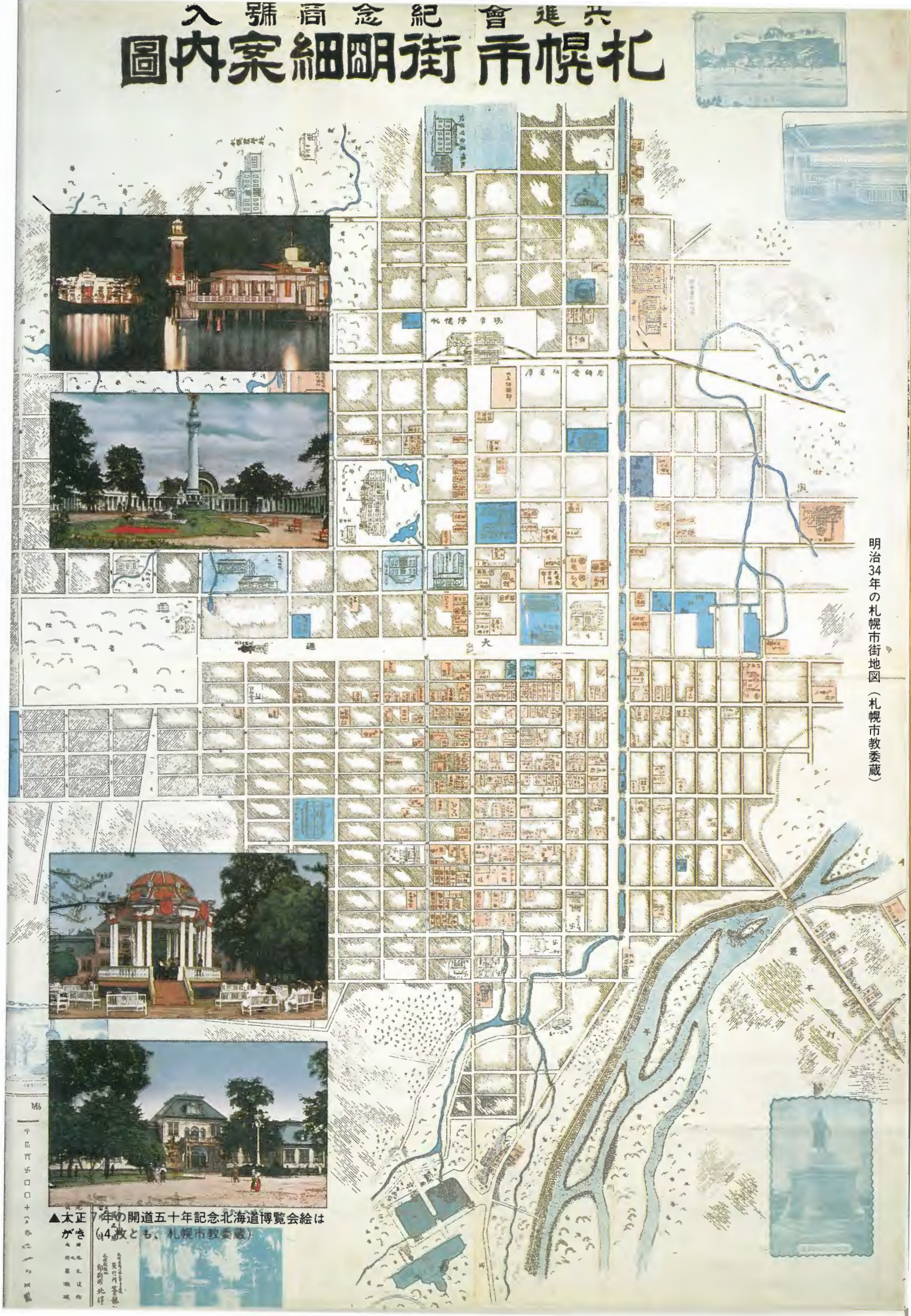


▲明治44年東宮殿下本道行啓記念絵はがき
（３枚とも、札幌市教委蔵）

▲国民体育大会冬季大会記念誌
（昭和16年）

▼昭和11年の札幌市島瞰図（札幌市教委蔵）





明治34年の札幌市街地図（札幌市教委蔵）

▲太正7年の開道五十年記念北海道博覧会絵はがき（4枚とも、札幌市教委蔵）

SAPPORO

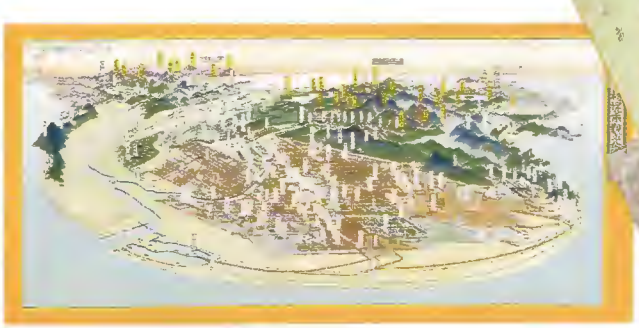
KOTONI

CENTRAL SAPPORO

SAPPORO
AND ITS VICINITY

JAPAN TRAVEL BUREAU
SAPPORO BRANCH

▲交通公社札幌支社が進駐軍向
けに発行した札幌案内図



▲「支笏洞爺国立公園を背景とする札幌市観光島瞰図」
（昭和27年）

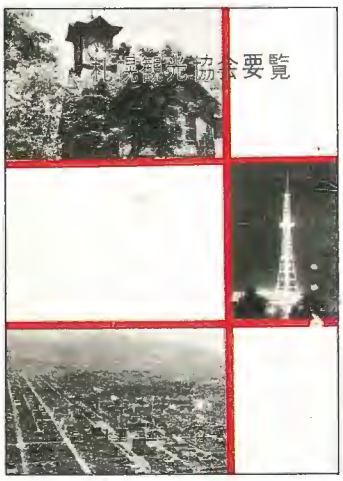
▲観光協会発行の
パンフレット類

▲「四季の札幌」
絵はがき

◀札幌観光協会創立直後に
発行した札幌紹介雑誌
（昭和12年）

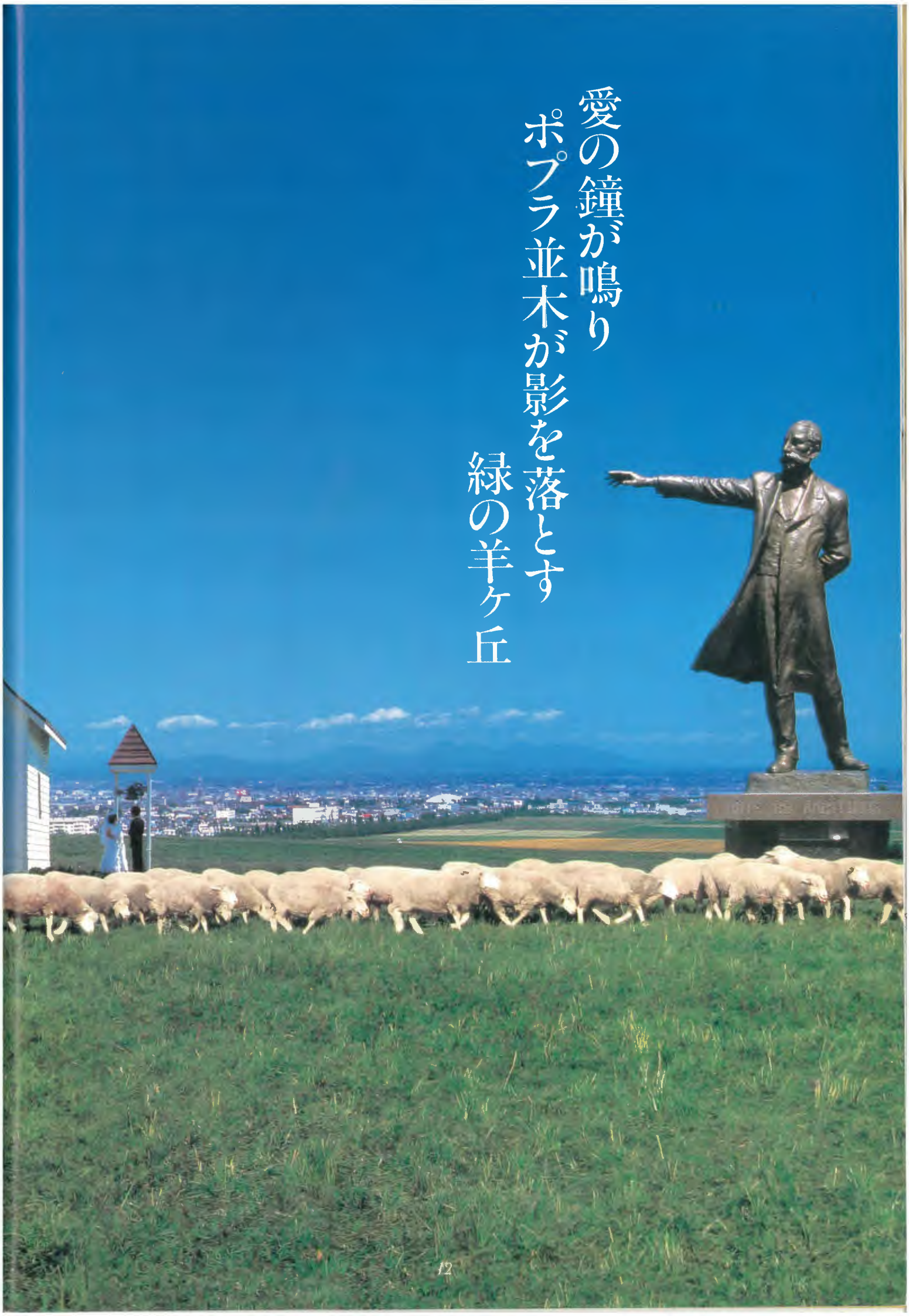
▲雪まつり30年史（昭和54年）

▲札幌観光協会30年記念誌（昭和
41年）



▲札幌観光協会20周年を機会に発
行（昭和32年）

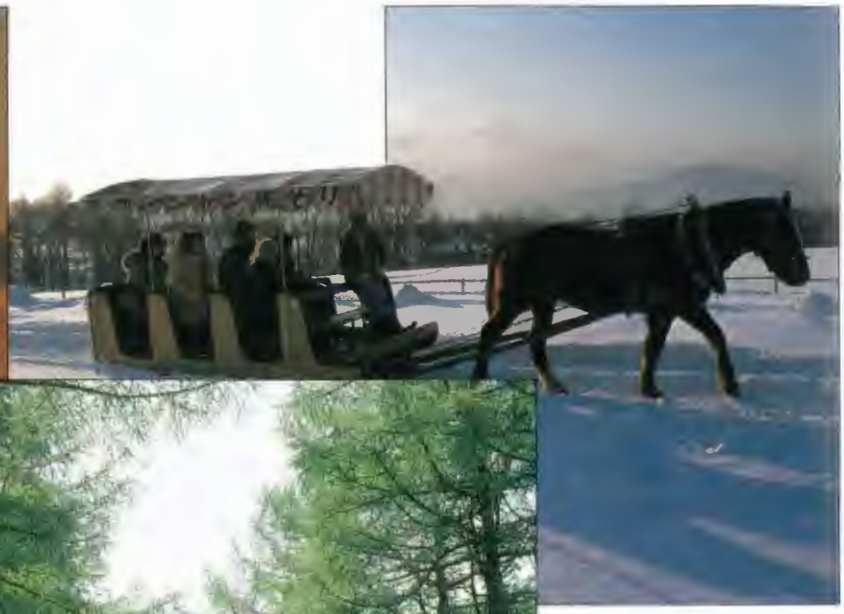
国際都市札幌の観光を、
ファインダーのアングルから観る



愛の鐘が鳴り
ポプラ並木が影を落とす
緑の羊ケ丘

▲左からレストハウス、オーストリア館、ウエディングパレス

▲羊ヶ丘冬の夕日



▲観光客に人気の馬ソリ

▲農林省北海道農業試験場正面
入口のカラマツ並木

透明な音色が心にひびく
百余年の歴史を刻む時計台

東京の工部省赤羽工作分局で作られたという鐘

100年以上働きづめの歯車とワイヤーロープ

イベントの広場
大通公園は都会のオアシス

大通公園のケヤキの大樹

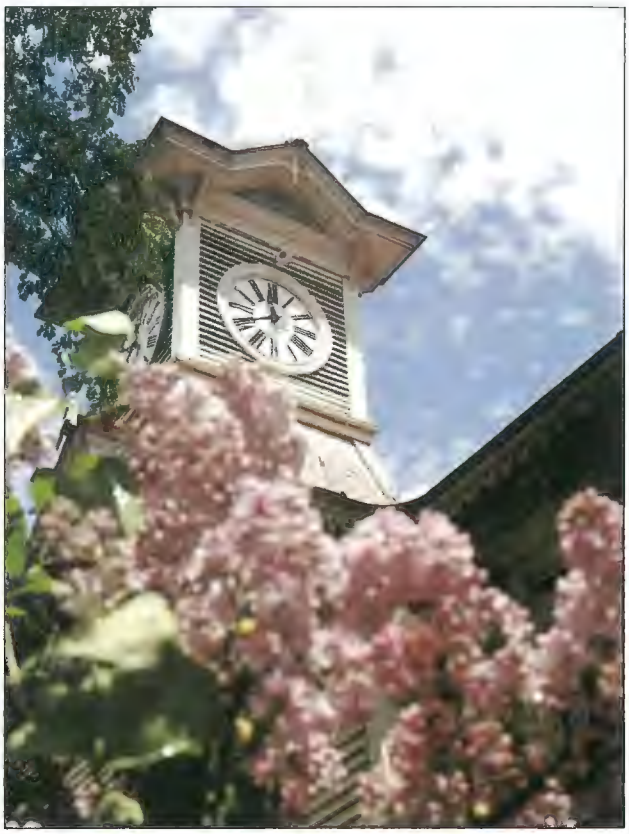
大通公園４丁目広場の噴水

▲大通公園は市民の広場

▲夜のテレビ塔

▲大通公園名物とうきび売り

▲おいしそうに食べるとうきび

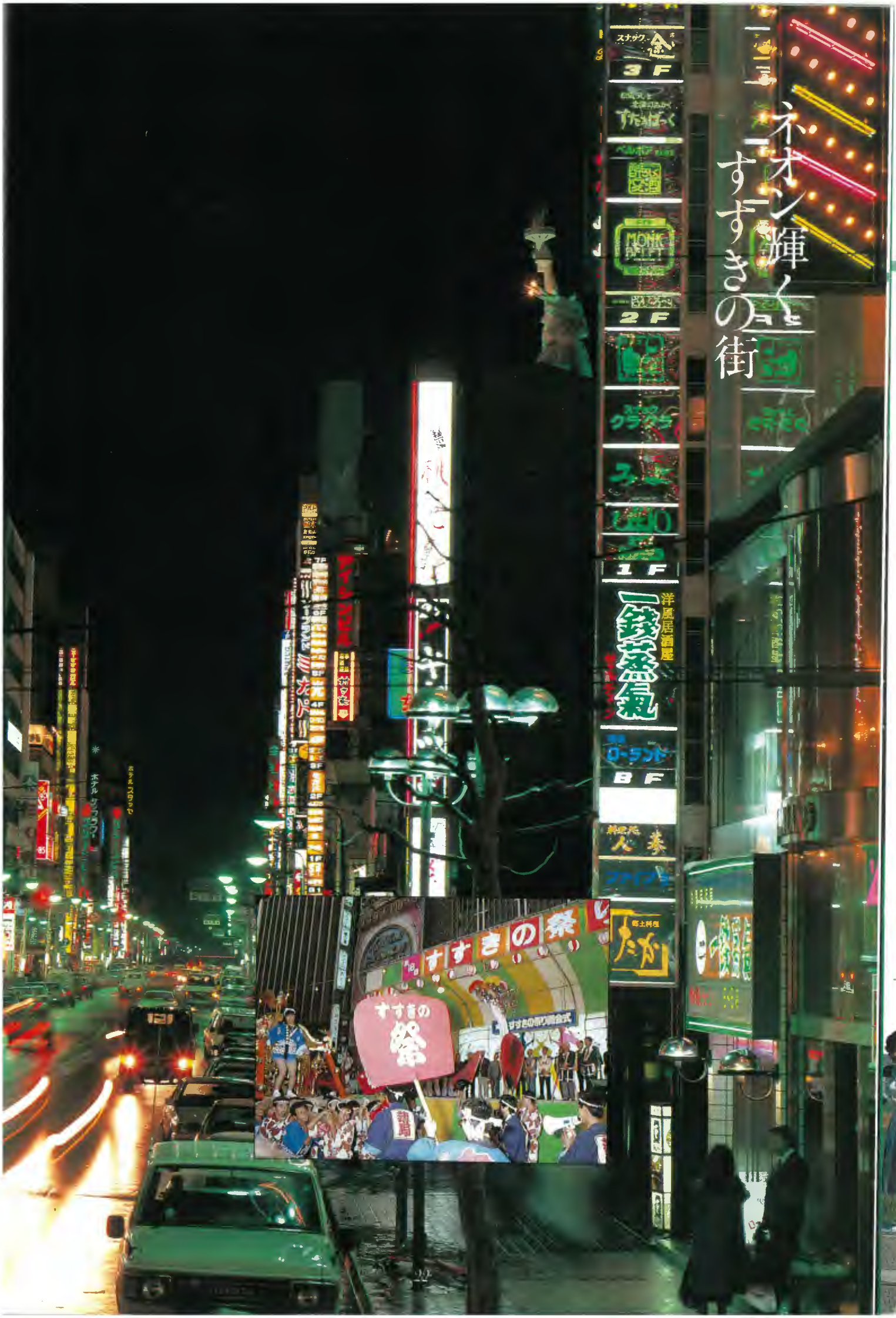


▲ライラックの花と時計台

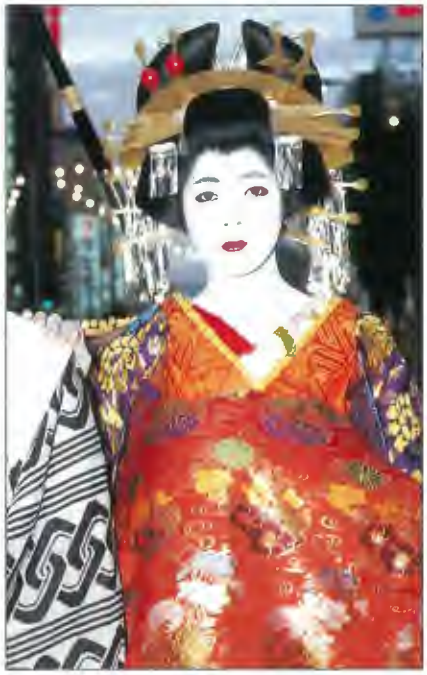
▲雪の降る日にも人気がある時計台

▲時計台まつりには明治時代の仮装も（昭和59年）

ネオン輝くすすきの街



▲狸小路の夏まつり


▲60年すすきのまつりのおいらん道中

▲地下鉄大通駅

▲地下街オーロラタウン

開拓時代の熱い息吹き
赤レンガに刻まれた遥かな時間

▲北大植物園の事務所（札幌農学校の植物学教室を移築）

▲北海道庁旧本庁舎（明治44年、国指定重要文化財）

▲豊平館（明治13年、国指定重要文化財）

ここには古き良き時代が息づいている

▲札幌ビール園（旧製麦工場、明治23年）

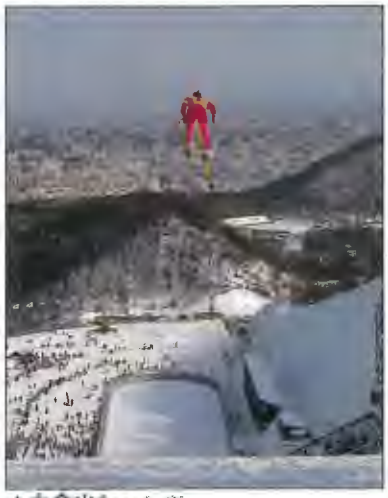
▲「北海道開拓の村」の入口にある旧札幌駅（再現）

熱いフロンティアスピリットを秘めた緑のキャンパス

北海道大学のイチョウ並木

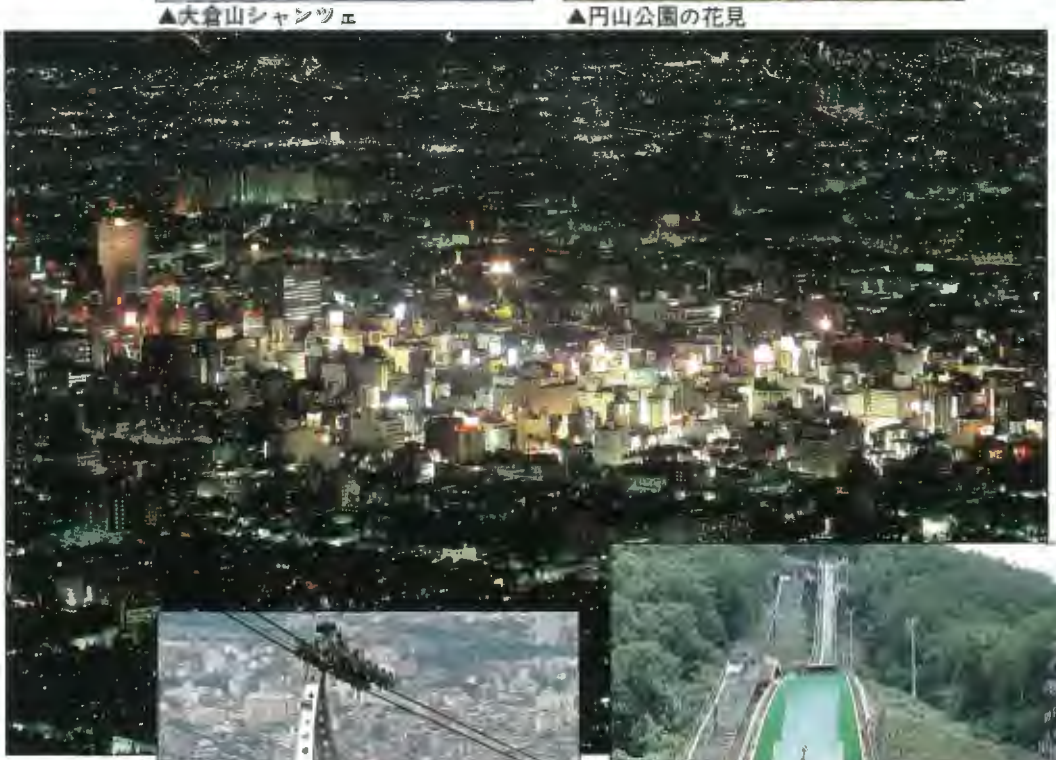
北海道大学農学部

百五十万人の夢がきらめく 石狩平野の大パノラマ



▲大倉山シャンツェ

▲円山公園の花見



▲藻岩山頂から望む札幌夜景

▲藻岩山ロープウエイ

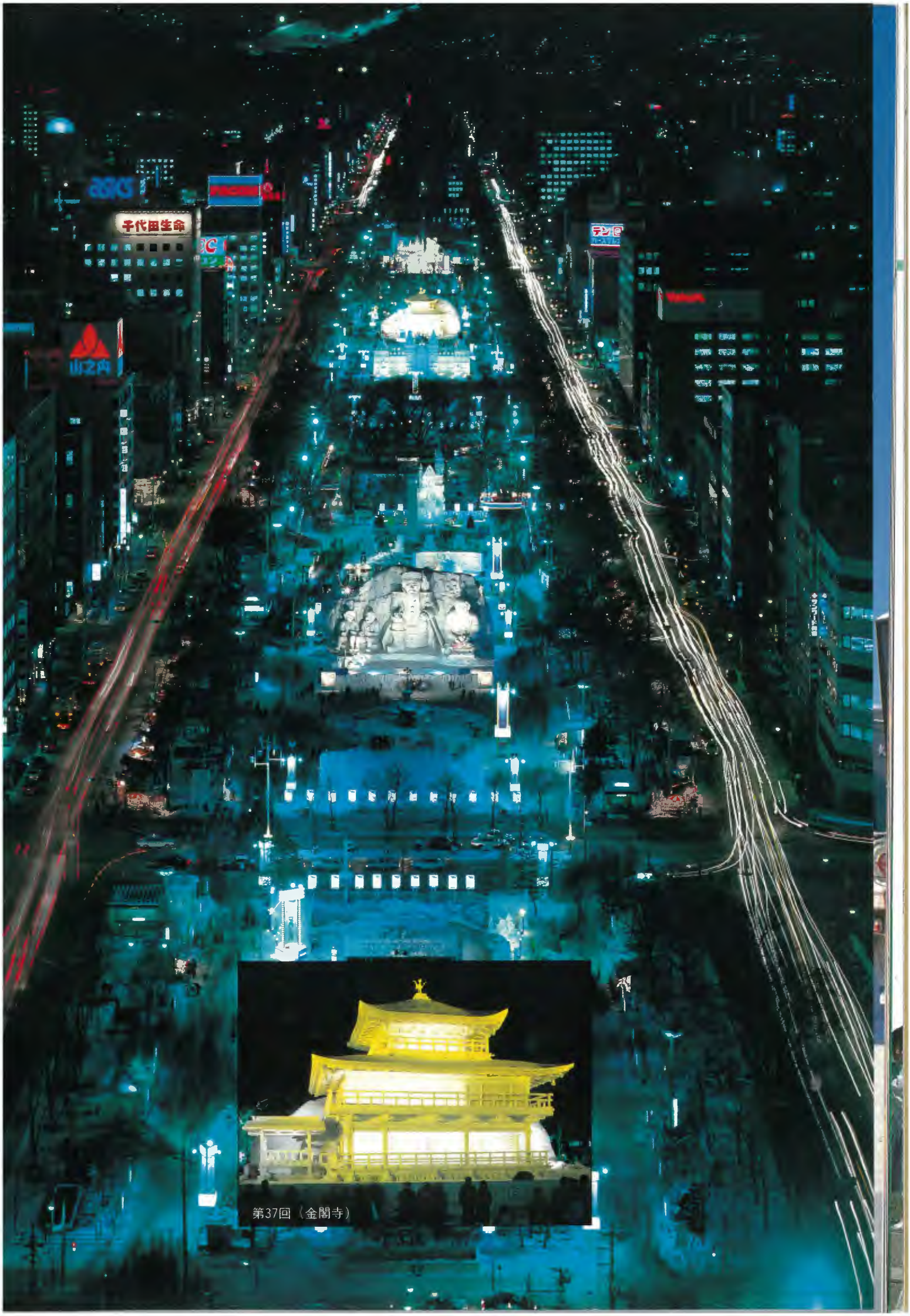
▲宮の森シャンツェのサマージャンプ

光と雪の芸術
ホワイトイルミネーション

世界の注目を集めて
さっぽろ雪まつり

第26回（夢の城）

第28回（西郷さんと桜島）



第37回（金閣寺）

▲第13回（オリンポス）

▲第１回（裸像）

▲第21回（菩薩半跏像）

▲第18回（ノアの箱舟）

▲第15回（スフィンクス）

▲第25回（さるかに合戦）

▲第22回（竹取物語）

▲第30回（桃太郎）

▲第28回（ミューヘン市庁舎）

◀第29回(シドニータウンホール)

▲第34回（大阪城）

▲第31回ＳＬ義経号の氷像

▲第35回（ルパン三世）

▲ 上.大雪像の作成風景
下.国際広場の雪像作成中

▲第35回（イーグルサム）

▲34回（セントメアリー大聖堂）

世界中に友好の架け橋を
姉妹提携現在四カ国

▲アリヨシ知事に表敬したハワイ親善訪問団

▲ソウル観光協会の李会長と握手する薩副会長

▲香港札幌親善協会発会式であいさつする今井会長

▲ホンコン（1977.5.16）

▲ハワイ（1982.2.5）

▲シドニー（1983.2.2）

▲ソウル（1985.2.7）

▲真駒内会場のシドニーオペラハウス

▲大通会場のハワイ・イオラニ宮殿

▲大通会場のホンコン時計タワー

▲真駒内会場のソウル南大門

札幌は美人の名産地
こぼれる笑みが札幌をPR

▲61年度に選ばれたミス

▲首相宮邸にて

▲ハワイにて

▲銀座にてスズランのプレゼント

▲ライラックまつりにて

北の白いワンダーランド
ポスターで見る雪まつり

▲第１回雪まつりのポスター（昭和25年）

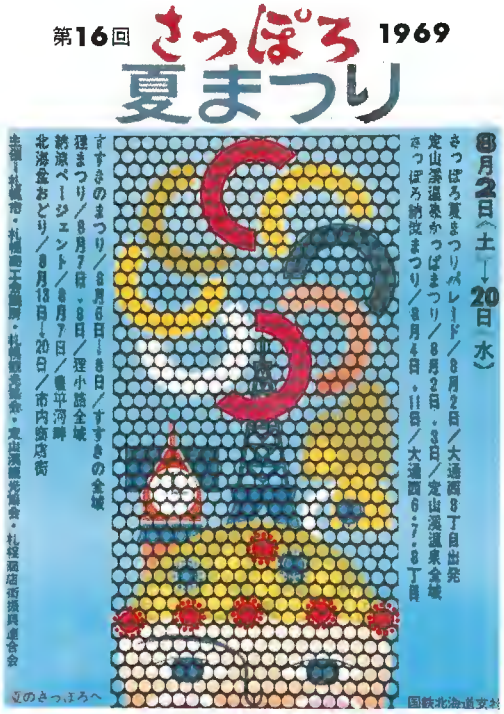
30th SAPPORO SNOW FESTIVAL

Winter in Sapporo
さっぽろ
第20回 雪まつり
1969年 1月30日 2月2日
SAPPORO SNOW FESTIVAL

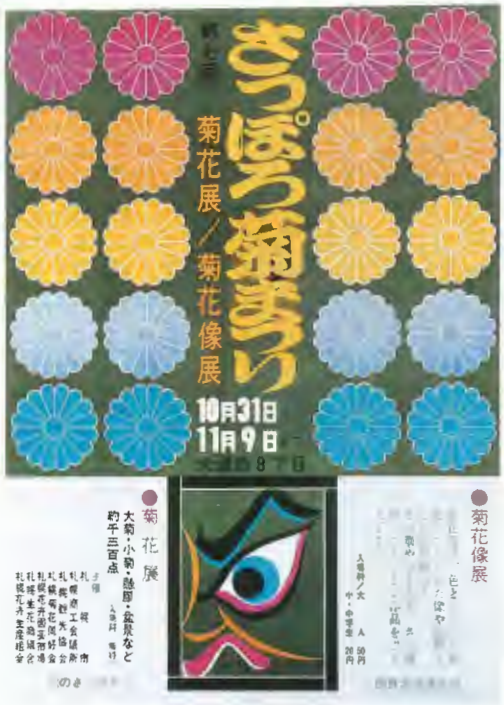
33rd
SAPPORO
SNOW
FESTIVAL
さっぽろ雪まつり
1982.2.3-7

Sapporo Snow Festival
第28回さっぽろ
雪まつり

時は流れ時代は変っても…
イベント好きは今も変らず



▲第１回さっぽろ夏まつりのポスター（昭和29年）


さっぽろ菊まつり
菊花展／菊花像展
10月31日
11月9日
●菊花展
大菊・小菊・懸崖・盆景など
約千三百点
●菊花像展

SAPPORO
LILAC
FESTIVAL
1968
さっぽろ
ライラックまつり
6月2日 3日 4日 5日
Sapporo Lilac Festival 1968

第13回さっぽろライラックまつり
Sapporo Lilac Festival 1974
5月／28(金)29(土)30(日)日
花の北海道

花の北海道
さっぽろ
ライラック
まつり
5月29日 30日 31日
SAPPORO
LILAC
FESTIVAL 1970

時間と風土が育んだ札幌のまち
ロマンのイメージ

歓声が今も耳に蘇える鮮やかに焼きついた1972冬

札幌っ子は陽気に騒ぐのが大好き
青空に高らかに響く笑い声

▲ライラックまつり

▲夏まつり

▲菊まつり

▲北方圏さっぽろフェスティバル

▲国際スキーマラソン大会

▲夏まつり

▲豊平川のイカダ下り

▲夏まつり

◀豊平川畔のマラソン

▲盆おどり仮装大会

▲盆おどり

湯けむり&雪けむり
定山渓温泉

▲定山渓温泉街

▲豊平峡ダム

▲カッパまつり

▲札幌国際スキー場

札幌観光協会50年のあゆみ

一、札幌の〝観光元年〟

札幌駅前から市内へ向う天皇陛下のお車（昭和11年10月1日）

札幌観光協会が設立された昭和十一年という年は、今にして思えば日本にとっても北海道にとっても、昭和史の中での大きな曲がり角に当たっていた。

二月にはあの二・二六事件が起こり、高橋是清蔵相など政府や軍の要人が殺害された。事件後、粛軍の名の下に軍部の政治支配が強化され、翌十二年七月の日中戦争ぼっ発、十一月の日独伊防共協定締結、と太平洋戦争への坂道を転がり始めることになる。

昭和十一年の北海道は、六月十九日に稚内から根室を結ぶオホーツク沿岸にかけて皆既日食がみられ、国内外の学者、研究者が約二百人も集まった。日食という誰もが関心を持つ科学イベントとあって、道内はしばしの間、国際親善ムードにわきかえった。事実、この年を境に、北海道を訪れる外人観光客は激増した。

同年十月二日から五日まで、札幌市郊外の島松、恵庭一帯で、陸軍特別大演習が行われた。参加将兵二万五千人という大規模なもので、この陸軍最大の年中行事が始まった明治二十五年以来、北海道が舞台になったのは最初で最後であった。というのは、中国との将来戦に備えて、地勢が似ている北海道が選ばれたといわれ、早くも翌年七月には不幸な現実となったからである。

しかし、北海道の人たちは、誰もそんなことには気付かない。大元帥として演習を統監される天皇陛下が、明治天皇以来六十年ぶりに、北海道内を十五日間にわたって行幸されたこと、随行の宮様方、広田弘毅首相以下各大臣、貴族院・衆議院議員、陸海軍の将官、外国武官らが大挙して来道したこと、などを素直に喜んでいた。

とくに、大演習最後の観兵式が、十月六日に当時の飛行場で行われた札幌市内は、天皇陛下が九日間もご滞在になったほか、将兵二万五千人と関係者すべてが集まり、汽車で来た見物客だけで二万五千人にものぼった。当時の札幌市の人口は二十万一千人だったから、一時的に四、五割もふくれ上がったに違いない。花電車が五台も走り、夜は提灯行列が中心街をねり歩き、狸小路はすれ違うのも大変な混雑だった。

札幌市民は開びゃく以来の賑わいに興奮し、明るい将来の夢をしばしの間味わった。アジアでもヨーロッパでも、暗い戦雲がしのび足で近づいているのにも気付かずに…。

北海タイムス　昭和十一年四月十一日

観光協會を組織

物産の紹介や宣傳

遊覽客誘致にも一肌

札幌を中心に

肅選のあと始末

出征勇士が裁かる

齋原派の運動員は"四ヶ月

白米小賣値段に

価格を協定

札幌観光協会創立の予告記事（昭和11年4月11日付）

陸軍大演習がきっかけ

さて、わが札幌観光協会の設立には、皆既日食の観測と、陸軍特別大演習の実施が、深くかかわっていた。日食観測チームと大演習関係者の大挙来札を機会に、にわかにまとめ上げられた組織である、といってもいいほどの舞台裏だった。

「大演習・黒い太陽／観光北海道宣伝／道庁も本腰で乗出す

六月の皆既日食観測隊の来道、八月の全日本エスペラント大会（札幌）の開催、夏季の内外観光客や十月の陸軍特別大演習を控え、北海道庁商工課に於ては本年度観光費目として千五百円を始めて予算に組んだが、七百円と査定された。額こそ少いが、とに角観光施設費としての予算の決定公認を見たことは、確に画期的飛躍である。

一方、林務課内に事務所を置く北海道景勝地協会では、昨年度の予算千円に対し本年度には一躍二千五百円となり、この五月までには温泉地紹介パンフレット、阿寒並に大雪山国立公園及び利尻島の絵葉書を発行し、内外の大宣伝に乗出すことになっている。

札幌市役所経済課の観光係に於いても、本年度こそ三千円程度の予算を初めて組み今月二十日頃査定されるはずであるが、兎に角観光都市の面目を発揮すべく攻究中である。かように当局は何れも観光予算を初めて具体化しつつあって、これは単なる観光事業としてよりは、更に産業北海道の紹介宣伝にも大いに資する意味から、その徹底を各方面から期待されている」

（「北海タイムス」昭和11年1月15日付）

「札幌市役所に／観光係を設置／駅には観光相談所

東北海道工業展覧会、第四回全道エスペラント大会（八月）、特別大演習（十月）等を控えて居る札幌市では、道内六市に何れも観光協会があり、かつ内地他府県には四百二十もの観光協会があるばかりでなく、札幌と同じ人口を有する都市は勿論、全国で百七十二市が観光課を有しているに鑑がみ、本年度こそは八千円の予算をもって札幌市役所経済課に於て観光係を設置して、宣伝誘致、案内接遇、紹介あっ旋、調査改善、施設計画、に当ることになった。

また札幌観光協会をも近く実現せしめて之が徹底を期する方針であるが、之が主体たる札幌旅館同業組合では、過日の総会に於て市が計画中の札幌駅構内に観光相談所を設置する費用千百円を寄付するという決議をした。かくて札幌観光協会の事業がいよいよ第一歩を踏出したこ

とになる訳である。

因に札幌鉄道局の調査による最近の札幌市宿泊者数は、昭和八年には△道内九万九千五百七十一人△道外四万三百五十人△外国人二十四人、昭和九年には△道内六万七千四百七十九人△道外二万五千五百七十七人△外国人九十三人、昭和十年には△道内十一万六千七百七十六人△道外五万二千二百三十四人△外国人七百三十五人となった」（「同」同年1月27日付）

二つの記事には多少の食い違いもあるが、北海道庁や道内外の他都市に比べ札幌の観光行政が立ち遅れていたこと、北海道の他市（函館、小樽、室蘭、旭川、帯広、釧路）には観光協会があったのに札幌だけなかったこと、それが日食や陸軍特別大演習を目前に控えてようやく重い腰を上げる気運になったこと、…などがうかがい知れる。

初代会長には橋本市長

道内他市の観光協会で、創立年月日がはっきりしているのは、室蘭昭和六年四月、釧路同八月、旭川同九年五月ころ、函館同十年四月などである。

なぜ、札幌観光協会の設立が道内七市の最後だったのか、札幌市は観光行政にあまり熱心でなかったのか、については記録も証言者も残っていない。ただ、昭和初期から十年まで札幌市の財政が極度に苦しかったことと、無関係ではなかったろうし、当時の橋本正三市長と佐上信一北海道庁長官の間が、何かとぎくしゃくしていたことも影響したのではないか、とも考えられる。

札幌観光協会初代会長になった橋本正治札幌市長

橋本市長は、すでに大正年間に北海道庁の勧業、土木、内務各部長を歴任、さらに鹿児島、山口の県知事も経験したベテラン内務官僚だった。札幌では市営の水道、電気事業の実現に情熱を傾けていた。一方、内務官僚としては後輩に当たる佐上長官は、長崎県と京都府の知事を経て北海道へ来ただけに、観光については理解が深く熱心だった。昭和九年に開業した札幌グランドホテルは、佐上の力に負うところが大きかったのである。

また当時の観光行政の推進は、佐上個人の識見というだけでなく、国の重要施策の柱でもあった。昭和初期の不景気、輸入の大幅超過の対抗策として、貴族院と衆議院は「外人来遊促進に関する決議」を、昭和四年三月に可決した。それを受けて、政府は翌年鉄道省に国際観光局を設置、ホテル事業の助長、海外宣伝の強化を図った。内務省も昭和九年に十二カ所の国立公園を指定した。北海道では阿寒と大雪山が選ばれた。

だから、札幌をはじめ道内の主な市町村には、国と道庁の両方から観光行政促進が働きかけられたはずである。札幌以外の六市は市長を会長とする官製の観光協会を早々と組織し、阿寒や大雪周辺の町村でも似たような体制を整えた。だが、自治体に対する政府の財政方針に強い批判を持ち（新

昭和十一年当時の札幌市役所

聞紙上に論文を出したこともある)、念願の市営電気事業を佐上長官の〝あっ旋〟で中止させられたばかりの橋本市長が、政府の道庁お声がかりの観光行政に、おいそれと飛び付かなかったとしても不思議ではない。

しかし機が熟したというか、追いつめられた結果というか、日食観測と特別大演習の大義名分をえて、それまで腰が重かった橋本市長も、昭和十年ころには観光協会設立を決意する。というのは、札幌観光協会初代書記(のち事務局長)となった近藤直人が十年三月に釧路営林区署長を退職して、橋本に就職を頼んだところ、「明年観光協会を設立するからその仕事をやれ」といわれた、と『札幌観光協会30年記念誌』に書いているからである。ただし、近藤が嘱託として札幌市役所に入ったのは十年十月、しかもその仕事は観光関係ではなく、税務課実収係というところだった。市税の滞納者のところを、一軒一軒回って歩き、催促したり集金したりという、大学出の営林区署長をやった男にとっては、およそ場違いなつらい仕事だったようだ。

いくら年度途中とはいえ、このあたりにも、当時の札幌市の観光行政の姿勢がうかがわれる。ようやく翌十一年四月になって、近藤は経済課商工係に配置されて、観光協会創立の準備を始めることになる。ところが、さきの新聞記事にあった経済課観光係の設置は、なんと十四年も後の昭和二十五年九月一日に、経済部振興課観光係として、ようやく実現したのである!

それにしても、昭和十一年こそ、札幌市にとって本格的な観光行政の幕明け、〝観光元年〟であったことには間違いない。

なお、この時代の札幌市役所は、いまの札幌市役所庁舎横駐車場(北一条西二丁目)のところにあった木造二階建て、明治四十二年以来の古い建物だった。鉄筋コンクリート造四階建ての新庁舎が、前年から北一条西四丁目に建てられていたが、完成して移転するのは昭和十二年四月になってからである。

二、公会堂で創立総会

札幌観光協会の創立総会（〝協〟の字が間違っている）

観光協会設立への踏み切りは遅かったが、昭和十一年四月に体勢が整ってからの動きは、まさに疾風迅雷（しっぷうじんらい）という言葉そのままの早さだった。四月十一日に市役所で札幌観光協会創立協議会開催、同十五日創立準備委員会開催、五月九日創立総会招待者に案内状出状、そして同十六日（木曜日）の午後、創立総会並びに発会式挙行、と記録されている（『観光の札幌』昭和12年1月20日発行による）。

もちろんその間には、創立協議会や準備委員会の人選とか依頼、趣意書や会則、事業計画案の作成とか打ち会わせ、会員や役員構成についての根回し、…などがあったはずだ。いろいろな文書のガリ版切りなど印刷も大変な仕事だったろうし、総会と発会式（いまでいうパーティー）の準備だけでも、当日の出席者二百四十六人（前掲の『観光の札幌』記載）の顔触れからいっても、大仕事だったと想像される。

ただ、前にふれたように、道内の他都市にはすでに観光協会があったので、設立の手順や会則、事業計画、役員構成などには、意外と頭を悩ませないですんだのかも知れないが…。例えば会則のうち「目的」の項を、前年に出来た函館観光協会と、札幌の分を並べてみると、次の通り地名以外は、ほとんど同文である。

函館　「第二条　本会ハ函館市ヲ中心トスル渡島半島ノ名所旧蹟、物産ノ紹介並観光ノ利便ヲ図ルヲ以テ目的トス」

札幌　「第三条　本会ハ札幌市ヲ中心トスル道内観光地及物産ノ紹介宣伝並観光ノ利便ヲ図ルヲ以テ目的トス」

役員は公職者が独占

それにしても、これだけの業務量を一カ月ほどの間に、近藤ほか札幌市役所経済課商工係の数人のスタッフがやったというのだから、驚くほかはない（札幌商工会議所や札幌鉄道局も手伝ったのかも知れないが）。創立総会と発会式の模様は、翌十七日付の「北海タイムス」朝刊に五本立ての大きな見出しで、次のように報道されている。

「札幌観光協会／創立総会並に／発会式を行ふ／きのふ公会堂で／役員事業等決定

躍進札幌の姿を反映して、札幌観光協会の創立総会を桜花爛漫の十六日午後二時から、市公会堂に於て華々しく開催された。

創立総会を開いた札幌市公会堂

北海道庁長官（代理大塚商工課長）、国際観光局長（代理川井運輸課長）他来賓多数出席のもとに、定刻伊沢市助役が開会挨拶を兼ねた協会設立の趣旨を述べ、次で島崎経済課長の創立経過報告の後ち、橋本市長座長となって会則審議に入ったが、遂条的審議の省略満場一致で会則案を可決、更に役員選挙に入り、会長に札幌市長、副会長に石狩支庁長、商工会議所会頭、市助役、札幌運輸事務所長の五氏が当選、顧問並に相談役には北海道庁長官、北大総長、札鉄局長等が推薦され、更に評議員、常務理事並に各部々長の選挙を行い、次で予算並に事業計画の審議をなしたが、極めて順調に総会を終了した。

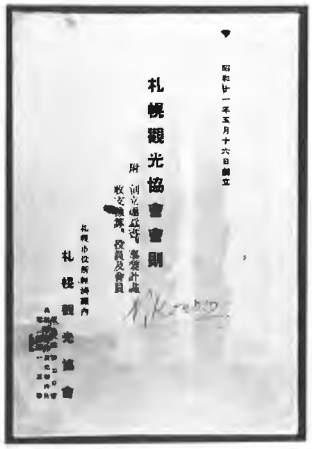
創立総会に引続いて行われた発会式は、観光札幌並文化札幌の躍動を喜ぶ来賓及び会員の多数参会のもとに行われた。伊沢副会長の挙式挨拶に始まり、橋本会長の挨拶についで長官、国際観光局長、小樽市長、北大総長等来賓多数の祝辞並祝電の披露あって開宴、カフェー自治組合女給連が酒間をあっ旋、札幌各見番美形連の長唄や観光音頭等の余興があり、盛会を極めて午後五時散会した。

尚創立された観光協会本年度の収支予算は、会費四千六百円、市並商工会議所補助金の一千三百円、寄付金二百円、その他併せて六千四百三十円の収入予算に対し、事務費、会議費、事業費、建築費等の項目で六千四百三十円の支出予算をあげている。

会場となった市公会堂は、いまの市民会館（中央区北一条西一丁目）の北半分のところにあって、北一条通りに面していた。豊平館（現在は中島公園に移築）とは背中合わせだった。昭和二年に建てられた木造二階建て、左右にがっしりした角塔を持つ重厚な建物で、当時は札幌で唯一の大集会場であり音楽会場であった。昭和三十二年に、豊平館とともに解体された。

来賓代表の北海道庁長官は欠席したが、あの佐上信一は直前の四月二十二日に退官、池田清が朝鮮総督府警務局長から着任していた。半年後の陸軍特別大演習に備えて、治安維持専門家の長官人事と噂された。

会長、副会長のほか、顧問九人、相談役二十六人、評議員二十四人、理事三十六人が決まったが、会長、副会長、顧問のうち、副会長の商工会議所会頭をのぞく全員が公職者。相談役、評議員、理事も半数近くが公職者という構成で、常務理事は札幌市経済課長の島崎林蔵だった。部会は宣伝部、サービス部、調査部の三部をつくったが、宣伝部長は商工会議所理事、サービス部長札幌駅長、調


昭和十一年五月十六日創立

札幌觀光協會會則

附 同じ通知書、事業計畫
收支豫算、役員及會員

札幌市役所料理部内
札幌觀光協會

創立時の札幌観光協会会則パンフレット

査部長札幌市電気局長といった具合で、あくまでも官主導型の体質が濃く現われていた。

事務局職員は、書記として近藤直人と松本譲の二人、ほかに嘱託として市役所、商工会議所、鉄道局の書記クラス六人と女性一人が任命された。

会員は会費で区別

設立された札幌観光協会の会員は、会則により次の四種に大別され、特別会員は会費額によってさらに四区分されていた。

一、名誉会員　本会ニ功労アル者又ハ学識経験アル者ニシテ評議員会ノ決議ヲ経テ会長ノ推挙シタル者及年額二百円ヲ出金スルモノ

二、特別会員　本会ノ趣旨ヲ翼賛スル者ニシテ左ノ会費ヲ納ムル者

一級　年額　百円
二級　年額　五十円
三級　年額　三十円
四級　年額　二十円

三、正会員　本会ノ趣旨ヲ翼賛スル者ニシテ年額十円ヲ納ムル者

四、賛助会員ハ金五円以上ヲ寄付シタルモノ

昭和十一年設立当時の会員は百二十四名（同年末には百二十八名）で、内訳は名誉会員五名、特別一級十一名、同二級五名、同三級十九名、同四級三十名、正会員五十三名、賛助会員一名であった（詳しくは資料篇参照）。

名誉会員は定山渓鉄道と札幌市電気局、丸井、三越の両百貨店と大日本麦酒だった。特別一級は札幌グランドホテル、五番舘、古谷製菓、北海道製酪販売組合（いまの雪印）、明治製菓、北の誉、千歳鶴、狸小路聯合会といった一流どころで、大方の旅館は特別三、四級か正会員、三八、千秋庵なども特別四級。料理店も「いくよ」が特別二級、東京庵が三級、写真店はすべて正会員だった。

商店やカフェーなどの中には、組合として入っているほかに、個々でも会員になっているところがあるのに、金融機関では札幌信用組合だけで、拓銀や当時の道銀は入っていなかった。

一年早く発足した函館観光協会の会費は、名誉会員が三十円以上、特別会員が十円以上、正会員が三円以上の三種類となっていて、札幌観光協会の方が、会員種類を細分し、しかも会費が数倍高い。札幌の方に大企業が多いこともあるのだろうが、旅館や一般商店などの規模は札幌、函館ともそう変わらないのだから、彼らにとっては苦しい出費だったろうと思われる。

そのせいもあってか、昭和十一年末同士の比較では、会員数は札幌の百二十八名に対し函館は二百四十名もあり、とくに正会員だけをみると、札幌五十四名に対し、函館二百名と四倍近い。函館

昭和十一年の札幌駅前通り、手前南一条側から北を望む

の方がずっと基盤が広かったわけだが、会費収入は函館の千二百円に対し札幌は四千円を見込んでいた。北海道の首都としての、札幌の気張りぶりがよくわかる。

多彩だった事業計画

札幌観光協会昭和十一年度の事業計画は、施設、調査、宣伝、座談会、懸賞募集を五本の柱とし、経費的には宣伝を最重点にしていた。事業計画の詳細は、次の三十一項目である。

〔施　設〕

一、札幌駅構内ニ観光案内所ヲ設置スルコト

二、札幌駅前ニ観光案内板ヲ設置シ一般観光客ノ利便ニ供スルコト

三、名勝地標示杭ヲ主要ノ個所ニ設置シ以テ一般観光客ノ利便ヲ図ルコト

四、駅前ソノ他主要個所ニ希望箱ヲ設置シ観光客ノ本会ニ対スル希望不平感謝等ノ投書ヲ為サシメ以テ本会将来（主トシテ観光事業ニ関スル）企画経営ノ参考ニ資スルコト

五、市役所前ニ告知板ヲ建設シ観光団体来札ノ都度一般市民ニ報告ノ用ニ供スルコト

六、観光個所ニ簡明ナル由所来歴ヲ附シタル表示板若シクハソノ所属団体ニ交渉シテ之ガ設置方ヲ慫慂シ一般観光客ノ利便ニ供スルコト

〔調　査〕

一、観光コースノ調査設定

二、名勝地及観光地ノ設定

三、観光地帯及観光道路等ノ改善並ニ設備ニ関スル調査

四、観光関係地方トノ聯絡ニ関スル調査

五、札幌市及ソノ付近町村ニ於ケル年中行事ノ調査

〔宣　伝〕

一、観光日程ノ作製

二、ポスター調製（小樽、函館等ノ各地ト共同作製モ可）

三、絵葉書調製

四、修学旅行勧誘ノ為栞調製（全国中等学校以上ニ配付）

五、札幌案内書調製

六、各地発行ノ観光雑誌新聞等ニ観光事業設備ノ記事写真ヲ登載シ廣ク宣伝スルコト

七、東京市設案内所ソノ他主要ノ地ニ印刷物ヲ委託及贈呈スルコト

八、観光雑誌『札幌の観光』ヲ発行スルコト

九、記念スタンプノ作製

〔座談会〕

一、運輸業者、土産品商、旅館、料理飲食店、カフェー、喫茶店等ノ協議座談会開催

二、スキー、スケート及運動関係方面トノ座談会開催

三、道内各地観光協会代表者懇談会開催

四、サービス講習会ノ開催

〔懸賞募集〕（経費ニ余裕ヲ生ジタル場合）

一、遊覧コース　懸賞募集

二、遊覧小唄　懸賞募集

三、札幌民謡　懸賞募集

四、名勝地写真　懸賞募集

五、遊覧記念スタンプ図案懸賞募集

六、郷土民謡ヲ各放送局ニ贈呈シテ放送ヲ依頼スルコト

七、観光サービスニ関スル標語、観光客誘引ニ関スル標語ノ懸賞募集

現在でも十分に通用する先見的な事業計画である。なかには、それから二十年、三十年たってようやく実現した項目もある。札幌観光協会五十年の歴史は、昭和十一年のこのときに決められたレールの上を、ひたすら走って来たといえるのかも知れない。

札幌駅構内に出来た観光案内所（昭和11年）

三、案内所と観光PR

札幌観光協会が出来て初めにやった事業は、札幌駅構内に観光案内所を作ることと、案内所に備えつける遊覧スタンプの製作であった。当時の記録をみると、この二つの作業は、実に素早く進められている。当然、協会設立の準備段階で、ある程度の段どりはつけていたのだろうが、現在でもちょっと考えられないほどのスピードなのだ。まず、観光協会の創立総会と発会式が昭和十一年五月十六日、そして―。

▽五月二十二日　札幌駅構内に案内所建設の入札を行い、泉屋為次郎と契約す。

▽五月二十六日　遊覧記念スタンプ懸賞募集す（賞金は一等十円一名、二等五円二名）。

▽六月十七日　札幌駅構内観光案内所工事着手。

▽六月二十九日　札幌駅楼上会議室にて、案内所開設に関する打合会開催。

▽七月四日　札幌市役所に於て、懸賞遊覧スタンプ審査会開催。一等渡辺誠一、二等栗田菊蔵、海老江元治。一等及二等の内、栗田の分を以てスタンプ調製、駅前案内所に備付、遊覧者の捺印に応ず。

▽七月十五日　札幌駅構内札幌観光協会案内所開所。

観光案内所は木造平屋建ての小さなもの（写真から推定すると一五平方㍍くらい？）だが、それにしても一カ月たらずで作り上げたとは、関係者の意気込みがうかがえるではないか。窓口は三等分されて、中央に観光協会の案内所があり、その向って右側に旅館業者の案内所、左側は自動車、人力車の案内所（小荷物の預り所も兼ねる）が配置された。観光協会からは、書記の松本譲が常駐した。

観光案内所は大繁昌

遊覧記念スタンプは、さきの記録では二等入選の栗田の分を採用したとあるが、案内所の写真では二個置いてあるし、『観光の札幌』にも二種類のスタンプが掲載されているので、一等入選の渡辺の分も使われたのではなかろうか。

図柄は時計台、ジャンプ、羊ヶ丘、定山渓温泉のマークなどは両者に共通し、片方はそのほかにアカシヤの葉と札幌神社、もう一方は札幌～東京間の定期航空便が、大きくあしらわれている。両方ともかなり盛りたくさんなデザインなので、翌年には時計台を中心に、スキー、めん羊、北大と

昭和十一年の遊覧記念スタンプ二種

昭和十二年の記念スタンプ

ポプラ並木、飛行機を描き、周囲をアカシヤの葉とスズランの花で囲んだすっきりしたスタンプが使われた。

案内所の開設いらい十月末まで三カ月半の取扱件数が、『観光の札幌』に記載されているので、次に再録しておく。十月の件数が圧倒的に多いのは、

種類	月別 七月	八月	九月	十月	計
市内観光	人 三九九	人 七四六	人 九六六	人 二、五七三	人 四、五二四
郊外観光 定山渓	五六	五七八	六〇一	五六八	一、三三三
支笏湖方面	二四	八二	一九三	八八	四七七
石狩、茨戸	五五	四七五	四四六	一、三七三	二、三九三
月寒種羊場	三〇	五六七	五七八	一六八	七三九
真駒内種畜場	二九三	二三八	一六六	七三九	二、三三三
其他	二七	九九	一五四	一二四	四一四
他管内観光定期遊覧バス	三〇一	五八八	三八三	三七一	一、二三五
観光バス問合	二九五	二七四	一六四	八九八	二、〇三八
電車、バス	一四一	八六	一四三	二三三	五三三
タクシー	五九八	五六四	一、四二〇	二、六二四	五、三三四
特産品、土産品	二二二	一五七	一八一	六二七	一、〇八三
産業視察	四〇	一八六	四〇〇	七九四	二、二四〇
官庁其他	二四	七五	九八	一一〇	三〇五
旅館	六一	二三三	二九五	三二三	九〇三
登山者	五六	四五一	五六一	四三五	一、六三三
スキーヤー	二〇	二九	四〇	五七	一四六
其他	—	—	—	—	—
計	一、二八二	五、四八一	五、九四四	八、一五四	二〇、八六一
スタンプ押捺	一、三三〇	一一、五〇〇	五、四六〇	一三、〇〇〇	二五〇、二九〇
乗客者	—	一九〇、五九一	一五一、一七九	二〇〇、五八一	五四三、二七九
降客者	—	一八〇、五六四	一四三、一六三	一八九、九二八	五一三、六五四
計	—	三七一、〇八三	二九三、三四一	三五〇、五九一	一、〇五四、九三三

陸軍特別大演習関係の利用者増によるものであろう。とくに、スタンプ押捺数十三万二千というのは、一日当り四千四百、一人が二種押したとしても一千二百人なので、案内所前は長蛇の列が出来たに違いない。

案内所と同時に、観光協会では札幌駅前に横三メートル、縦一・五メートルほどの「札幌及石狩案内」という観光案内板を新設した。定山渓や真駒内、羊ヶ丘、手稲山などが、まだ札幌市外だった時代なので、〝札幌及石狩〟としたのである。案内板の設置費二百円に対し、観光案内所の建設費は百六十円となっているのは、旅館業者などが分担したからだろう。それよりも、一番高いのが電話架設費の一百九十円（もちろん一台分）というのが、時代を反映していて面白い。

『観光の札幌』を発行

案内所、スタンプの準備と並行して、観光名所、コースの調査、選定作業が進められた。その成果が駅前の案内板となり、同じ七月中に「観光札幌」のリーフレット一万部が完成、市内をはじめ道内各地に発送した。また、大演習を間近かに控え、天皇陛下の札幌市内巡幸地図をスポンサーつきで作り、市内の各学校や駅前案内所、道内各駅などに配付している。

実質的には近藤直人が一人で切り盛りしている観光協会にしては、いくら発足早々でやるべきこ

札幌駅前に設けられた観光案内板（昭和11年）

とが山積していたとはいえ、目を見張るばかりの観光PR作戦だったが、設立の年の大事業としてもう一つ、『観光の札幌』の編集作業があった。予定では十一年中に発行するつもりだったが、原稿集めに手間どり、正式の発行日は翌十二年一月二十日になっている。

この雑誌スタイルの本は、B5判一一八ページという部厚いもので、観光協会設立当時の記録文書としては、『札幌観光協会会則』以外ほとんど唯一の貴重な資料である。冬の北大構内ポプラ並木の写真を表紙にし、見開きに札幌観光主要案内図（カラー）があって、当時の主な観光地、五種類の観光コース、タクシーの料金などがのっている。

主な観光地を以下に列挙するが、五十年後の現在の観光名所と、ほとんど変っていないのには驚く。戦災や大火で失われたものがない代りに、新しく生まれたものもあまりないということになる（カッコ内は、現在の名称、施設）。

▽北海道帝国大学（北海道大学）▽清華亭▽植物園・博物館▽官幣大社札幌神社（北海道神宮）▽円山公園・綜合グラウンド▽大倉シャンツェ▽大通逍遙地（大通公園）▽商工奨励館（札幌グランドホテル）▽時計台▽豊平館▽月寒種羊場（羊ヶ丘）▽真駒内種畜場（真駒内団地、アイスアリーナー）▽定山渓温泉▽豊平峡▽中島公園▽狸小路▽水郷茨戸▽石狩海浜▽銭函海水浴場・ゴルフ場▽野幌原始林（百年記念塔、開拓記念館、開拓の村）▽支笏湖▽千歳孵化場。

本文にはいわゆる名士のあいさつのあと、「札幌近郊の山々」（栃内吉彦）、「スケートの話」（内藤芳雄）、「札幌の史蹟」（高倉新一郎）、「観光の札幌」（河合裸石）、「クラーク先生」（宮部金吾）、「札幌の今昔」（桜庭善一郎）、「北海道の名付親、松浦武四郎」（近藤磐峰）、「情熱の詩人啄木と札幌」（加勢蔵太郎）、「札幌ネオン街報告書」（水野富士夫）、「原色版、北大植物園と創成川」（能勢真美画）、「山湖と釣の北海道」（永田春水）…と、当時の札幌の文化人がそれぞれの専門分野の記事をのせている。

末尾に、観光協会の業務日誌、創立総会の模様、案内所成績、会員名簿等が収録されていて、本書でも随時引用あるいは参考にさせてもらうことにする。なお、編集後記は（河野生）となっているが、これは当時、思想問題で北海道大学を追われていた河野広道（昆虫学者、考古学者で、のち北海道教育大学教授）のことで、河野の学識と人脈が裏付けられる労作である。

この『観光の札幌』は何部印刷されたかわからないが、道内、本州各地はもちろん、遠く台湾にまで配布したという。一般にも市販したほか、一部は太平洋戦争の後まで残っていて、一部二十五円で販売されたこともあった。しかし現在では、図書館でも古書店でも、ほとんどみかけることはない。

幻に終わった「第五回冬季オリンピック札幌大会」の会場案内リーフレット

幻の札幌オリンピック

昭和十二年には出来たばかりの札幌観光協会にとって、二つの大きなプレゼントがあった。一つは四月一日からの札幌―東京間定期航空開設であり、もう一つは六月九日IOCワルシャワ総会での第五回冬季オリンピック札幌大会開催決定であった。定期航空の方は、十一年の大演習のさいテスト運航が行われたことにより、既定事実として遊覧記念スタンプの図案にも入っていたが、オリンピック開催については、二転三転しての決定だったので、関係者や市民の喜びは大きかった。

いまでは運勢暦くらいでしか使わないが、当時は紀元二千何年という呼び方が一般的で、昭和十五年はちょうど紀元二千六百年に当っていた。そして四年に一度のオリンピック開催年にもぶつかるので、夏冬のオリンピックをぜひ日本でということになり、世界各国への働きかけが行なわれた。日本での開催地は、夏の東京はすんなりまとまったが、冬は札幌と日光が争っていた。

ところが十一年七月の第十二回夏季オリンピック東京大会を決めるIOC総会で、それまでの夏冬同一国開催を分離することも同時に決定され、札幌にまとまっていた冬季大会はまったく絶望となった。代ってノルウェーとカナダが立候補したが、同年末には両国とも国内事情で辞退することになり、またまた札幌が再浮上したのである。札幌観光協会は十二年の年賀状に、奥手稲山の家の写真を入れたオリンピック招致PR用のもの五万一千部を作り、会員や市民を通じて各方面に発送した。

だから六月九日（日本時間では十日未明）に満場一致で札幌開催が内定したときには、新聞記事はオリンピック一色で埋まり、今井、五番館、三越の三デパートが、その日のうちに対策を協議するほどのはしゃぎよう。札幌神社祭を終えた六月十九日には、全日本スキー連盟会長小島三郎を迎えて、昼は旗行列、夜はちょうちん行列という騒ぎだった。

七月七日には日中戦争の発端となる盧溝橋事件が起こるのだが、その直後の七月一日には第五回冬季オリンピック札幌大会実行委員会が、事務局を市役所に置いて活動を始めた。観光協会では十一月にオリンピック会場のリーフレット二万部を作って、国内と諸外国に発送したほか、宣伝のゴム印を大量に用意して、官庁、銀行、会社、商店などに実費分譲した。

翌十三年三月十六日のIOCカイロ総会で札幌開催が正式決定したものの、政府は日中戦争の拡大を理由にわずか四カ月後の七月十五日、東京、札幌のオリンピック返上を決定してしまう。それまでに札幌の実行委員会が使った費用は六万五千円だった。札幌でオリンピックが実現するまでには、それから実に三十四年の歳月が必要だった。

昭和十二、三年ごろに協会が発行した種々の版画集

四、戦中戦後

わずか一年で終った幻の札幌オリンピック騒ぎをのぞくと、札幌観光協会の設立いらい十年間は、いまわしい戦争の時代にどっぷりとひたっていたことになる。設立翌年の昭和十二年には日中戦争ぼっ発、十三年国家総動員法公布、十四年ノモンハン事件、ドイツのポーランド侵入で第二次世界大戦始まる、十五年日独伊三国同盟調印、大政翼賛会発足、そして十六年十二月八日太平洋戦争に突入する。

だから観光協会が、「札幌市を中心とする道内観光地及物産の紹介、宣伝並に利便を図る」という本来の趣旨に添った事業に専念できたのも、最初の一、二年に過ぎなかった。観光旅行がぜいたく視され、あらゆる物資が不足してくると、観光地及物産の紹介宣伝などやっても意味がない。会員が減り、市や商工会議所の補助金も減っていった。

協会では絵はがきや版画集、アツシ織りなどを作って資金集めをするとともに、出征軍人慰問用の札幌芸妓プロマイド、野戦病院向けに「札幌おどり」のレコード、「観光札幌の姿」という写真グラフを作った。市民対象には近郊のハイキングコース案内を出したり、催しも時局映画会や産業施設見学会、戦捷感謝雪中行軍などを実施するようになる。

紀元二千六百年事業も

紀元二千六百年に当る昭和十五年は、世が世ならオリンピックで国際親善の花が咲くとしであったが、それでも国をあげてのお祭りとなり、札幌観光協会もいくつかの記念行事を計画した。ただし、内容的には花々しいことはできず、威勢のいい文字だけが新聞紙上を飾っていた。

「多彩な記念事業／札幌観光協会準備進む

札幌観光協会の輝く紀元二千六百年記念事業は、既報紀元節の夜に展開する雪祭の他、四季の暦を追って左の如く多彩なプランが決定し、著々準備を進めることになった。

一、土産品展覧会（北海道庁、札幌商工会議所、札幌物産協会と協力）一、写真懸賞募集（春、夏の写真募集す）一、土産品調製一、スキーの夕（札鉄と協力し東京に於て開催する）一、北海道工業美術展覧会（東京に於て本道の美術工芸品、例へば写真、陶器、油絵、宝石加工品、樺絵、木工品、鉄製品等を陳列し、大いに北海道の文化を宣伝す）一、雪に関する展覧会（十六年は紀元二千六百年の冬季競技札幌に於て開催のため、多数の来札者見るべきに付、デパー

トに於て雪に関する文献その他を蒐集し展覧す）一、案内板建設す一、ハイキングコース指導標建設一、ハイキングコース開鑿（藤ノ沢―簾舞間ハイキングコース中御料峡沼にハイキングコースその筋より認可に付）一、旅館の使用人表彰」（「北海タイムス」昭和15年1月28日付）

この記事のまわりには、「お巡りさん総動員／盗電者を摘発」とか、「畏し殉国勇士に御下賜品／札幌で伝達式」「初の木炭闇移出／小樽水上、一歩前で検挙」といった見出しが並んでいる。そんな時代だったから、観光協会の〝多彩なプラン〟もどこまで実施されたのか、協会の記録にもそのごの新聞紙上にもほとんど残されていない。

「第十一回明治神宮国民体育大会冬季大会」の閉会式（札幌市公会堂。時節柄かドイツ国旗が目立つ）

ただ、記事中にある〝紀元二千六百年の冬季競技〟というのは、正式には「紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会冬季大会」といい、昭和十六年二月四日から九日までの六日間、札幌と小樽、苫小牧の三市にまたがって開かれた。札幌円山競技場の開会式が、宮城、明治神宮、橿原神宮の遙拝、戦没勇士英霊と出征兵士への黙禱といった軍国調なら、競技内容も陸海軍人斥候競走、在郷軍人伝令競走などが幅をきかせていた（戦争中のスキー大会では、距離競走が重視された反面、ジャンプは軽業式競技として排斥され、十八年からは全面中止になった）。

札幌観光協会では、駅前に選手受付所を設けて、接待したほか、カラー表紙つき三十六ページの記念写真誌（五十銭）を、十六年六月になって発行した。四カ月もかかったということに、当時の不自由だった物資や印刷事情が偲ばれる。

協会の総会は、初期の公会堂からやがて商工会議所講堂や市議会の議員控室などを転々したが、十八年には藤の沢小沢農場の野外で開かれた。十九年も小沢農場だったが、時期は年度初めから十月末まで延期された。戦争中の混乱と人出不足で、とても観光協会どころではなかったのだろう（しかし二十年五月には、ちゃんと市庁舎で総会を開いている！）。

食糧確保と健歩の会

戦争中、道内をはじめ全国各都市の観光協会は、解散もしくは開店休業の状態だったが、わが札幌観光協会は細々とはいえ、活動を継続した輝しい歴史を持っている。その秘密は、一つにはさまざまなハイキング行事を催し、一般市民の支持をえたこと、もう一つは、絵はがき売りなどの自主財源によって、パンフレット、リーフレットの発行を欠かさなかったことである。

協会の実質的な責任者だった近藤直人が、営林

戦争中の協会活動はハイキングが中心

昭和十八年発行の写真クラブ「札幌」（下部に防諜標語が）

署出身ということから山野歩きが好きだったこともあって、初期のころからハイキングコースの選定、普及に力を入れた。ちょうど国の政策になった歩け歩け運動とも合致し、十五年には札幌エゾヌプリ会（翌年、札幌健歩会となる）と共催で、札樽国道ハイキングと天狗山登山をやったのを手始めに、銭函―定山渓間ハイキング、札幌―定山渓間鍛錬健歩の会などを実施した。

そのうちに食糧不足も深刻化したので、歩くついでに農家に頼んでイモ掘りやイチゴ摘みをしたり、フキ、ワラビなどの野草狩りをするようになった。ついには、催しの名前そのものが、食糧確保と健歩の会、草摘み健歩の会というように主客転倒(?)の形になったが、参加者はかえってふえて一ヵ月二回ということもあった。十八年、十九年の野外での総会は、その延長線上に開かれたものである。

昭和十七年以降のパンフレット、リーフレットの発行状況は以下の通りである（『札幌観光協会30年記念誌』による）。▽17年　道外に北海道案内リーフレットを送付、北海道物産のしおりを調製、徒歩運動リーフレット五千部を無料配布▽18年　札幌の年中の出来事の冊子調製、健歩会予定表三千枚無料配布、写真グラフ「札幌」五千部を各方面に配布、パンフレット「北方文化の都・札幌」二万部を調製、一部二十五銭で頒布▽19年　アッツ英霊遺族全部に札幌案内図（裏面に参拝心得）贈呈、リーフレット一万部を無料配布、汽車時間改正による時刻表配布…。

写真グラフ「札幌」などは、グラビア十六ページの薄手ながら、駅前通りやクラーク像、ポプラ並木、時計台、ネオンの狸小路、大通公園、鈴蘭狩、月寒ゴルフ場などの写真が大きく扱われ、表紙下の「友は聖戦、我等は防諜」の標語さえなければ、とても戦争中の出版物とは思えない。

当時はすでに軍部の検閲があったが、「近藤というのは爺さんだ。年寄りだから分別があろう」と、案外すらりと通ったとは、協会設立以来の役員だった佐々木徳三郎の話。

昭和二十年は、春に野生蔬菜の採取案内書（ガリ版刷り）を出し、ヨモギ、ワラビ採集の会を十回もやっているうちに、八月十五日の敗戦となる。観光協会も百八十度の方向転換を余儀なくされ、もっぱら進駐軍の観光案内業務に専念する。進駐軍といえども外国人、九年前の「外客ノ誘致ト利便トヲ計リ」という設立趣旨書が、皮肉にも現実になったわけである。

進駐軍の土産品捜し

進駐軍の第一陣として、米軍第七十七歩兵師団八千名が二十年十月六日朝小樽港に上陸、午前十

高田富与　第四代会長

戦後もパンフレット作りで活動を再開

時過ぎにはジープ、トラックを連ねて札幌の宿舎に分散した。師団司令部が大通西二丁目の拓銀新館に設置されたほか、大同ビル、鉄道クラブ、帝国生命ビル、第一徴兵ビル、越山ビル、グランドホテル、逓信局、札幌聯隊区司令部、被服廠、北部憲兵隊司令部、糧抹支廠、陸軍兵器廠、北部軍管区司令部、月寒陸軍病院、月寒兵舎などが接収された。

観光協会では、早くも進駐以前の九月十二日に札幌グランドホテルに関係者を集め、進駐軍に対する土産品の相談を始めた。札幌に戦時疎開していた外遊経験者から知恵を借りたりしたが、新しい土産品を作るにしても材料がなく、市民から古い人形や骨とう品を買い集めるなど、古道具屋まがいの苦労もあった。それらの品物は今井、二越、五番館各デパートに陳列して、進駐軍の要望にこたえた。

戦争中から作っていてストックのあった絵はがきや版画集、アツシ織りなどは、進駐軍にも人気があってよく売れた。札幌案内の英文パンフレット作りにもとりかかったが、英訳できる人が少なく、いても進駐軍関係の業務が忙しいため、とうとう調製不能となったこともある（英文の札幌案内は、そのご交通公社札幌支社が発行した）。

とはいえ、協会の組織はどんどん弱体化して、昭和二十二年の会員はわずか二十二名に減り、会費収入も千円に満たぬ有様。市に申請した補助金一万円も断わられ、北海道観光連盟の負担金三千円が払えなかった。二十二年の総会はとうとう開催不能になった。協会の事務所もそれまでの経済課から都市計画課に、その後土木課の片隅に追いやられた。札幌観光協会にとって、どん底の時代であった。

この間、会長職の札幌市長も二十年上原六郎、二十一年原田与作代理（助役）、二十二年高田富与と、目まぐるしく変った。高田は二十三年九月に協会強化促進協議会を設け、市役所の関係部課を督励して、会員増加、会則改正、会費増額等の基本案を練った。そのため、同年十一月末には、会員が百三名にまで復活した。

もちろんこの間にも、協会本来の仕事は地道に続けられた。なかでも、二十一年から始まった支笏洞爺国立公園指定促進運動は、二十四年五月に実を結んだ。お得意の印刷物作りも、二十四年三月に第四回国体スキー大会が札幌で開かれたのを機会に再開され、「雪の北海道」（二十四年）、「グレート・サッポロ」（二十五年）などのパンフレットを出した。

「グレート・サッポロ」には四季のさっぽろ、札幌の現勢、支笏洞爺国立公園紹介といった読みものの他に、地崎宇三郎の「間宮海峡埋立論」と河野広道の「北海道自由国論」がのっている。この二つの論文は、終戦直後の北海道の人たちに、大きな反響を呼んだ、記念碑的構想であった。

五、旅館とホテル

札幌観光協会の設立時会員百二十四名(社)のうち、単独業種で一番多かったのは、旅館業の二十二名だった。実に二割近い勢力である。設立三十周年の昭和四十一年では、旅館ホテル関係が七十九社で、全会員二百九十一社の二割強を占めていた。昭和六十年も四百十四会員中七十九社でやはり二割近い。

昭和九年に出来た当時の札幌グランドホテル

観光といえば、旅館が交通機関と並んで重要な役割を果たすのは当然だし、観光振興によって旅館も発展するのだから、旅館が観光協会や札幌の商業界の大きな柱になっていることは、いまの常識でいうと当たり前のことである。ところが、観光協会が出来るまでの旅館業というのは、極めて低い立場に置かれていたらしい。

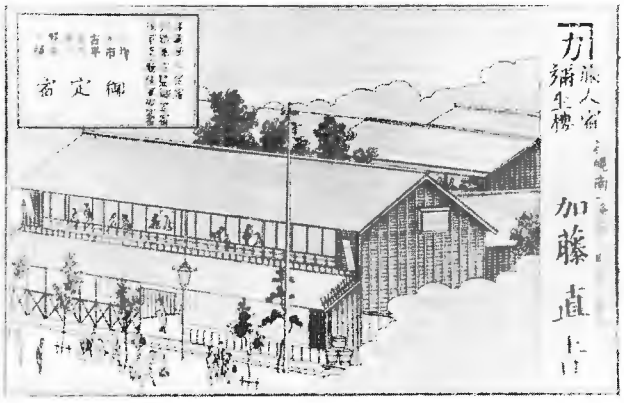
というのは、札幌グランドホテルが出来る昭和九年まで、札幌商工会議所は旅館業者の加入を認めず、そのためか旅館業者の猛反対を押し切って、商工会議所自体がグランドホテルを作ったのだ。道庁や市役所の商工関係の部課も、旅館は行政の対象とはしておらず、当時の旅館の監督官庁はなんと警察署だったのである。

人間が集まったり動いたりするところには、必ず旅館業があったはずだ。つまり明治初期の開拓使設置以来、札幌には少なくない旅館（あるいは旅人宿）があったはずだが、現在残っている札幌市の行政資料には、旅館のりょの字も出てこない。『札幌区史』はもちろん、昭和二六年発行の『札幌市史』も旅館業については全く触れていない(札幌グランドホテルは建築の項に一行だけ)。

明治末期には五十余軒

そこで明治以来、札幌への旅行者に憩いの場所とサービスを提供し、観光協会を作るときには率先大挙して参加し、今日まで協会の発展を支えてきた札幌の旅館業の歩みを、乏しい資料によって構築してみることにする。

札幌に定住した最初の和人が、志村鉄一と吉田茂八であることは、よく知られている事実である。二人は豊平川の渡し守りをしていたのだが、そのうち志村は官営渡船場渡し守りとして、通行屋管理人も兼ねていた。通行屋というのは、宿泊もさせていたので、札幌における旅館第一号といえるが、官営なのでサービスもたいしたことはなかったろうし、何日も泊まるというわけにはいかない



旅人宿弥生楼
（明治20年の「札幌繁昌図録」から）

ので、いわゆる旅館とはいいづらい。

明治四十二年発行の『最近之札幌』という小冊子には、〝旅人宿〟の項に「札幌市街創設に際して率先今の南二条西一丁目南西角に於いて柾屋を建築し、旅人宿を始めしは菅原甚右衛門（秋田屋）にして、次で清水利左衛門（丸八）菅原の向かひに旅人宿を開業せりと云ふ、現今区内に於ける旅人宿は三十三軒あり」とある。しかし同時に〝薄野の由来〟の項には「薄野にて最初に貸座敷を営みしは菅原甚右衛門なり、この菅原はいまの南二条西一丁目角にて宿屋業を始め、多くの女中（当時之を飯盛と呼べり）を抱えて客に戯れしめ、…」と記し、当然の旅人宿がたんに泊まるだけの場所ではなかったことをにおわしている。

ところで、北海道立文書館所蔵の「辛未歳（明治四年）市中人別申出綴」という書類には、旅籠屋渡世という肩書きで、菅原（名前は治左衛門となっている、四十五歳）、清水（五十九歳）のほか、川村丑太郎（四十三歳）、山本弥兵衛（四十二歳）、立半兵衛（三十五歳）、中川良助（五十歳）、伊藤孫右衛門（四十五歳）、高瀬和三郎（四十四歳）の八人の名前がのっている。明治六年の「市民商業惣高取調」（山形県鶴岡図書館蔵）には、旅籠屋渡世が九人のっているが、人名はだいぶ入れ替わっているので、一部をのぞいてはあまり安定した商売ではなかったようだ。

人別帳には屋号とか旅館名の記載はない。古い旅館名としては、前述の『最近之札幌』にのっている旅人宿のはしり、秋田屋と丸八があるが、両者とも明治五年以降、薄野に移転して妓楼になってしまった。正式（？）な旅館としては、明治二十四年発行の『札幌繁盛記』に次の四軒が紹介されている。それまでにも開廃業した旅館はあっただろうが、ほとんど知られていない。

「上等旅人宿は一条通の弥生楼、北辰楼、二条に京華楼、北三条に山形屋、何れも劣り優りなく、滅相豪毅な家構え、座敷の間取りも都合よく、体裁殊に備わりて、料理も可なり結構なり」

次いで明治三十二年発行の『札幌案内』では、当時の札幌区には五十一軒の旅館があるとして、そのうち主なもの九軒の名前と住所、内容などを紹介している。それは山形屋（北二西四）、旭屋（北二西四）、丸ソ旅館（北一西三）越前屋（南三西一）、大泉館（大通西四）、丸新（北一西四）、久星（南一西三）、宮城屋（南二東一）、角イ星（北一西三）である。

山形屋と丸惣が双壁

『札幌案内』（明治三十二年）と『最近之札幌』（明治四十二年）に、それぞれ宿泊料がのっている。宿泊料の区分が、価格等級として三十二年は

札幌第一の旅館を誇った山形屋（昭和初期）

最上級、上等、中等、下等の四段階あったものが、四十二年は多少民主的(?)に一等、二等、三等の三段階に変わったほかは、営業等級が一級、二級、三級と同じ三段階。実際の値段も十年たったわりにはあまり変わっていないので、次に明治四十二年の分を掲げておく。

営業等級 価格等級	一級	二級	三級
一等 一泊	一円四〇銭	一円一〇銭	八五銭
一日	一円八五銭	一円四〇銭	一円一五銭
二等 一泊	一円一〇銭	八五銭	八〇銭
一日	一円四〇銭	一円一五銭	九五銭
三等 一泊	八五銭	七〇銭	六〇銭
一日	一円一〇銭	九〇銭	八〇銭

一泊と一日の違いは、一泊が朝夕二食だけ、一日は昼食も含む三食付きとわかるが、価格等級と営業等級という二種類の区別は、ちょっと面白い。営業等級というのは旅館の格式で決まり、価格等級は部屋の大きさ、布団の厚さ、食事の品数、暖房の種類などで細分されていた。もっとも、大正時代になると、料金表はすっきりとして、宿泊代といえば朝夕二食付きだけになり、等級の差も少なくなった。

その代わりに、〝茶代〟という奇妙な制度が生まれ、旅館の格だけでなく泊まる人の格によって、宿泊代以外に払うことが、なかば義務づけられた（女中への心付けとは別）。同じ旅館の三円の部屋に泊まっても、一般客なら一円ですむところが、大会社の重役なら五円、社長なら十円も払うという習慣である。額が少ないといって、その時はどうということがなくても、会社の評判が落ちたり、次の時に露骨に反応がでる。

北海道の人は慣れても、本州からの旅行客には悪評ぷんぷんで、それが昭和九年の札幌グランドホテル設立の一つの大きな原因になった、というほどの奇妙で不明朗な制度であった。

グランドホテルが出来るまで（出来てからでも和風旅館としては）、札幌一の旅館といえば、山形屋、次いで丸惣旅館（『札幌案内』では丸ソ）だった。山形屋は明治十九年に、山形県出身の大竹敬助が狸小路の南三条西四丁目で開業、翌年大通西四丁目に移り、同二十三年から北一条西四丁目にあった。丸惣は山形屋より一年前の明治十八年、秋田県出身の佐々木源六が南三条西二丁目に金物屋、米屋、質屋と兼業で始め、同二十三年に時計台向かいの北一条西二丁目に移った。源六は金物など他の商売を主にやり、旅館は妻そのが経営していたので、丸ソという屋号になったらしい。

山形屋も丸惣も、明治二十三年に南から北へ移転している。かつては札幌への入り口が、馬や徒歩で室蘭街道（いまの国道二十六号線）からくるか、舟で創成川（昔の大友堀）をのぼるかだったので、南三条あたりが便利だったが、明治二十年代になって鉄道輸送が活発になり、札幌駅が名実共に札幌の玄関口になったからである。札幌駅の

開拓使が洋造ホテルとして作った豊平館（昭和11年ころ）

年間乗車客数が、明治二十年二万六千人が、二十一年に五万人、二十二年に九万人と急増している。

札幌旅館組合の前身である札幌旅人宿組合も同じ二十三年二月に設立された。初代取締（組合長のこと）は、山形屋の北隣りにあった旭館の稲川直義で、組合員数は二十八軒だったといわれている。当時の札幌区の人口は二万四千人だった。

国際観光ホテルが16も

札幌に市制がしかれた大正十一年には人口が十二万七千人になり、札幌駅の乗車客数も百二十三万人にのぼり、旅館業も繁栄の一途をたどった。昭和に入ると、政府の方針として観光事業、とくに外貨獲得の手段としての外人観光客の誘致に、官民一体となって取り組むようになる。その北海道における具体的な現われが、大雪山、阿寒両国立公園の指定と、札幌グランドホテルの開業で、いずれも昭和九年十二月の出来事だった。

札幌のホテルといえば、明治十三年十一月に豊平館が、開拓使の洋造ホテルとして完成した。明治政府が建てた唯一のホテルであるとともに、わが国初期のホテル建築で唯一現存する貴重な遺構である。しかし、ホテルとしては短期間しか使われず、むしろレストランと公会堂的役割を果たしていた。そのため、政府がいくら外人観光客誘致を叫んでも、札幌には外人が快適に泊まれる施設がなかった（山形屋には洋室が六部屋だけあったが…）ので、政府や道庁の後押しで、札幌商工会議所が主体になって、鉄筋コンクリート五階建て、客室数五十一の札幌グランドホテルを作ったわけである。

当時の和風旅館の宿泊料（二食付き）は、山形屋で三円から五円（洋室は最高七円）、丸惣旅館で三円から三円五十銭だった。それに対しグランドホテルは、食事なしで三円五十銭から十円までの六段階、ほかに特別室として十五円と二十円が一室ずつあった。値段の面でも、習慣の上でも、山形屋などをのぞく一般旅館には、あまり影響はなかった。

昭和十六年十二月現在の「北海道旅館組合員名簿」によると、札幌旅館組合が山形屋、丸惣佐々木旅館、敷島屋、静岡屋旅館など市内中心部の五十二軒、九百五十二室、札幌第二旅館組合が創成川以東と豊平地区の四十軒、四百十室が加盟している。合わせて九十二軒だが、下宿兼業のような未加盟のところも加えると、実際は、百軒を越え、札幌における旅館の全盛期であったと思われる。その後は食糧事情の悪化や旅行の制限で減少し、戦後昭和二十六年十月現在の名簿では、中心部の五十軒、六百五十二室だけが記載されているから

北一条西三丁目の駅前通りにあった岩手屋旅館（昭和初期）

札幌駅前にあった静岡屋旅館（昭和初期）

である。

しかし昭和三十年代後半以降、ローヤルホテル、ホテル三愛（現在の札幌パークホテル）、プリンスホテル、センチュリー・ローヤルホテル、札幌東急ホテル、ホテルアルファ・サッポロなど、大型ホテルが続々開業。また官公庁共済組合のホテルやビジネスホテルもやつぎばやに出来た。それだけでなく、これまで旅館のあった場所は銀行や会社ビル用地としてねらわれ、山形屋をはじめとする在来の旅館は次々と転廃業に追い込まれた。丸惣も、ちょうど百周年に当たる昭和六十年に廃業した。

昭和六十一年三月現在、札幌市内のホテル、旅館と客室数（定山渓をのぞく）は、政府登録国際観光ホテル十六軒四千八室、同旅館一軒六十二室、一般ホテル五十九軒六、一二二室、旅館四十一軒九一〇室である。

第一回雪まつりの会場入口

六、さっぽろ雪まつり

例年二月上旬に開かれるさっぽろ雪まつりは、いまや世界一の冬の観光イベントといっていい。ことし（昭和六十一年）の第三十七回雪まつりは、二月五日から九日まで催されたが、大通会場に雪像百二十基（うち大雪像四基）、氷像五十七基、真駒内会場には雪像二十六基（うち大雪像八基）が並び、見物客は延べ百九十万四千人にのぼった。そのほか期間中、すすきのでも氷像百基が飾られた。

見物客が使った金は史上最高の百八億五千万円と、札幌市観光課では推定している。このうち札幌市民が二十五億七千万円で、市民以外が八十二億八千万。雪まつりに直接関連した業界以外の波及効果を加えると、この時期に百五十億円から二百億円が動いた計算になるという。

最初は二日間の催し

第一回の雪まつりは、昭和二十五年二月十八（土曜）十九（日曜）両日に、大通公園七丁目広場で開かれた。最近のように雪像中心ではなく、スクエアダンスやドッグレース、スキー仮装行列など雪の上での各種催しを混然一体として、それまではマイナス効果しか考えられなかった雪を逆手にとり、札幌市民に雪を楽しんでもらおうという発想だった。スクエアダンスが入ったのは、同月十七、十八、十九日の三日間、札幌市西郊の手稲山や大倉山で開かれた第二十一回宮様スキー大会にご出席の三笠宮にも参加していただこうと、というねらいであった。

いやそれどころか、雪まつり自体が三笠宮歓迎の催しで、その年だけという感じもあった。まさか現在まで延々と続き、世界的イベントになるとは、当時は誰も考えていなかったようだ。その証拠に、ポスターにも当時の新聞記事にも、「第一回」という文字は全くみられない。

「雪の祭典」行事決る

札幌観光協会は三笠宮様のご来道を機会に、二月十八日〝雪の祭典〟を盛沢山のプログラムで次のように展開する▽雪像コンクール―市内の高校生や中学生の製作する雪像を大通西七、八丁目に、駅前通商店がつくる雪像は歩車道の中間に陳列、審査のうえ天、地、人三賞を贈与する▽雪戦会―札一高の復活雪戦会を同校庭で行う▽子供スロープ―大通西七、八丁目に特設、雪像をとり巻くスクエアダンス会を催す▽夜の

第一回雪まつりで北辰中が作った「バルザック像」（坂坦道氏蔵）

行事―花火五十発による雪中花火大会や大倉シャンツェ、ニセコなどスキーの名所を表現する写真を大通西四丁目付近で照明、また大通付近を舞台にスキー仮装タイマツ行進を行い、狸小路では鈴蘭灯を点灯する▽その他―雪中タンブリング、マスゲーム、宝探しなどを大通で行う」（「北海道新聞」昭和25年1月24日付）

北海道新聞のこの記事は、わずか一段の小さなものだが、そのすぐ横に二段囲みで、札幌スケート協会と共催でやる氷上エキジビションの社告がのっている。こちらは苫小牧市で行われる第五回国体冬季大会に臨席の高松宮をお迎えして、二月二日中島公園特設リンクでアイスホッケーやフィギュアを公開するとともに、恒例の氷上カーニバルも同時開催するという内容だ。

ところが昭和二十五年は全国的な暖冬異変で、一月二十八日などは札幌の午前六時の気温がプラス四度と平年より十三度も高く、二月に入ってからも暖かい日が続き、第二十七回氷上カーニバルは予定より三日遅れの二月五日に開かれた。雪の祭典の呼び物の一つになるはずだった札幌一高（旧札幌一中、現在の札幌南高）の雪戦会も、雪不足のため直前になって中止と決まった。

さきの新聞記事でみるように、最初は「雪の祭典」という名前で準備にかかったが、途中でいまに続く「さっぽろ雪まつり」に変わった。当時の原田与作札幌市助役（のち市長）が、市民に親しめる名称がいいといったのがきっかけだった。そういえば、始めは観光協会の単独プランだったのが、実施の段階では札幌市との共催になっている。後援には国鉄、札幌商工会議所のほか、北海道新聞社、札幌中央放送局（NHK）、新北海新聞社（「夕刊北海タイムス」を発行、いまの北海タイムス社の前身）のマスコミ三社が加わった。

中、高生が雪像を作る

まだ民放がなく、東京三紙も札幌印刷を始めていないころだったので、この三社が地元マスコミのすべてだった。しかし北海道新聞社は、伝統のある氷上カーニバルを主催していたせいもあって、新参の雪まつりには積極的でなく、夕刊北海タイムスの方が熱心だった。第一回と第二回は大通西七丁目が主会場だったが、第三回は北海タイムス本社前の大通西四丁目に主会場を移したほどである。それだけに雪まつりの報道も、北海タイムスの方が扱いが大きかった。第一回の予告記事を次に再録しておく（会期中には詳しい記事がなかったので）。

「雪まつり／あす開幕／プロも多彩！

札幌市の雪まつりはいよいよ十八日昼夜にわ

第一回雪まつりで啓明中が作った「白熊」

たり大通西七丁目広場を中心にくりひろげられるが、呼びもののスクエアダンスには遠く釧路、帯広からも参加して地元ダンサーと交歓、また北辰中の生徒がロダンのバルザック像を懸命に作るなど、北国の冬に絢爛たる景趣をそえるに十分だ。

会場は中央にイルミネーション付きの五十尺の大塔を設け、その周囲には市内中高生作の大雪像が立ちならび、北側野球ネット付近の一角は電気広告で彩られた歌と踊りのステージをつくり、昼は映画招待券入りの花火が打揚げられ、夜は一町四方を囲むかがり火がえんえんと燃やさせライトに照らされた踊り手達のスクエアダンスは六つの雪像の中をねり、趣向をこらしたスキー仮装行列がそれにあやなし、レコードテスト盤が間断なく甘いメロディーを流す。

以下プログラムを順に追うと、

△開会十時三十分△歌謡コンクール予選（十時三十分から十二時まで）十七日までに三十余名が応募しているが、会場でも受付ける。伴奏は楽団ニューサッポロの予定。

△タンブリング（一時から二時）札商高選り抜きの三十余名がそろいのユニホームでアクロバット式体操をお目にかける。

△スクエアダンス昼の部（二時から三時まで）ニプロ氏によって普及されいま全道に流行。学芸大学、柏中、西創成小など総勢百六十名が出場。

△演芸大会（三時から四時まで）市内小学生の演芸、唱歌発表会と共に日の丸舞踊団藤間会など十四幕の踊りと歌の合戦。

△ドッグレース（五時から五時半）札幌ケネルクラブの名犬が出場、五レースが予定される。

△スキー仮装行列（六時半から七時半まで）札幌スキー連盟の指導で行われるが、十七日でもう三十組の申込があり、デパート、商店などの宣伝をねらった変わり種も飛出しそう。審査員には台臨の三笠宮殿下もぜひと市当局でねらっている。

△スクエアダンス夜の部（六時半から七時まで）遠く釧路から第四回国体でランキングされた名チームや、帯広、小樽、室蘭等の遠征軍に、地元札幌レクリエーション協会所属の職場チームが覇を競う。

△歌謡コンクール決勝（七時から八時まで）

△映画・銀嶺の果て（八時から九時まで）その他会場を飾る雪像は北辰中二個、北海高、向陵中、道二高、工業高の各一計六個で、いずれも三㍍から五㍍に及ぶ巨大なもの。また駅前には札鉄が自然の像、大通四丁目に交通局が三笠宮歓迎雪アーチを二カ所設置する」（「夕刊北海タイムス」昭和25年2月18日付）

第一回雪まつりの広告塔と舞踊

十八日の日曜日は、午前六時にマイナス八度と二月らしい寒さになったが、晴天に恵まれて早朝から多数の市民が押しかけ、その数は三万とも五万とも記録されている。とくに人気があったのはスクエアダンスで、夜の部では観衆が場内になだれ込んで、一時催しが中止になるほどの騒ぎだった。

このため、三笠宮は「ホウ、大変な盛況だネ。スクエアダンスもやってみたいが、今日のスキーの疲れがなおっていないから、見物だけさせてもらうヨ」とおっしゃって、〝スクエアダンスの宮様〟の参加を期待していた関係者をがっかりさせた。

ところで肝心の雪像だが、製作にあたった中高生は一生懸命だったが、なにしろ初めての経験であった上、雪不足と日中の暖気にたたられ、勉強の都合で一日か二日の作業だったので、出来上がった作品はまだ幼稚なものだった。しかしそのときの指導教官たち、北辰中の坂坦道、北海高の栃内忠男、向陵中の亀山良雄らは、現在では北海道美術界の重鎮として活躍している。

会期を二月上旬に移す

ここで、さっぽろ雪まつりのルーツについて触れておく。過去に書かれたものの中には、いくつかの説がある。例えば、戦前の札幌一中の雪戦会、中島公園で催された氷上カーニバル、それに小樽市内の小学校で盛んだった雪像展、の三つをミックスしたというストーリーだが、すでに書いたように第一回雪まつりと同じ昭和二十五年二月に、中島公園の氷上カーニバルも別個に開かれているのだから、これはおかしい。次に、戦前から小樽の長橋小学校で子供たちが雪像を作っていたのを思い出して、と紹介している本もあるが、これもはっきりした資料はない。

やはり、当時札幌観光協会の主事をしていて、雪まつりを含む札観協の事務をほとんど一人でとり仕切っていた近藤直人が、札観協30年記念誌『観光札幌』（昭和41年8月1日発行）に寄せた文章の中で、「昭和十四年に小樽の手宮小学校々庭で、児童の雪像づくりをみて感激したのが、この発想である」といっているのが、正しいようである。

ただし、手宮小学校というのは北手宮小学校の誤りで、また、すでに昭和十年から続けられている小樽の名物行事であったことが、次の新聞記事で裏付けられよう。

「雪まつりの準備／北手宮校ですすむ

雪の郷土祭として小樽の一名物となっている北手宮小学校の第五回〝雪まつり〟は、二十六日〝国民精神総動員全国皆スキー行進〟と呼応して開催されるが、呼物の雪細工は寿老人、軍艦、タンク、兎等で、スキー合同体操、スキー行進、達磨落し、雪戦会その他がある」（「北海タイムス」昭和14年2月21日付）

第一回雪まつりでPRを兼ねて市中行進をするドッグレースの犬たち

北手宮小学校の第一回は昭和十年一月二十四日に始められ、その時からすでに「雪まつり」の名前が使われている（「小樽新聞」昭和10年2月25日付による）。一小学校と全市をあげての差はあるが、さっぽろ雪まつりの原形は、すでに十五年前から小樽にあったのだ。

小学校の雪像展といえば、昭和十四年二月十七日に、旭川市中央小学校（現在の同市知新小学校）でも、全校二千人の小芸術家が三時間がかりで、大小三百余の雪の彫刻品を作り、参観の父母も観賞したという記事が、やはり当時の「北海タイムス」にのっている。旭川市中央小学校の行事は昭和八年ごろから昭和二十年まで継続して、毎年二月十七日か十八日に開かれていた。

近藤直人も別のところで、「昭和十五年に札幌のある学校に相談したところ、物資不足の時でもあったので、児童のゴム靴や手袋が破損するという理由で、協力していただけなかった」と、残念そうに書いている。また『観光札幌』の札幌観光協会年譜の昭和十四年五月の項に、近藤主事から「雪まつり」の発言があった、との記載が残っている。近藤にしてみれば、戦前から暖めていた構想が、三笠宮来札を機会にようやく日の目をみた、ということではなかったのだろうか。

いずれにせよ、昭和二十五年のさっぽろ雪まつりが予想以上の盛会だったため、二十六年以降は札幌の年中行事として固定することにした。二十六年はやはり宮様スキー大会に合わせ、一月二十六、二十七日両日に開かれた。中、高校生の作る雪像も高さ七、八メートルと、前年より一回り大きく、出来ばえもよかった。

催しものは前年と同種類のもののほか、市民会館で有料の郷土芸能祭を開いたが、押すな押すなの大盛況で、壊された椅子やガラスの損害弁償費として、二万数千円を請求された。また丸井今井デパートで文化展「雪の教室」を、一月二十六日から二月三日まで開いた。雪の博士として世界的に有名になっていた中谷宇吉郎北海道大学教授が指導監修してくれた。中島公園の恒例氷上カーニバルも、この年から雪まつりに合体した。

余談になるが、中谷宇吉郎が初めて人工雪の実験に成功したのは、観光協会設立と同じ昭和十一年である。

昭和二十七年の第三回からは、宮様スキー大会が二月に行われるようになったため、独自のスケジュールを組むことが出来、二月九、十の両日、主会場を大通西四丁目に移して開かれた。この二月上旬という開催日程は、その後特別のことがないかぎり守られている。

七、国際化した雪まつり

自衛隊が雪像製作にタッチするようになったのは、昭和三十年の第六回雪まつりからである（保安隊時代の二十八年第四回では、野外演奏会に吹奏楽で参加しているが）。初期の雪像作りは中、高校生だけで、第四回からは商店街なども加わり、第五回では市内各地区も代表を出し、本職の彫刻家の〝壁画〟も現れた。なかには高さ一五メートルという、いまでいう大雪像のはしりもあった（第四回、伏見高の「昇天」）が、授業の関係などで、あまり大きいものは無理だった。

伏見高の大作「昇天」（第四回）

また、雪像が大きくなると材料の雪も付近からだけでは間に合わず、市土木課のトラックが近郊から運んだりした。そのため、観光協会などが自衛隊に打診したところ、〝国民に愛される自衛隊〟として地域社会に貢献したいし、本州出身の雪を知らない隊員の訓練にもなるからという理由で、雪運びと雪像作りへの積極的な協力申し出があった。

第六回では高さ一〇メートルのマリア像「栄光」一基だけだったが、第七回は馬に乗った楠正成の像「至誠」のほか、隊員二百名による雪戦会が人気を呼んだ。自衛隊の作る雪像は、雪も時間もたっぷりとかけているので、出来ばえは見事なものだった。第九回では二基となり、第十回からは三基になった。

自衛隊の協力で大雪像

やがて雪運びと大雪像作りはすべて自衛隊が当たることになり、昭和三十八年の第十四回からは真駒内自衛隊駐屯地を開放して、大通会場にまさるとも劣らない雪像群を作り出した（正式参加は第十六回から）。自衛隊の雪まつりに寄せる熱意と人海作戦は、一部から（自衛隊内部を含め）批判がないわけではないが、現在のさっぽろ雪まつりは、もはや自衛隊の協力なくしては成り立たないほど、規模も内容も膨張してしまっている。

雪まつりの主催団体は昭和三十四年の第十回から実行委員会組織に改められ、総務班、企画班、行事班、宣伝班、会場班に分かれた事務局（局員は観光協会、札幌市、商工会議所などから出向）が、それぞれ計画的かつ円滑に活動するようになった。このことは、その後の雪まつりの大型化、国際化に大いに役立つことになる。

最初は札幌市民のための行事だったが、やがて

北海道民の楽しみになり、全国に知られるまつりに成長していく。それには「札幌の雪まつりから日本の雪まつりへ」をキャッチフレーズに、旅行業者などとタイアップした実行委員会のPR活動もさることながら、たまたまそのころから開局するようになったテレビ局（NHK三十一年、HBC三十二年、STV三十四年）、部数が増えだした週刊誌などが、競って紹介してくれた功績も見逃せない。

国際化が目立ちだしたのは、昭和四十一年の第十七回だった。冬季オリンピック札幌大会の開催決定が目前に迫っていたこともあって（正式決定は四月二十六日）、北海タイムス社が各国の大公使から八十人を招待したのである。また、アラスカからエスキモーが訪れ、イグルーなど雪の部落を製作展示した。しかしこの年はまた、雪まつり客らを乗せた全日空機が羽田沖で墜落し、百三十三人全員が死亡するという悲しい出来事もあった。

しかしなんといっても、国際色豊かな雪まつりとなったのは、プレオリンピック開催の昭和四十六年と、オリンピック本番の四十七年だった。会期をそれぞれの大会の直前に設定し、雪像もオリンピック関係や外人にもわかりやすい童話ものが多かった（大雪像のテーマは、第二十回から公募）。四十七年には、ブランデージIOC会長をはじめ、各国役員、選手団、それに世界三十九カ国からのマスコミ取材陣も訪れ、〝ワンダフル雪まつり〟の映像や記事が世界中に広がった。

四十七年の第二十三回でもう一つ特記すべきことは、観客数調査方法の大幅変更である。それまでは、大通会場でいえば各丁目で随時カウントして、それらを合計する方法をとっていた。そのため一人の人が、西一丁目から十丁目までくまなく見ると、十人とかぞえられるような場合があった。観客数が十万や二十万人のときなら目立たないが、第二十回では、大通、真駒内合わせて四百一万人、第二十二回では四百五万人という数字になってしまい、市民やマスコミからもクレームが出た。

そのためこの年からは、大通会場では午前八時から午後十一時までの観客の動きを特定の地点でのみ測定、真駒内会場では通用門（一般入り口）地点で測定することにした。だから、第二十三回の合計観客数は、オリンピックでそれまでの最高だったのに、前年の四分の一の百十一万人と発表された。この測定方法はその後もずっと守られている。

自衛隊がはじめて作ったマリア像「栄光」（第六回）

雪まつりの期間中、薄野では「氷の祭典」がくりひろげられる

オイルショックで苦労

昭和四十八年秋のオイルショックは、翌年の第二十五回雪まつりにも、大きな影響を及ぼした。大雪像が一基でトラック四、五百台分の雪を使うほど（これまでの最高記録は、札幌オリンピックがあった第二十二回の大雪像「ガリバー像」の千三百台）、雪まつり全体では莫大な量の雪が必要だが、雪運びのためのガソリンもまた莫大である。家庭用の灯油でさえ見通しの立たないときだけに、ガソリン調達のための関係者の苦労は大変なものだった。

役員が上京して、島本虎三議員のあっせんで担当の大臣に折衝までしたが、確保できたのは前年実績六六％の一十五キロリットルだけだった。そのため苦肉の策として、大雪像の中に空のドラムかんを入れて雪の使用量を減らすことにした。大通、真駒内両会場で八百本も使ったが、製作期間中に大雪があったりして、無事開催することができた。危機といえば、四十四、五年ごろに、自衛隊の雪像作りに批判する声が出たことに対し、自衛隊側も協力打切りの姿勢をみせた。このため協会役員が、当時の松野頼三防衛庁長官に陳情して、ようやく理解してもらったこともあった。

しかし第二十五回は、雪まつりの国際化という面では画期的な年だった。初めて国際雪像コンクールが実施され、カナダ、フランス、韓国、南ベトナム、アメリカ、日本の六チームが参加し、それぞれ民族カラーを出した雪像を作った。最優秀賞はカナダの「セ・ラビロン」、アイデア賞フランスの「弥勒菩薩」、テーマ賞韓国の「南大門」、そして努力賞には、生まれて初めて雪をみるベトナムチームの「アオザイを着た少女」が選ばれた。国際雪像コンクールの参加国は年々増加し、昭和五十三年の第二十九回ではイタリア、パキスタン、エルサルバドルを含め十二カ国となり、昭和六十一年第三十七回は十一カ国十三チームだった。

外国からの観光客も年ごとに増えているが、観光協会としても昭和五十年十月に札幌市香港親善使節団十人を送って雪まつりキャンペーンを行い、翌五十一年の第二十七回には香港から大挙三百人の観光団と国際コンクール参加チームを迎えることができた。五十一年秋には、香港のほかシンガポール、クアラルンプールでもPRをおこなった。香港などとの使節団相互派遣は現在までずうと続いているほか、六十年からは、お隣の韓国とも友

国際雪像コンクールの製作風景

好関係を結んでいる。

昭和五十四年には、さっぽろ雪まつりも第三十回を迎えた。その目玉として、大阪の万国博で太陽と女神のシンボルタワーを作った世界的な芸術家、岡本太郎氏に、三十回雪まつり記念のシンボル大雪像を頼んでみよう、という話がもちあがった。実行委員会の代表が上京して頼んだところ、こころよく引き受けてくれ、高さ一二メートル、横幅三二メートル、奥行一〇メートルのテーマ雪像「雪の女神」が、会場を飾ることができた。

外国へも雪像の出前

岡本太郎と第三十回記念大雪像の模型。実際の雪像は、製作の都合上かなり変更された。

一方、雪まつりの見事な雪像が世界的に有名になるにつれ、外国からも雪像作りの依頼がふえてきた。第一回の海外遠征は、昭和四十八年の第二十四回ケベック・カーニバル（カナダ）で、久末鉄男を団長とする四人が派遣され「鏡獅子」を作った。ケベックには以来三回も行った。

続いて五十三年にはアメリカ・セントポール市の第二十九回ウインター・カーニバルに招かれ、五十五年にはアメリカ・シカゴ市、五十七年にはアメリカ・アンカレッジのファーランデーブーへ行った。五十八年にはスイス・グリンデルワルトの第一回世界の雪まつりに、五十九年には中国ハルビンの氷灯まつりでの国際氷像コンクールに招待された。グリンデルワルドとハルビンには、その後も毎年のようにいっている。

いってみれば雪像作りの出前だが、札幌雪まつりの長い伝統と、日本人の勤勉と器用さに裏付けされた雪像技術は、行くさきざきで驚きの目で迎えられている。雪まつりはたんに外国から観光客を呼ぶだけでなく、世界中に平和使節として札幌の名前を売り込むまでに成長したのである。

六十一年五月十五日の雪まつり実行委員会で、来年の第三十八回から会期を二日間延長することを決めた。新しい会期は、二月五日から建国記念日の十一日までで、十一日が土曜か日曜と重なった場合は、初日を一日繰下げ六日から十二日までとする。これによって休日が必ず二日入り、市民や観光客により長く楽しんでもらえるほか、地域活性化と経済効果のメリットも大きい。

戦前の中島公園

八、さっぽろ夏まつり

長い間札幌の人たちにとって、お祭りといえば五月の円山公園での花見を別にすると、毎年六月十五日の札幌神社祭だけだった（もちろんほかにも、三吉神社など地区ごとの祭りはあるが…）。この日は、客商売をのぞく会社、官庁、学校も休み、子供たちは正月のお年玉いらいの小遣いをもらって、買いものやサーカスを見に行く。中学生、女学生、そして警察官までも、この日を境に制服が夏服に変わる。氷水屋やビヤホールも本格的に忙しくなる…。

札幌神社や北海道神宮と名前の変った現在も、このお祭りが札幌市民にとっての大きな年中行事の一つであることに変りはない。しかし、いまは休日扱いになることもなく、だから人出も昔ほどではない。みこし行列の花やかさは変らないが、制服の切替日として重要性は薄れた（なにしろ制服そのものが減ったし、六月初旬から気候に合わせて替えている）。

始めは中島公園中心

だが戦後の札幌では、昭和二十五年からの「さっぽろ雪まつり」に続いて、二十九年から「さっぽろ夏まつり」が催されている。北海道神宮祭が初夏の二日間だけなのに対し、この夏まつりは文字どおり真夏の七～八月に、約一カ月間も連続して繰り広げられるのである。しかも、大通公園から駅前通り、狸小路、すすきの、中島公園、定山渓など、全市を包み込んでの多彩な催しであるところが面白い。

雪まつりと同じく、観光協会が中心になって盛り上げてきたものだが、その発端、途中経過は、必ずしも平担なものではなかった。

「盆踊りや花火大会／夏まつり・多彩な計画きまる

札幌観光協会では観光客の誘致とレクリエーションのために、今年から〝夏まつり〟を年中行事の一つとして開催する方針を決定、準備を進めていたが、このほどつぎのような要項が決定した。

期間は七月十七日から八月十八日ごろまで、中島公園のボート祭、豊平河畔の花火大会、大通二丁目の盆踊り、円山公園のホタル狩りをはじめ、オタネ浜の海水浴場、藻南公園の親子バス運転、定山渓の納涼電車、茨戸のボート遊びなどをこの祭りの中心とし、期間中に自動車に舞台装置をつけた山車を出すとともに、舞踊やクイズを公開、市内各店の早回りマラソン競走

商工夏まつりの納涼市（昭35年ころ）

も行う計画である。

このほか、夏まつり、大通花壇をテーマとして写真コンクールも行うことになっている」（「北海道新聞」昭和29年5月30日付）。

「札幌夏まつり幕開く／一カ月多彩な催し／これからは年中行事に

札幌夏まつりは十七日のパレードを皮切りに一カ月間のふたをあけたが、札幌観光協会では恒例の〝雪まつり〟とタイアップし、夏まつりを札幌の年中行事の一つにしようと懸命で、市民の参加を要望している。夏まつりの行事つぎのとおり。

中島ボート祭り（中島公園）、全国花火大会（豊平河畔）、子供相撲大会（中島公園）、海水浴（オタネ浜）、納涼バス（茨戸）、宮城道雄演奏会（中央創成小）、舞踊（中島公園）、明治デー（中島公園）、六大学ジャズバンド（スポーツセンター）、ほたる狩り（円山）、ビールの王様コンクール（狸小路）、三つの歌（中島公園）、ページェント（スポーツセンター）、漫才民芸大会（中島公園）、森永デー（中島公園）、七夕祭（中島公園）、バンビデー（中島公園）、盆おどり（中島公園）、納涼電車（定山渓）、遊覧飛行（市内および郊外）、夏まつり懸賞写真募集（市内各催場）」（「同」29年7月18日付）。

五月の予告記事での行事数は十三、七月の開始記事にのった行事は二十二。とにかく集めたものだが、よくみると、ボート祭りにしろ花火大会にしろ、盆踊りにしろ、それまでも企業なり地区なりがやっていたものが多い。目新しくみえた大通公園の盆踊りや有名店早回りマラソンは、七月の記事からは消えている。つまり、既存の催しをそのまま「さっぽろ夏まつり」という総称をつけてまとめた、という程度に過ぎなかった。

会場も二十二行事のうち十四までが、中島公園周辺に固まっている。第二回から狸小路商店街の「狸まつり」（前年から独自で開催）が夏まつりに参加するようになったが、全体的には中島公園がメイン会場であることに変わりはない。第四回（昭和三十二年）になって、花火大会や納涼ページェント、それに狸まつりをのぞいた大半の催しが、大通西二丁目広場に全面的に移動した。大通での主な行事は、子供提灯コンクール、道新こどもの夕べ、プロムナードコンサート、映画会、北海道郷土芸能大会、野外演奏会、観光の夕べなどであった。

夏まつりの日程は、第一回の三十二日間が第二回十四日間、第三回十七日、第四回十日間と減り、三十三年の第五回はたった四日間になってしまった。ボート祭りや海水浴のような行事を外したせいもあるが、大通公園の規制とか、商店街の都合とかによるものだった。しかしまつりを八月の初

定山渓かっぱまつりのパレード

旬に固めることによって、かえって人気が高まりその期間中の人出も増大したのである。

定山渓、すすきのも加わる

そのため、二十四年の第六回からは「さっぽろ商工夏まつり」と改称、商店街の夏枯れ対策としての催しをふやしていった。すでに主会場となった大通公園では、西一丁目のテレビ塔下と西八丁目特設舞台の二カ所で芸能関係の行事を九日間連続したほか、西六丁目でビヤガーデン、西七丁目で納涼市(金魚、植木、小鳥、骨とう品など)、特選品ショー、バーゲンセールなどを店開きした。昔の露店市を復活させたわけである。

三十九年の第十一回では、名称をもとの「さっぽろ夏まつり」にもどし、翌四十年の第十二回から「定山渓かっぱまつり」と「すすきのまつり」が加わった。これで、大通、狸小路、すすきの、定山渓の四大会場が出揃ったわけで、ほぼ全市をあげての夏まつりという体裁がととのい、このパターンは現在まで二十年以上も不動のものになっている。

また、このとしから始めたエルムカーニバルは、夏まつりの開幕を知らせるパレードとして、市民はもちろん観光客の喝さいを浴びた。警察のきびしい交通規制のため中止した年もあるが、さっぽろ夏まつりパレード、オリンピック音頭パレード、オープニングパレード、北方圏さっぽろ国際フェスティバルなどと名称は変っても、原則として続けられている。まつり関係者はリオのカーニバルとまではいかなくても、仙台の七夕、徳島の阿波おどりのような形に発展することを願っているのだが…。

「さっぽろ夏まつり／きょう幕あけ／ぐんとワイド化／〝定山渓、すすきの〟加え

〝さっぽろ夏まつり〟はこれが十二回目。同まつりを共催する市、札幌観光協会などは今回から雪まつりに並ぶ名物にするため、いままでの〝北海盆おどり〟〝狸まつり〟に新しく〝定山渓かっぱまつり〟〝すすきのまつり〟を加えて大型化をはかっただけに催しはぐんと充実。大通会場は十二日まで、他会場は九日までにぎやかな行事を繰り広げる。

初日の見ものはなんといってもエルムカーニバル。これには各会場の踊り手のほか市民仮装団も参加。千人からなる大パレードが大通西八―拓銀前―薄野十字街―南六西四間をねり歩く。これに続いても大通西八で午後六時半からキャンプソングを歌う会、北海盆踊り大会が開かれる。

一方、定山渓ではひと足先に午後一時から二

大通公園の納涼ビアガーデン年々人気が盛り上る

見橋上流で新名所〝かっぱがふち〟の入魂式を行ない、午後三時から全町かっぱパレード、夜八時から群舞パレードを繰りだす。

薄野会場でも負けじとグリーンビル前に特設舞台を設け。内海突破らの司会で午後六時からホステスらの踊り、ビール早飲みコンクール、韓国親善舞踊ショー、伊藤久男歌謡ショーなどを開催、初のすすきのまつりを盛り上げる。

また狸小路商店街は一丁目創成川河畔を会場に七日午後五時から舞楽、狸おどりばやしを、八日は子供みこしなどで景気をつける。このほか七日、八日は薄野会場で薄野美人コンテスト、定山渓会場でもかっぱパレードや群舞、アトラクションを実施。大通会場では十二日まで市民盆踊り、のど自慢、仮装盆踊りなどを連日繰広げる」（「北海道新聞」昭和40年8月6日付）

納涼ビアガーデン大好評

会期の方も北海道百年、札幌市創建百年に当った昭和四十三年（第十五回）には十八日間に伸び、四十五年には二十日、五十年には二十六日となり、最近では初めのころと同じ約一カ月間に戻った。大通公園の納涼ビアガーデンが大変好評のため、ガーデン開店中は各種催しも付随して続くからである。ただし、狸まつり、すすきのまつりは、それぞれ二―三日間でパッと咲き終える。

第三十二回になった昭和六十年の場合は、夏まつりの会期は七月二十一日から八月二十日までの一カ月間と決め、二十日夜の納涼ページェント（豊平川河畔での花火大会）が前夜祭となった。定山渓ニューかっぱ祭りが七月一十七日から八月四日まで、すすきのまつりは八月一―三日、狸まつりは同三―四日だった。そのほか、さっぽろ電車まつり（七月二十―二十一日）、北方圏さっぽろ国際フェスティバル（七月二十七日―八月五日）、四番街ふれあい夏まつり（八月三日、十四―十六日）などがあって、いつもどこかで何かが…という全市あげてのおまつりに発展しつつあるようだ。

六十年の納涼ビアガーデンは、七月二十一日から八月十日までの三週間店開きしたが、序盤と中盤には雨や涼気で閑古鳥が鳴く日もあったものの、終盤は連日の猛暑で五千席が毎晩満員の盛況。売れたビールは二十三万千リットル、中ジョッキーにして約四十六万杯にもなり、前年と並んで過去最高を記録した。

ライラックまつりの提唱者、更科源蔵

九、ライラックまつり 菊まつり

札幌市民には多分いないとは思うが、いまでも世間では、ライラックとリラを別の花と考えている人がいる。というより、ライラックは知っているがリラは見たことがない、リラは知っているがライラックはまだ見ていない、という人たちである。

昭和三十四年五月二十八日の第一回さっぽろライラック祭前夜祭で、ライラック文化講演会というのが市民会館で開かれた。講師は評論家の小林秀雄と作家の高見順、植物学者の館脇操北大教授の三人だった。高見順が演壇に立ったとき、わきに、まだ花が十分開いていないライラックが置いてあるのをみて、「なんだ、こんなこきたない花、ここに置いて」と、司会役の更科源蔵を叱ったという。

そのころも北海道ではライラックだったが、本州ではリラという名の方が通りがよかった。なんのことはない。両方とも全く同じもので、英語ではライラック、フランス語でリラと発音するだけのことだ。

原産地はイラン、トルコ半島から、ヨーロッパ南東部のバルカン半島にかけての一帯である。それが一五、六世紀ころ、フランスを中心にしたヨーロッパ全域に広がり、かなり遅れてアメリカに渡った。そしてアメリカから直接持ち込まれた北海道ではライラック、フランスから入ってきた本州ではリラと呼んでいたわけである。

明治中期からアメリカ産が普及した北海道（とくに札幌）では、どこの家庭にも一本や二本はあるほどのありふれた花木だったが、本州では気候のせいもあってあまりみかけない（暖かいところでは花付きが悪い）。それよりも、シャンソンの「リラの花咲くころ」が有名で、その歌を「スミレの花咲くとき」と改作した宝塚歌劇のテーマソングがさらに有名だった。つまり東京や大阪では、実物抜きにリラの名前だけが先行していたものだから、ライラック祭に呼ばれた高見順も気づかなかったのだろう。

札幌の木に選ばれる

現在でも、シャンソンの連想からライラックをロマンチックな草花と思っている旅行客が多いらしく、開花時以外に大通公園や北大植物園のゴツゴツしたライラックの大木をみて、がっかりする人が少なくない。なお、札幌で一番古い（ということは一番大きい）ライラックの木は、北大植物園の事務所の前にあって、樹齢は百年に近い。

日本名はムラサキハシドイというのが本当だが、

初期のライラック祭の市中パレード

いまでは札幌市民の百人が百人、ライラックと呼んでいる。さすがに、リラという人はほとんどいない。

さて、昭和三十四年から始まったさっぽろライラック祭（三十八年の第五回からライラックまつりと改称）のきっかけには、ちょっとしたエピソードがある。

札幌に文化人を主体にした〝こっくり会〟という月例の酒飲み会があって、三十年ころの会合で更科源蔵（詩人、郷土史家）が、「円山公園の花見は、よっぱらいが多くて、あまりにあさましい。むしろ札幌に多いライラックの花が咲くころ、大通公園に集まってビールで乾杯したり歌ったりするのが、ロマンチックで札幌らしい」といい出したところ、酔いも手伝ってか、「そうだ、そうだ」ということになった。

ところが札幌市からは、大通公園を一部の人たちの遊びに開放するわけにはいかないと断わられ、切角のアイデアも頓挫した。その後、更科と国松登（画家）、渡辺茂（郷土史家）が、NHKで対談したときにその話を持ち出した。当時NHK放送部長だった熊谷幸博が「それはいい、やりましょう」と、市役所に申し入れたらこんどは一発でOKとなった。

NHKも大通公園に面した建物に移ったばかりで、何か市民に喜ばれる事業をと考えていたところだった。だから最初のころのライラック祭は、札幌市、札幌観光協会、全北海道文化団体連絡協議会（道文団協）とNHKが主催で、他のマスコミは後援に回った。NHKは中央から講師を呼ぶ文化講演会や、「ライラックの歌」の募集、当時の人気番組「歌の祭典」の公開録音など、行事に積極的に貢献した。「歌の祭典」には藤山一郎、石井好子、柳沢真一、ビショップ節子らが出演した（翌年からは「今週の明星」「花の星座」）。なお、文化講演会は第七回まで続いた。

文化人らも道文団協として主催団体になったので、更科、国松、渡辺を始め、九島勝太郎（道文団協会長、音楽）、入江好之（詩人）、高木黄史（日本画）、河野広道（考古学）、金田一昌三（道立図書館長）、大谷久子（画家）、本田明二（彫刻）といった面々が、アイヌの衣装で飾りたて、市民会館から中島公園間を往復パレードして、市民の目を驚かせた。このとき、美術家連中は「札幌に美術館を建設しよう」のスローガンを掲げたが、これが札幌での美術館建設運動の旗揚げでもあった。パレードは第二回までで姿を消した。

第二回が開かれた昭和二十五年、札幌市の人口五十万人突破を記念して、市を代表する花、木、鳥を市民投票で決めることにした。札幌の代表的な木といえば、ライラックのほか、アカシヤ、エルム、ポプラ、白樺など、誰でもすぐにいくつか列挙するが、そのなかからひとつだけ選ぶとなると難かしい。ライラックまつり関係者は、ほかの

ライラックの植樹祭

木が選ばれたらどうしよう、と真剣に心配した。幸い、ライラックが一六、〇二一票で一位、次点はアカシヤ一四、〇〇〇票だった。なお花はスズラン、鳥はカッコウに決まった。

ライラックまつり関係者以上に喜んだのは、ライラックを〝行花〟としている北海道銀行で、大通公園にも面している同行は、ライラックまつりのオープンセレモニーである植樹祭に使うライラックの成木、市民に配る苗木をずっと寄付している。

ライラックまつりは、原則として五月の最終日曜日を含む三日間に開かれることになっていて、昭和六十一年五月二十三日～二十五日が第二十八回であった。これまでに行事はいろいろ変化しているが、植樹祭、苗木贈呈、野外演奏会などは恒例で、そのほかファッションショー、子供バレー、人形劇、似顔絵コーナー、花の種プレゼント、茶の野立て、大学生の落語などが人気を集めていた。

菊まつりは地下街に

札幌の四季の観光イベントとして、一番古いのは昭和二十五年から始まった冬の雪まつり、次いで二十九年からの夏まつり、そして春のライラックまつりとあるが、秋には目立った行事がなかった。札幌の秋は九月から十一月初めまでと短いが、それだけに秋の花と紅葉がいっぺんに来て、気候的にも本州の人たちが喜ぶ季節である。

例えば、十月の気象データを東京と比較すると、日最高気温の平均一五・九度（東京二一・二度）月間平均降水量一一五ミリ（東京一八一ミリ）、月間日照時間一六七時間（東京一三四時間）である。つまり、暑さが一段落して、雨が少なく、お天気の日が多い、ということになる。ところが紅葉にあまり期待できない札幌の場合（定山渓や豊平峡ダム、野幌森林公園等はあるが）、市街地で開く秋のまつりがほしかった。

たまたまというか、古来日本人に愛されている菊栽培の愛好者が、札幌でも昭和三十年代には急速にふえ、地域や職場のグループ毎に発表会が開かれるようになった。昭和三十六年十月には札幌菊花同好会が、市民会館で「第一回札幌菊花展」を開いた。翌年十月第二回を開いたが、会場が市内の中心地であったこともあって、これまでの発表会ではみられない観客と人気を呼んだ。

市民会館で開催するため、便宜上、札幌市教育委員会との共催の形をとった。札幌市ではどうせやるなら、札幌市全体の菊花展にしようと考え、昭和三十八年四月に市内の菊づくり六団体の責任者に集まってもらい、話し合いをした。その内容は次の通り報道された。

「市民がこぞって菊を観賞しようという仮称

大通公園の特設テントで開かれていた菊まつり

『札幌市菊花展』が、今秋から催される。いままでばらばらだった市内外の菊作りの人々が歩調を合わせることになったためで、札幌市観光課は札幌の秋の名物に仕上げたいと構想を練り始めた。

札幌を中心とする菊の愛好者は園芸ブームに乗ってめっきりふえている。グループ活動をしているところだけでも四十八年の歴史を誇る北海道菊花協賛会をはじめ、札幌市菊花同好会、札幌菊花芸術研究会、月寒菊花同好会、琴似菊花同好会、厚別菊花同好会がある。会員も市内はじめ岩内、千歳、岩見沢、室蘭などから参加、ざっと七、八百人に上る。

これらのグループはそれぞれ菊花展を開いているが、メンバーは二、三の会に重複して入会している例が少なくない。また、展覧会も貧弱なものが多かった。札幌市観光課はこれらのグループを一本にまとめ、スケールの大きい菊花展にする案を立て、三日午後、各グループと打ち合せた。この結果『仮称札幌市菊花展は各グループが市と共催して開き、盛大なものにする』ことに話がまとまった。全市的なスケールの菊花展が開かれるのは、道内では北見市に次いで二番目（「北海タイムス」昭和38年4月5日付）

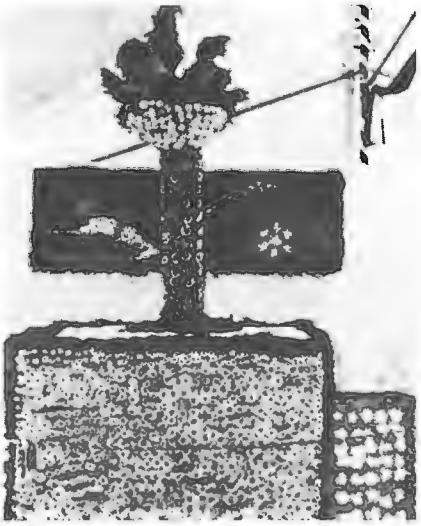
半年後の三十八年十月二十九日から十一月五日までの八日間、大通西七丁目広場で、第一回さっぽろ菊花展が開かれた。実行委員長には当時の原田与作札幌市長がなったが、菊作り六団体は群雄割拠の状態で一本化は難しく、結局札幌市と札幌菊花同好会の共催でスタートした（のち月寒、琴似、厚別同好会は札幌同好会の支部となり、観光協会との三者共催）。しかし他団体の会員も出品した。

会場を大通公園に移したのは、出品点数が市民会館時代より倍増して四五一点にものぼったため、屋内では適当な場所が見つからなかったことと、札幌の観光行事は大通公園でとの慣行もあった。大通公園の会場は四十八年まで続いたが、晴天のときは市民の出足も極めて快調で賑わうが、十月末という時期柄、雨や風、ときには雪の洗礼もあって、関係者は苦労した。大型ビニールハウスや特設テントを使うことになり、その使用料捻出のために入場料（四十二年二十円、四十五年五十円、四十八年百円）をとった。

しかし昭和四十九年の第十二回からは、札幌地下街を全面的に使用することになり、天候に左右される心配がなくなるとともに、市民のまつりにふさわしく無料とすることが出来た。翌五十年からは、それまで別個の菊花展を続けていた北海道園芸会菊花会が合流して、名実共に札幌市全体の菊まつりが実現した。昭和三十八

年に札幌市が秋のまつりとして構想してから、実に十三年ぶりであった。

いまは毎年十月末から十一月二日の文化の日までの四ないし五日間、さっぽろ地下街オーロラタウンとポールタウンの全長七百メートルが、ふくいくたる菊の香に包まれる。



菊で作ったオリンピック聖火台

札幌地下街で開かれている最近の菊まつり

初夏とともに大通公園を彩る観光協会のトウキビ販売ワゴン

十、トウキビと啄木

しんとして幅広き街の秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ

石川啄木の第一歌集『一握の砂』（明治四十三年十二月初版発行）に収められているこの一首は、明治四十年九月に札幌の多分、大通公園あたりで作られた。それから八十年たったいまも、札幌を訪れる観光客は、このうたを口ずさみながら、一本二百五十円の焼きトウキビを噛るのである。

古くは啄木をはじめ、本州の人たちはトウモロコシというが、北海道ではトウキビである。『広辞苑』によると、〝とうもろこし（玉蜀黍）〟は唐もろこしの意で、イネ科一年草、ペルーあるいはメキシコ原産、高さ三メートル、とある。その〝もろこし（唐黍、蜀黍）〟はイネ科一年草、インド原産、高さ二メートル、モロコシキビ、トウキビ、コーリャン。〝きび（黍）〟はイネ科一年草、東南アジア原産、高さ一メートル。イネ科一年草というところが共通で、高さが一メートルずつ違うのがおかしいが、唐もろこしなら唐唐黍と書いてもいいはずだし、もろこしの説明でトウキビとコーリャンを一緒にしているのも乱暴だ。なぜ北海道だけがトウキビなのかは判然としないが、トウモロコシ、イコール、トウキビであることは間違いない。

さて、その札幌のトウキビだが、明治四年ごろ開拓使がアメリカから輸入、栽培しやすいのと収穫率がいいのでたちまち普及した。そのころから昭和二十年代までのトウキビは、フリントコーン（硬粒種）とスイートコーン（甘味種）という品種がほとんどで、なかでもフリントコーンの中の「札幌八条」が有名だった。これは実がきっちり八列に並んでいるためで、焼いて食べるのがおいしい（もちきびのスイートコーン系の「ゴールデンクロスバンタム」は、ゆでるのがいい）。最近はデントコーン（馬歯種）の改良品種である「ハニーバンタム」が、甘味も収量も多いために市場を独占しているが、昔からの札幌市民にはサクサクして物足りない。

明治時代からの風物詩

大通公園でのトウキビ売りは、啄木のうたにあるように明治時代からあった。元祖といわれているのは、平岸村（現在、豊平区平岸）の重延テイである。明治十七年に夫の久太郎とともに愛媛県から移住したが、開墾のかたわら家計の足しにと、春はわらび、ぜんまいなどの野草をとって札幌で売り、九月には焼きトウキビを大通で売った。明

毎年ミスさっぽろが首相などにトウキビをプレゼントする（写真は鈴木善幸首相）

治三十年ころからのことらしい。

道路のいい現在でも、平岸から大通までは、手ぶらで歩いて一時間くらいかかる。それを女の人が、重たい皮付きのトウキビ（皮をむくとすぐ味が落ちる）をいっぱい背負い、ろくな道もなかったところを歩くのだから、昔の人は偉かった。テイのトウキビ売りが好評だったため、一人まね、二人まねするようになり、いつしか札幌の風物詩となった。そのうち一杯飲み屋まで加わって、屋台があまりに多くなったため、大正年間には禁止令が出たほどだった。

昭和十二年の『観光の札幌』に、広田ゆたかという人の「玉蜀黍の焼くる匂ひよ」という記事がのっている。

「アカシヤの並木の辻や、枝を張ったエルムの樹かげで、女の人が玉蜀黍を焼いている風景は、札幌の秋の夜の姿である。（中略）

唐蜀黍の焼ける匂ひと、醤油のこげる匂ひが、通る人の足を止めずにはおかない。

『唐蜀黍、いくらだね』

腰をかがめて囁く客の耳に、

『一本、二銭です』

といふ答につづいて、まだお河童にしたやうな女の子が、

『をぢちゃん、買って頂戴…』

と訴える声…

時には、姉さん被りにした若い内儀さんらしいのが味噌っ歯にこぼれるやうな愛嬌をのぞかせて、

『いかがです…もぎ立ての唐蜀黍です。とても軟かでおいしんですが…』

などと訴へて来ると、

『僕は遠くからわざわざ君の所まで買いに来たんだよ…』

なんて…その癖三本で五銭位にまけらせて買って行く連中もある。

とにかく、唐蜀黍はもぎ立てに限る。一晩おいても味は半減する。

もぎ立てで、然も割合に若い、淡黄色の奴、釜でゆでたものなどは食べられやしない。

やはり焼いたやつ、然も炭火で、わきの方から灰神楽を立てながら団輪（うちわ）でパタパタと煽（あお）ぎ立て、いい匂ひのプーンとして来た所へ、唐蜀黍を包んだ薄い葉で醤油を塗る―そしてもう一度仄（ほの）かに焼いたもの…

それが一番匂ひが高くて味も良い。

その一本を横に持ってかぶりつく。体裁よく指で一粒づつとって食べたりしたんじゃ、切角の北海道の味が台無しになってしまふ。

だから玉蜀黍は、明るい街頭の下じゃ食はれ

石川啄木像にトウキビを供える今井観光協会会長

ないので、賑やかな通りを避けた並木の下や、辻の樹かげなどが、最も相応しい」

観光協会の直営事業に

太平洋戦争のあと、風物詩など風流なものではなく、貴重な食糧補給源としてのトウキビ売りの屋台が、また大通公園に現われた。食糧難が落ち着く三十年代からは観光客相手の屋台の数がふえ、それとともに保健衛生上や道路通行上のトラブルが多くなり、四十年ころにはいったん姿を消す事態になった。

しかし、明治以来の札幌名物を消さないで、という世論が強く、昭和四十二年からは札幌観光協会の直営事業として、大通公園のトウキビ売りが再開された。カラフルなワゴン十台を、大通西一丁目から七丁目に配置して、昔と変わらぬ香ばしいにおいを振りまいている。地物が出回る七月下旬までは冷凍ものを用意して、四月末から十月一杯営業を続ける。

最高の売り上げを記録したのは、札幌オリンピック翌年の昭和四十八年で、最盛期には一日一万本、シーズン合計で九十三万六千本も売った。値段は一本九十円だった。翌年はオイルショック後のインフレで、一本百三十円になったことも響いて、売り上げは七十二万三千本に落ちた。一本百五十円になった五十年は六十四万四千本、五十六年には一本二百円になったが七十五万本と持ち直した。

しかし五十九年（一本二百五十円）は五十万四千本と再びちょう落、六十年は四十七万六千本で最盛期の半分になってしまった。不振の原因は、猛暑続きで観光客がアイスクリームやコーラに流れたこと、札幌の食べ物の種類が豊富になってトウキビの魅力が薄れたこと、市民にとっては豊作で一般市価との価格差が目立ったこと、甘いだけの「ハニーバンタム」が飽きられたこと、などがあげられている。札幌名物トウキビ売りも、啄木以来八十年で、大きな曲がり角に来ているといえよう。

詩人の住むべき都会

その啄木だが、七十回忌の昭和五十六年に札幌観光協会を中心として設立期成会の手で、歌碑と全身像がゆかりの大通公園西三丁目に建てられた。歌碑はもちろん「しんとして…」のトウキビのうた（書は日展会友、中野北溟）、像は札幌に来た二十一歳当時の和服、羽織袴姿（制作は日展会員、坂坦道）。はじめはトウキビを食べている像が検討されたが、とても彫刻にはならないということで、結局はいまみる手ぶら姿に落ち着いたというエピソードも残っている。

啄木は、結果的には札幌にたった二週間しか滞在しなかったが、札幌をこよなく愛し、できれば五、六年は住みたい、といっていた。その間の事

情は碑の裏面に、また啄木の札幌観は碑の側面に、それぞれ次の通り記録されている。

国民的歌人として知られる石川啄木が函館・札幌・小樽・釧路と本道漂泊の旅を続けたのは、二十一歳の折の明治四十年春から翌年の春にかけてであった。

札幌には秋九月の二週間滞在し、北門新報社に勤めた。啄木の代表歌集『一握の砂』は近代詩歌史上もっとも愛唱されているが、ここにきざんだ歌には明治の札幌の心情が鮮やかに詠まれている。

啄木像（うしろ）除幕式で「さっぽろ・啄木の歌」を献歌するたくぎん銀声会

啄木は札幌を「美しき北の都」とも「住心地最もよき所」ともいったが、そのゆかりを想い、ことし七十回忌にちなんでこの記念碑を建立するものである。

昭和五十六年九月十四日

石川啄木記念像設立期成会

「秋風記」より

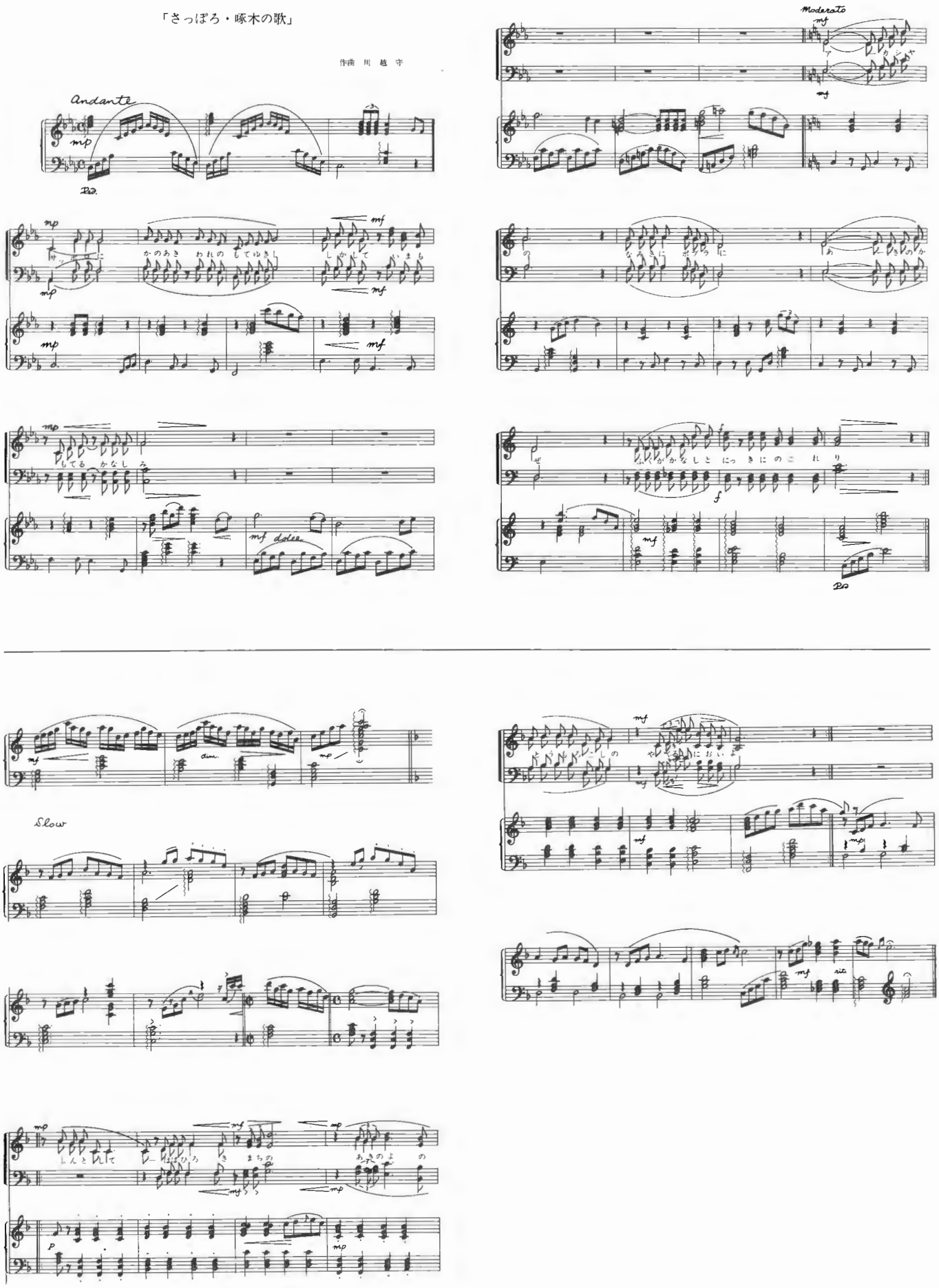
札幌は寔に美しき北の都なり。初めて見たる我が喜びは何にか例へむ。アカシヤの並木を騒がせ、ポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ。札幌は秋風の国なり、木立の市なり。おほらかに静かにして人と香よりは樹の香こそ勝りたれ。大なる田舎町なり、しめやかなる恋の多くありさうなる郷なり、詩人の住むべき都会なり。此処に住むべくなりし身の幸を思いて、予は喜び且つ感謝したり。

〈明治四十年作〉

なお、除幕式のあった昭和五十六年九月十四日は、啄木が七十四年前に札幌に足を踏み入れた日である。また、碑と像の建立を記念して、啄木が札幌で詠んだ三首をもとに、「さっぽろ・啄木の歌」が、北大交響楽団常任指揮者・川越守によって作曲され、除幕式で献歌された（合唱・たくぎん銀声会、指揮・池上恵三大谷短大教授）。

「さっぽろ・啄木の歌」

作曲　川越守



十一、大通り公園

ライラックの季節の大通公園

大通公園は、観光札幌の顔である。『観光客の動態調査』（昭和60年10月、札幌市観光部刊行）の中の、「札幌市内で一番印象に残った所」という設問に対し、二千人中一九・三％が大通公園と答え、トップを占めている。

なお二位以下ベストテンは、時計台一八・七％、旧道庁九・二％、北大九・一％、大倉山ジャンプ台三・八％、すすきの三・五％、サッポロビール園二・七％、羊ケ丘展望台二・五％、ラーメン横丁二・一％、植物園一・七％である。十二位にテレビ塔〇・七％があるので、これも広い意味の大通公園に加えると、ちょうど二〇％になる。

この調査は、六十年七月末に実施したので、大通公園を会場とする雪まつりやライラックまつり、ホワイトイルミネーションなどの催しとは、重なっていない。もし、それらの期間中だったら、もっと高い数字になっていたかも知れないが…。

最大のイベント会場

札幌の四季のまつりは、すべて大通公園を会場にしているか、会場にしていたことがある。始まりの古い順番でいうと、昭和二十五年からの「さっぽろ雪まつり」の第一回は大通西七丁目で始まって、いまは西一丁目から西十一丁目まで全部に広がっている。

昭和二十九年に始まった「さっぽろ夏まつり」は、最初の三回くらいまでは中島公園が中心会場だったが、そのごは次第に大通公園にウエイトが置かれるようになった。最近は、狸小路、すすきの、定山渓とともに四本立てで行われているが、期間中の人出はやはり大通公園が目立っている。

昭和三十四年からの「さっぽろライラックまつり」は、もともと大通公園から離れることはない。最近の催しもの会場は西四―八丁目だが、大通公園と周辺全体にライラックの木がふえていて、公園すべてがライラックまつりに包まれるといっていい。

「さっぽろ菊まつり」も、昭和二十八年に大通西七丁目で始まった。西七丁目は、戦後一時野球場になったことがあったので、他のブロックより

も木が少なく、ビニールハウス式の設備をするのには都合がよかった。四十三年から西八丁目に移り、四十九年からは地下街に入ったが、地下街もまた大通公園の下なので、いまもなお公園とは関係が深いことになる。

そのほかトウキビ売りも大通公園だし、噴水が四カ所、花壇が約八十カ所、彫刻、彫像が十基、記念碑が八基ある（いずれも昭和六十年末現在）。まさに大通公園は、市民にとっては便利な憩いの場所であり、観光客が札幌の名所と納得して帰るだけの値打ちがある。全国どこの名所をみても、これだけ盛りたくさんに飾られ、行事が行われている場所はない。

料理にたとえれば、洋食のフルコース、中国の満漢全席メニューである。しかも見どころのどれひとつをとっても、天然自然のものはまったくなく、古くても開拓使以後、ほとんどはここ三、四十年間に、札幌市民と観光関係者の努力で作られ、始められたのだから、その点だけとっても全国有数の〝名所〟に違いあるまい。

世間一般では昔から大通公園といい、ここでもそのように書いてきたが、実は昭和五十五年六月までは公園ではなく、法律的には道路として扱われていたのである。公的呼称は「大通逍遙地」であった。奇怪と思われるかも知れないが、成立の事情にまでさかのぼってみれば、その理由が明らかになる。

札幌市役所ロビーにある開拓使判官、島義勇の銅像

防火帯が公園になる

札幌のまちづくりは明治二年（一八六九）秋、開拓使判官島義勇が構想をたてたが二カ月で帰京を命ぜられ、後任の岩村通俊判官が翌三年三月から実際の地割りを指図した。

島判官が残した「石狩国本府指図」によると、いまの大通公園のあたりは、幅四十二間（約七六メートル）の広場のような空間になっていて、中央部に幅三間（約五メートル）の土塁が二列に並ぶ計画だった。防火帯であるとともに、官庁街（北側）と商人街（南側）の境界を形成する。この図面では、まちの北端に〝石狩国本府〟があって、そこからは幅十二間（約二二メートル）の大きな道路が一本だけ、南にずっと続くことになっている。アメリカ映画の西部劇に出てくる町並みとよく似ている。

ところが、岩村判官の指図で始められた建府の地割りはガラリと変わって、現在の札幌の町並みの原形ともいえる碁盤形に区切られるようになった。開拓使本庁はまちの北端ではなく、西北端に大きく位置し、その周辺には官舎街が取り巻く。まちを官庁街と商人街にわける防火帯の広場はそのままだが、幅が島判官の四十二間から五十八間（約一〇五メートル、図面では六十間だったが実測では

五十八間）にふくらんだ。

つまり、現在の大通公園はすでに明治三年に設計され、翌四年には出来ていた。当時は火防線あるいは後志（しりべし）通と呼ばれていたが、この呼び名は一般化せず、広い通りという意味の「大通」が固有名詞化したのである。

当初区割りされたのは、創成川を狭んで現在の東二丁目から西七丁目あたりまでだったが、その東も西もずっと空き地や桑畑だった。だから、東は豊平川から西は円山まで、大通が伸びる可能性もあったわけである。

しかし実際には、翌明治五年に東一丁目（便宜上いまの丁目を使う）から東側に開拓使工作所が作られて、東の方は創成川で切られてしまう。また明治十四年に豊平館が出来て、その前庭として大通の西一丁目が削られ、同三十一年には石造の札幌電話交換局が大通二丁目にはみ出した。そして決定的だったのは、大正十五年に大通西十三丁目に札幌控訴院（現在、札幌資料館）が東向き、つまり大通をさえぎる格好で新築されたことだ。これで大通は西一丁目から西十二丁目までに局限されることになった。いまでも札幌の将来像として、円山公園までの延長論が出ることがあるが、実際的にはもう不可能であろう。

島、岩村両判官が区割りした当時、本州のまちの道路幅は、四間とか八間とかが普通で、十間以上もあるのは東京でも京都でも珍らしい時代であった。明治五年に、東京府知事由利公正が、それまで八間幅だった銀座大通りの火災復旧案として、ニューヨークやワシントンの大通りと同じ二十四間にしようと提言したが、工務省や大蔵省からそんな広い道路は必要ないと反対されて、十五間に落ち着いたといういきさつもある。それなのになぜ、地方の小都市にもならない札幌で、六十間の大通りが計画されたのだろうか。

いくら土地が広いといっても、また島や岩村判官が気宇広大だったといっても、それまで四間や八間道路を歩いていた人間が、急に六十間道路を構想することがありうるのだろうか。いまの大通公園周辺が、ワシントンの国会議事堂前の緑地帯（モール）によく似ていることもあって、欧米の都市計画の影響がどこかでにおう（札幌にお雇い外人が来たのは、大通の地割りが終わったずっとあとだが…）。

さて理由は何であれ、人口千人そこそこの札幌のまちの真ん中に、幅百㍍以上、東西一㌔近い広場が出来た。草も木もなく、文字通りの広場であって、雨が降れば一面ぬかるみになる。逆に晴れた日は砂塵がすごかったろうし、通り抜けるのには時間がかかるし、当時の人々にとっては邪魔な存在だったに違いない。

大通が利用された記録としては、明治六年の札幌神社祭に、馬で参拝した農民たちが、大通で競馬（？）をしたこと、同九年には開拓使の官園で育

昭和15年ころの大通公園西三丁目

てた洋種の花を、西三、四丁目に植えた（花壇の始まり）こと、同十年から近在屯田兵の練兵場に使われたことなどがある。

明治十一年十月十五日には、西三丁目で第一回農業仮博覧会が開かれた。札幌農学校教授ブルックスの提案で、開拓使の札幌、函館の官園、札幌周辺の一般農家からの出品だけだったが、催しの少ない時代だっただけに、二日間の会期中大いに賑わったという。札幌の人口も三千人になっていた。以後函館と隔年開催され、大通での第二回は同十三年十月一日からの五日間で、一日平均二、九九一人の見物客があった（札幌の人口八千二百人）。同十七年からは北海道物産共進会と改称され、毎年大通で開かれるようになったが、同二十年には新しく出来た中島公園に移っていく。いずれにせよ、一般住民を対象にした本格的催事のはしりで、現在の大通公園の利用のさきがけというべき出来事だった。

札幌方式の大通花壇

何もなかった大通に初めて人工的な植栽が行われたのは、さきにのべたように明治九年、西三、四丁目の草花園だが、同二十九年にはマツ、サクラ、ヤナギの木が植えられ、牧草の種もまかれたという。四十年には札幌農学校出身で種苗と農機具商をやっていた小川二郎が、自費で花壇の造成をした。四十二年には札幌区が東京の公園技師長、長岡安平を招き、大通逍遙地の調査設計を依頼、その結果イタヤ、マツ、オンコなどが植えられ、次第に緑が増えていった。

明治三十二年に、それまで偕楽園（北七条西七丁目）にあった「開拓記念碑」が、大通西六丁目に移された。高さ二・七メートル、幅一・六メートルの安山岩で作られた碑石は、札幌でも最も古い記念碑である。続いて三十六年には、屯田兵本部長、第二代北海道庁長官をやった永山武四郎が中心になって、第三代開拓長官でのちに第二代総理大臣にもなった黒田清隆の銅像が西七丁目に建てられた。黒田と永山は同じ鹿児島県人で、軍人としても北海道開拓行政でも先輩後輩として深く結んでいた。同四十二年にはその永山の銅像が西三丁目に建てられた。

この二つの銅像は、太平洋戦争中の昭和十八年に金属回収のため撤去され、黒田清隆の方は昭和

昭和21年ころの駅前通りと大通公園、右側の西三丁目には米軍の教会がみえる。

四十二年に西十丁目に復活した。永山の像も同じ年に、第七師団長としてゆかりの深い旭川市常磐公園に建てられた。二つとも古い像は軍服姿だったが、新しい像は洋服姿である。

大正時代に入ると、大通の整備は急速に進み、公園としての体裁が整った。当時の写真をみると、芝生がきれいに手入れされ、遊歩道が幾何学模様に配置されている。その中に二つの銅像がそそりたち、周辺の木々もずいぶん大きくなっている。なかでも、西九丁目のハルニレ樹林がよく育ち、のちにその全体像から〝クジラ（鯨）森〟と呼ばれるようになった。

大通に面した建物も、明治十三年に豊平館が出来たのをはじめに、郵便電信局、聯隊区司令部、税務署、逓信局、地方・区裁判所、札幌監獄、控訴院、大通小学校、消防本部などの官公庁が、昭和初年までに勢揃いした。民間では新聞社、銀行、教会、医院、保険会社、旅館、印刷所、弁護士事務所などが続々建った。商店はほとんどなかったので、人出は必ずしも多くはないが、それだけに上品な街並が大通とよくマッチしていた。

しかし昭和十六年に始まった太平洋戦争で、大通も長い受難の日々を迎えることになる。銅像が撤去されただけでなく、芝生は掘りかえされて、食糧自給のためのイモやカボチャの畑に変わった。防空演習が始まると、大通は付近の住民や勤め人の避難広場になった（幸い、実際に使われたことはなかったが…）。

そして敗戦―。すぐには市民の手には戻らず、大半は進駐軍に接収された。西三丁目には木造ペンキ塗りの教会が出来、西四丁目は野球場、西五丁目はテニスコートに使用された。やがてこれにならって、市民用バレーコート（西二丁目）、テニス、バスケットコート（西六丁目）、野球場（西七丁目）が出来、散歩のための公園が、日米いりまじっての運動公園の観を呈した。もちろん冬季間は一面の雪野原になり、そのほとんどは市民の雪捨て場、そして子供たちのスキー場に早変わりした。

大通が昔の姿を取り戻していくのは、第一回雪まつりが開かれた昭和二十五年以降で、芝生の復旧、花壇の造成が徐々に進められていった。とくに、市内の造園業者が協力しての花壇造成は、札幌方式として全国的に注目されるほどの画期的な試みで、春から晩秋まで、いろとりどりの草花がとぎれることなく咲き続いている。

サルビアの小雨にけぶる花壇過ぎ
舗道を一つ傘に歩めり　　内田　弘
大通花壇花は終りて掘りかへされし

土のあらはに霜とけつ来つ　　吹田　晋平

歩みつつ手帳にメモとりゐたり

大通り花壇の由来あれこれ　　小林　哥子

建設中のテレビ塔、向いのビルは北海道電力（昭和31年、札幌市教委蔵）

昭和三十二年八月、それまでは芝生と花壇、それに樹木だけの平坦な眺めが特徴だった大通公園に、突如として地上高百四十七メートルの鉄塔が出現した。NHKのテレビ放送のための札幌テレビ塔である（テレビ放送は三十一年十二月から開始）。

正式には道路用地である大通公園に永久建築物を建てることには、法規上、景観上の諸問題があったが、折からのテレビブームと、観光資源としての魅力もあって、鉄材八百五十トン、セメント千三百トンを使って作られた。地上十九メートルのところに三階建ての食堂、事務室、準展望台、九十メートルに展望台があって、札幌周辺はもちろん石狩湾や大雪連峰まで遠望できた。

最初の一年間で百万人の展望客があったほどの観光新名所となったが、四十六年の札幌市新庁舎をはじめ八十メートルクラスの高層ビルが続々出来たので、眺めも珍らしさも次第に落ちて、最近では年間三十万人程度となっているが、六十年度末までの総入場者は千百八万人に達した。肝心のNHKテレビも四十年には手稲山頂から放送するようになり、いまでは〝テレビ塔〟の名は、体を表していない存在だ。

十二、札幌オリンピック

札幌のまちの原型は、明治初期に島、岩村両判官（とその協力者）によって作られたことは間違いないが、今日の札幌のまちは、昭和四十七年（一九七二）の札幌オリンピックが作り直した、といって過言ではない。それほど、オリンピックが札幌に与えた影響は大きかった。とくに来札する観光客（国内外とも）の数は、オリンピックを境に激増したからである。

札幌での冬季オリンピックは、かつて昭和十五年の開催が決まったものの、日中戦争のぼっ発で返上したという苦い思い出がある。そのあと第二次世界大戦に拡大したため、オリンピックは夏冬とも中止となり、戦後再開されたのは昭和二十三年（一九四八）のロンドン（夏）、サンモリッツ（冬）大会だったが、占領下のわが国は参加が認められなかった。

昭和二十六年（一九五一）になって、ようやく日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）の国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）復帰が実現した。さらに八年後の三十四年ミュンヘンＩＯＣ総会で、第十八回オリンピック東京大会（三十九年十月）の開催が決定した。東京も昭和十五年大会の返上いらい、実に二十四年ぶりに幻の大会を取戻したわけである。

ローマ総会で「われ勝てり」

このことから、冬季オリンピックの日本招致の気運が高まり、東京開催決定の翌三十五年十一月には、ＩＯＣの中に「オリンピック冬季大会招致委員会」（竹田恒徳委員長）が設けられ、各都道府県のスキー・スケート連盟に対し開催地希望をとった。すでに札幌市議会では三十二年三月の段階で、社会党提案の冬季オリンピック誘致の意見書を、満場一致で可決していたので、三十六年三月に「第十回オリンピック冬季大会開催地に立候補するの件」を、賛成多数で議決承認した。

ついで四月には、市長からオリンピック冬季大会招致委員会委員長に対し、正式に立候補の届出を行った。五月には北海道選出国会議員、道議会、市議会、地元の経済団体、報道機関、スポーツ団体、官公庁代表者など百三十七名からなる「一九六八年オリンピック冬季大会札幌招致委員会」（原田与作札幌市長が委員長）が結成され、三十七年六月に市総務局に「オリンピック課」も新設した。

中央の招致委員会からの呼びかけで立候補した市町村は八カ所にのぼったが、同委員会は三十七年五月に札幌市を最適地として選んだ。冬季競技の実績が多いこと、立地条件がいいことのほか、

札幌開催決定の知らせを受けて、市役所屋上に掲げられた市旗、国旗と五輪旗

かつて昭和十五年の開催が決まっていたことも大きな理由になった。このあと、JOCと政府の承認手続きをへて、板垣武四（市助役）ら三名の使節団がスイスのIOC本部を訪ね、ブランデージ会長に大会招請状を提出したのは、昭和三十八年二月七日のことだった。

第十回大会の開催地を決めるIOC総会の投票は、第九回オリンピック冬季大会の開催でわき立つオーストリアのインスブルクで三十九年一月二十九日に行なわれた。札幌招致委員会では原田市長以下二十名の使節団を送り込んで、事前の展示会やPRに懸命の努力を払ったが、投票の結果は立候補六都市のうち第四位で、開催地の栄誉はフランスのグルノーブルに与えられた。

かくして、北海道開道ならびに札幌市開府百年の記念すべき年にオリンピックを、という市民や関係者の夢はまたもや消えた。札幌に帰った原田市長には、市議会の一部から不信任案が提出されるという騒ぎもあった（賛成少数で否決）が、「青少年の希望の火を消すな」との大方市民の強い声に支えられて、同年十二月に市議会の支持をえて再立候補に踏み切った。

今回はとくに海外対策に重点を置き、東京大会のさいに、ブランデージ会長以下のIOC委員など海外の権威者を札幌に招いたのをはじめ、四十一年二月のさっぽろ雪まつりに、在日各国大公使、報道関係者を招くなど、PRに努めた。同時に競技施設の造成、改修も意欲的に進め、同年三月の第三十七回宮様スキー大会に招いた多くの外国選手、役員に好印象を与えた。

そして昭和四十一年四月二十六日、ローマで開かれた第六十四回IOC総会の投票結果、札幌が第十一回オリンピック冬季大会の開催都市に選ばれた。会期は四十七年二月三日から十三日までの十一日間と決まった。あの昭和十五年から実に三十二年目に、夢がついに実現するのである。

ローマでも招致派遣団長として苦労した原田与作は、札幌市役所の留守部隊など関係方面へ、「われ勝てり」の連絡をした。財政通で普段は地味な原田も、ことオリンピックに関しては、異常なまでの忍耐と闘志をしめした。若いころ、東京市財務局の予算係長をしていて、昭和十五年東京大会の計画づくりを担当したことで、オリンピック開

オリンピックを迎える札幌市民の合い言葉になった「ようこそ」のステッカー

オリンピック招致にかけた原田与作札幌市長

催が街づくりにいかに効果があるかを、よく知っていたからだという。

そのご原田は、オリンピック開催準備とまち作り推進に没頭したが、オリンピック開催の十カ月前に退任した。原田はその著者『私の五十年』の中で、「オリンピックの招致は、私の人生の最後の締めくくりをする、いわばライフワークだった。多くの人々に『オリンピックを契機に札幌の街の様相は一変した』とか『近代的な街になった』といわれると、私はいいしれぬ喜びに包まれ、生きがいを感ずるのである」といっている。

街づくりに約二千億円

『第11回オリンピック冬季大会札幌市報告書』によると、大会経費の総額は約二千二百億円で、内訳は競技場建設維持に約百億円、大会運営費等に約百億円、都市環境の整備事業、つまり街づくりに約二千億円が投資された。そのうち札幌市が負担したのは約九百億円、四〇パーセントで、原田のねらいは的を射ていた。

新設された十四競技施設は、現在もほとんど存置され、市民の体育振興に利用されているだけでなく、全国的規模のスポーツ、文化行事の会場としても、四季を通じて活用されている。関連施設も、オリンピック村、報道関係宿舎、大会運営事務局などは、それぞれ公団住宅、小、中学校、ショッピングセンターとして、恒久的に使用されている。柏ヶ丘のプレスセンターは、北海道青少年会館になっている。

関連施設の中には、現在の札幌市庁舎も含まれている。四十四年四月に着工(起工式は同年六月)、四十六年十一月に完成した。地上十九階、地下二階、延べ面積四万三千四百平方メートル、総工費約四十一億円。東京以北最高はもちろん、市庁舎としては当時世界一といわれた。札幌観光協会事務局もその四階に入居した(五十三年から二階)。設立当時は北一条西二丁目の旧市役所(現在、市庁舎駐車場)、翌十二年には北一条西四丁目の前市役所(現在、札幌グランドホテル別館)に移り、戦後の一時は旧市役所跡の産業会館にもいた観光協会にとって、四つ目の建物である。

IOC総会用にと建設された北海道厚生年金会館(中央区北一西十二)は、地上八階、地下一階、延べ面積三万一千九百平方メートルで、総工費は約四十八億円かかった。東京、大阪についで全国で三番目に作られた厚生年金会館で、二千三百席ある大ホールは現在でも札幌有数の催しもの会場として、各種全国大会、学会、音楽会などにフルに使われている。

都市環境整備事業費約二千億円のうち、もっともウエイトの高いのは道路整備費で、実に八百二十五億円が札幌市内とその周辺に使われた。まず道路では、札幌―千歳間、札幌―小樽間各二十四キロの高速道路(有料道路)が、日本道路公団によ

札幌オリンピック記念切手小型シート

って建設された(総工費三百十七億円)。もちろん北海道では初めての高速道路で、オリンピック運営にとどまらず、北海道の産業、文化、生活に及ぼしている恩恵は、いまにいたるまで計りしれないほど大きい。

そのほか、札幌市が豊平川の堤防道路など二十路線延べ五十五キロを、北海道が支笏湖線など十二路線延べ六十八キロ、国が創成川通りなど七路線延べ四十一キロを新に建設した。いま札幌で主要道路といわれているものの大半は、オリンピックのおかげで整備されたといっていい。オイルショックの前で、しかも土地提供者の協力があって、なお八百億円以上の金がかかった。もしオリンピックというチャンスがなければ、その何倍を使ってもまず不可能なほどの大手術で、いまの札幌の街の姿も違ったものになっていただろう。

橋も豊平川に南九条大橋、南十九条大橋、五輪大橋、真駒内に五輪小橋が新設されたほか、東橋、南一条橋、豊平橋、幌平橋、新藻岩橋が整備された。とくに真駒内主会場に近い五輪大橋と五輪小橋の親柱には、札幌出身の彫刻家、本郷新、山内壮夫、佐藤忠良、本田明二が製作した八基の彫像が建ち、芸術の香りをただよわせている。

高速電車(地下鉄)とそれに関連する地下街建設も、環境整備事業のうちだが別章でくわしく語ることにする。そのほか、都心部の地域暖房供給施設の新設、上、下水道の整備、真駒内公園の整備などがあった。またホテル、旅館の新築十五軒、増改築二十一軒が行なわれ、約二千五百人分の収容力が増加した。

世界にサッポロの名が

さて肝心のオリンピック大会だが、昭和四十七年二月三日の開会式から十三日の閉会式まで十一日間、好天続きに恵まれて競技および諸行事が予定どおり実施された。開会式には天皇、皇后両陛下が、閉会式には皇太子、同妃両殿下がご臨席になった。大会参加者は、三十五カ国から選手、役員千六百七十二人(うち海外千五百五十人)にのぼり、ほかに賓客等二千六十六人(海外七百六十五人)、報道関係者三千七百十二人(海外千三百四十一人)が記録された。

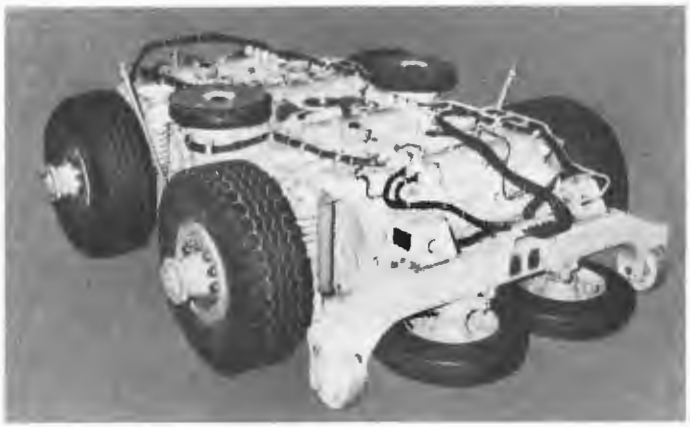
競技の成績は、金メダルがソ連八、東ドイツ、スイス、オランダ各四、アメリカ、西ドイツ各二などだった。日本は二月六日の七〇メートル級ジャンプで、笠谷幸生、金野昭次、青地清二が、金、銀、銅メダルを独占した。笠谷の金メダルは、日本にとって冬季オリンピックでは、初めてのことであった。

期間中の一般観客は約四十四万人(海外二千六百人)と推定され、大会関係者と合わせた延べ宿泊人数は三十二万七千人(海外七万九千人)になる。その消費額は、交通費十一億円、宿泊費十億円、その他雑費十二億円、合わせて約三十三億円と見込まれ、この額が生産部門に及ぼした波及効

七〇メートル級ジャンプで金、銀、銅メダルを独占した日本選手たち

果は六十四億円にのぼった(たくぎん調査部調べ)。中でもホテル、旅館、飲食店等サービス部門が十七億円でトップ、次いで運輸部門の十一億円、食・飲料品部門の九億円だった。

また札幌通産局試算による札幌オリンピック投資効果は、総額二千百億円の建設投資が約二倍の四千百八十億円の波及効果を生み、市内および道内の経済に大きな影響を与えたといっている。とにかくオリンピック前後以降の札幌市の人口、観光客の増加は、国内の大都市中群を抜いている。そして、世界におけるサッポロの知名度上昇が、何よりの遺産であったといえよう。



札幌方式ゴムタイヤ台車（最新の六〇〇〇系）

十三、地下鉄と地下街

札幌の地下鉄は日本では四番目に開通したが、ゴムタイヤだけの地下鉄としては世界最初である。ゴムタイヤを使った地下鉄はパリなどにもあるが、あちらはタイヤと鉄輪の両方を持っていて、走行中はタイヤを使うが交差点を渡るときは鉄輪を使う。札幌ではその交差点の構造を工夫して、タイヤだけですむようにしている。

そのため、札幌の地下鉄は世界中のどの地下鉄に比べても騒音が少なく、札幌へ来る観光客は一様に感心してくれる。世界中から地下鉄関係者や鉄道マニアが、地下鉄に試乗するだけの目的で、わざわざ札幌を訪れるほど。札幌のあと、横浜、神戸、福岡、京都…と新しい地下鉄が誕生したが、タイヤだけの〝札幌方式〟はまだない。

馬鉄から地下鉄へ

札幌地下鉄の開業は昭和四十六年十二月十六日で、南北線の北二十四条―真駒内十二・一キロがまず開通した。その四十九日後には、真駒内で冬季オリンピック札幌大会が開会したので、地下鉄はオリンピックのために計画、建設されたと思われがちだが、実は十数年前から札幌の新しい交通機関の検討が始まっていた。

札幌の都市交通機関として一番古いのは、明治四十二年に石切山石材運搬から始まった民営の馬車鉄道で、その後市街地の路線にも力を入れて、大正六年には延べ二〇キロにもなった。大正七年に開道五十年記念博覧会が中島公園を主会場に開かれたのを機会に、市街地線を電車に切替え、社名も札幌電気軌道株式会社と変更した。

レールと車両はイギリスに注文したが、第一次世界大戦のさなかだったので海上輸送が間に合わず、名古屋の会社から中古を二台買い、試運転もせずに大正七年八月十二日に営業を開始した（博覧会は八月一日から始まっていた！）。この二十六人乗り、長さ七・四メートルの第一号車は、現在札幌市交通資料館に保存されている。

昭和二年に札幌市が札幌電気軌道株式会社の事業を譲り受けた。このときの電車数は、二十六人乗り二十一両、四十二人乗り四十二両の計六十三両で、路線延長は十六キロだった。その後人口の増加、市街地の拡大とともに、路線は伸び、電車は大型化し、台数も増えていった。昭和三十九年度の路線延長二十五キロ、電車百四十三両、一日平均の乗客二十八万人というのが、市電史上最高の数字である。

一方、バス事業も馬鉄と同じ明治四十二年に始まり、昭和五年には市営バスも走り出した。その

札幌駅前通りを走る馬鉄（大正初期）

ほか国鉄、中央、定鉄バスがあって、いずれも都心部に集中してくる。昭和三十年ごろ、大通西二丁目の市営バスターミナルだけで、一日十五万人の乗降客があった。このため都心部の交通渋滞はひどく、バスは五キロ、市電は七キロ（いずれも時速！）にまで落ちた。

こうした傾向が出はじめた同三十一年、札幌市議会では将来の都市交通機関として、トロリーバスの調査研究に手をつけた。市としても三十五年、市電の大幅延長計画をたてたり、翌三十六年にはモノレールの検討もした。そうこうするうちに、札幌オリンピックの可能性が出はじめ、三十九年からタイヤ方式による地下鉄を前提にした、新しい交通方式の実験をスタートした。

そのあとは、四十一年オリンピック開催決定、四十二年地下鉄南北線建設申請。四十四年二月同工事着工と進んでいった。それまでの地下鉄道法では、免許基準としてレール幅何メートルという定めがあったのに、札幌方式ではレールがないので物議をかもしたが、急遽法令の方を改正して免許となった。工事期間も実質二年半という突貫工事だったが、あれもこれもオリンピックという錦の御旗ゆえだった。

その後五十一年六月には東西線琴似―白石間が開通、五十三年三月に南北線北二十四条―麻生間を延長、五十七年三月東西線白石―新さっぽろ間を延長して、現在の路線長は三十一・六キロ（営業キロ）になっている。そして五十八年七月から、第三の路線となる東豊線栄町―すすきの間八・一キロの工事にとりかかり、六十三年完成を目指している。

一キロ当りの建設費は、最初の南北線では約三十四億円だったのが、東西線では百二億円になり、東豊線では二百九十億円くらいになる見込みだ。一メートルが二千九百万円もかかるのだ。物価の値上りとか、駅舎など付帯設備の向上だけでなく、土地の買収価格が大幅にはね上ったためである。

開業当時の一日平均乗客数は約十八万人（札幌市の人口百五万人）だったが、東西線が出来てからは約四十二万人（人口百二十八万人）になり、六十年度は約五十四万人（人口百五十五万人）にのぼる。札幌市民だけでいえば、三日に一回乗る勘定だし、六人に一人が毎日一往復しているともいえる。

札幌の地下鉄は、札幌方式のゴムタイヤのほかにも、いくつかの新しい技術が採用されている。建設費節約のため、南北線平岸―真駒内間は地上を走っているが（だから正式には地下鉄といわず、高速電車といっている）、冬の雪害を防ぐスノーシェルターも札幌が初めてで、その後国鉄の新幹線などに応用された。無人出改札も当時としては目

地下鉄のテスト車「すずかけ号」（昭和42年10月）

新しく、しかも無札のときには、手前に閉じる方式だったので、妊婦に当って流産したらどうする、と市議会で真面目に議論されたことがあったが、幸いそうした事故は起らなかった。

地下鉄の開通によって、バスのターミナルは二十カ所に分散され、一番利用者の多いところでも、一日の乗降客は三万人程度に減少した。一列車で八百人以上も運べる大量輸送機関なので、雪まつりや夏まつり、初詣でといった人出のさいにも、大きな混乱なしに市民や観光客の足として十分に威力を発揮している。昭和六十年度冬のような記録的大雪でも、地下鉄だけは順調にしかも暖かく運んでくれるのである。

地下街は突貫工事で

地下鉄の副産物として出来、ある意味では地下鉄以上に、市民や観光客に親しまれているのが、札幌地下街である。

札幌の（というより北海道の）地下街のはしりは、札幌駅改築のさい、その地下に出来たステーションデパートという商店街で、昭和二十七年十二月に開業した（反対側の札幌駅名店街は、ずっと遅れて四十七年の開業）。

それから十年以上たった三十九年ごろ、狸小路商店街の人たちの間で、駅前通りの下をつなぐ地下道建設が話題になった。駅前通りがそれまでの二十三メートルから二十六メートルに拡幅されることになったため、西三丁目から西四丁目への人波がとぎれるのではないかと心配したのだ。そうでなくても、南一条と薄野の中間にある狸小路付近の市電の混雑がひどく、時には七台もジュズつなぎに止まって、老人や子供の横断は命がけだった。

しかし都心部での地下道建設は、金がかかるだけでなく各種の規制が強く、切角の名案も棚上げになっていた。ところが、四十三年になると地下鉄南北線の工事が始まったので、それに便乗する形で地下道建設案が再燃し、狸小路商店街を中心に「地下道造成推進協議会」が、四十四年二月に結成された。そのときはまだ〝地下街〟でなく〝地下道〟であった。

建設省の方針として地下道にしろ地下街にしろ、建設管理の主体は公社的性格でないとだめだといわれ、急遽同年五月に札幌都市開発公社（札幌市と商工会議所が五一パーセント出資）が設立された。初代会長に地崎宇三郎（衆議院議員）、社長に今井保（丸井今井デパート専務）が就任した。

全市的な公社になったため、狸小路だけの地下道計画が、大通から薄野までを南北に通る地下街計画に広がり、さらに大通公園下に東西線に延びる第二地下街と大駐車場も作ろう、と計画はどんどんエスカレートした。そのため、当初一億円だった資本金が、六回にもわたる増資で五億二千万

豊平川の下を通る地下鉄のケーソン工事

円にまでふくれ上った。

公社設立後わずか十カ月の四十五年三月に、南北線地下街の工事に着手、同年七月から東西線地下街と駐車場にも着工した。この時点ではまだ地下鉄東西線の工事は始まっていなかったのだから、ずい分思い切った工事計画だった。しかも、四十七年二月のオリンピックには絶対間に合わせる、商店街だから出来れば四十六年の歳末セールもやりたい、と無暴ともいえる突貫工事を強行したのである。

その結果、四十六年九月には本体工事が終った。着工以来、東西線はなんと一年三カ月、南北線でも一年七カ月という短い工期だった。トンネル工事とは違い地表から掘るオープンカット工法とはいえ、東西線では大通公園の樹木を移し芝生をはがして元に戻すというデリケートな作業があり、南北線では駅前通り商店街の商売邪魔にならないような工夫が必要だった。

一年半前後の工事で作った地下街の総面積は約四万五千平方㍍そのうち店舗面積は二五㌫で、残り七五㌫は歩道と地下駐車場のいわゆる公共施設だった（五十一年の東西線開通にともない、店舗面積が約千平方㍍増加した）。地下駐車場は普通乗用車が四百台収容出来、当時としては北海道一の大駐車場だった。

地下街のネーミングは、北国らしいイメージをふくらませて、南北線は「ポールタウン」、東西線は「オーロラタウン」と命名され、百五十一の店舗（うち本州企業六十五店舗）が入居した。駅前通り下のポールタウンはいいが、オーロラタウンは上が大通公園なので、買い物客は少ないだろうと敬遠されたが、いざ開業してみると人出はさほど変らず、売上げはむしろオーロラタウンの方が上回った（五十二年以後はポールタウンが上）。

二百億円を越える商店街

札幌地下街の開業は、昭和四十六年十一月十六日午前十一時十六分だった。月日と時間の数を揃えたのである。地下鉄開通のちょうど一カ月前になる。人出は一日で三十五万人を数え、最初の日曜日に当った二十一日には四十五万人が殺倒した。

十一月中旬は地上の道路が泥だらけの季節だったこともあって、地下街は土ぼこりで遠くが見えないほど。あわてて入口にマットを敷いたが、そのマットから出る泥が一日に石油缶二十杯にもなった。一日に六回サイレンを鳴らし、各店舗の従業員がモップを持っていっせいに泥掃除をするという珍妙な光景もみられた。最近は、地上の道路が完全舗装され、地下街の空調機もよくなったので、こんなことはないが……。

冬でも快適な札幌地下街

地下街は四十九年から、観光協会など共催のさっぽろ菊まつりの会場を提供しているほか、雪まつりや夏まつりのときには協賛セールをやる。また五十三年から商店街の経営者たちが「地下街木遣り行列」を始め、いまでは札幌の正月名物のひとつになっている。

近く開業十五周年を迎える地下街の現況は、店舗数百五十二で、年間売上げ高二百億円を越える。業種別では、衣料品と身の回り雑貨(靴、バッグ、アクセサリー、化粧品)が六割を占め、圧倒的に婦人ものが多い。売上げ高では丸井今井、三越、東急などのデパートにはかなわないが、売場面積当りではむしろデパートを抜くことが多い。

地下街の通行量は、平日平均三十五万人、休日四十五万人で、平日は夕方、休日はひる過ぎころが一番多い。ポールタウンとオーロラタウンの割合は、開業当初は六対四くらいだったが、五十一年にオーロラタウンに並行して地下鉄コンコースが出来たことと、五十三年にポールタウンわきに場外馬券売場が出来たため、最近では七対三くらいまで開いている。

明治十二年の札幌農学校、左手奥が演武場、その右が寄宿舎（『札幌生活文化史』から、北大図書館蔵）

十四、時計台

一年三百六十五日、時計台の前には、カメラをかまえた観光客がいる。とくに夏休みや雪まつりのころになると、西二丁目通りの時計台側にも、その反対側の歩道にも観光客があふれる。時計台をバックに写真をとり、とられようとするものだから、小走りに西二丁目通りを横断して、車の方が恐る恐る通っている。

『観光客の動態調査』（昭和60年10月、札幌市観光部刊行）で、観光客の市内訪問先のサンプル調査の結果をみると、時計台が八四・九パーセントで断然トップになっている。二位以下は大通公園七六・三パーセント、旧北海道庁四九・八パーセント、すすきの四一・一パーセント、北大三六・三パーセントである。とくに十五歳から二十四歳までの若年層では九〇パーセントを越し、二位大通公園の七〇パーセント台を大きく引離している。

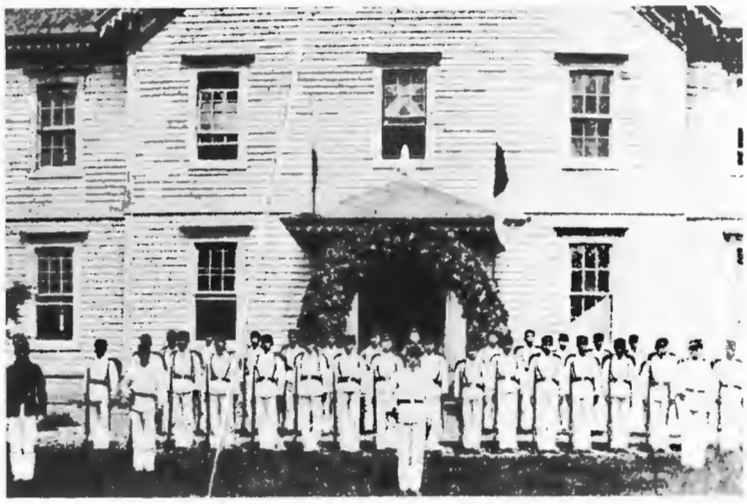
年間観光客を八百万人とすると、時計台には六百八十万人が訪れる勘定になり、一日平均二万人近い。だから観光シーズンは四、五万人ということになって、西二丁目通りが渋滞するのも不思議ではない。イメージ的にも時計台といえば札幌を指すほど、札幌のシンボルになっている時計台の、何が一体そんなに人をひきつけるのだろうか―。

もとは屋内軍事教練場

時計台は正式には、旧札幌農学校演武場である。札幌農学校は明治九年、開拓使によってわが国最初の高等農事専門教育機関として、現在の中央区北二条西二丁目あたりに設けられた。二年後の十一年に建てられたのが演武場で、英語名は「ミリタリーホール」、つまり屋内軍事教練場であった。当時は「練兵館」とも呼ばれていた。

木造二階建て、延べ七六〇平方メートルの建物が当時の三千八百七十円で出来た。一平方メートル当り五円ちょっとで、同じ農学校北講堂（外人教師住居）の二十二円はもとより、寄宿舎の九円に比べてもずい分安い。なにしろ教練場なので、間仕切りが少なく、防寒抜きの実用建築だった、からであろう。同じアメリカ式建物でも、東部の古典式本格的なものではなく、どちらかというと西部の開拓地スタイルである。

それでは実質本位の教練場の建物に、なぜ時計台を飾ったのだろうか。その答えは簡単で、時計台が建てられた明治十一年前後のわが国では、官庁、兵舎、学校、会社商店、はては妓楼まで、さまざまな建物に時計をつけることが流行していた。文明開化を象徴するアクセサリーとして、当時の人々に歓迎されたのだろう。東京区内だけでも三十六あったというから、全国では恐らく百以上数えた



演武場前での卒業式閲兵行進（明治二十一年、『札幌生活文化史』から、北大図書館蔵）

に違いない。

こう書くと時計台の値打ちが下がるようだが、アメリカ西部開拓地スタイルの建物というのが日本ではきわめて珍しい存在だったし、東京はじめ各地の古い時計付き建物がなくなったり、かろうじて残っていても時計が壊われていたりしているのに、わが時計台のみはいまも正確に時を刻んでいる。だからこそ国指定重要文化財として、全国的にも貴重視されているのである。

だがそれ以上に若者たちに人気がある理由としては、時計台が小説や詩歌、歌謡曲にしばしばとり上げられ、文学的かつロマンチックなムードを漂わせているからではないだろうか。古いところでは、札幌農学校の生徒から教授として前後十二年間を札幌で過した有島武郎が、大正十一年に出版した小説「星座」の一節である。

「手欄りもない階子段を、手さぐりの指先に細かい塵を感じながら、折れ曲り折れ曲りして昇るのだ。長い四角形の筒のやうな壁には窓一つなかった。その暗闇の中を園は昇っていった。（略）

頂点には、主に堅い木で作った大きな歯車や槓杆の簡単な機械が、どろ〳〵に埃と油とで黒くなって、秒を刻みながら動いてゐた。（略）

札幌に来てから園の心を牽きつけるものとてはさう沢山はなかった。唯この鐘の音に心から牽きつけられた…。鐘に慣れたその耳にも演武場の鐘の音は美しいものだった」

園とは主人公の農学校生徒の苗字である。この小説が世に出てから、時計台は全国に知られるようになったという。一方、同じ年に高階哲夫が作詞作曲した「時計台の鐘」は、長い年月を経て人々に愛唱されるようになり、いまでは、〝札幌市歌〟といえるほどいろいろな機会、場所で流されている。なお、この「時計台の鐘」の原譜、テスト盤レコードなどは、高階愛用のバイオリンとともに、いまも時計台の一室に飾られている。

一　時計台の鐘が鳴る
　大空遠くほのぼのと
　静かに夜は明けて来た
　ポプラの梢に日は照り出して
　奇麗な朝に成りました
　時計台の鐘が鳴る

二　時計台の鐘が鳴る
　アカシヤの樹に日は落ちて
　静かに街も暮れて行く
　山の牧場の羊の群も
　黙って御家へ帰るだろ
　時計台の鐘が鳴る

もう一つ、北原白秋が雑誌『赤い鳥』の大正十

札幌区教育会付属図書館時代の時計台（大正初期）

五年に発表、昭和二年に山田耕作の作曲で世に出た「この道」も、時計台のPRには大きな役割を果たしてくれた。実はこの詩、白秋の生地である九州柳川市を歌ったものだとか、母堂のふるさと熊本のイメージも入っているという説もあるが、〝アカシヤ、時計台、馬車〟と並んでいるのだから、大正末期の札幌を歌ったものと思いたい。

この道はいつか来た道
　ああ、そうだよ
アカシヤの花が咲いている

あの丘はいつか見た丘
　ああ、そうだよ
ほら、白い時計台だよ

この道はいつか来た道
　ああ、そうだよ
お母さまと馬車で行ったよ

もっぱら図書館の役割

ところで、演武場の建物だが、軍事教練のほか一種の雨天体操場としても使われ、一階の小部屋は農学や英語の教室、動植物・地質鉱物の標本室にも使われた。さらに、卒業式や講演会、学芸会のような学校行事の会場にもなったし、ときには校外の団体が主催する催しものにも開放されることがあった。当時、札幌で数百人を収容できる建物は、明治十四年に完成した豊平館とこの演武場しかなかった。

明治三十六年になると、札幌農学校は北部の農場（現在の北大農学部付近）に広い校舎を新築して移転、空き家になった演武場は札幌区に貸付けられた。三十九年には買収費千円で札幌区に移管され、同時に北二条通り建設のため、約百メートル離れた北一条西二丁目の現在地（農学校寄宿舎あと）に引っ越した。このころには演武場の名前も消えて時計台となり、その鐘の音は街の四方に鳴り響いたのである。

札幌区が時計台の利用計画を考えていた矢先の明治四十年五月十日に、南三条西一丁目から出火した火災が大通以南の中心部を焼きつくした。その中には札幌支庁、警察署、郵便局、各銀行などが含まれていたので、郵便局の窓口が時計台を使うことになった。明治二十五年の大大のときにも、裁判所の法廷に一時使われたことがあったが、こんどは明治四十三年十一月までの三年半に及んだ。

翌四十四年からは、北海道教育会と札幌区教育会が無償貸付けを受け、事務所と図書館が入った。当時道内の他地区には公共図書館がすでに七館あったが、札幌区ではこれが初めてで蔵書も五千冊たらずだった。その後教育会の組織には多少の変化はあったが、太平洋戦争で軍の施設に接収され

る昭和十八年まで、実に三十二年間も北海道教育のメッカになった。

図書館としての役割りは、予算不足で蔵書がふえなかったこともあって、低調の時代が長く続いた。大正十一年七月二十七日に、図書および設備一切を札幌区に移管して、区立札幌図書館が誕生した（北海道庁でも、皇太子行啓を記念して同十五年八月、庁立北海道図書館を北一条西五丁目に開館した）。

時計台の土地は、ずっと札幌農学校とその後身の北海道帝国大学の所有だったが、大正十五年一月に約千坪を五万四千円弱で買収、ようやく土地建物とも札幌市所有になったのである。

時計台は札幌の顔、いつも観光客でにぎわっている。

教育会が管理していた期間中、講堂が教育関係の総会、講演会、講習会などに使われたのはもちろんだが、一般の利用にもしばしば開放された。主なものとしては、早稲田大学総長高田早苗の講演会（明治45年）、内村鑑三のキリスト教講演会（大正元年）、島村抱月の新劇講演会（同3年）北斗画会展覧会（同4年）、農科大学文武会主催の模擬国会（同6年）、普通選挙促進演説会、救世軍山室軍平講演会（同8年）永井柳太郎講演会、賀川豊彦講演会（同10年）、大山郁男講演会、長谷川如是閑講演会（同14年）、有島武郎七周年記念講演会（昭和4年）、雪国作品展覧会（同5年）、伊藤整、阿部知二講演会（同13年）。

昭和十八年に接収されて陸軍の通信隊などに使用され、一十年の敗戦後は、米軍に接収された札幌商工会議所ビルから、北海道商工経済会（のち商工会議所に）など経済関係諸団体が移転、二十一年には新たに結成された北海道教職員組合（北教組）の本部も入った。呉越同舟、寄合い世帯の時代であった。

しかし二十三年には諸団体はすべて退去し、二百三十万円をかけて修復したあと、二十五年五月一日、市立図書館として新装オープンした。二十六年には、それまで今井デパートにあった郷土資料室も移り、その後「ホーレス・ケプロン資料展」「時計台変遷写真展」なども催され、博物館的役割も果たした。

ビルの谷間で生き続ける

昭和四十一年十二月に市立図書館は北二条西十二丁目に移転し、時計台は復元改修工事をほどこされたあと、四十三年「時計台資料室」（五十一年

明治の衣裳をつけて、にぎやかに時計台まつり（昭和五十九年）

から「札幌歴史館」）としてよみがえった。この前後に、札幌観光協会が時計台の永久保存を市議会に陳情して議決されたほか、ビルの谷間からの移転論も出たが、やはり由緒ある現在地に落ち着いたのである。

ここで時計台の時計と鐘についてふれておく。冒頭に書いたように、時計台の歴史的価値の一半は、古い時計が百年以上も動き続け、鐘を鳴らしている点にある。時計はアメリカ・ハワード社製、鐘は東京の工部省赤羽工作分局製で、明治十四年に据付けられた。時計と鐘の動力源はもちろん電気などではなく、石のおもりをつけたワイヤーロープを手で巻き上げ、それが除々に下がるときのエネルギーを利用している。三日毎に双方のおもりを巻き上げるのに二時間はかかる。

単純な機構とはいえ、主要部分が露出しているので、ほこりがたまり歯車などが磨滅する。教育会管理時代にはしばしば故障し、かなり長い間止まっていたこともあったらしい。近所にいた時計師の井上清が、おもりの巻き上げ、清掃、油差し、時刻調整を独力で無料奉仕するようになり、以来止まることはない。いまは息子の和雄が手伝っている。

なお、時計台創建の場所をしめす「札幌農学校演武場跡」の白御影石碑が、北二条西二丁目のヤナセ自動車札幌支店ショウ・ウインドウ内にある。

十五、羊ケ丘開放

羊ケ丘という地名は、昭和十九年二月二十七日の豊平町議会で、美園、西岡、福住、清田、真栄、北野、平岡、里塚、有明、藤野などと一緒に、新たな字名として誕生した。それまでの豊平町の地名は、極めて大雑把なもので、羊ケ丘をはじめ、西岡も福住も、清田、真栄、北野、平岡、里塚、有明とも、すべて大字月寒村の一部であった。

羊ケ丘には、明治三十九年から農商務省月寒種牛牧場（のち月寒種畜牧場、畜産試験場北海道支場）が設けられ、その一部に大正八年四月、月寒種羊場が出来た。途中、滝川種羊場の分場に格下げになったこともあるが、大正十三年十二月に、一、二〇〇㌶の用地全体が月寒種羊場となった。昭和六年からは、農林省月寒種羊場と改称され、最盛期には二千頭のめん羊がいた。

クラーク博士像と王貞治

ジンギスカンの発祥地

農商務省の依頼を受けて、それまで屯田兵の草刈場だったところを牧場用地に選び、初代場長ともなった岩波六郎は、札幌農学校で作家の有島武郎と同級生だった。用地選定の報告書では、この地は札幌から二里（約八㌔）と便利がよく、地形もおおむね平坦である。欠点としては、やせた火山灰で水の便悪く、樹林に乏しいことをあげている。だから岩波場長は、場内のいたるところにカラマツやポプラを植林した。現在の展望台の後方にこんもりと見える林や、正門からの並木などがそうである。

岩波場長は大正六年に農商務省畜産課に転勤になり、ここでめん羊百万頭自給計画という壮大な計画をたてた。当時の日本は、軍服などラシャ地の原料として、羊毛の需要が急増していたのである。月寒種羊場はこの自給計画に基づいて作られたもので、岩波は二重の意味で羊ケ丘の恩人であり、彼なしには現在の羊ケ丘は存在しない、といっても過言ではない。

余談だが、彫刻家で詩人でもある高村光太郎も、農商務省海外実習生としてパリ留学のあと、月寒種畜牧場に勤務したことがある（明治四十五年五～六月）。詩集『道程』（大正三年刊行）の中の「声」という詩に、「平原に来い／牛が居る／馬が居る／貴様一人や二人の生活には有り余る命の糧が／地

昭和初期の月寒種羊場

面から湧いて出る／透きとほった空気の味を食べてみろ／そして静かに人間の生活といふものを考えろ／すべてを棄てて兎に角石狩の平原に来い」とあるのは、当時の追憶であろう。

また、いまや北海道の名物料理になっているジンギスカン鍋の発祥は、大正十二年ころ月寒種羊場の技師が中国から持ち込んだのが起源である、という説が有力だ。昭和十六年には、農家や一般家庭用に羊肉料理のパンフレットを出し、月寒流ジンギスカンを紹介している。

さて、その月寒種羊場だが、広大な景観とめん羊の大群は、札幌観光協会設立当時から、札幌の代表的観光地だった。昭和十二年発行の『観光の札幌』にも、

「内地からの観光客が最も感興を惹き、景観美をたゝへる個所は、植物園と月寒の種羊場とである。（中略）種羊場から見はるかす石狩の大平原が展開して雄大の景観だ。殊に夕陽の傾く頃は、所謂北大の寮歌にある羊群声なく牧舎に帰る牧歌的な風景を如実に味はう事が出来る」

と紹介されているほどである。戦前にこの地を訪れた有名文化人も少なくない。

羊飼ましろき衣のうごくところ
羊の群の雲のごとくうごく　　九条　武子

時雨雲ゆきかひしげくはるかなる
羊の群にて照りかげりする　　若山喜志子

雲しづむ夕牧のはてに点々と
羊は黒き星のごとし　　佐々木信綱

花に舞ふ蝶をみだして二頭曳の
草刈車刈りつつ過ぎぬ　　吉植　庄亮

観光協会が新名所作り

戦前は観光名所といっても見学者はそれほどではなく、めん羊のそばまで自由に入っていた。しかし戦後、昭和二十年代後半になると数がふえ、しかも自動車での乗り入れがふえたので、二十七年八月に農林省北海道農業試験場畜産部（二十五年七月に改称）から、「車の往来で道路が荒れた。観光客の通行を断る」という申し入れが、観光協会はじめ関係機関にあった。

その時は、観光協会が中心になって、バス、ハイヤー業者から寄付金を集め、協会からも一部を出して破損道路を修理、なんとか観光見学を続けることが出来た。しかし観光客の中には、めん羊に石を投げたり追いかけたり、試験作物を失敬する不心得者もいて、三十年五月には再び「修学旅行以外の一般の見物を禁ずる」と、事実上の開放中止がきめられた。

折衝の結果、同年秋になって、「土曜午後と日曜日をのぞき、徒歩で見学するならよい」ということになったが、観光バス、ハイヤーの乗り入れが

大人も子供も喜ぶシャンシャン馬そり

許されず、肝心の土、日曜はダメということで、実際には全くのシャットアウトになってしまった。観光協会、北海道観光連盟、北海道バス協会による開放陳情と話し合いはずっと続けられたが、この状態は三十五年六月まで、実質五年間続いた。

三十四年の話し合いで、正門からの出入りは困まるが、札幌寄りの福住から入る裏通りならいいということになった。そのため、福住から牧場内に入る約二・二キロの豊平町道と、さらに展望台(駐車場)に通ずる一・二キロの私道を、百六十万円の予算(業者負担)で補修し、観光協会は百七十万円で入り口の通門所、展望台付近の環境整備と休憩所を作った。そして翌三十五年五月三十日付けで、六月一日から十月三十一日までの参観が正式に許可されたのである。この年の入場者は、十一万二千人だった。

しかし肝心のめん羊は、展望台から離れたところで飼育され、時期や時間によっては一頭も姿を見せず、入場者をガッカリさせることもあったが、昭和三十七年からは試験放牧という名目で、常時展望台付近にめん羊がみられるようになった。三十八年の入場者は二十万三千人と、わずか二年間で倍増する人気、札幌の観光コースの目玉として定着した。

初めのうちは、春から秋までだけ開いていたが、実情に合わせて昭和四十六年から冬季間も含め通年公開となった。しかし冬季間は緑がないため短調になるので、シャンシャン馬そりを運行、展望台広場を回るようにしたため、子供はもちろん大人にも人気をよんでいる。六十年冬の利用者は、四万二千人にのぼった。

昭和四十七年の十二月には、オーストリア館が移築され、新しい名所になった。これは同年二月の札幌オリンピックのさい、オーストリア政府が真駒内会場に七千万円で作ったもので、総ガラス張り二階建て、赤い三角屋根のしょうしゃな建物。オリンピック終了後撤去することになり、民間からの譲り受け希望も多かったが、処分をまかされていた竹中工務店が観光協会に寄贈してくれた。

それまでの休憩所よりは一回りも二回りも大きく、しかも集中暖房付きなので、一階は休憩所と食堂、二階は売店、オリンピック関係の資料展示、事務室などにして、現在まで羊ケ丘展望台の中心施設となっている。

同じ四十七年からは、国道三十六号線から展望台入口まで約二キロの間に、二百本のポプラ並木を作ることになり、まず二十本の成木が植えられた。ポプラ並木といえば北大構内が有名だったが、老木化して台風ごとに倒れるなど、年々数も少なく危険になっていた。観光協会では、札幌ポプラ並木を見にくる人たちのために、新しい名所を作ろうと考えたわけだが、翌四十八年から北大構内への観光バス、タクシー乗り入れが禁止されたので、先見の明があったわけである。

ウエディングパレス
（札幌北一条教会と同じ田上義也設計）

羊ヶ丘を楽しくしたレストハウス

新しいポプラ並木は、観光協会副会長だった柴野安三郎が、四十八年に叙勲記念とした百七十三本を寄付してくれたため、予定より早く二百本を突破した。成長が早いポプラ並木は、すでにもう観光客の被写体になっている。

四十八年の入場者数は、新しいレストハウス（旧オーストリア館）や馬そり人気もあって、四十四万五千人と十年間で倍増した。この間観光協会は、道路の整備や羊舎、牧柵の補修、駐車場の拡張などに年々投資してきたが、この年から展望台周辺の土地二万四百平方メートルを国から正式に借地することが出来た。

結婚式場としても繁昌

五十一年春には「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の名文句で有名な札幌農学校初代教頭、ウイリアム・S・クラーク博士の銅像が、札幌市街と石狩平野を見渡せる展望台の一隅に建立された。北大にあるクラーク博士の胸像は、観光札幌の大きな看板で、交通公社が調べたところ、胸像の前での団体の写真撮影料が、年間平均三千万円だったという。一人百円として三十万人分である。それも北大の四十八年からの観光バス・シャットアウトで、火の消えたような淋しさになった。

そこで観光協会は、昭和五十一年が北大の創基百年、アメリカ合衆国の建国二百年祭に当たるのを機会に、新しいクラーク博士像建立の計画を建てたのである。北大は胸像だが、こちらは全身像とし、日展会員の坂坦道が制作した。除幕式の行われた四月十六日は、九十九年前の明治十年のちょうどこの日、クラーク博士が札幌郊外の島松の駅逓で、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」と教え子たちに別れを告げた記念日であった。

五十九年二月に、羊ケ丘ウエディングパレスという施設が出来た。北海道の代表的建築家、田上義也の設計による白亜の壁に赤い屋根、教会風の建物で、十万円のセット料金で挙式できる。誓いの言葉のあと、牛乳で乾杯、所要時間は約三十分、と手軽なことも受けて、道外からくるカップルも多い。六十年三月までの約一年間の利用者は四百四十組、六十年度は五百三十二組だった。まちの結婚式が年々派手になるのに比例するかのように、ここでの挙式も増えていくようだ。

羊ケ丘の一番新しい施設は、六十年七月十九日にオープンしたレストハウスである。鉄骨造り三階建て、やはり白亜の壁に赤い屋根のしゃれた洋館で、一階、二階はレストラン、三階は展望室と宴会場になっている。既設のウエディングパレス、オーストリア館とともに、景観によく調和し、オーストリア館とは渡り廊下でつながっている。事業費は約三億円。オーストリア館のレストランはなくなり、オリンピック資料館と観光案内所に重点を置いている。昭和六十年度の羊ケ丘入場者は、六十一万七千人だった。

札幌博物場（現在の北大農学部付属博物館、『札幌繁栄図録』から）

十六、博覧会・博物館

北海道開拓使は明治六年、局制をしくと同時に、物産局の中に博物課を置いた。「物品ヲ採集シ、縦覧ニ供スルモノハ、其種類ヲ別チ名称ヲ明ニシ、産地発見年月ヲ記シ、人造ハ創造ノ年代其人ノ郷貫氏名ヲ調査ス」という職務分掌の示す通り、博物館作り（といっても物産展示場程度だが）を目指すポストだった。

開拓使お雇い外人のリーダー格だったケプロンが、教育政策の一つとして図書館と博物館の設置を提案していたことと、無関係ではあるまい。その結果、明治八年東京に北海道物産縦観所、同十年札幌、同十二年には函館に仮博物場が設けられた。全国的にもきわめて早い。札幌の仮博物場は現在の北大農学部付属博物館（北大植物園内）に発展して、札幌の貴重な観光資源の一つになっている。

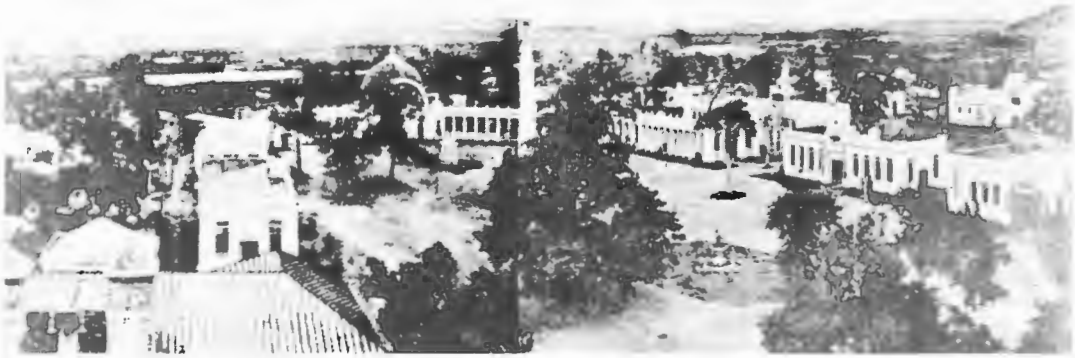
博覧会は開拓政策推進策

しかしそれよりも、物産局博物課（およびその後継部署）がやった主な仕事は、北海道の物産を海外や国内の大きな博覧会に出品することだった。海外だけでも、明治六年ウィーンで開かれた万国博覧会をはじめとして、九年のフィラデルフィア万国博、十一年のパリ万国博、十三年のメルボルン博覧会と続くのだから、その活躍ぶりはたいしたものだ。

ウィーン万国博に出品したアイヌの生活用具は、日本に戻ったあと東京国立博物館の倉庫にずっと保管され、ようやく昭和五十九年から公開されている。ただし、ウィーン万国博は明治六年五月から十一月まで開かれたが、物産局博物課が設置されたのは同年三月なので、出品の準備や当時の輸送事情を考えると、博物課が出来てからの仕事だったかどうかは疑問だが……。

フィラデルフィア万国博への出品は、ラッコやオットセイ、熊などの皮と、麻、繭糸、鉱石など十八種だったが、パリ万国博のときには種類も五十種ほどにふえ、初めて工業製品や農水産加工品が出品された。主なものは、石炭、砂金、木材、麻、繭、生糸、麦酒、縮緬（ちりめん）、穀類、牛羊鹿肉と鮭鱒の缶詰、豚肉くん製、カキのウォッカ漬、博多織、綾織などであった。そのうち、繭と生糸は、オランダ国王に望まれて贈呈した、と記録されている。

国内でも、明治十年と十四年に東京で開かれた第一回と第二回内国勧業博覧会に、多数の道産品を出品、即売もしている。出品したいが資金のないものには無利子で貸し、あるいは開拓使が買い



大正七年の「開道五十年記念博覧会」第一会場全景（『同博覧会事務報告』から）

上げて出品し、出品者の旅費も支給した。木製家具、生糸、めん羊、なめし皮、麦わらで作った紙、製氷機械、西洋農機具などが、優秀賞を受け、ラッコの毛皮二枚が天皇お買上げになった。

開拓使はこうした博覧会（というより共進会に近い）が、生産者の収入とプライドを刺激し、開拓政策を進める上で重要な役割を果たすことに気付き、こんどは地元で博覧会を開くことに力を入れる。その最初が、明治十一年十月に大通西三丁目で開かれた第一回農業仮博覧会で、以後開拓使が札幌県、北海道庁と変わりながらも、同種催しが明治二十五年の北海道物産共進会まで、ほぼ切れ目なく続く（開催地が函館や根室だったこともあるが）。

二十五年の共進会は、はじめは「北海道殖民大博覧会」という名称で「内ハ大ニ全道物産ノ興隆発達ヲ図リ、外ニ普ク府県人士ノ来観ヲ誘導シテ、本道前途ノ多望ナルヲ表示シ、益々移住転徒ノ思想ヲ喚起セシメンコトヲ欲シ」計画された。初めて博覧会に観光客誘致を掲げた画期的試みだった。

ところが農商務省から「殖民博覧会ノ名義ニテハ許可ナリカタキニ付キ相当ノ名義ヲ付シ、且ツ博覧会モ共進会ニ改メラルヘシ」とクレームがついて、結局明治十七年から使っていたいままで通りの「北海道物産共進会」に落着いた。しかし一万九千六百九十五円という多額の予算はそのまま認められ、会場の中島公園には既設の物産陳列場（二十年の物産共進会のさい建設）のほか、約二十棟の建物と外柵などが新設された（工事費八千五百二十二円）。

出品展示品も道内から一万千二百点、道外の三十府県から三千百点にのぼった。ただし、道内出品は一等褒賞の記録（大豆、小豆、小麦、麻、塩鮭、棒鱈、牛、石炭など）からみると、農畜水産物がほとんどで、工業製品はあまりなかったようだ。

この共進会のもう一つの特記事項は、この種催しで初めて入場料一円をとったことだ。ただし、官吏はもちろん高等官以上のものの父母と妻子は無料なのに、民間では銀行頭取と支店長、新聞社々長と記者ぐらいだけが無料というのは、かなりの官尊民卑だし、入場券売場の名前が「入場券売下・所」というのもひどい。

それでも八月一日から三十一日間の会期中に、七万千二百人（一日の最高六千二百人）の入場者があった。当時の札幌区人口が二万六千人だったから、その三倍近い入場者は大成功だったといえる。その後は日清、日露戦争でしばらく途絶え、明治三十九年に最後の物産共進会が開かれた。

〝人間大砲〟思い出に残る

さて、札幌で開かれた本格的な博覧会の第一号は、大正七年八月一日から九月十九日までの五十日間にわたる「開道五十年記念北海道博覧会」である。

大正十五年の「国産振興博覧会」第一会場入口の観衆（『同博覧会誌』から）

会期の長さもさることながら、会場が中島公園と北一西四（現在の札幌グランドホテルの場所）のほか、小樽区に第三会場として水族館を作ったこと、府県や企業の特設館が多数出来たこと、第一会場内に郵便局や消防詰所、救護所などが配置されたこと、会期に合わせて全国、全道規模の各種大会が七十八も開かれたこと、などは現代の博覧会の開催方法とほとんど変わりはない（遊戯施設だけはなかったが…）。

二会場とも建物は著名な建築家の中條精一郎（作家の宮本百合子の父）の指導の下に新築され（農業館だけは既在の物産陳列場を改修）、第一会場だけでも四十棟以上あった。第一会場の拓殖教育衛生館（木造二階建二百五十三坪）は、博覧会終了後も拓殖記念館として戦後まで使われ、第二会場の工業館は北海道物産館になった（昭和八年、グランドホテル建設のため取壊し）。

博覧会の総経費は四十五万九千四百円で、二十六年前の共進会とは物価も違っているにせよ二十三倍にふくれ上り、出品点類も四万四千三百余点と二倍以上だった。とくに道外からの一万七千七百余点というのは、北海道庁がいかに熱心に働きかけたかということの表われである。博覧会事務総長として、北海道庁の実質的責任者であった橋本正治内務部長は、昭和十一年に札幌観光協会創立時の札幌市長その人だ。

大人二十銭、小人十銭の入場料をとったが、五十日間の入場者は、第一会場だけで六十七万四千人にのぼり、ピークの八月十六日は一日だけで三万二千八百人だった（札幌区の人口九万四千六百人）。二会場を合わせると、総入場者は百四十二万五千人で、当時としてはもちろん、札幌の博覧会史上でも驚異的な数字といえよう。

博覧会景気が、その後の札幌の発展にいろいろな意味でいい刺激を与えたが、なかでも博覧会を機会に、それまでの馬車鉄道が電車に変わったことが、一番大きい贈りものだった。

八年後の大正十五年八月には、やはり中島公園で、「国産振興博覧会」が開かれた。北海タイムス社（いまの北海道新聞社の前身）創立二十五周年記念事業で、これまでとは異なり民間の主催だったが、建物の増改築の設計と工事監督は、北海道庁の建築課長以下が当った。新聞社の主催らしく、演芸館を作って日替りで活動写真や踊り、講談、浪花節などをみせた。また道内の遺跡発掘品や民俗資料を展示した歴史館も人気を集めた。

主催者側の負担はわずか四万円たらずで、あとは入場料（大人五十銭）と出品料、協賛料などでまかなった。会期三十日間の入場者は三十七万七千六百人で、一日の最高は二万七千百人である。

続いて昭和六年七月十二日から八月二十日までの四十日間、また中島公園を主会場に「国産振興北海道拓殖博覧会」が開かれた。北海道庁のほか初めて、札幌市と札幌商工会議所が共催した。ま

昭和六年の「国産振興北海道拓殖博覧会」第一会場全景（『同博覧会誌』から）

た「此の夏は札幌へ!!」とか「この夏は是非涼しい北海道へ」と書いた絵はがきを作って全国に送り、博覧会とも観光宣伝にも熱意をみせたのも初めてである。

北海道内のほか全国から十一万二千点もの出品があったが、その八割以上が機械、化学、染織などの工業製品で、かつては博覧会の主役だった農水産物は片隅に追いやられた。この博覧会の運営上の特色の一つは、ポスター一万一千枚、絵はがき十二万枚、マッチ十万個を全国にばらまいて宣伝したことと、会期中に石狩デー、樺太デー、東京デーといった特別日を作って盛り上りをはかったことである。

催しものも多彩で、とくにカール・ライネルトの〝人間大砲〟は、のちのちまでの語り草になったほど。藤田堺舞踊団のフラダンスも、途中で警察から露出過多で公演禁止をかけられるなど、話題に事欠かなかった。前半は低温と雨にたたられたが、六十五万人の入場者があった。

札幌観光協会創立の前年、昭和十年七月十八日から八月二十一日まで、札幌商工会議所と札幌実業組合連合会共催の「北海道工業振興共進会」が、やはり中島公園で開かれた。工業だけでなく農水畜産の原料と製品の展示が中心だったが、子供の国や海女館などの催し会場もあって、二十五万人が入場した。

このあとは日中戦争と太平洋戦争が始まったため、戦意高揚の展覧会などはしばしばあったが、大がかりな本格的博覧会は、札幌では昭和三十三年までなかった。戦後、北海道での博覧会のはしりは昭和二十五年旭川で開かれた「北海道開発大博覧会」、次いで二十七年に岩見沢、帯広、富良野を持ち回った「平和博覧会」、二十九年には「北洋博覧会」が函館で開かれた（北海道初のテレビ実験放送があった）。

ようやく札幌で開かれたのは、昭和三十三年七月、道、札幌市、小樽市共催の「北海道大博覧会」だった。五十八日間の会期中に、札幌桑園、同中島、小樽の三会場に足を運んだ人は、実に四百十九万人、主会場の中島公園だけでも百二十万人にのぼった。朝鮮戦争をきっかけに始まった経済成長、観光ブームに乗って、「もはや戦後ではない」を象徴するかのような、にぎやかで楽しい博覧会であった。

十年たった昭和四十三年には、北海道百年を記念して、北海道新聞社、北海道、札幌市、北海道商工会議所連合会共催の「北海道大博覧会」が、六月十四日から八月十八日までの六十六日間、真駒内公園で開かれた。真駒内は四年後の札幌オリンピック主会場になったところで、札幌での博覧会が初めて中島公園から離れた。中島公園は、明治二十年から昭和三十三年まで、実に七十七年以上も博覧会に付き合ってくれた。

この博覧会では、百年の歴史をみせる「輝く北

昭和33年の「北海道大博覧会」桑園会場

昭和43年の「北海道大博覧会」真駒内会場（『同博覧会記念誌』から）

海道館」、サマージャンプ台を付設した「オリンピック館」、月探険船の実物大模型を展示した「アメリカ館」、北海道では初めてだったジェットコースターなどに、人気が集まった。入場者は百五十二万六千人だった。

北海道新聞社は昭和五十七年六月にも、北海道、札幌市、札幌商工会議所と共催で、「'82北海道博覧会」を開いた。会場は豊平区の北海道立産業共進会場とその周辺で、七十二日間に二百六十七万六千人が入場したという。

札幌観光協会が直接博覧会を主催したりすることはないが、札幌に数十万の人たちが集まるのだから、札幌市の観光担当部課とともに受入れ対策とか、PRのための印刷物製作に忙しくなる。博覧会に来た人たちがこんどは雪まつりやライラックまつりのシーズンに再訪し、かつて札幌の行事を楽しんだ人が博覧会を機会にもう一度―と、博覧会が札幌観光の大きな支えになっている。

望まれる博物館の充実

さて一方、冒頭に戻って博物館の方だが、開拓使仮博物場以来百年以上も、目立った動きはなかった。かつて北海道立や札幌市立の博物館が計画されたことはあったが、戦争などの事情で立ち消えになった。

札幌に本格的な博物館施設が出来たのは、昭和四十六年開館の「北海道開拓記念館」（白石区厚別町小野幌）だった。北海道百年を記念して作られたこの施設は、名前こそ記念館だが内容はレッキとした歴史博物館で、一般観光客はもちろん札幌を訪れる国賓クラスも必ず立ち寄る。次いで五十二年七月には「北海道近代美術館」（中央区北一西十七）、五十八年には開拓記念館のそばに「北海道開拓の村」、知事公館の内に「北海道立三岸好太郎美術館」が移転して、いずれも観光客の出入りが多い。

札幌市立では、時計台内の「札幌歴史館」、大通公園西十三丁目に「札幌市資料館」、中島公園に「さっぽろ冬のスポーツ博物館」、真駒内公園に「さけ科学館」などがある。それぞれに貴重な資料、札幌ならではの展示が光っているが、いずれも規模の小さいことが残念だ。観光が昔の物見遊山から、文化探究の知的なものへと変わりつつある現在、観光札幌として自慢できる大博物館がほしいところ……。

大正時代の狸小路三丁目（札幌市教委蔵）

十七、狸小路と薄野（すすきの）

札幌の代表的繁華街として全国的に有名なところは、いまも昔も狸小路と薄野（すすきの）であろう。狸小路はひるのショッピング、散歩道として、薄野は夜の歓楽ゾーンとして多くの人たちを集めているだけでなく、ともに観光協会の〝さっぽろ夏まつり〟の主要会場でもある。

昭和十一年に札幌観光協会が設立されたときの会員百二十四名中、狸小路からは狸小路聯合会のほか商店、映画館、喫茶店など七店が、薄野からも札幌カフェー自治組合、芸妓置屋組合、聯合見番の三団体と料理店、映画館、カフェーなど約十店が、有力メンバーとして加わっていた。狸小路と薄野は、観光札幌の人間くさい方の代表であり、この両地区なくしては、観光協会も成り立たなかったかも知れない。

あいまいな狸小路の起原

さてその狸小路だが、いつどのようにして出来たかについては、はっきりした記録はない。狸小路の古いそば屋の長男だった金田一昌三（大正二年生まれ、もと道立図書館長）は、「明治四、五年ごろ、南二条本通りの西二丁目に下級吏員の長屋、同じく西六丁目に通称〝白官邸〟、二条から三条本通西五丁目の一町四方に〝新長屋〟という一等官舎があった。これらの役所関係者が居住する地域に、狸小路らしい商店がぽつぽつ出現したのではないか」と推理している。

しかしこれでは、狸小路という呼び名の由来が出て来ない。明治六年に二十歳で来札した写真師、三島常盤は、昭和九年の「北海タイムス」に、次のような回顧談をのせている。

「明治六、七年であったと思うが、旅籠屋渡世、侠客松本代吉が南三条西二丁目に東座というのを建てた。それが切掛（きっかけ）になって一杯酒の店が出る、白首（ごけ）（註、淫売婦の俗称）が出だすという按排（あんばい）で、それ迄一帯の大ヤブであった地が次第に賑わって来た。私達も其の後南二条西一丁目の西角、今、畳表敷物の専売店（註、現在は三菱自動車ショールーム）になっているのは私の建てた家屋で、其処にいて徒（あだ）に付けた白首小路、即ち狸小路の名が其の尽本名になってしまったんだから面白い。大ヤブに出る狸で、狸は白首の異名であった」

記事の見出しも「狸小路の名付親」となっている。しかしそれ以前から付近に、〝あいまい宿〟があったことは、明治六年の「市民商業惣高取調」

大正時代の狸小路二丁目、通りの真ん中に雪がうず高く積まれている（札幌市教委蔵）

などでも明らかで、当時の三島がすでに八十歳過ぎであったことも考えると、名付親の件とともにわかには納得しかねる。明治二年に札幌に来た深谷鉄三郎の思い出話が、同三十一年の「北海道毎日新聞」にのっていることが、河野常吉編『さっぽろの昔話』に大要次のように紹介されている。

「（曖昧屋の）第二には南二条西二丁目の湯屋のある所へ金又という人が初めた。そこにはビロード後家という面白い仇名の女がいた。これは年中ビロードの襟を用いている。徳利後家、こやつは朝から晩まで酒ばかり飲んでいる。次が剣術後家、このやつは士族の娘で、少し剣術を知っているのを自慢にした。そのほか目腐れ後家、サンマ後家などがいた。（中略）

狸小路は初めは三丁目の裏通り（註、現在の狸小路側を指す）だけを申したもので、二丁目の裏通りは安津満小路と申したものです。三丁目の方を狸小路と申したのは、明治十年の頃、まだあの辺は萱の原であった。

その中へただ一軒、今の金沢亭（註、三丁目の寄席）の向うの所へ、丸太で門構えにして御料理という額行燈を出し、門柱へは一方へ初音すし、一方へ生そばという聯をかけて、ここへ曖昧女を四、五人置いたのが初まりで、仙北屋という家号。これ一軒の外別に怪しい家もなかったのですが、これがために狸小路という名がついたのです。

第二の狸小路ともいうべき二丁目の裏の安津満小路というのは、初め松本房吉という人が、松本座というのを建てた。これが札幌での第二番目の芝居小屋でしたが、少しも繁盛しないので遂に借金のために石川正造にとられてしまった。石川はこの松本座というのを改めて安津満座とした。それ故にこの小路が安津満小路といわれる様になった。

石川はすぐにこの座を伊藤辰造にゆずったので、また座名を橘座と改め、立派な芝居小屋を建直したが、じきに芝居の向う裏から出火して焼失した。またじきに新築して、それまでは小路の方に木戸口があったのを、二条通りの方に向けたので小路は大層衰微した。この小屋も二十五年の大火の節に焼失してしまった。

安津満小路をも狸小路と申すわけは、北海楼が函館から連れて来た女で、あだ名を雨風というのがいた。雨風というのは、その顔がまるで暴風にあったように目も鼻もどこかへ吹き飛ばされ、当り前の場所にはないということからついた。これが芸は相当あったので、なかなか評判者だった。

池田定吉という鍛冶屋の妾になった時分に、安津満小路に二軒の貸長屋が出来て、その一軒を借り受け、安津満屋という料理屋兼曖昧屋を始めた。これが第二狸小路の始まりである。し

明治時代の南一条通り、右手前が今井洋物店（札幌市教委蔵）

かしこの雨風は、いまでは立派な隠居になっている」

前の三島常盤回顧談と比較すると、「松本代吉・二丁目・東座が、松本房吉・二丁目・松本座→安津満座」とほとんど一致するので、深谷鉄三郎のいう三丁目狸小路・二丁目安津満小路（第二狸小路）説の方が、説得力があるように思われるのだが…。いずれにせよ、狸小路は二丁目、三丁目を中心に栄え、それぞれに勧工場という雑貨の商店街も出来る。一丁目には魚市場が誕生した。

勧工場で栄える

深谷の話の中にあった明治二十五年の大火で、二丁目、三丁目とも全焼、それを機会に私娼窟は薄野かいわいに移転させられ、狸小路は明るい商店街として生まれ変わる。丸井今井、池内など老舗といわれる商店は南一条通りに並んでいたが、小間物屋や飲食店の多い狸小路には独特の人気があった。その大火の直前、二十四年九月発行『札幌繁栄記』から、「狸小路の夕　勧工場」の一部を紹介する。

「狸小路とは綽名なり。創成川の西側、南二条と三条間の小路を云う。此の所飲食店とて、西二丁目三丁目にて両側に軒を比べ、四十余りの角行燈影暗き辺、一種異体の怪物、無尻を着る下婢体のもの、唐浅の娘、黒チリ一ツ絞の令嬢的のもの、無慮百三、四十四。

各衣裳なりに身体を拵い、夜な夜な真面目に白い手をスックと伸ばして、故郷を威張って遙々来た大の男子等を巧に生擒り、財布の底を叩かせる。ハテ怪有な動物かな。其の魅方狸より上手なれば、人々斯くは狸小路となん呼べるなり。

北の端なる北海道、又其の北なる札幌は、開闢以来僅か二十年、名所旧蹟素よりなく、見物は芝居ばかり。去れば晩餐後の散歩は勧工場にぞある。勧工場は二カ所あり、一を東勧工場といい、一を第一勧工場という。

東勧工場は狸小路二丁目に、第一勧工場は三丁目にあり、孰れも主に和洋小間物、陶器、書籍、たばこ、頑弄品等をひさげり。昼間は店を張らざるも、夜に入れば春夏秋冬、洋燈昼欺き、貴賤老若麇集し、更に春風颯風と肌に温かなる頃よりは、散歩がてらの素見連多く、売場も亦夥多なりという」

明治三十四年にも火災があって、こんどは狸小路一、二丁目が焼失、再建後の一丁目に共益商館という勧工場が出来たが、四十年にはそこが火元になって、一丁目から五丁目までが灰になった。つまり明治年間に、二丁目三丁目は三回、一丁目は二回、四丁目五丁目も一回ずつ焼けたわけである（四丁目は大正十一年にも焼失）。

昭和二十四年ころの狸小路二丁目

昭和二十四年ころの狸小路一丁目、鈴蘭灯が復活した。

共同精神で独特の街に

しかし商店街として定着した狸小路は、そのたびにたくましくよみがえり、協同精神がつちかわれていった。大正五年に三丁目から始まった街灯会を手初めに、共同散水、共同除雪、舗装工事（大正十四年、札幌市のアスファルト舗装の最初）、鈴蘭灯（大正十五年から、昭和十一年にはネオンもついた）と続く。念願の札幌狸小路聯合会も、大正十四年には二、三、四丁目の加盟で結成された。協同精神のきわめ付きは、昭和三十三年から始まったアーケードの新設だった。

まず三丁目のアーケードが三十三年暮に出来、一丁目から七丁目まで完成したのは三十五年暮だった。これで雨が降っても銀ブラならぬ狸ブラを楽しむことができたし、なによりも冬の間中、両側の店が中央部に積み上げて向いが見えないほどの雪の山が消えた。売り上げが一挙に三割もふえたと語り継がれている。しかし戦争中の金属回収で姿を消し、二十四年の札幌市創建八十年記念として復活した鈴蘭灯が、アーケード完成とともに姿を消した。そのアーケードも五十七年十一月に、約十八億円かけて開閉式に更新されている。

狸小路の全盛期は大正末期から、昭和四十年代といわれる。札幌観光協会が出来た昭和十一年、陸軍特別大演習が終わった十月六日の午後には二万人の参加将兵が狸小路に溢れ、満員電車の中のように歩くのも困難だったと当時の新聞にのっている。二十年代は闇市に人が集まり、衣料品店や食堂には行列も出来た。占領軍に接収された札幌グランドホテルが、狸小路六丁目の仮店舗で営業したのもこのころである。

三十七年には三丁目の駅前通り角に、札幌で最初の共同店舗ビル「サンデパート」が出来た。新しいアーケードとデパート―、押寄せる買物客に他の老舗（しにせ）も次々と店のイメージアップをはかり、かつては札幌の浅草風だった狸小路は銀座を目指すようになる。しかし、四十六年十一月に札幌地下街が出来たため、人の流れは地上から地下への移動が多くなった。

現在の狸小路は西一丁目から十丁目まで、狸小路商店街振興組合の加盟は百八十店あまり。それぞれの丁目には、百年の歴史にはぐくまれた特色があるが、最近は若い女性を対象にしたブティックや輸入小間物屋といったナウい店も出来、古さと新しさ、スマートとやぼったさが同居して、かえって不思議な魅力を振りまいている。民芸土産物店がふえたせいか、観光客の姿もひときわ目立つようだ。

明治初期、野原の中に出来たばかりの薄野遊廓（『札幌歴史写真集』から、北大図書館蔵）

十八、ネオン街

狸小路の生い立ちがばく然としているのに比べ、薄野の方は場所も日付までもはっきりしている。なにしろ薄野は、全国ただ　カ所の官営遊廓としてスタートしたのだから……。時の権力者が、遊廓という売春事業を公認したり、場合によっては土地を与えたことは、日本の歴史上珍しくはない。京都の島原は豊臣秀吉が、江戸の吉原は徳川幕府が認可したものである。

ところが薄野遊廓は、開拓使が敷地を選び、測量し、周囲の土塁を作った。当時の金で千三百円もかかった。創成川付近にあった怪しげな旅人宿、料理屋などを移したが、目玉（？）として開拓使自身が「東京楼」という〝御用女郎屋〟を建て、東京から遊女二十数を名呼んだ。経営の実務は業者にまかせたが、建築費、女の雇い入れ金は官費を支出し、年期証文も役所が保管したというのだから、開拓使直営と変わらない。

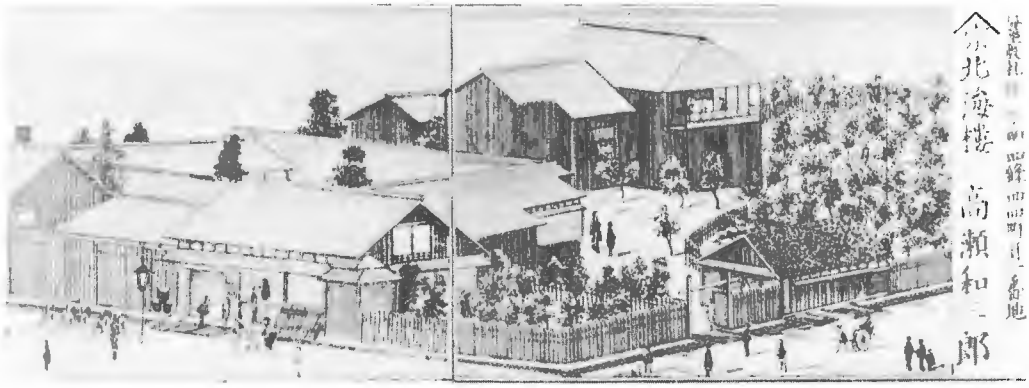
薄野遊廓の場所は、いまの南四条、五条の西三、四丁目を含む一町四方。当時の市街地からは遠く離れ、一面ススキなどの藪原で、野ギツネがたくさんいた。そのため開拓使は、市街から幅六間半（約一二メートル）、延長九〇五間（約一・六キロ）の道路を、わざわざ新設した。一部の男たちが通うためだけの道路のはずが、いまは札幌市のメイン道路（駅前通り、四番街）になってしまっている。

開拓使が作った歓楽地

薄野遊廓の営業開始日は、明治四年七月十五日といわれ、同月十九日（いずれも陰暦）に正式許可がおりている。翌五年から採用されたいまの太陽暦でいうと、明治四年八月三十日と九月三日になる。いっせいに開業したのではなく、「東京楼」などは翌年にかかっている。東京から遊女を呼んだものの、まだ薄野の方の建築が出来ていなかったので、開拓使の宿舎である札幌脇御本陣に入れておいて、「東京楼」が出来るまでそこで商売をさせた（深谷鉄三郎談）という。

開拓使が遊廓設置にこんなにも熱心だったのは、一にも二にも本府建設のための職人や人夫の定着策、としてであった。開拓使が政府に届出た文書にも、「…遠隔の儀、自然人夫共は厭倦（えんけん）の意を生じ候も計り難き候につき、妓楼立置き公然売女免許仕まつり候…」と書いている。この文書は明治五年一月なので、薄野遊廓の事後届出か「東京楼」だけの申請なのか、よくわからないが…。

さて、薄野という地名の由来については二説ある。一つはさきに書いたように、ススキの野原に作ったからという自然地名説で、単純明解でわか



当時一、二を誇った北海楼
（「札幌繁昌図録」から）

りやすいが、当時の札幌の街はずれはどこもススキの野原だったはず、という反論が出そうだ。もう一つは、遊廓建設地を選んだ開拓使の役人、薄井竜之の薄の字をとって、岩村判官が命名したという記念地名説である。

明治二十九年発行の『札幌沿革史』、同三十二年発行の『札幌案内』や、新聞にのった古老の話などでは、いずれも薄井記念説をとっているので、こちらの方が信ぴょう性が強い。しかし、薄井の読みが薄野に変わることに、ちょっと抵抗がなくもない。なお薄井竜之は信州飯田の生まれ、頼三樹三郎、藤田東湖らに師事、開拓使後は福島や名古屋の裁判所長になっている。遊廓作りと裁判官—明治ならではの話である。

明治三十二年当時の薄野遊廓の模様を、『札幌案内』から抄録しておく。

「区の中央より南すること五町にして一個の別天地あり。いわゆる薄野遊廓これなり。二町四方の所にして青楼の外、見番、劇場等あり。当区の遊廓は明治四年初めて其区画を創成橋の東、豊平に行く方面に設けられしも、区画地はその名のみにして、渡島通（いまの南一条通）にても追々軒を連ね、かくては市街の風紀に関すること少なからずとて、時の判官之を憂い薄井監事に命じ、花街区画地を市街の外に撰ばしめ…。（中略）

それより二十二、三年の頃までは、貸座敷の数僅に十二、三軒程にして、娼妓の数も百名内外に過ぎざりしが、二十四年に至り狸小路の密売婦厳禁せられしより、今の豊川町に三等貸座敷を設け、十軒の飲食店移転開業し、二十五年に入り貸座敷の数漸次増加して三十二戸の多きに達し、娼妓も二百余名となり、二十六年雨垂小路の密売婦盛んになるに及び、遊廓衰微して貸座敷より転じて飲食店に復帰するものもあり…。（中略）

二十七、八の両年、密売婦の取締再び厳重を加へしにより又々貸座敷に転ずるもの多く、競ふて家屋を建築するより廓内空地を余さざるに至り、貸座敷総数四十二戸、娼妓三百余名となりぬ。目下貸座敷は三十九戸に減ぜしも、娼妓は更に十余名を増したりといふ。貸座敷及娼妓は左の如し（揚代一等金一円五十銭、二等金一円、三等金八十銭）。

（一等の一部）（店名のみ）昇月楼、新青楼、北海楼、長谷川楼、文明楼、若松楼、花月楼、三津楼、松島楼、岡田楼、金生楼、寿々喜楼、高砂楼、日新楼、北新楼（二等の部）青葉楼、翁楼、仙遊楼、高島楼、開花楼、北国楼、原嘉楼、三四楼、稲花楼、松葉楼、新潟楼、西花楼、北越楼、明治楼、栄清楼、松獄楼、北喜楼、成田楼、近怡楼、若葉楼、敷島楼、北明楼、金華楼、吾妻楼」

明治四十年ころの大店、高砂楼（明治41年の『札幌便覧』から）

はじめは野原の中の遊廓だったが、娼妓や遊び客目当ての衣料品店、雑貨屋、飲み屋、食堂などが出来、いまと違って職住一体時代だったから、付近で遊ぶ子供たちも多くなった。それに、市街地と繋ってきたこともあって、早くも明治三十年代には、薄野遊廓移転論が新聞や区会で論議され出した。開道五十年記念博覧会が大正七年に中島公園で開かれることが決まると、遊廓移転問題はいっそう切実になり、促進演説会等も開かれた。

ついに大正六年、札幌区は豊平川をへだてた白石町に移転させることを決め、畑地一万坪あまりを業者に分譲することにした。ところが土地所有者との話合いが長引き、遊廓二十一軒が移転したのは同九年になってからで、博覧会対策としてのもくろみは外れた（おかげで、薄野遊廓は未曽有の繁昌をした）。外れたといえば、札幌区は新遊廓を札幌遊廓と命名したが、人々は白石遊廓とか大門通りとしか呼ばなかった（昭和三十二年にいっせい廃業）。

官公吏相手のカフェー街

遊廓によって生まれた薄野は、ちょうど満五十年たった大正九年に遊廓と別れた。遊廓のあとは、割ぽうになったり劇場になったり、レコード店になったり、そのころからはやり出したカフェーに衣替えした。新規の業者もいたが、貸座敷から転業したケースも少なくない。薄野は明るい歓楽街に生まれ変わるとともに、その範囲も大きく広がった。（いまでは南三条から六、七条まで、西二丁目から五、六丁目あたりをいう）。

昭和初期から札幌観光協会が設立された十一年ごろは、薄野はカフェー全盛時代で、その間に割ぽう、料理店、食堂、映画館、撞球場、呉服店、薬局など一般商店が連なっていた。札幌初の本格的カフェーといわれた三階建ての「エルム」（南四条西三丁目）が、これまた札幌初のネオンをつけたことがきっかけで、カフェーといえばネオン、ネオン街といえば薄野を指した。

札幌観光協会刊行の『観光の札幌』（昭和12年）に、「札幌ネオン街報告書」という多少ふざけた文章がのっている。筆者の水野富士夫というのは、当時の新聞記者のペンネームらしいが、その一部を次に紹介しょう。

「札幌は、東京以北第一の文化都市を誇っても、商業都市ではない。ビールやバターを世界市場に送っても、工業都市の貫録は未だ不十分である。金融資本家の活躍舞台でもない。それは、ひどく小市民的な官公吏サラリーマン都市として、青白く、取りすましているのだ！恐らく日本中で人口十万以上の都会で、このやうな『珍しい都会』はさうザラにあるものでない。

札幌のカフェーの特異性は、この上にうち建てられた特異性であって、他に類例を求め得な

太平洋戦争とともに、カフェーの女給さんたちも縫製作業に動員された（昭和17年）

い。お客の大半は官公吏である。店もこれを第一目標にしなければ、全くソロバンが弾かれないのである。札幌の街の約三百軒に垂々とするカフェー、飲食店は、それぞれ道庁を筆頭に鉄道、逓信、大学、帝林、税務、司法、市役所に勤める高等官から、下は事務員、使丁に到る迄を、客としているのだ。

そんな訳で、札幌のカフェーで、白熱的なエロ気分の満喫は出来ない。その代り、遊興上の安易性がある、社交性がある。朱に交われば赤くなる如く、サラリーマン相手の女給もいつしか、青白く取りすますやうになるのだが、それが却って、われわれに都合がよいのである。他の土地のカフェーの場合の如く、女給が寄って集って、鯨飲馬食の競技会を開き、眼の玉の飛び出るやうな勘定書を請求して、われわれの心胆を寒からしめることがないからである。

ところがである。このやうに国宝？にでも申請して永久に保存したい札幌のカフェーの特異性が、近年しかもこの昭和十一年に至って、漸次失はれてゆくといふ悲観すべき傾向を辿っている。それと同時に、今は昔、昭和三、四年以来の所謂カフェー時代と謳はれた華やかさは、逐年寂れてゆく。それは不景気の故もあらう。けれど、やっぱり時代の波の大きな動きによる事は否定出来ない。

即ち、カフェーが現代人にとって受けいれられた最大の理由は、資本主義経済組織の現代社会が、最高度の発展を遂げて、中小商工業者や、インテリゲンチャなどが、其の社会生活の上にも、私生活の上にも、方向を喪失して、その生活意識を刹那的な世界観へとはしらせたからであったといふ。かの満州事変を契機として、国民意識が熾烈となるに従って、国民は何か清新なものを社会の前途に発見した。とすれば、カフェーが之れ等の人々から以前のやうに顧みられるといふことはあり得ない。…」

当時の札幌の歓楽街（つまり薄野）の特徴の一端と、迫まりくる非常時体制の息吹きが感じられる。その予感どおり太平洋戦争のぼっ発で、薄野はネオンを消して沈黙の時期にはいる。カフェーの女給さんたちは軍服や作業服の縫製作業に動員される。戦後しばらくは、占領軍と夜の女たち、一部の闇商人と統制会社、役人だけが潤歩するまちになってしまう。占領軍の指示で、性病専門の道立薄野病院（南六西五）が作られたのも、このころのことだ。

いまや若者が主人公に

やがて、「モロッコ」、「マイプロミス」、「アカネ」など、薄野繁昌記に名を残すキャバレーが開業し、

昭和三十七年、薄野ゼロ番地ビルが出来たときの薄野全景。右が西四丁目通り、左が西五丁目通り（岩田建設提供）

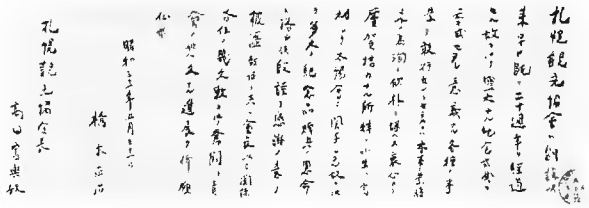
三十七年には薄野初の飲み屋ビル「薄野ゼロ番地」（南六西四）が開業する。そして堰を切ったように、キレバレー、バー、クラブ、スナック、寿司屋、飲み屋、焼き鳥屋、ラーメン屋が乱立。いわゆる〝社用族〟時代の援護もあって、薄野は空前の活況を呈し、トルコ風呂（いまはソープランド）密集地帯ということもあって、全国にその名をとどろかせることになる。

それが昭和五十年代から除々に変化の様相を見せて来た。一つは相次ぐ火災が契機になってのビルラッシュ、もう一つは客層の若年化が目立つ。夜中過ぎでも一般女性客がゾロゾロと歩いているのは、日本広しといえども薄野だけ、と本州から来た観光客を驚かせている。それほど薄野は安全な歓楽地帯ということでもある。

六十年には、地上八階、延べ面積一万平方㍍以上、入居が百店近いジャンボ飲食ビルが、二軒も開業、大低のことには驚かない札幌市民をびっくりさせた。薄野地区の飲食店総数は四千軒を越えている。また、六十一年三月には、薄野の真ん中ともいえる南七西三で三十五度の温泉が吹き出し、温泉つきのレジャービルが計画されているなど、薄野は刻々と変容していく。

三沢寛一二代会長

上原六郎三代会長



橋本正治から高田会長への手紙

十九、年輪をへて法人化

札幌観光協会は昭和三十一年に創立二十周年を迎えた。創立記念日である五月十六日に記念式典をするつもりだったが、協会会長の高田富与札幌市長が、前日に苫小牧で開かれる全道市長会で議長を務めるため、式典は二日ずらして十八日午前十一時半から札幌グランドホテルで催され、百九十二名が出席した。

席上、観光協会の二十年間に功績のあった歴代会長(市長)はじめ、次の七氏五社に感謝状と記念品が、近藤直人事務局長に表彰状と記念品が贈られた。

▽橋本正治(元市長、協会初代会長)▽三沢寛一(元市長、二代会長)▽上原六郎(前市長、三代会長)▽佐々木徳三郎(丸惣旅館社長、設立当時から本会発展に努力)▽小須田潤治(定山渓観光協会長、本会窮乏時代に絵はがき調製に協力)▽小島国平(本会設立に尽力、その後市経済課勤務中にも嘱託として協力)▽楡金幸三(札鉄、陸運局職員として、本会創立以来各種事業に協力)▽古谷製菓株式会社▽雪印乳業株式会社▽日本麦酒株式会社札幌支店▽株式会社三越札幌支店▽株式会社丸井今井札幌本店。

三人の歴代市長はいずれも東京在住だったので、感謝状などは代理人に渡された。初代会長だった橋本正治はすでに八十三歳だったが、後日巻き紙で格調高い礼状を寄せている。また当時の書類をみると、四代会長高田富与も、二十二年以来九年間と歴代会長中最も長いので、はじめは感謝状贈呈リストにのっていたが、「決裁書類を回したところ自身の分は削除されました」と担当者の註記が残っている。いかにも高田らしい。

阿寒国立公園の恩人

事務局関係者からは近藤直人がただ一人表彰されている。記念品も他の人たちは二千―四千円程度がほとんどなのに、近藤のそれは二万五千円だった。観光協会にとって最大の功労者とされた近藤とはどんな人物だったのか―。

近藤は昭和十一年春、札幌観光協会設立の準備段階から参画し、二十周年を終えた三十一年暮に七十歳で退職するまで、実に二十一年間を観光札幌の裏方として勤め上げた。生まれたばかりの協会業務をほとんど一人で切盛りし、観光という言葉自体が白眼視された戦中戦後をくぐり抜け、さっぽろ雪まつりなど数々の名企画をプロデュースした。

二十七年にようやく事務局長の肩書きがついた

近藤直人

が、それまでの主事時代も実質的には事務局長だった。晩年の近藤は、札幌を始め全国の観光事業関係者から、「じっちゃん、じっちゃん」の愛称で親しまれ、本人自身もいくぶんカドがとれたようだったが、働き盛りのころは謹厳実直、こと観光に関しては、相手が誰であっても、決して自説をまげない頑固な一面があった。

近藤は明治十九年に福島県猪苗代町に生まれ、同三十八年札幌農学校林学科に入学、学制改革で東北帝国大学農科大学となった同校を、同四十一年に卒業した。すぐに北海道庁野幌林業試験場に入り、釧路営林区署次席、天塩分署長、帯広分署長、陸別分署長などを経て、昭和二年には四十歳で網走営林区署長になった。この間、帯広大通りにアカシヤ並木を育てたり、カシワ造林の種子採集に辺地の小学生を動員したり、道内初のトラクター運材を試みるなど、アイデアマンの片鱗をのぞかせている。

昭和三年には釧路営林区署長に着任、阿寒国立公園の指定実現のために職責以上の働きをする。大詰めの六年七月に釧路市ほか関係町村が、国の国立公園調査会委員（一条実孝公爵、鷹司信輔公爵、本多静六東京帝大名誉教授、新井堯爾鉄道省国際観光局長ら十五名）を現地視察に招待したときには、近藤は案内テキストを作って三日間にわたって同行し、自分が作ったシャクナゲのステッキを長生きにいいと一同に配った。

また、調査会委員が到着した日の「釧路新聞」に、「阿寒国立公園候補地巡り」という連載記事を署名入りでのせてもらった。このあたりの人情の機微をついたPRのうまさは、後年の札幌観光協会勤務でも十分に発揮される。翌七年八月には澄宮（現三笠宮）殿下をお招きして、近藤がご案内した。このことについて、近藤は次のような正直な手記を残している。

「阿寒一帯は雄大な風景に恵まれてはいるが、道路の悪いことが欠点である。当時は皇室中心主義の時代であったので、昭和六年澄宮殿下の阿寒ご視察を願う運動を起した。

というのは、宮様がご視察になるとなれば、監督官庁で道路の手入れをしなければならないので、非常によい結果を生むからである。このときも道庁で道路の手入れをしてくれたので、阿寒一帯の道路は非常によくなった」

こうした努力と段取りが功を奏してか、阿寒は昭和九年十二月に全国の十一カ所とともに、初の国立公園に指定された。北海道では大雪山とともに二カ所だけだった。この間の近藤の役割りについては、釧路観光連盟の『阿寒国立公園の三恩人』（種市佐改著、昭和五十九年発行）にくわしい。昭和二十九年の阿寒国立公園指定二十周年記念式では、〝君の名は〟の菊田一夫とともに感謝状を贈られている。だが近藤は、三カ月後の十年三月に

昭和二十年前後の定山渓温泉

支笏洞爺国立公園切手（昭和28年発行）

突然、道庁を退職する。まだ四十八歳の働きざかりだった。

近藤自身は後年、「子供の教育上札幌に転住した」とだけ書いているが、札幌転住は退職の結果であって、退職の原因ではないはずだ。近藤の長男で父と同じ営林技師の道を歩んだ近藤直康（札幌在住）は、「父は退職の理由を家族にはいわなかったが、佐上信一長官から『（辞表は）真意なりや否や』という電報が来たのだけ覚えている」と語る。

帝大出の林業専門家として前途洋々のはずの近藤が、八人の子供を抱えて次の就職のあてもなしに辞表を出したのには、やはり何か深いわけがあったと思うのだが…。謹厳実直な（裏を返せば融通のきかない）性格、阿寒国立公園でのスタンドプレーともみえるアイデア、行動力が、当時の北海道庁の枠にはまらなかったのではなかろうか。

いずれにせよおかげで札幌観光協会は、近藤直人という自然や樹木にくわしく、観光事業やそのPRのコツを知りつくし、アイデアマンで仕事熱心な男を手に入れたわけだ。近藤の業績については、設立来二十一年間の札幌観光協会の歴史そのものなのでとくに触れないが、昭和二十四年の支笏洞爺国立公園指定での近藤の役割りは大きかった。

戦後間もなく、定山渓温泉の経営者を中心に、支笏洞爺国立公園の指定促進運動が始まった。定山渓温泉の主な旅館は、札幌観光協会の設立と同時に加入していたが、札幌市と豊平町という行政区域の違い、一般旅館と温泉の違いなどもあって、国立公園指定運動を機会に、昭和二十一年五月に定山渓観光協会として独立した。初代会長は章月旅館主の小須田治朗が就任した。

同年六月には札幌市役所に関係十四市町村長が集まって、北海道国立公園指定促進期成会の創立ならびに第一回総会を開催、会長に上原六郎札幌市長、副会長に山田為吉豊平町長を選んだほか、関係市町村と団体から委員を出し、近藤直人はまとめ役の幹事に推薦された。

国立公園の担当官庁は、戦前の内務省から戦後は厚生省に変ったとはいうものの、かつて阿寒国立公園指定で活躍した近藤にとっては経験も知人も多い。資料作りや陳情、視察者の案内などに奔走、三年後には支笏洞爺国立公園の実現をみることが出来たのである。

近藤は観光協会退職後も札幌に住み、雪まつり会場に顔を出したりしていたが、昭和四十年七十九歳で死去した。

民間主導の観光協会に

創立三十周年記念式典は、昭和四十一年八月八日午後二時から、やはり札幌グランドホテルで開かれた。席上、時計台の時計修理を続けている井上清、ジンギスカン鍋の普及や発展につくした栗林元二郎をはじめ、永年勤続役職員、三十年継続会員らに、表彰状や感謝状が贈られた。こんどは

舟橋要（六代会長、右）から今井道雄（七代会長、左）へバトンタッチ

高田富与も元会長として、前会長（第五代）の原田与作とともに感謝状を受取った。

現職市長の原田が、観光協会の前会長となっているのは、前年の四十年三月十一日の臨時総会で民間人の舟橋要（札幌商工会議所副会頭）が第六代会長に就任したためである。創立いらい三十年近く続いた市長・協会長兼任制は、創成期、発展期ではそれなりのメリットもあった。しかし、観光協会が雪まつりや夏まつり、羊ケ丘展望台など、大がかりなイベントをするまでに本腰で取り組むようになると、観光協会と市の役割分担を明確化し、いわゆる民間活力を導入するためにも、民間主導型の観光協会が望まれたのである。

なお、三十周年記念事業として、『観光札幌―札幌観光協会30年記念誌』が、四十一年八月に刊行された。B5変形判二百二十四ページで、札幌市の歴史と特色、観光の案内、観光協会小史と年譜などが、簡潔にまとめられている。二十周年のときにも、記念誌の発行が計画されたが、資金と人材不足のため、一年以上たった三十二年十一月に、『札幌観光要覧』という小冊子（B6判四十四ページ）が刊行され、「観光協会二十年の歩み」が四ページだけ収容されている。

舟橋会長時代には、雪まつりが真駒内会場にまで拡がってグンと大型し、大通公園の直営トウキビ売りを始めたり、札幌オリンピックに伴う事業や行事が相次ぎ、羊ヶ丘展望台もオーストリア館の移設によって観光客が激増した。観光協会にとっては忙しく、かつ飛躍の時期であった。

舟橋は明治二十八年石狩町に生まれたが、少年時代から農業、行商、炭鉱夫など過酷な労働に追われながらも勉強にいそしみ、ついに炭鉱事業で成功を納め、北海道石炭鉱業協会会長に登りつめた人物である。官製の札幌観光協会を事業家の目で見直して、事業を発展拡大させた。四十五年に北海道観光連盟会長に選ばれたのを機会に、四十七年五月の定期総会で、札幌観光協会々長の椅子を今井道雄（丸井今井デパート社長）に引続いだ。なお、舟橋は五十三年十二月に八十三歳で死去した（葬儀は札幌観光協会、北海道石炭同交振興会同交会病院の合同葬）。

民間人としては二代目、創立以来、七代目の札幌観光協会々長になった今井道雄は、昭和二十七年から二十年間副会長を務めていた。会長としても名会長の評判が高く、昭和六十一年六月現在すでに十四年間も続けている。

札幌観光協会は、創立以来ずっと任意団体でやってきたが、会長が民間人から選ばれるようになったことや、業務の拡大に伴って組織基盤を確立するために、四十五年ごろから法人化の準備を進めていたが、四十八年八月二十五日付で社団法人として認可された。当初の基本金は八百八十四万円だったが、現在では三千五百万円になっている。なお会員数も四百十一名（団体）にのぼる。

二十、好きです SAPPORO

昭和五十年七月十日、社団法人札幌観光協会の創立四十年記念式典が、札幌パークホテルで開かれた。今井道雄会長は「札幌市はじめ会員各位、全市民のご協力で、年間一億八千万円にのぼる事業を行なうまでに発展した。全国広しといえどもこれほどの事業費をもつ観光協会は他にはない、いまや札幌観光協会は〝日本一の観光協会〟に成長した」とあいさつした。

昭和五十四年六月のポーランド・ローズフェスティバルに参加した風間香代子（第8代ミスさっぽろ）

そのあと、歴代会長の高田富与、原田与作、舟橋要の三氏をはじめ、協会の発展と札幌の観光振興に功労のあった十八氏、八団体に「札幌観光振興功労賞」を贈り、三十一氏を表彰した。表彰された三十一人の中に、四十七年から四十九年までの初代―三代の元ミスさっぽろ十二人が含まれていた。また七月一日付けで新設された札幌市観光部の、菅昭二部長以下幹部の人たちの紹介もあった。

六十人のミスサッポロ

ミス何々という賞金や賞品付きの美人コンクールは、札幌市内でも昭和初期からいろいろ開かれているが、ミスさっぽろは札幌市を代表する健康で明るく教養豊かな女性で、雪まつりをはじめ札幌の観光行事でホステス役をつとめたり、親善使節として全国やときには外国を訪問するのが主な仕事で、一年間の〝任期〟である。第一回は四十七年五月二十一日に選考審査が行なわれた。

初めての試みのため意図が徹底せず、募集期間も短かったことなどから、応募者は四十三人と少なかったが、洋裁学院生、小倉春代（二一）、無職、鈴木美恵子（二三）、銀行員、五十嵐博子（二二）、無職、森京子（一八）の四人が、栄えの初代ミスさっぽろに選ばれた。募集要項には「身長百五十五チセン以上、バスト、ウエスト、ヒップの各サイズを明記」とあったが、当時の新聞発表をみるとBWHの数字はのっていない。

五十年の第四回募集からは、時期をくり上げて雪まつりの前に審査を行ない、雪まつり前夜祭の会場で花々しく発表されるようになった。雪まつり前夜祭を盛り上げるとともに、札幌の美の代表にふさわしいマナーや化粧、着付けなどの訓練の時間をとり、四月からすぐに活躍できるようにしたのである。そのため、最近では、「八十何年雪の

五十八年の雪まつり会場で姉妹提携の調印をするシドニー観光協会のエマリー会長（右端）と、札幌観光協会の今井会長（左端）

女王（ミスさっぽろ）」というのが正式名称になっている。

これまでに十五回六十人のミスさっぽろが選ばれた。行事や親善訪問の出番は、最初のころは年間五、六十回程度だったが、このごろは百三十回くらいにふえている。それだけ観光行事がふえたこともあるが、全国的な行事にミスさっぽろが引っ張りだこだ。とくに民放テレビで全国のミスが出るクイズ番組では正答率が高く、各放送局とも札幌の教養レベルは高いと評判になっているほど。

春の全国各地でのすずらんプレゼント、秋の首相官邸へのトウキビ贈呈なども、新聞紙上の風物詩として、例年大きく報道されている。これまでのミスさっぽろ六十人は次の通りである。

▽第一回（昭和47年）小倉春代、五十嵐博子、森京子、鈴木美恵子▽第二回（昭和48年）松浦栄子、八田美佐子、村田二三子、高橋真由美▽第三回（昭和49年）山口昌子、佐藤裕美子、西川律子、紙谷美喜▽第四回（昭和50年）沢崎瞳、時田郁子、三好真智子、斉藤恵子▽第五回（昭和51年）田村恵理子、黒田智恵子、坂本和喜子、新田見恵子。

▽第六回（昭和52年）伊藤久美子、鵜川美喜枝、加藤伸子、森本明子▽第七回（昭和53年）今村久美子、斉藤えいな、渡部栄子、木村妃富美▽第八回（昭和54年）風間香代子、片川千洋、天谷寿子、高松恵子▽第九回（昭和55年）山田弘美、大野裕子、高安留美、加藤鈴子▽第十回（昭和56年）佐藤美子、牛島民美子、浜野由貴子、西川敦子。

▽第十一回（昭和57年）佐藤みすず、山本朱美、藤田友子、泉田結花▽第十二回（昭和58年）斉藤円、中明美和、篠田寿津美、臼井美喜▽第十三回（昭和59年）藤嶋広絵、前川百代、石橋宣子、種田享子▽第十四回（昭和60年）吉田佳代、原田和江、勇崎すみれ、渡辺美津子▽第十五回（昭和61年）安達あゆみ、鎌田優子、佐藤美香子、中田由美。

国際親善にも力を入れる

札幌観光協会は雪まつりの国際化促進のため、昭和五十、五十一年と香港に親善使節団を派遣してキャンペーンにつとめ、香港から多数の雪まつり観光団がくるようになったことは、「国際化する雪まつり」の項でも触れたが、それがきっかけになって五十二年には、香港観光協会との姉妹提携という画期的な縁組みが成立した。

五十二年五月に今井道雄会長を団長とする親善使節団三十七人が香港を訪問、十六日に五十五階建てのビル、コンノートセンター三十五階にある香港観光協会会議室で、調印式が行なわれた。第六代ミスさっぽろの四人を含む使節団全員が見守る中で、香港側のジョン・H・ペイン会長と今井

会長、立会人として参加した板垣札幌市長の三人が署名した。

香港観光協会は、香港政庁が設立した機関で、いわば香港政庁観光局の役割を果している。香港そのものが観光立国なので、観光協会も年間予算十八億円という大組織。その協会と「相互利益のために総合的に協力することを誓約し、両都市の人的ならびに文化的交流を深め、相互の観光の振興に務める」（提携書から）ことになったのだ。

調印式の当日、四人のミスさっぽろは香港の目抜き通りで、はるばる札幌から持参したすずらんの花二千束を配ばり、香港の人たちを喜ばせた。札幌と香港の交流は姉妹提携書の通り、毎年のように親善使節団が往来するようになり、五十六年には札幌に札幌・香港親善協会（会長今井道雄）が出来て、その絆は一段と固くなっている。

札幌観光協会の海外との姉妹提携の二番目は、五十七年二月に調印したハワイ州観光局（ケネス・C・チャー局長）である。前年の五十六二月に、日本航空が札幌（千歳）―ハワイ間直行便を成田経由で週一往復飛ばすことになったとき、河崎札幌市助役を団長とする大型親善使節団がハワイを訪問して、日系のアリヨシ州知事と提携話がまとまった結果である。

ビルの十階を覆う「好きです。Sapporo」の大たれ幕（昭和55年7月）

翌五十八年二月の第三十四回さっぽろ雪まつりでは、真駒内会場に作ったオーストラリア・シドニーのシンボル、オペラハウスの大雪像の前で、シドニー観光協会（ピーター・エマリー会長）との姉妹提携が調印された。一年おいて六十年二月の第三十六回さっぽろ雪まつりでは、やはり真駒内会場の韓国の首都ソウル南大門の大雪像前で、ソウル特別市観光協会（李健珩会長）との姉妹提携が成立した。ソウルには、五十八年と六十年に薩副会長を団長とする札幌観光協会の親善使節団が訪れている（六十一年にも予定）。

市町村が外国の市町村と姉妹提携しているのは珍しいことではなく、わが札幌市もアメリカのポートランド、ドイツのミュンヘン、中国の瀋陽と提携している。しかし観光協会同士が、市町村段階とは別に姉妹提携するケースはそう多くはなく、札幌のように世界四カ国としているのはあまり例がない。雪まつり、オリンピックで売ったSapporoの名を高めるのに、大きな役割を果している。

さらに札幌観光協会では、五十五年から七月を観光月間と定め、「好きですSapporo」をテーマに、札幌を世界にイメージアップする運動をはじめている。善意通訳の募集のほか、テーマの文字を空色の円の中に入れたワッペン、ステッカーを作って配ったが、このデザインが若い人たち

第一回「ホワイトイルミネーション・サッポロプラザ」を点灯する板垣市長（右）と今井会長

にも受けて、Tシャツやキーホルダー、はてはラーメンにまで使われ出した。いまでは札幌のシンボルマークのような存在にまで普及した。

ホワイトイルミネーション

札幌観光協会のごく最近のイベントとしては、五十六年から始めた十二月の「ホワイトイルミネーション・サッポロプラザ」である。それまで冬の行事は二月の雪まつりしかなかったので、市民やスキー客たちのためにも札幌の冬の彩るものを…、というのが発想の原点でスタートした。

第一回は五十六年十二月十二日、市役所庁舎前の大通西二丁目に作られた高さ十五㍍の電飾タワーに、板垣市長と今井会長が点灯のスイッチを入れた。札幌出身の造形作家、伊藤隆道デザインの軽金属製樹木型タワーに、千四十八個の電球が輝いた。周囲にはエゾマツ、トドマツの電飾ツリー六本も植えられ、一時間毎に電子音楽が鳴り渡るという趣向(電球の合計二千五百個)。クリスマスには、フォークダンス、キャンドルサービスなど市民参加の行事もあった。

翌年には西三、四丁目広場にも拡がり、第四回目の五十九年からは、西二丁目から西六丁目までつながった。どの広場にも、若手造形作家たちによる高さ十―十五㍍のメーンオブジェが設置され、周囲の立木にも電飾がつけられた。電球の数は年々ふえて、五十九年は十二万二千個だったのが、六十年には十三万四千個にふえた。

点灯期間も第一回の二十五日間から次第に延びて、六十年は十二月七日から翌年一月七日までの三十二日間になり、時間も午後四時から同十時になった(第一回は九時まで)。寒さのせいもあるが、雪と光と音がかもし出すファンタスティックな芸術には、若い人たちの見物が圧倒的に多い。恋人同士、正月の帰省者、スキー客などが、ミシッ、ミシッと鳴る雪の上を、消灯間ぎわまで散策に余念がない。

六十年六月には第二回札幌市都市景観賞を受賞したが、さっぽろ雪まつりに劣らない札幌の新しい名物として有名になる日はそう遠くない。

札幌観光協会は六十一年五月十六日で創立満五十周年を迎えた。この半世紀の間に、札幌市の人口は二十万人から百五十五万人になった。観光協会も雪まつりからホワイトイルミネーションまで数々のイベントを生み出し、羊ヶ丘という観光名所を育て上げた。そしてまた、世界の各都市の姉妹提携という太い絆を投げかけている。

札幌観光協会の六十一年度事業予算は三億六千四百万円、会員総数四百十二―。次の半世紀へ向けて、世界一の観光協会を目指す第一歩を、いま踏み出すところだ。

座談会

観光の国際化を目指す

今井会長あいさつ　昭和十一年に札幌観光協会が出来まして、ことしで五十年ということになります。それでいま五十年記念誌を作ろうと、薩副会長さんを中心にご苦労願っておりますが、きょうは役員の方々にいろいろお話しをうかがおうと、お忙しいところをお集まりいただきました。ひとつよろしくお願いいたします。

今井さん

現在は地方の時代といわれていますね。地方の活性化には国際化が一番手っ取り早い。そういうときに、観光協会が一役も二役も買って努力をする、ということが必要なんじゃないでしょうか。おかげさまで、札幌観光協会は、香港とかハワイとか、シドニー、ソウルと姉妹提携をしている。

そして、お互いに親善使節団を送ったり迎えたり、いろいろな行事を通じて友好を深めています。市のレベルでは出来ないようなことも、観光協会としてはやることが出来、親善と国際化に努めているわけです。それが地方の活性化にも、大いに役立っていると思いますね。

薩　それでは、僭越ですが司会をやらせていただきます。五十年誌といいましても、あまり固くては誰れも読んでくれない。写真をふんだんに使って、目で見る五十年誌、みんなが楽しく昔のこと、現在までの過程を、見たり読んでいただけるようなものにしたい、と思っています。

雪まつりについては『30年史』で座談会を何回もやっていますし、観光協会が作られた前後の事情とか、いろいろ過去の出来事などについては、五十年誌執筆担当者がくわしく調査しています。それで今日の座談会は、これからの札幌観光協会はいかにあるべきか、という未来に向けてのお話を中心に、お願いしたいと思います。

最初に、かつて札幌市商工課長をされ、現在は商工会

議所におられる石林さんから…。

石林　昭和二十四年に民間から市役所に入ったとき、商工課の仕事の中に観光に関することという一項があって、観光協会の事務局も同居していた。それから私が観光という仕事につながっていったわけです。当時はまだ観光というと物見遊山、つまりぜいたくな遊びと見る人が多く、あまり歓迎されない時代でした。

そんな中で、事務局の近藤直人さんというおじいさん―六十歳くらいでしたか―は、観光事業に大変な情熱をもってぶつかっておられた。もう一人、定山渓にも小須田治朗さんという熱心な方がいて、定山渓を一本にまとめられた。とにかく観光という仕事は、強力なリーダーが大事なんですね。

左手前から時計回りに、杉岡、薩、今井、若林、井上（龍）、石林、杉野、井上（俊）のみなさん

それまで歴代の観光協会長は市長がやっていましたが、民間に移したのはたしか原田さんの時代でしたか。行政としての観光ではダメで、民間主導型というか、観光業者の自主的な努力を中核に、強力なリーダーがいて旗を振る、それを行政がバックアップするというのが、望ましい姿だと思います。

石林さん

薩　原田さんは、行政は出しゃばるべきでない、役人が表面に立つ観光は伸びないという考え方で、いまでいう民活を期待していましたね。ところで、将来の札幌観光、北海道観光に、何かひとこと。

石林　自然の景観はたくさんあるのだから、それに加えてこの時期になったら北海道へ行こう、札幌へ行ってみようという人工的なイベントを、もっともっと育ててほしいですね。冬のイベントは一応あるとしても、夏はバラバラでこれといった山場がない。

四季を通じてそれぞれの山場になるようなイベント作りを、これからの札幌観光協会にぜひ期待したいと思いますね。

杉野　私は観光関係の仕事をかれこれ二十五年やっていますが、観光の基本は人の交流ですから、人の行き来がもう少し円滑になるよう、国内にも国外にも門戸を拡げることに、もっと努力をしなければと思いますよ。観光というのは平和産業ですから、人の交流、そして文化の交流に心掛ける。

絵画とか音楽とかの交流をもっとひんぱんに行ない、札幌は文化交流のまちであるという認識を、市民はじめ

出・席　者　（敬称略・順不同）

札幌観光協会会長	今井道雄
札幌観光協会副会長	杉野重雄
札幌観光協会副会長	杉岡幸三郎
札幌観光協会財務委員長	若林ヤタロオ
札幌観光協会施設委員長	井上龍吾
札幌観光協会観光土産品開発委員長	井上俊弥
札幌観光協会参与	石林清
札幌観光協会常任理事	澤舘兼一
司会　札幌観光協会副会長	薩一夫

昭和61年3月27日　札幌グランドホテルで

関係者が持つようになってほしいですね。そのためには、イベントをやったときに、もう少し宣伝を全国的に展開していただきたい。業界の一部でちょっとやっていても、一般の人たちにはわからない。

杉野さん

文化的なものを持ってきても、一カ所でやるだけではだめで、二カ所、三カ所というようにならなければ…。今後、将来に向けて、札幌市も民間団体も積極的にイベントに対する投資をしていかなければなりません。

それから、雪まつりのように消えてしまうイベントだけでなく、あとに残るものも作るようにしたい。夏に来た方が、雪まつりをみたいといっても見れない。ところがどこかの会館にいけばいつでも見れる、それを見れば楽しいといった施設があればいいと思います。こんどは二月に来ようということにもなるわけで、残すことが将来につながる遺産です。

ぜひ雪まつり期間延長を……

若林　札幌観光協会は、これまでずっと札幌の観光開発について、実りのある活動をされて来たと思います。で、これからの札幌の観光開発の主眼は、さきほど今井会長もおっしゃったように、いかに外からの人に知ってもらい、来て見て喜んでもらうか、ということだと思います。

観光資源をみんなに知ってもらう方法としては、文章もあるしいろいろなメディアもある。しかし一番有効なのは、いわゆるオピニオンリーダーという人たちに、見てもらい体験してもらうことではないでしょうか。札幌の観光資源を、点でなく面で知ってもらうことになって、他の人たちにも拡がっていく。

ここに最近のある新聞の切抜きがあります。私のよく知っている記者が、スイスのジュネーブで書いたものですが、いまのことに非常に関係のある話を紹介しています。ヨーロッパの東欧圏を交じえて国際ジャーナリスト・スキークラブという二百五十人ほどの団体が、毎年各都市に家族連れで集ってスキーをやり、アフタースキーでいろいろな話をする。四、五日間も続くんですね。

たまたま日本人のその記者に、日本でもスキーが出来るのか、スキーのあと楽しめるところがあるのか、という話が出て、彼は日本には北海道というところにたくさんスキー場がある、北海道の中心は札幌である、といったら「オー、札幌か」と、みんなオリンピックで札幌を

知っているんですね。

そして「いっぺん札幌でやりたいな」ということになって、チャーター便は安くとれるかとか、ホテルはどうかとかの話が出たらしい。こういう国際ジャーナリスト団体に来てもらう、といったチャンスを作ることに、札幌観光協会が動いていただけると、国際的な札幌、北海道の展開が、より実現性をもったものになるのではないか、と思いますが…。

井上（龍） 私も航空会社という商売柄、日本全国各地の観光団体とお付合いがありますが、札幌観光協会の場合は非常に進んだケースだといえると思います。というのは、官の行政が前面に出ないで、民間が調和を持ってすばらしい活動をなさっている。全国の観光協会でこれほど完璧な形はないと思います。

井上（龍）さん

あと観光の面でお願いしたいことは、北海道の自然は本州各地に類をみないほど、春夏秋冬の季節ごとにすばらしいポイントがある。ところが、日本全国の観光地は金太郎飴のように、どこでも同じ姿になっている。せめて北海道は、自然を十分生かして、ほかのどこでも見られないものをやってほしい、と強く希望しています。

短期間のイベントとしてはやはり雪まつりですね。ことし（第37回）は二百万にもう少しで手が届く客があったと聞いています。リオのカーニバルは二百五十万人で、もう少しで追付くくらいに成長した。雪まつり期間の延長が検討されているようですが、動員をふやす最高の手段だと思いますので、ぜひ実現していただきたい。

もう一つは、国内はもちろん世界中から北海道へお越しになるわけですから、さっぽろ雪まつりだけで帰ってしまわれるのではなく、北海道各地の雪まつり、氷まつりがスケジュール的につながるようにしていただきたい。北海道全部が点や線でなく、面になって観光行事を展開するようになると、遠くから運賃をかけて来る人たちも喜ばれるんじゃないでしょうか。

今井 いま五日間のさっぽろ雪まつりを一週間にしていただきたい、と自衛隊さんに再三再四お願いしているところです。二月十一日の「建国記念の日」の前の一週間を雪まつりとすると、休日が必ず二回入りますし、毎年の期間も固定できる。各地の雪まつり、氷まつりも、いままでは札幌の日程がなかなかきまらないので、調整出来ず困っていたのですから…。

市民のための観光施設を

杉岡 私はこれまでの札幌観光は、北海道が大自然に恵まれていることと、札幌の立地条件がいいことで展開して、むしろ観光資源を食い潰しているのではないか、何のプラスにもなっていないのではないか、と考えている。円山の桜をみても北大のポプラ並木をみても、年々なくなっているのに、われわれが作ったものといえば、羊ヶ丘の施設くらいしかありません。

そもそも観光というのは、外から来た人たちを楽しませることよりも、まず地域住民が楽しみ利用できるものでなければならない、と思いますよ。よそからくる人ばかりの観光で、札幌の人はよそへ行って観光する、というのは間違っている。札幌の人が札幌で観光して楽しむ

ことの方が、大事ですよ。

最近、強烈な印象を受けたのは、沼津の郊外に白隠禅師が建てたお寺があって、そこのお坊さんが富士山のふもとを桜の並木で囲むという一大悲願を立てて、もう二千㍍か三千㍍植えているんですよ。札幌も短期のイベントもさることながら、長い目でみた観光投資の必要があると思います。観光業者の営業的な投資はあるが公的な投資がない。

もう一つ、観光協会のやるべき仕事としては、一般家庭レベルに対する教育が必要だ。秋田の竿灯を見に行って感心したが、札幌の北一条に当るところで三時間も四時間も待っていると、まわりの民家が喜んでトイレを貸してくれる。そこのところの感覚が、札幌市民にはあまりない。暖かく迎えましょうといったキャッチフレーズはあるが、観光は誰かがやるもの、われわれは関係ないと思っている。

雪まつりにしても、北方圏フェスティバルにしても、一部の土産物屋が儲かるだけで、市民としては迷惑だと思っている。こんなことでは大きなイベントは成り立たないので、協会はもっと積極的に市民教育をやるべきだと思いますよ。

それから、さきほどから札幌の官は出しゃばらないというが、あまりにもうしろに下がり過ぎている。二十八、九年だったと思いますが、私ども日専連の全国大会が鹿児島でありましたときに、民宿していた家庭一軒一軒を鹿児島小原良節の連中が慰問に回ってきましたが、驚いたことに全員が市役所の職員なんですね。

札幌市役所で、長い間観光行政にたずさわっていらっしゃった石林さん、こういうご経験はおありですか。それで札幌市の観光行政の考え方がわかるのですが…（笑い）。

薩　あのときは、二年後に札幌で大会をやるので、高田市長も鹿児島へ見に行った。ところが札幌でやるとき補助金を申請したら、高田市長は「冗談じゃない。夏の暑いときに一生懸命働いている人がいるのに、北海道に遊びに来るとは何事だ。そういう不心得者に補助金は出せない」といった（笑い）。

薩さん

それでもらうのにはずい分苦労した。隔世の感がありますね。とにかくあれは、終戦後の札幌でのイベントとしては、最大のものだったんではないでしょうか。

杉岡　あのときの大会には、よその知事が四人もいらっしゃったが、来賓の北海道知事は来なかった。

観光資源に対する意見として、こういう経験がある。私どものライオンズクラブで、年一回地方の女子職員を集めて慰安会をやったとき、定山渓に泊めたら、「私たちはススキノでディスコに行きたかったのに…」と文句をいわれた。若い女の子でもそんな具合いだから、ススキノは大切な観光資源ですよ（笑い）。

ススキノは悪のかたまりであるといった見方で、抑制して閉じ込めることを考えるのはおかしい。桜ばかりが観光資源ではない。金太郎飴ではなく、ススキノにはススキノの良いところがあるというふうに、観光というものを根本的に見直してみたらどうでしょう。

本当の国際空港を早く

澤舘　私どものホテルに泊まられる方も、ポプラ並木と時計台とススキノには、非常に関心をお持ちのようです。札幌らしい街づくりということが、長い目でみれば観光要素ですので、市の方でももっと力を入れていただきたいと思います。最近では、花と緑の博覧会とか、芸術の森とかおやりのようで、大変結構なことと思います。

澤舘さん

大通公園の中ではいま雪まつりだけですけれども、夏場になれば仙台の青葉城へ行くカシの木の並み木のように、あるいは北大のポプラ並木のようなさわやかさを作る、ということも都市景観としては必要なんじゃないでしょうか。

石林　そういうお金のかかることは行政でやってくれないと…。ハードな面は行政がやるべきですね。民間の企業から金を集めてやるのは難かしい。

薩　神戸まつりには市が一億円出しています。あそこはファッション都市宣言をしているので、その方のイベントにも三千万円だしている。神戸というところは、なかなかさすがです。

ところが札幌市は、自分達がしなくても観光協会がやってくれるだろうと考えているのか、こちらもあまりお願いしなかったことが、こういう事態を招いている。雪まつりなど、われわれはバッジまで売って一生懸命やっている。公式にかかる金だけでも七千百万円、大雪像などを含めると六億近い金がかかっているのに、市は千六百万円しか出さない。

あまりにひどいではないか、というと、市はそれ以外に除雪をやっている、という。除雪は、雪まつりがなくてもやらなければならないのにね(笑い)。それでは井上さん―。

井上（俊）　せっかく協会の皆さんに、観光土産品の開発委員会を作っていただいたので、札幌らしい土産品の開発にチャレンジしたいと思っていますが、土産品の内容も時代によって変っていく。

一部の観光客のお話を聞くと、北海道はどこへ行っても同じ土産品なので、地区地区に合ったものを作れといわれる。ところが、ほとんどの方は北海道を一つの地域とみられて、札幌で買っても稚内で買っても北海道の土産だ、北海道という文字さえ入っていればいい、とおっしゃる。しかしこれからはやはり、札幌は札幌らしいお土産を考えて行きたい。

井上（俊）さん

若林　札幌観光協会だけでなく、市も道も国際化がこれからの課題だと思うのですが、そのためにも千歳空港は何とかなりませんか。国際空港といっているのが、あれでは田舎の駅の待合室です。いまのところ、国際線で来る人が少ないからいいというのではなく、「さあ、いらっしゃい」といえる施設をちゃんと作って、国際化にかける姿勢を示さなければ…。

いまの状態では、びっくりしてくる人もこなくなる。札観協としても担当の行政体に働きかけていただかない

と、あれは屈辱的な施設ですよ。税関の建物が小さいものだから、乗客は機内で待たせられる。その税関の仕事の遅いことも全国一で、むしろ直行便に乗らず成田で通関して、ふつうの国内便で千歳に帰ってこられる方もいるほどです。

杉岡　とにかくマテなんだよ。荷物はすっかりひっくり返えすし、ポケットの中まで全部出させる。

薩　千歳の税関は本当にはずかしいですね。建物はニワトリ小屋みたいだし、職員は素人ばかりだし。ハワイから戻るおじいさん、おばあさんが、麻薬やピストルを持ってくるはずがない。大体、人相や見なりをみて判断するのが、プロですよ。それを延々と時間をかけてみる。あれでは千歳空港より、成田で通関した方がずっと早い。

秋にはグルメフェスティバル

薩　ところで札幌を国際的にするには、コンベンションホール（会議場）の大きなのを作らなければダメだ、といい続けているんです。京都に大きいのがありますが、京都は夏は行きたがらない冬もダメだが、札幌なら四季を通じて使える。市長や外務大臣にもいうのですが、作るのに金がかかりすぎるということで、なかなか実現しないんです。いま全国で二十何カ所か名乗りを上げていますが…。

コンベンションホール発祥の地といわれるアメリカのマイアミにも行ってきました。あそこの観光協会は、市、商工会議所、州政府と一諸になって、コンベンションホールにあらゆる全国大会、世界大会、スポーツ大会を誘致することが、一番大きな仕事なんですね。その以外のことはする必要がない、というほどの力を入れている。

それから、ここに持ってきた香港観光協会のパンフレット、日本向けに毎月出しているのをみると、ことしの八月十七日から一カ月間、香港の食べ物フェスティバルをやるという。海外から安い料金で団体ツアーが来るが、一番悪いところへ行って、一番うまくないものを食べて帰る。これではダメなんで、この一カ月間はそれぞれの店のシェフが腕を振って、本当の中華料理を味わってもらおうということです。

これをなぜ札幌でやらないのか。秋のシーズンオフの十月から十一月にかけて、北海道の本当の味覚を味わってもらう、グルメフェスティバルをやったらいいのではないか、と思っているのですがね。

若林　札幌にこられる方の楽しみのひとつは、レジャーセンターのススキノの雰囲気を味わって、北海道らしい食べもの、カニやホッキ、ホッケの開きを食べたいということです。ところがツアーでこられる方の料金がメチャ安い、あれではおいしいものを食べられるわけがない。値段はよくわかるが、品質のわからないお客が多いので、少し高くてもいいからおいしいものを食べるコースと、安い値段の若者向きと二本立てにすればいい。

若林さん

井上（俊）　旅行代理店同士の競争があって、オフシーズンなど、旅館に三食付き三千七、八百円でやってくれなんていうケースがある。これではとても満足していただける食事が出せない。大手代理店さんあたりが、き

ちんとした料金体系をとっていただければ、他の皆さんもついていくんではないでしょうか。

杉岡　これからは個人観光がふえていくと思うんですね。ところが団体観光にくらべ、料金的にも便利さでも差がありすぎる。この辺を何とかしないと、個人観光が伸びない…。

薩　サンフランシスコでレンタカーを借りたら、まずどこどこへ行けという分りやすい標識があって、そこへ行くと次のところへの標識がちゃんと出ている。初めていった人でもよくわかる。これからは、そういうことも考えていかなければいけませんね。

若林　北海道もレンタカーで回わる若い人たちがふえると思うが、道路標識はその土地の人の常識で作っているので、来た人には大変わかりずらい。まちへ入るまではいいが、まちへ入ってからどこに何があるかわからない。ところが土地の人にとっては、そんなことは常識なので、あえて標識はいらないという。

井上（龍）　アメリカの人が日本に来て一番不思議に思うのは、駐車場の情報がまったくないということなんですね。向うでは、どこに駐車場があって、いま何台分空いているということまで、はっきりわかるようになっている。ところがこちらではグルグル回って捜さなければならない、観光客だけでなく土地の人も同じことをやっている。だから道路が混んでいるのではないか、といっていた（笑い）。

石林　話がちょっと飛びますが、北海道神宮のお祭りは、いまのままでは消えてしまうのではないでしょうか。期間は短かいが、全道から結構たくさんの人が集まる行事なんですが。

杉岡　昨年は中央区が祭典区になって、四番街で大パレードをしましたが、宮司さんが「こんなに人が来たことがない」というほど、にぎやかなものになりました。それで、祭典区を回り持ちにしてそれぞれの地区で行列をやるのを考え直して、行列は毎年都心でやるようにしたらどうか、と思いますね。

杉岡さん

もう一つ、北海道神宮のお祭りの日（六月十五日）は変えられないが、パレードだけは一番近い日曜日にしたらどうか、とも提案したんです。宮司さんには怒られましたがね（笑い）。祭典区といっても、大きな企業のあるところとないところがある。やはり中央区の企業が中心になっていただいて、奉讃会を作らなければと思っています。

石林　ライラックまつりは、札幌を象徴する自然をうまく使ったいい催しだと思うのですが、このころはあまりパッとしませんね。

杉岡　アカシアを復活できないですかね。札幌といえばアカシアと思ってくる人も少なくないのに、このごろはどこに行っても見当らない。せめて時計台の周りくらいには、アカシアの花が咲き誇っているようにしてほしいと思います。

薩　いろいろ貴重なお話をありがとうございました。これからも札幌観光協会を通じ、札幌や北海道の観光のために、いっそうのご尽力をお願いします。それではこのへんで…。

再録

雪まつり・あの日の証言

『さっぽろ雪まつり30周年記念誌』（昭和54年2月、札幌観光協会発行）に、雪まつり三十年間の前期、中期、後期のそれぞれの関係者による座談会が掲載されている。重要な証言やエピソードが多く含まれていて、将来的に貴重な資料になると思われるので、その大要を以下に原文のまま再録する。なお、すでに故人となられた出席者の方には、謹んでおくやみ申し上げる。

前期編

戦後の冬の暮しに一条の光求めて

みんなのアイデアを結集して

司会　戦後三十五年、その歴史と共に歩んで来たさっぽろ雪まつりは北国に住む者にとっては深い意味を持つ大きな行事ではないかと考えます。そこで今日集っていただいたみなさんから、雪まつりがどのような形で生まれたか起源を掘り起こしながら、それを育てて来た苦労話を話し合っていただきたいと思います。昭和二十五年に第一回雪まつりが開かれた当時、札幌市の商工課長でおられた石林さんから—。

石林　結論から申しますと、雪まつりの起源は第一回が開催された当時、観光に携わっておられた方々や、教育、文化、マスコミ関係者など多くの方々で構想を練り、当時経済部長であった板垣現市長が札幌市の行事としてGOサインを出したということです。

司会　当時の市長は高田さん（故高田富与元札幌市長）でした。現在のように大きくなった雪まつりを考えますと、これを市の行事として取り上げた高田さんの英断には感服致しますが……。

今井　本当にそうですね。高田さんはマチを明るくするということには非常に前向きの人でした。かつて南一条をカラー舗装したことがありましたが、渡り初めに来られた高田さんが、マチがきれいになったと非常に喜んでくれました。暗い札幌の冬の生活を明るくしたいという高田さんの心が今も雪まつりのなかに生きていると思っております。

今井さん

石林　雪まつりが初めて開催されたころは、私にとっても役所入りした記念すべき年代なんですが、観光というものにはズブの素人で何をすればいいのか見当がつかない。もちろん現在のように観光行政がしっかり根づいているような社会情勢でもありませんでした。ところが商工課の事務分掌のなかに、すでに「観光に関する事」という一項が記載されていたんですね。その「観光」という二文字をどのように分析、理解すればよいのか大変悩んだことを今もはっきりと覚えております。

二十四年に京都市で開かれた「第一回観光都市連絡会議」に出席し、席上、観光というものはその都市の性格にあったものを新しく生み育てていくものだという話が出され、観光資源が皆無の札幌市を考えて、非常に感銘を受け帰って来たものです。

佐々木　二十三、四年ころといえば未だ戦争の荒廃の跡も残っていた時期です。そこで札幌市が明るい都市づくりをどのように進めていくと良いのか、私を含め当時観光事業に携わっていた人達の大きな話題であったわけです。とくに冬の生活を明るく楽しいものにしようということは、雪深い北国に住む者だけが知る切実な願望でした。

名称は簡明に「さっぽろ…」と

司会　厳寒の冬を人間の力で克服し明るい季節として生活に組み込もうという大きな期待がこめられて、雪まつりはスタート台に立った。しかも当時は敗戦直後という厳しい時代背景があったわけです。雪まつりを語る時忘れてならない人に近藤さん(故近藤直人氏・元札幌観光協会事務局長)がいらっしゃいますね。

薩さん

今井　懐かしい方です。当時私は本店の支配人でした

出席者　（五十音順）

札幌中小企業センター専務理事	荒川　毅
元北海タイムス企画部長	五十嵐久一
札幌商工会議所専務理事	石林　清
丸井今井相談役	今井　保
商業デザイナー	栗谷川健一
北海道女子短期大学教授	坂　坦道
札幌観光協会副会長	佐々木徳三郎
元札幌市教育部長	佐藤麟太郎
司会	
雪まつり実行委員会企画宣伝委員長	薩　一夫

が、近藤さんから雪まつりのことで最初に相談を受けたのは営業部長だった平松君（平松英一道百貨店協会事務局長）でした。札幌の冬の生活は陰気で困る。何か市民を元気づける催しは無いものだろうか、という話だったと記憶しております。平松君は新潟の出身ですから、故郷に雪を利用したまつりがあるという話しをしたところ、近藤さんは札幌にもそういうまつりがあってもいいと喜んで帰られたそうで、のちに私もそうした話に加わって、雪まつりをサイドから応援させてもらいました。

石林　近藤さんは全道各地の営林局を歩かれ釧路営林区の署長を最後に退官、昭和十一年に札幌観光協会が出来るとすぐ専任職員となられた観光功労者です。私が近藤さんから雪まつりについての相談があったのは観光都市連絡会議から帰った直後のことでした。

佐々木　今もそうですが、当時私は観光協会の副会長でした。協会にはこれという財源も無く、近藤さんとアイデアを出し合いながら景勝地の絵葉書をつくり、今井さんにお願いしてデパートで売ってもらうなど、非常に苦労して資金をつくり運営費に当てたものでした。札幌で冬の行事をという相談を受けたとき思い出したのが、戦前一中（南高）でやっていた雪戦会でした。形を変えてやってもいいと答えたのを記憶しております。

司会　初期の雪像は学生が制作したのですが、当時教育部長だった佐藤さんにはどんな思い出がありますか。

佐藤　二十四年の十一月だったと記憶しております。近藤さんがふらりと部長室に来て、札幌で冬の行事をやりたいが知恵を貸してもらいたいというんです。そのころ青少年の不良化に頭を悩ましていたもんですから、その防止の意味から、若者が心から楽しめる催しがあってもいいと考えたわけです。先ほど話に出て来ました雪戦会やカーニバルを復活させることや、小樽の小学校の校庭で見た雪像がまず頭に浮びまして、雪像を囲んでスクエアーダンスでもやるとみんな楽しく参加するのではないかと話し合ったものです。スクエアーダンスは当時大変盛んでしたからね。

司会　雪戦会は非常に勇壮なゲームでしたね。あのころは柔道や剣道などでさえ軍国主義の復興だと規制を受けていた時代ですから、雪戦会は出来ないだろうという空気が強かった。そこで原田さん（原田與作前市長）、確か助役時代だったと思いますが、進駐軍の所へ伺いに行き、アメリカでもそれに似たスポーツがあるのでスポーツとして考えれば良いのではないかということで、心良く了解してもらったと聞いています。

佐藤　雪像を中、高校生が製作してもらいたいという話があってから、それなら早急に各校へ働きかけなければならないだろうと、数校の美術の先生に時計台に集まってもらった。製作費を助成してくれるということでしたが、バケツやスコップを購入するまでには至らない。必要な用具は各自家庭から持ち寄って作業を進めることになりました。

佐藤さん

今井　当時は雪まつりの規模が現在のように大きくなるとは考えられませんでしたね。

石林　その通りです。雪ダルマを囲んでみんなでスクエアーダンスでもやろうじゃないかという気持でした。

名称もそのころ流行していた「祭典」という言葉を使って「雪の祭典」にしてはどうかという話が出ましたが、原田さんが市民に親しまれる名称がいいのではないかといわれたこともありまして、最終的にはひらかなまじりの「さっぽろ雪まつり」になったわけです。

五十嵐　名称については私も懐かしい思い出があります。二十四年の暮れでした。近藤さんが私の所へ来て小樽の手宮西小で雪の彫刻展をやっているのを見て来た。大変立派な雪像が並んでいて全市から見物者が集まっていた。札幌でも何かやりたいというのです。まあ冬に何か行事をということなら雪像展もいいだろうが、それだけではおもしろくない。

五十嵐さん

札幌には戦前、雪戦会とかカーニバルなど歴史のある冬まつりがある。それらをミックスして考えてみてはどうか。先程出て来ました名称も簡明なほど一般に親しめるだろうということで、文字も「雪」以外は平かなを使った方がいいのではないかとアドバイスしました。今考えれば簡単なようですが、何しろ初めての行事であり、あれこれ悩んだものでした。

ポスターはカーニバルから……

司会　栗谷川さんは最初のポスターを作ったのですね。

栗谷川　あのポスターには非常に懐かしい思い出があります。当時私は未だ商業デザイナーとしてのデビュー前でした。近藤さんから雪まつりのポスターを製作してもらえないかと頼まれた時頭にひらめいたのは、戦前中島公園の池で毎年二月に行われていたカーニバルでした。池の周辺は人で埋まり、凍てつく氷の上で、それぞれに仮装した人びとが軽やかに滑っている。その華やいだ風景は、じつに都会風で洗練されたものでした。あのカーニバルがまた札幌のマチに復活する。そんな思いを雪まつりに感じとってデザインにかかった印象は今も鮮やかに思い出します。

荒川　図柄は大きなクマの雪像を中央に、仮装した若い男女が喜々としてスクエアーダンスを楽しんでいるという、冬のまつりらしいポスターでした。みんなが大層気に入って雪まつりが続く限りこのポスターを使おうではないかという話になったのを記憶しています。

栗谷川　そうなんです、二回も三回も回数だけを直して同じものが使われた。そのうち印刷所の版がスリ減って図柄が不鮮明になってくる。たまり兼ねて四回目で近藤さんに苦言を呈した。版権の問題もあるし、新らしいのをつくらせて欲しいというお願いだったんですが、あのポスターは非常に良く描かれている、雪まつりが続く限り変える意志は無い、芸術家がそういうことにこだわってはいかん(笑い)、と逆にたしなめられました。

栗谷川さん

司会　結局は八回まで使われたわけですね。版権問題のうるさい今日では考えられないことで、大変いい時代だった(笑い)ということになりますか。

栗谷川　近藤さんの熱意に動かされたんです。近藤さんの思い出は先程もみなさんから語られましたが、説得

力のある方でした。予算が少ないなかでスタートした雪まつりだったと聞きます。近藤さんが手弁当で横のパイプをつなぎ拡大していったんですね。頼まれればいやといえない不思議な力を持った方でした。

司会　雪像製作の苦労話を坂さんから。

坂　初期の雪像は四回に伏見高（現在の札工高）が製作した「昇天」以外はせいぜい三―六メートルの小規模なもので、中、高校生が作ったものでした。参加校はどこも美術の先生が陣頭指揮に当り、指導したわけですが、当時私は北辰中学に籍があったので、担任のクラスを連れて参加しました。

坂さん

荒川　坂さんもそうですが、道展、全道展などの元老格である亀山良雄さん、栃内忠男さん、伊藤正さんなども指導陣に加わっておりましたね。

坂　手法は雪を一度山に積みあげ、それを踏み固めてノミで削る方法で、今と異なり非常に荒削りの雪像でしたね。ただ指導する側になればどのようにしたら雪像がつくれるのか、皆目見当がつかないというのが本音で、まあ、やっていくうちにだんだんわかって来るだろうということからスタートしました。

佐藤　教師としての苦労も大変だったでしょう。当時、祭りといえば不良が集まりそれが悩みでした。夢中になって雪像を作っているうちに夜になってしまう。あまり遅くまで生徒を使ってはいけないということで夜の八時にはチャイムを鳴らして帰宅させるよう指導した記憶があります。

坂　その通りです。体力的に限界のある生徒もおりますから、みんな同じように製作に参加させるというわけにいきません。個人差を考えながら指導するということでは、私に限らず実際に現場指導に当たった先生方の大きな課題であったろうと思います。しかし寒さに耐えて作業を進めていくという苦労があるからこそ、出来あがった雪像を見る喜びはひとしおで、今も生徒達の嬉しそうな表情が思い出されます。

司会　ＮＨＫラジオの放送劇をテーマにして雪像を製作するようになったのは三回目からですね。

栗谷川　そうです、最初は森本儀一郎さんの放送劇、「珊瑚の唄」でした。このテーマにちなむ雪像は南高の「魔性」、学芸大学（現在の教育大）附属中学の「群像」などです。

石林　四回は同じ森本さんの「カムイヌプリに雪が降る」で、この時は伏見高が、高さ十五メートルにも及ぶ大雪像「昇天」を製作し、観衆をアッと驚かせたものです。その雪運びが大変で、市の土木課のトラックを動員してもらって運搬に当りました。

石林さん

荒川　第五回は吹雪に見舞われ、岸田利彦さんの放送劇「雪が舞っている」がテーマでしたが、坂さんが「闘」を出展しましたね。

坂　私の「闘」と藤川基さんの「聖火」が展示されました。

今井　初期のころは私共の従業員も雪像を作ったんですよ。雪まつりにはみんなが参加しようという自発的な

意気込みがありました。各町内会でもそれぞれの趣向で参加していました。

栗谷川　現在は市民の広場で一般の参加を呼びかけていますが、そういう呼びかけが無くても自分たちの雪まつりであるという意識が強かったというわけです。

会場整理に汗ダクのスタッフ

司会　雪まつりが始まって間もなく商工課のなかに観光係が出来て、初代の係長が荒川さんでした。初期の雪まつりは今のように雪像がメインの雪まつりではなく、催しが中心だったわけですが、それなりに係としてのご苦労も多かったのではないでしょうか。

荒川　市の機構に観光係が出来たのは昭和二十五年八月で、第一回雪まつりが機縁となって設置されたといえるでしょう。これで、観光事業の振興が体制の上で一歩前進したといえます。初期の雪まつりは歌謡コンクール、タンブリング、スクエアーダンスなど、催しが中心でしたが、市や観光協会にはそれを行う予算の裏づけがない。ひっきょう、マスコミの宣伝力に頼ったり、商社のご協力をお願いするということでした。

荒川さん

五十嵐　雪まつりを行うといっても予算はわずか、宣伝費などはゼロに近い状態だ、申し訳ないが宣伝は新聞社でやってもらえないかという話しがあり、札幌市のためになることではあるし、私もまつりが好きだからそれは引き受ましょうということで了解した。雪まつり前から期間内いっぱい、連日かなりのスペースをさいて宣伝しムードを盛りあげたものでした。今思えば破格のサービスでしたよ（笑）

荒川　当時楽しみの何もない時代でした。まして冬ともなればスキーも今ほど盛んではありませんでしたから、雪まつり会場への人出は予想をはるかに越え、非常に盛会でした。

五十嵐　野外映画には観衆が殺到押すな押すなの大混雑、足元が雪でツルツル滑るものですから、映写台が押し潰されて途中で上映を中止したこともありました。

荒川　第一回のあとで、丸井今井の平松さんに客の入りを聞きましたら、入るも入ったりで、通路も通れない位、夏の札幌祭以上の人出、動けないほど入ったものだから売り上げの方はその割に良くはありませんでしたよとニコニコ顔でした。

司会　第一回の雪まつり風景を十六ミリで撮影しましたね。

佐藤　あれは北海道通信社に依頼したもので、フィルムは進駐軍民政部のニブロ教育課長の好意でアメリカから取り寄せ、現像も本国へ送って便宜を図っていただいた。

荒川　そのフィルムが戻ってくるのに二ヵ月位かかり、初夏を迎えた札幌で関係者が集って雪まつりの映画を見ながら、当時の思いを新たにしたものでした。そのなかで石林さんがスキーのストックを持って会場整理をしている姿が映っておりました。

佐藤　ドッグレース、花火大会など催しのなかで、今も思い出すのが市民会館で行われた郷土芸能祭です。

石林　場内整理料として五円以上は税の対象となるも

のですから四円九十九銭を頂戴した。ところが開館前から大勢が長い行列をつくってまさに押すな押すなの盛況でした。

五十嵐　五円持ってくる人が多いが、つり銭を渡しているヒマがない。仕方なく窓口のところに一銭玉を積みあげておいて、各自適当に持って行って下さい（笑い）。

無い無いづくしをみんなでカバー

司会　初年度の総経費が二十五万四千円余。不足分は賛助金でまかなったと当時の記録にありますが―。

佐々木　何しろ無い無いづくしの時代ですから、旅館組合はもとより、商社、マスコミの協力が得られなければ何一つとして催しは出来なかった。会場に大きな広告塔を建て協力をお願いしたものです。

佐々木さん

今井　札幌市のためになることであるという話は先に五十嵐さんからも出ておりましたが、じつにその通りで、雪まつりに協力するというのはデパートとして当然のことでした。会場も現在のように広く使ってはおりませんでしたから協賛行事の「雪の教室」は私共のデパートを使ってもらいました。

栗谷川　初期の雪まつりは遊びのほかに雪を学ぶ心を培おうという意識が強かったと思います。その意味で「雪の教室」は、〝雪の神様〟と呼ばれていた北大の中谷宇吉郎教授（故人）の指導で催されたものでした。

佐々木　学生はもとより一般市民も多数会場を訪れ、雪の実態を学び、雪まつりにこうした催しがあるのは大変素晴らしいことだとの評価を受けたのを覚えております。

荒川　大通西八丁目で行われた花火大会では、花火のなかに定山渓旅館組合から寄与されたロマンス招待券を入れて打ちあげ、大変喜ばれたものでした。

今井　冬の花火大会は雲が低いせいか非常にダイナミックなものですね。近くのビルに音が反響して豪快そのものでした。

佐々木　花火をバックに雪像が浮き彫りされる。今は近くにビルが林立し、観衆への危険が心配されて中島公園に会場が移ったわけですが、それにつけても初期の雪まつりは実におおらかに行われたといえますね。

五十嵐　催しもそれぞれに吹き出したくなるような楽しさがあった。ドッグレースは、飼い主を乗せてアイヌ犬やセパードがスピードを競うんですが、飼い主を落して犬だけゴールに駆け込んだり、仮装美人探し競争では、開始して三十秒も経たないうちに女性を連れて来る人がいる（笑い）。

石林　あのころはみんなおおらかでした。労を惜しまず働いた。夜遅くまで残って、雪像づくりにはげむ生徒達を激励したものです。

坂　雪を固めるのに水を使うんですが、そのため生徒のアノラックからツララが下る。それでも寒いなどと嘆く生徒は一人もいなかった。逆に私共が力づけられることもしばしばでした。

司会　有難うございました。

中期編

家族連れに人気の真駒内会場

自衛隊、雪像製作に参加

司会　雪まつりの中期は雪像製作に自衛隊の協力を得られるようになったことが大きな出来事の一つにあげられるのではないかと思います。そのいきさつについて小柴さんから。

小柴　初期から市民の喜ぶ雪まつりへと試行錯誤を繰り返して来た雪まつりも、観光ブームの台頭により札幌へやってくる観光客が増大、つれて市民に喜ばれる行事と併行して観光客もアピール出来る雪まつりを考えなければならない時期が参りました。たまたま自衛隊から雪像製作に参加しても良いという話が事務局の方にありましたことで、以上の事柄を考え合せ、是非ご協力いただきたいとお願いしたわけです。

渡辺（秋）　従来の雪像は中、高校生や、町内会の人たちが主として製作しました。しかし三十年ころからは高校、大学への受験が大変厳しい状態に置かれるようになったことと、実業高校でも非常に受験率が高まって来て、これまでのように生徒への依存度を高いラインに保つことが難しくなったという時代背景があったのではないのですか。

渡辺（秋）さん

四宮　学生の参加は現在も続いておりますから受験のために学校の協力が得られなくなったと断定するわけにはいかないと思いますが、雪まつりに今まで以上のものを求めるとすれば、大雪像をメインとするひとつの改革を検討する時期であったろうと思います。

大場　雪まつりの大雪像は誰れが見ても驚くばかりの出来栄えでそれがメインになっていることは事実です。自衛隊の力を借りなければ出来なかったでしょう。

渡辺（信）　私共の高校は実業高ですから、受験という問題は他の高校に比べてそれほどの厳しさはなく、雪まつりの雪像展には市民の広場のなかで今も参加しております。それと自衛隊の大雪像製作は別に考えるべきかもしれませんが、ただ、一般の人の手で製作する雪像には限界があるということは認めざる得ないでしょう。

司会　安宍さん、隊内ではどのように考えていらっしゃったのでしょうか。

安宍　二十九年に真駒内に駐とん地が設置されましたが、当時行政目標の一つに「国民に愛される自衛隊」というのがあり、地域社会に貢献するという意味から考えれば札幌市民が有形無形の恩恵を受けている雪まつりへの協力は進んで行うべきであろうということでした。

高橋　隊内には本州方面の雪を知らない隊員が多く、北海道の寒さに慣れるためと初めて雪を見る楽しさもあって、雪が降るとこぞって戸外に出て雪ダルマをつくり誰れが一番上手だとか批評し合い、冬のレクリエーションとして楽しんだと聞いています。

安宍　その通りです。私は当時の担当ではありませんが雪まつりに市民の一人として参加したいという希望は上からの命令では無く隊員誰れからともなく出たと聞いています。

小柴　雪像製作を行う以前に、ブラスバンドで協力してもらっておりますね。

雪まつりは観客が主役

司会　七、八回と雪戦会があり、催しのなかで非常に人気がありましたが。

大場　隊員二百人が紅白に分れ軍艦マーチの伴奏で騎馬戦をやり雪の城を奪い合う勇壮なゲームでした。

渡辺（秋）　雪まつりを考えた当初に出て来た戦前の一中（南高）のゲームですね。

出席者　（五十音順）

陸上自衛隊旭川業務隊長	安宍文雄
北海道酒類販売(株)常務取締役	大場実
札幌市審議室長	小柴伸
北海道新聞事業局企画部長	四宮和興
毎日サービス北海道支社長	高橋新平
国鉄道支社札幌車掌区区長	渡辺秋雄
札幌工業高校教諭	渡辺信
司会	
雪まつり実行委員会企画宣伝委員長	薩一夫

小柴　若者の血をたぎらす勇しい催しで、そのころはまだ催し指向の雪まつりだったので、観衆は大喜びでした。ただ、鼻血を出したりしたものですから二回で中止し残念がられたものです。

高橋　やっぱり冬のまつりなんだという実感があったのは、ブラスバンドの演奏で楽器にウイスキー飲ませてだましながら演奏する（笑い）という話を聞いた時です。

四宮　凍って音が出なくなるんでしょうか。

小柴　そうなんです。金管楽器のばあいですが、口につけると凍りつくばあいがあったりする。それで口にウイスキーを含んで流し込むんです。期間中ポケットびんで百本近いウイスキーを飲んでしまう（笑い）。これは毎年のことですが。

司会　安宍さんは札幌の生れですね。

安宍　そうです。初めての雪まつりのころは学生で、冬の大通公園といえば近くの人が捨てに来る黒い雪の山でとても汚れていた。それが、大きな雪像が並び、美しいイルミネーションが輝く大通の冬を迎え、自分も今また参加していると思うと、一札幌市民として、感無量のものがありました。隊員が純粋な心で雪像製作に当っているのを見ますと、自分の故郷のために労を惜しまずやってくれていると思い非常に嬉しく感じます。

安宍さん

司会　雪まつりと観光客を結ぶパイプ役は何といっても当時の〝旅の足〟国鉄の役割は大きかったと思いますが。

渡辺（秋）　国鉄は初期から後援団体として参画して

来たのですが、本格的に加わるようになったのは七回ごろからだと思います。

小柴　会場に切符販売所を設け観客の便を図ったり、今も続いておりますね。

渡辺（秋）　雪まつりの成長と共に全国的な観光ブームの波が北上して来ましたが、この素晴らしい行事を札幌だけのものとしてとどめて置くのはもったいないということでスキーツアーと雪まつりをセットした本州観光団の募集や、主要都市の各駅に宣伝ポスターを貼るなど、PRを強力に進めて来ました。

小柴　駅前に「歓迎さっぽろ雪まつり」の雪像を製作駅に降りたつ人たちの目を楽しませたり、当時国鉄の宣伝力は非常に強かったものです。

大場　現在ほど旅行代理店が多くありませんでしたから、一般が国鉄にかける期待は大きかったのですね。

渡辺（秋）　三十五年から国鉄道支社では、関東支社とタイアップ、雪まつりをセットした「北海道スキー観光団」の募集を関東地域を対象に大々的に行いました。それによって十二回開催の三十六年には九十九人、三十七年には百八十八人、三十八年には百六十三人が札幌へやって参りました。冬季観光団のはしりではなかったかと思います。

四宮　全国が観光ブームに浮かれても、さて北海道は

四宮さん

と考えると、夏のシーズンはだまっていても観光客はやってくるが、冬は眠っていると同じでまさに〝デカンショ観光〟だった。雪の美しさ、雪の遊びをどの様な形で本州の人に知ってもらうかは、全道各都市の悲願であった訳です。その意味で、さっぽろ雪まつりの成功は、旭川をはじめとして各市に冬まつりの誕生を見、スキーブームと併行してデカンショ観光脱皮の起爆剤となったと言えると思います。

高橋　旅行代理店が増えたということは冬の北海道を売る意味で非常な力になっています。

小柴　本州各都市の有名なまつり、京都の「山鉾（ぼこ）」にしても青森の「ねぶた」でも、芸術的な作為をもって全国に知られ、長い歴史を築いて来ました。しかし雪まつりは、保存ということは不可能な自然の雪を素材とした造形美であってこれは全国に例のないユニークなまつりといえるでしょう。

司会　十日町の雪まつりも三十年を迎えたと聞きます。札幌と同じスタートですが、その間雪不足で数回休んでいる。北海道と異なって、どんなに立派な雪像でも暖気に見舞われると一日で駄目になってしまう。それに市に大勢の観光客を収容する施設がない。マスコミ関係が札幌ほど集中していないなど、数多くのネックを抱えていると土地の人は言います。その意味で札幌は非常に幸運であると言えるのではないでしょうか。

大場　自衛隊参加によって雪まつりの内容が非常に充実した。市民の参加気運が高まった。長い間続きさらに拡大した来た理由は市民を含め多くの観客に愛されたというところにあると思います。

小柴　アメリカの太平洋艦隊司令長官がハワイからやって来たり、ソ連大使が訪れた。また札幌冬季オリンピックを中心にして雪まつりが国際的な行事として飛躍し

ていく話しは後に出て参りましょうがすでにこのころそのきざしが見え始めていたんです。

雪像製作の経過も観賞を

司会　このあたりで中期の雪像と催しなどについて語っていただきたいと思いますが、渡辺（信）さんから―。

渡辺（信）　三十年前と言いますと、苦労したということより、なつかしい語り草として思い出されるのですが、私共の高校は五十二年に六十周年を迎えましたが、その記念誌の中に、四回の雪まつりに製作した「昇天」の指導に当った先生の話しが掲載されておりそれによりますと、雪像は、石造工事と同じ方法で足場を組み、固雪を鋸で切り取って石を積み上げる。札工全科、延べ一千人を動員する大工事になったとあります。もちろんこの他に市交通局、市土木課などの雪運搬作業等、大変な協力を得て居る訳です。

渡辺（信）さん

高橋　出来あがった大雪像をながめてどうこういうのは簡単ですが、それまでの努力を周知してもらうことによって、より一層雪まつりへの理解と楽しさを深めてもらえるのではないかと思います。

大場　全くその通りで製作過程の公開は、今後も強力に行い一般に理解を深めてもらうべきであろうと思います。

渡辺（信）　雪像の製作は単に像をつくるというにとどまらず、像をとりまく周辺と深い関係を持っているということを知って欲しいと思います。例えば、大通周辺の建築物か高層化していくと、そこに製作される雪像もかなり大きなものでなければ周囲に負けてしまう。いろいろな角度から測定して製作する。そういうことを知ることによって、毎年作られるみごとな大雪像は、又別の角度から観賞してもらえるのではないかと思うのです。小さいものはそれなりの味いがあり大変楽しく見れるものが多いのですが。

四宮　私共では地下街が出来て大雪像が三丁目に製作されなくなるまで、自衛隊にお願いし、仏像をシリーズで製作してきました。その出来栄えが非常に良く、高い評価を受けたものですが、観客のなかには、像の前に供物を供えるお年寄りが居て、たまたま担当者がそれを目撃、感激して語っていたのを今も忘れません。ところが雪まつりが終り、それをとり壊す段階になって、立派な雪像を壊すだけでも惜しいという声が強いところへたまたま仏像を頭から壊す写真が新聞に掲載された。それを見た市民から「何という罰当りのことをするんですか」とお叱りを受けたこともありました（笑い）。

司会　期間が終ったら未だ崩れていない大雪像を解体する。惜しむ声も確かにあるでしょうね。

小柴　二月の雪まつりが開かれる時期は寒暖の差が激しく、一夜にして雪像が崩れ落ちるほどの暖気が来る場合もあり得るわけです。会期中はそれなりの警備体制をとって万全を期しているからいいわけですが、長い期間ともなるとそうそうかかりっきりというわけにも参りません。万が一にも危険があっては、せっかくの雪まつりも台無しで、雪像の解体は、製作と共に雪まつりには欠くことの出来ない作業なのです。

大場　天をつくような大雪像が期間が過ぎるとあっという間に会場から姿を消す。季節が来たらあとかたもなく消えていく雪の命に似て、これも、雪まつりらしい余韻を残す意味でいいのではないでしょうか。雪まつりが終った。もう春は近いという感触があって。

真駒内会場は家族連れ対象に

司会　突然やって来る暖気や吹雪に悩まされた年も多いですね。それに雪不足も市民の暮しにはいいのですが、雪まつりには敵です。

高橋　七回目の雪まつりに暖気に見舞われ雪像を期間中に取り壊したことがありましたね。

大場　四丁目に自衛隊が製作した楠正成が白馬に乗った雪像「至誠」です。立派な出来栄えで大変人気だったんですが、ところが観客のなかに尾にブラ下がった人が居て折ってしまったんです。（笑い）

大場さん

小柴　あげくに暖気で形がすっかり崩れてしまった。泣く泣く会期中に壊わさなければならない破目になって、非常に惜しまれたものです。

四宮　酔っ払いとか、いたずらものが時どき現われて自衛隊はもとより事務局の人も随分苦労して居られました。

小柴　当時は石炭を燃しておりましたから、大通周辺もご多聞にもれずで、ばい煙で雪像が〝黒像〟になってしまうんです（笑い）。それで汚れていない雪を採って来て化粧直しをする。少し暖かくなると又黒いハダが見えて（笑い）。これが大変な作業でした。

四宮　雪像をイタズラされないよう事務局のものが、当時舞台を木ワクで組んでおりましたから、その下にストーブを焚き交替で寝ずの番をしたそうです。

安宍　これは真駒内会場のことですが、毎年会場に姿を見せる若い女性グループがいました。市内の幼稚園の保母さんの仲間で、子供のころ両親と来たのが最初。大変楽しかったのでそれがずーっと続いているというのです。

司会　いよいよ真駒内会場が誕生したわけですが、そのいきさつを。

安宍　三十七年に第十一師団が置かれ、初代の平井重文師団長（故人）が、隊内につくった雪像のみごとな出来栄えに感心して、雪まつりとタイアップして真駒内でも雪像をつくり、観賞していただいてはどうかと話されたのがきっかけでした。三十八年（十四回）三十九年（十五回）は「真駒内スノーフェスティバル」と銘うって、雪まつりに協賛のかたちをとっておりましたが、四十年（十六回）からは正式会場としてスタートしたのです。

高橋　私共（毎日新聞）が後援の形をとり宣伝その他を引き受けております。最初はPRがいき届かないこともあって観客はわずか一万人そこそこ、隊員が五千、その家族も含めて考えると、隊内でやっているのと少しも変らないではないか（笑い）といわれ、その後、真駒内でも雪まつりをやって居りますと、声を大にPRにのり出した。大通に〝追いつけ追い越せ〟（笑い）。

高橋さん

安宍　一人でも多くの市民に観てもらいたいと思い、隊内でもあれこれ工夫をこらしたものでした。大通会場と同じものであれば大通を観るだけで充分、真駒内らしい雪まつりで喜んでもらおうというわけです。

高橋　大通と異る点は豊富に〝白い雪〟があり、広大な敷地を有している。家族連れに喜ばれる雪像をつくってはどうかということでした。

安宍　ファミリーランド的要素を持った会場を考えたわけです。

高橋　今は地下鉄を利用する観客が多く、輸送面のトラブルはありませんが、真駒内に大量の観客を動員出来るようになった最初のころは交通面で大変苦労しました。

中期は飛躍への土台づくり

司会　何をするにしても最初に手がけた人達の苦労は想像をはるかに越えたものであることがわかります。とくに輸送面などは、毎年細かい計算の上でそれを実行するんですが、次の年は又考えを新たにして検討し直さなければならないという悩みがあったようです。

小柴　苦労を積み重ねていくうえでそこに歴史が培われてくるものですが、経験がまた新らしいアイデアを生んでいくといえるでしょう。雪まつりも大きくなっていくに従い、それなりの体制を整えていかなければならない。話しが前後しますが、昭和三十四年に雪まつり実行委員会が出来、運営主体を担って来ました。そのなかでいろいろな事業を展開して来た訳ですけれども、地下鉄が出来るまでの真駒内会場への観客輸送問題は毎年のように新しい局面を迎えて来たものです。せっかくの雪まつり会場に人が行かないのは困るけれど、行き過ぎても又困る(笑い)。事故は無いか。人的トラブルは無かったか、期間が終わるまでハラハラのし通しでした。

小柴さん

安宍　隊内でもそれなりの心配をしましたね。マイカーでやって来る人が多いので、駐車場のスペースをどうとるか悩んだものです。しかし、せっかく寒いなか会場までやって来てくれる、来て良かったと思って帰ってもらいたい。今もその気持は変るものではないでしょうが、細い点に注意を払うことは主催者側の義務だと思いましたよ。

高橋　雪像をつくって見てもらうというだけではない隠れた苦労をそれぞれにになっているわけです。

四宮　その意味からいえば、中期は体制づくりに全力投球をした時期であったと思いますね。

大場　まあ、より大きく飛躍していくための土台づくりをしたということでしょうか。一方では民間放送局がタレントを招いたり会場でショーをやる。それが電波にのって全国津々浦々まで浸透していったのも大きな特徴でしたね。

司会　ではこのへんで。

後期編

雪像は大きく、舞台は世界へ

市民が生み育てた雪まつり

司会　後期の雪まつりは、オリンピックという大きな国際行事をジャンプ台に世界に飛躍したころであり、国際雪像コンクールや、香港へのキャラバン隊を派遣するなど、海外へのキャンペーンを強化しました。反面オイルショックの余波、自衛隊の雪像製作に対する批判などこもごもの時代でもあったわけです。西田さんから―。

西田　私は昭和三十九年に札幌へ参りまして、主に真駒内会場に関係して来たわけですが、それ以前の自衛隊は大通会場で二、三基の大雪像を製作して来ました。真駒内については隊内で同好者が集って雪像展をやって来たものが、現在のように発展したのです。

西田さん

久末　四十三年だったでしょうか、雪まつりに自衛隊が雪像をつくるということは、税金の無駄使いではないのかというような批判が地区労や全道労協から出ましたのは。

林　それがマスコミに取りあげられ、自衛隊の上層部で〝札幌市民がそれを望まないのなら雪まつりへの参加のありかたを考え直さなければならないだろう―〟という話が出たのですね。

長井　確か大通会場の雪像製作は辞退したい。真駒内会場の規模もグンと縮少してという話だったのですね。

光地　当時、事務局の方も非常に驚いて、今自衛隊に引きあげられては大変なことになると頭を悩ましたものでした。

光地さん

西田　ご存知のように雪像製作には各担当区域に報道機関などの後援がつくわけです。企業のコマーシャルベースに自衛隊がのるというのはおかしいではないかということでした。

中山　北海道開拓の歴史を考えると、厳しい寒さにさいなまれる冬を自ら克服するということは、そこに住む者の悲願であり、雪まつりはそういうなかから生まれ今日に至ったわけです。形こそ大きな変革をとげておりますが、実行委員会は雪まつりの原点に立ち返って考え、運営しようと努力しているわけで、現在の雪まつりのメインになっている大雪像を、そのなかの一分野として自衛隊にお願いしているものです。こういうことをかみ砕いて考えてもらえば、自衛隊に対する批判などは生まれて来ないのではないかと思うのですが。

西田　私共も札幌市民の一人として、また自衛隊が地域発展に役立つという行政目標で進んでいる以上、進んで協力するのが当然ではないか。批判は批判として謙虚に受とめ、内部検討を加える一方では、それをやることによって百数十万人以上もの札幌市民を初め国内外の人達が冬の一日を楽しんで帰られる。しかも冬期間の札幌

市の経済をうるおす原動力ともなるのだと考え、そこに自衛隊参加の意味があるわけです。

林　雪像製作はもちろんですが、「市民の広場」に雪を輸送する作業も一部を交通局の車でというのもありますが、自衛隊の輸送力への依存は大きいといえます。ブラスバンドの参加も含めて自衛隊の協力姿勢については、全市あげて感謝しなければならないでしょう。

林さん

石上　批判といっても極く少数の人たちの意見で、それが強いと思われては困る。

中山　自衛隊に強力していただかなければ、大雪像がメインになっている現在の雪まつりはあり得ない。世界の冬のまつりで代表されるのは、リオ（ブラジル）のカーニバル、ニース（フランス）のカーニバル、ニューオリンズ（アメリカ）のまつり、ケベック（カナダ）のスノーフェスティバルが挙げられますが、世界の人びとは、さっぽろ雪まつりもこの中に入れて評価してくれております。自分の住む故郷に、世界に誇りとするまつりのあることは大きな喜びであろうと思います。

菅　私も同感です。第一回の雪まつりにかかった経費は二十三万四千百八十円五十銭。現在雪まつりにかかっている関連経費を金額で試算するとザット六億円は越えるだろうといいます。しかし実行委員会の経費は〆て四千五百万円程度、その差額をどこで見ているかと言えば、総ては自衛隊をはじめとする市民の善意から生まれているのです。

菅さん

長井　自衛隊の今後の協力については、先程の西田さんの話で安心しておりますが、だからといって雪まつりが決して自衛隊のまつりである訳はなく、札幌市民がその手でつくりあげたまつりであることに異論を差しはさ

出席者（五十音順）

札幌市観光部長	石上良忠
札幌市商工会議所事務局長	光地勇一
自衛隊第十一師団広報班長	佐々木舜三郎
札幌市庶務部長	菅　昭二
元自衛隊第十一師団副師団長	西田秀男
雪まつり実行委員会前夜祭委員長〈札幌専門店会理事長〉	中山大五郎
雪まつり実行委員会事務総長〈北海道観光事業㈱社長〉	長井　忠
雪まつり実行委員会サービス委員長〈三井観光開発㈱専務取締役〉	林　英夫
雪まつり実行委員会財務委員長〈北海道振興㈱社長〉	久末鉄男
司会	
雪まつり実行委員会企画宣伝委員長	薩　一夫
オブザーバ	
札幌市観光部観光課長	松原和男
札幌観光協会常務理事	光野英親
同	津田光夫

む人は居ないでしょう。

石上　大通八～十丁目の「市民の広場」をぜひ注目していただきたいものです。ここに集まる若者のグループ、若い公務員、学生生徒達、お母さんのグループ…と、誰から頼まれ、強制されたものでもない。一人びとりが進んで雪まつり参加への意欲に燃えている。自分の意志で夜空の星を仰ぎながら、凍てつく手で雪像をつくっていく。近くに出来あがっている自衛隊の大雪像に力づけられながら、それならこちらは像こそ小さいが心のこもったものをと作業を進めていくのです。

石上さん

光地　「市民のひろば」は年を追うごとに盛んになり、作られる雪像も立派なものが多い。自衛隊の大雪像を見てそれがみんなの励みになっていることも事実なら、札幌市民のほとんどは自衛隊の協力に感謝こそすれ、批判の目を向けるような人はいないと断言できると思います。

佐々木　自衛隊も「市民の広場」に雪像をつくるという、市民参加の形だけをとればいいとの声も確かに隊内にあります。しかし現段階は地域の発展のために誇りを持って協力しているという方向で進んでいるのですから、そのなかで若い隊員はもとより、雪像製作を指揮する幹部も、純粋な心から雪まつりに参画しているのです。

ジャンボ雪まつりに大型予算

司会　このへんで大型化した雪まつり運営の苦心談を聞かせていただきたいのですが、資金集めに毎年ご苦労なさる久末さんから。

久末　雪まつりが国際的な行事になり、大きくなっていきますと、国賓クラスの人を札幌が迎えなくてはならないという一つの例をとっても、そこにかかる経費は決して少ない額ではなく、単に協賛金、会議所だけがそれをやるのでは追いつかない訳です。そこで全市をあげ、みんなが力を合わせて雪まつりを盛り上げいくという意気込みが必要になり、最近は雪まつり自体が有名になったことで、そうした方向づけが固まったと見ていいでしょう。

光地　苦労がなくなったといいましても、やはり大変な仕事でして久末委員長自らあちこちとお願いして回られております。私共もじっとしてられない気持にさせられます。

長井　私の記憶では、自衛隊に協力していただいた最初のころは、実行委員会も役所も予算ゼロ。ガソリン代など総て隊内でまかなっていただいたものです。真駒内会場が出来ました時、交通が非常に混雑し、危険でした。当時の道警本部長は森永さんでしたが、真駒内までの路線を一方通行にしてもいいから標識は実行委員会でつくるようにとのことでした。当時のお金で数百万円、原田市長にお願いして出していただいたものです。

長井さん

司会　資金集めで一役かったのが前夜祭でしたね。

久末　オリンピック前夜祭を中島スポーツセンターでやったころから、自衛隊への感謝の気持を表わすことと、資金調達のために本格的な雪まつり前夜祭を行いました。

司会　最初は業者の好意で行ったものでした。一回目がテレビ塔、二回が第一ホテル、三回はグランドホテル各社にお願いして実施したものでしたね。

石上　最近の前夜祭、開会式は、若者の手で盛り上げてもらう方向で進めております。雪まつりに集まる観客は、七割近くが三十代以前と言う数字が出ておりまして、雪像を〝静〟とすれば、前夜祭などは、〝動〟となり後者を若者の手にゆだねることによって、雪まつりの期間いっぱい楽しんでもらおうという気持からです。

長井　氷上カーニバルの復活、パレードなどもその意味では効果のあるものですね。

中山　オリンピックを成功させようと、当時全市をあげて売り出しやバザーをやったり、オリンピックメダルを作って売り、会議所あげて資金集めをしたものです。メダルが売れに売れて大変でした。

中山さん

司会　最初に前夜祭を行った時、それを新聞で見て旭川の五十嵐前市長が、うち（旭川）では反省会をやって協力していただいた自衛隊に感謝の気持を表わしているが、その時期が遅いために間のびしてしまう。前夜祭とはよく考えたものだと感心しておりました。

林　自衛隊の苦労に感謝する市民の気持を前夜祭のなかで表わすことは大切で、今後も続けていくべきだろうと思います。

国際行事と共に世界へ飛躍

司会　オリンピックを頂点として国際色が強まっていく雪まつりの足跡をたどって見たいと思います。

菅　国際的な行事へと飛躍致しました背景には、当然オリンピックという国際的行事が開催されたことがあげられましょうが、忘れてならないのが以前にも北海タイムスが東京在住の大、公使を招待し、雪まつりを見てもらったことがあり、それが海外観光客誘致の引き金となった事実です。

松原　四十七年のオリンピックの時、開、閉会式場となった真駒内屋外競技場横に、高さ二十五㍍の大雪像「ようこそガリバー」が製作されました。これが、選手、役員の行進コースにあるものですから、いやでも宇宙中継のテレビ放映対象となったもので、世界に雪まつりの印象を深めたわけです。

松原さん

津田　プレオリンピックのときも、世界から報道関係者が大挙来札しました。雪まつりのころすでに訪れていた人達も多かったわけで、会場でシャッターを切る海外カメラマンが目についたものです。

松原　オリンピック組織委員会のブランデージ会長も雪像を見、札幌市民の素晴らしい歓迎に心を打たれたと語っていたそうです。

林　開会式には天皇、皇后陛下がお見えになられ、雪像付近をお通りの時には、侍従から説明を聞かれ車窓から楽しそうに雪像をごらんになられました。

菅　皇太子殿下に雪像の滑り台から滑っていただきたいとお願い致しましたが、スケジュールの関係で実現出来ませんでした。

司会　プレオリンピック、そして本番と、世界中のマスコミが競技に合わせて雪まつりを報じた。その国際化を定着させたのは久末さんを団長とするカナダ・ケベックへの雪像コンクールに参加などがあげられますね。

久末　四十八年の二月、ノルマン・ベルニエさん（州政府駐日代表）の力を借りまして、ケベックの国際雪像コンクールに日本チーム代表として参加致しました。出展作品は「鏡獅子」で非常に人気があったと自負しております。

津田　招待は二回、三回と現在も続いております。

菅　雪まつり会場で国際雪像コンクールを開催する様になったのは四十八年でした。東京で大使館を回り歩いて参加を呼びかけ、最初はカナダ、フランス、ベトナム、アメリカ、韓国、日本と六ヵ国の雪像が並び、各国では雪まつりをニュースとして大々的に報じたものでした。

津田　雪まつりが縁で結ばれたカップルも多いのです。

津田さん

ベトナムのブエン・アントン君と、NHK学園に学んでいた五十嵐美子さん、そしてアメリカのバリー・ケリー大尉とオーストリアのゲイル・セールさんなどで、国境を越えた若者達の交流は、国際化していく雪まつりの美談といえるでしょう。

司会　香港にキャラバン隊を派遣しましたのが五十年でしたが。

光野　キャセイ航空の協力で親善使節団を送りました。中山さんが団長で私も同行致しましたが、現地では極めて好意を持って迎えられました。翌年の国際雪像コンクールに香港が参加致しまして民族色豊かな『ジャンク』が製作されました。また香港からの観光団も大勢札幌の雪まつり会場にやって参りまして、親善の橋渡しになったことは非常に喜ばしいことです。五十一年から日本航空が協力してくれていますが。

光野さん

菅　雪まつりが国際的になっていくことはわれわれとして大変喜ばしいことなのですが、先ほど財務を担当しておられる久末さんのご苦労の話しが出ました、何しろ予算の裏づけが必要になってくる。それをどう調達するかは今後の大きな課題であるわけですが、その意味でいうと、航空会社などの協力は非常に有難いものですね。

津田　香港など海外へのキャンペーンは、雪まつりに限らず、夏の札幌観光誘致にも大きな力になっていますね。

光野　札幌へ来たということで挨拶に見えられる海外の方の話を聞くと、私共が現地に出向いてPRしたことの効果が具体的に出ていると感じることがしばしばで、事務局としては非常に嬉しく思うことがあります。

光地　各国大使館の協力についても何らかの形で感謝の気持を表わすべきでしょうね。

ハリボテ雪像に連日緊張

司会　四十七年から期間を二月一日から五日迄に固定したことは画期的なものですが、四十九年のオイルショックは雪まつり開催が危ぶまれるほどの出来事でしたね。

林　雪輸送が大変な作業ですから、その難関をどう突

破するかということですね。

西田　ご指適の通り自衛隊が一番苦労しますのが雪の輸送なんです。新雪の白い雪がどうしても必要なんです。中山峠、丘珠、定山渓あたりから集めるんですが、普通の年でも大変な作業に加えて、オイルショックをモロに受けた二十五回雪まつりは万事休すといった状態でした。

菅　家庭用灯油でさえ見通しの立たない時輸送のガソリンなんかは考えられないことだというわけです。役員が上京して大臣折衝に当ったりで、それなりの成果は得られましたものの満ぱいとはいかず、結局は雪の中にドラムかんを埋め込んで張りボテの大雪像を作ったりしましたね。

佐々木さん

佐々木　大通、真駒内両会場の大雪像づくりに使用したドラムかんは八百本にものぼりました。しかしいつ崩れてしまうか予想もつかず、雪まつりが終わるまで警備が大変でした。

司会　そのときどきでいろいろ曲折がありましたが、しかし三十年も続いて来たことは意味深いことではないでしょうか。最後になりましたが、三十回記念の雪まつりに照準をあて、今後の方向を語ってもらいたいと思いますが―。

石上　全国から、また海外からもやって来る方々に雪まつりの印象を強くしてもらうために、世界的にも著名な岡本太郎さんに三十回記念のテーマ大雪像をお願いしてはという話が薩さんの方から出され、検討を加えて参りました。岡本さんには予算面などで随分無理なお願いもし、心良く受入れていただきました。

久末　自衛隊を初めとして、市民の皆様からも力強い支持を受け三十回記念にふさわしい行事になったことを心から喜びとしているものの一人です。

久末さん

松原　今後の雪まつりは過去三十年間に築きあげた大きな土台を元に、さらに内容の充実を図るべく努力すべきではないでしょうか。

林　市民参加意識の高揚は目を見はるものがありますが、今後はさらに細かい点まで気を配って、市民一人ひとりが雪まつりに参加しているという気持にまでもっていきたいものですね。

司会　初期・中期・後期に至る貴重な体験談を語っていただき誠にありがとうございました。

資料編

一、札幌観光協会設立趣意書

地方ノ發展策ハ種々アリマセウガ、要ハ内部的ニハ産業ノ充實ト観光ノ施設トヲ計リ、外部的ニ之ガ宣傳ヲナシ、外來者ヲ誘致シテ地方ヲ紹介スルト云フ事ハ最モ大事ナ事ト思ヒマス。最近観光ハ産業ノ一部門デアルト高唱サレ、所謂ツーリスト、インダストリーハ他ノ産業ニ比ベテ種々ノ異彩ト特色トヲ持ツ揺籃期ノ産業ダトモイフベキデアリマセウ、コノ新シイ観光事業ガ将來ノ産業界ニドンナ役割ヲ勤メ、イカニ活躍スルカト云フトコロハ現在未知数デアルトハ云ヘ、頗ル興味深イ問題デハアリマスマイカ、苟モ産業ノ發展振興ニ關心ヲ持ツモノハ、忽諸ニ附シテハナラナイ重要案件デアルト信ジマス。

特ニ本地方ハ山紫水明、四季トリ〴〵風光皆掬スベキ名勝地ノアルノニ加ヘ、然モ明治二年維新ノ大業ニ際シテ、本道ノ防備ト富源ノ開發ノタメ開拓使ガ置カレ、政務總攬ノ府ト定メラレタ事實ニ徴シテモ、将又現ニ本道十一州ノ總鎮守、宮居ノ地トシテ、或ハ近代的スポーツ精華トシテノスキー、アイスホッケーノユウトピアトシテ市内及郊外ニハ見逃スコトノ出來ヌモノ亦決シテ尠ナクナイノデアリマスガ、タヾ従來之ヲ天下ニ紹介スル方法ガ十分デナカッタト思ヒマス。

既ニ以上ノ如ク観光上恵マレタ地ニ居住スル吾々ハ一段ノ協力ト努力ヲ以テ此ノ天恵ニ和シ、茲ニ観光地ノ設備ヲ整ヘ外客ノ誘致ト利便トヲ計リ、一ハ産業ノ興隆ニ資シ、二ハ此ノ地ヲシテ更ニ居ヨイ、住ミヨイ土地トシテ物産ト併セテ宣傳紹介シ、本市及近郷ノ發展ヲ期シタイト希フモノデアリマス。

如上ノ目的カラ今回各方面ノ御意見ヲモ伺ヒ各位ノ燃ユルガ如キ郷土愛ニ訴ヘ、大体左ノ會則ノ下ニ観光協會ヲ設立シ、相倚リ相扶ケ共存共榮ノ實ヲ具現イタシタイト念スルモノデアリマス。希クバ郷土ニ對スル責務ト思召サレ、此ノ趣旨ニ御共鳴ノ上奮ツテ御賛助御加盟アランコトヲ。

二、札幌観光協会々則（設立時）

第一章　總　則

第一條　本會ハ札幌観光協會ト称ス

第二條　本會ハ事務所ヲ札幌市役所經済課内ニ置ク

第三條　本會ハ札幌市ヲ中心トスル道内観光及物産ノ紹介、宣傳竝観光ノ利便ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二章　事　業

第四條　本會ハ第三條ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

一、年中行事、名所舊蹟其ノ他観光地ノ宣傳紹介ニ關スル事項

二、観光客ノ誘致策竝之ニ對スル新施設ノ研究及充實改善ニ關スル事項

四、旅館、休憩所、其ノ他接客施設ノ改善紹介竝観光客ノ案内接遇ニ關スル事項

五、交通機關ノ整備及紹介ニ關スル事項

六、其ノ他本會目的達成必要ト認ムル事項

第五條　前項ノ事業施行ノ為本會ニ左ノ三部ヲ置ク

宣　傳　部

サービス部

調　査　部

第三章　會　員

第六條　本會ハ札幌市及其近郊ニ於ケル観光ニ關係ヲ有スル各種團體竝關係業者其ノ他本會ノ趣旨ニ賛同スルモノヲ以テ組織ス

第七條　本會ノ會員ヲ分チテ左ノ四種トス

一、名譽會員　本會ニ功労アル者又ハ學識經驗アル者ニシテ評議員會ノ決議ヲ經テ會長ノ推挙シタル者及年額二百圓ヲ出金スルモノ

二、特別會員　本會ノ趣旨ヲ翼賛スル者ニシテ左ノ會費ヲ納ムル者

一級　年額　百　圓

二級　年額　五　十　圓

三級　年額　三　十　圓

四級　年額　二　十　圓

三、正會員　本會ノ趣旨ヲ翼賛スル者ニシテ年額一圓ヲ納ムル者

四、賛助會員ハ金五圓以上ヲ寄附シタルモノ

第八條　本會員タラントスル者ハ住所、氏名、職業ヲ記シ本會ニ申込ムモノトス

第九條　本會員タルノ資格ハ退會又ハ死亡、解散、除名ニ依リ喪失スルモノトス

第四章　役員及職員

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會　長　一　名

副會長　四　名

評議員　若干名
常務理事　一名
理事　若干名
部長　三名
副部長　三名
委員　若干名

役員ハ名譽職トス但シ常務理事ハ手當ヲ給スルコトヲ得

第十一條　會長ハ札幌市長ヲ、副會長中一名ハ札幌運輸事務所長ヲ、一名ハ石狩支廳長、一名ハ札幌商工會議所會頭、他ノ一名ハ札幌市助役ヲ以テ之ニ充ツ

評議員ハ總會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ選挙ス

但シ會長ハ町村長其ノ他關係者ヲ評議員ニ囑託スルコトヲ得

常務理事ハ札幌市經済課長ヲ以テ之ニ充テ理事ハ會長之ヲ囑託ス

部長、副部長、委員ハ會長之ヲ囑託ス

第十二條　選挙セラレタル評議員ノ任期ハ二ケ年トス但シ満期再選ヲ妨ケス

補欠ニ依リ就任シタル役員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

役員ハ任期満了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄仍其ノ職務ヲ行フモノトス

第十三條　會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理ス

副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アル場合ハ其ノ一人之ヲ代理ス

評議員ハ重要會務ヲ評議ス

常務理事ハ常務ヲ處理シ會長及副會長共ニ事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

理事ハ會務ヲ分掌ス

部長ハ會長ヲ補佐シ各部ト連絡ヲ取リ部務ノ執行ヲ司ル

副部長ハ部長ヲ補佐シ部長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

委員ハ部ニ屬シ重要部務ヲ審議考究シ併テ之カ實行ヲ補助ス

第十四條　本會ニ顧問及相談役ヲ置クコトヲ得

顧問及相談役ハ評議員會ノ決議ヲ經テ會長之ヲ推挙ス

顧問及相談役ハ會長ノ諮問ニ應シ又ハ會議ニ出席シテ意見ヲ述ブルコトヲ得

第十五條　本會ニ主事及書記ヲ置キ會長之ヲ任免又ハ囑託ス

主事及書記ハ上司ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

會ハ豫算ノ範圍内ニ於テ前項ノ外囑託員ヲ置クコトヲ得

第五章　會議

第十六條　會議ハ總會評議員會理事會及部會ノ四種トス

總會ハ定期及臨時ノ二種トシ定期總會ハ毎年一回臨時總會ハ會長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ會員三分ノ一以上ヨリ會議ノ目的ヲ示

シテ請求アリタルトキ會長之ヲ召集ス
評議員會ハ會長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ評議員三分ノ一以上ヨリ會議ノ目的ヲ示シテ請求アリタルトキ會長之ヲ召集ス
理事會ハ會長ニ於テ必要ト認メタルトキ會長之ヲ召集ス
部會ハ會長又ハ部長ニ於テ必要ト認メタルトキ會長又ハ部長之ヲ召集ス
但シ會長ハ聯合部會ヲ召集スルコトヲ得
第十七條　總會、評議員會及理事會ハ會長ヲ以テ議長トス會長事故アルトキハ副會長ノ一人之ヲ代理ス
部會ハ部長ヲ以テ議長トス部長事故アルトキハ副部長之ヲ代理ス
但シ會長ノ召集シタル部會ノ議長ハ前項ノ例ニ依ル
第十八條　會議ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス
第十九條　總會ニ於テ決議スヘキ事項左ノ如シ
一、會則ノ変更ニ關スル事項
二、經費豫算ニ關スル事項
三、經費決算認定ニ關スル事項
四、其ノ他重要ト認ムル事項
第二十條　評議員會ニ於テ決議スヘキ事項左ノ如シ
一、總會ニ提出スヘキ議案ニ關スル事項
二、總會ニ於テ委任セラレタル事項
三、其ノ他會長ニ於テ必要ト認メタル事項
第二十一條　理事會ニ於テ議決スヘキ事項左ノ如シ
一、評議員會ニ提出スヘキ議案ニ關スル事項
二、事業實施上必要ト認ムル事項

第六章　會　計

第二十二條　本會ノ經費ハ財産收入、事業收入、會費、寄附金、補助金、其ノ他雜收入ヲ以テ之ニ充ツ
第二十三條　本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ヲ以テ終ル
第二十四條　本會ノ出納ハ五月三十一日ヲ以テ閉鎖ス
第二十五條　本會ノ財産ハ確實ナル方法ニ依リ常務理事之ヲ保管スルモノトス

附　則

第二十六條　本會則施行ニ必要ナル細則ハ會長別ニ之ヲ定ム
第二十七條　本會則ニ規定ナキ事項ニ關シテハ會長適宜ニ之ヲ處理スルコトヲ得
第二十八條　本會則ハ昭和十一年五月十六日ヨリ之ヲ施行ス

三、役員、顧問、相談役、評議員、職員（設立時）

會長　札幌市長　橋本正治
副會長　札幌運輸事務所長　山下虎吉
同　石狩支廳長　能木善七
同　札幌商工會議所會頭　大瀧甚太郎
同　札幌市助役　伊澤廣曹
顧問　北海道廳長官　池田清
　　北海道帝國大學總長　高岡熊雄
　　札幌鐵道局長　山下雅實
　　帝室林野局札幌支局長　井上重則
　　北海道廳總務部長　本間清
　　同・土木部長　中村忠充
　　同　拓殖部長　外山福男
　　同　經濟部長　奥野定八
　　札幌鐵道局運輸課長　川井健太郎
相談役　札幌市會議長　村田不二三
　　同　副議長　本間久三
　　北海道廳林務課長　林常夫
　　同　道路課長　町田利臣
　　同　商工課長　大塚兼記
　　帝室林野局札幌支局業務課長　前田碩太郎
　　札幌鐵道局旅客係長　川村二郎
　　札幌土木事務所長　杉森意彦
　　札幌警察署長　榎本吉之助
　　札幌營林区署長　渡邊兵左衛門
　　北海道拓殖銀行頭取　岡田信
　　札幌商工會議所副會頭　伊達翁記
　　札幌中央放送局長　船水喜平
　　北海タイムス社長　阿部良夫
　　同　事業部長　河合裸石
　　小樽新聞社札幌支社長　工藤梅次郎
　　北海道水力電気株式會社々長　藤原銀次郎
　　札幌實業組合聯合會々長　金子久吉
　　スキー聯盟北海道支部長　長橋茂男
　　札幌スキー聯盟會長　大野精七
　　札幌スケート協會長　木下三四彦
評議員　江別町長　金子薫藏
　　石狩町長　高野金作
　　琴似村長　清水涼
　　藻岩村長　佐藤正三郎
　　手稲村長　星野毅
　　白石村長　古瀬猛二
　　札幌村長　藤木與次郎
　　千歳村長　畠山定吉
　　恵庭村長　光富松衛
　　札幌運輸事務所營業係主任　磯野渡
　　ツーリストビューロー北海道支部　副幹事　後藤恒次郎
　　北海道鐵道株式會社專務　伊藤裕啓
　　高桑市藏
　　藤甚之助
　　西尾長次郎
　　伊藤亀太郎
　　大島喜一郎

定山溪鐵道株式會社長　金子元三郎

株式會社三越札幌支店
株式会社㊥今井札幌支店
株式会社五番館
大日本麦酒株式會社札幌支店
帝國製麻會社札幌支店
株式會社曲丸古谷商店製菓工場
株式會社西尾商店
日本清酒株式會社
北海道製酪販賣組合聯合會
明治製菓株式會社北海道事務所

常務理事
札幌小賣商同盟會長　小谷義雄
札幌市經濟課長　島崎林藏
札幌駅長　大石善六
札幌運輸事務所旅客掛　飯田清司
石狩支廳殖産課長　赤城五十羽
札幌警察署次席　佐藤幸次郎
札幌自動車所主任　大谷難三郎
豊平町長　松崎亀二
北海道自動車協會札幌支部長　榎本吉之助
札幌中央放送局放送部長　落合守平
札幌案内所（ツーリストビューロー）主任　小藤孝正

理事
定山溪鐵道株式會社支配人　岩永謙吾
北海道鐵道株式會社運輸課長　岸本定士
札幌旅館商業組合理事長　佐々木徳三郎
札幌旅館組合長　服部熊一
定山溪旅館組合長　金川彌吉
狸小路聯合會々長　松内保太郎
定山溪振興會副會長　松崎亀二
札幌スキー工業組合理事長　佐久間安春
札幌スキー聯盟主席幹事　廣田戸七郎
札幌スケート協會常任幹事　有坂織之助
札幌酒造組合長　柴田衛治
札幌名産品組合長　富樫長吉
札幌菓子商組合長　坂井幸藏
札幌實業組合聯合會副會長　小笠原楠彌
札幌料理屋組合長　齋藤源藏
札幌飲食店組合長　安田榮次郎
藝妓置屋組合長　須藤九平
札幌カフェー自治組合長　山本勝治
札幌商工會議所理事　吉田寧
同　調査課長　矢崎卓之助
札幌市電気局長　太田駒雄
札幌市電気局運輸課長　笹繁
同　庶務課長　和武雄
札幌市土木課長　津田安治郎
同　庶務課長　平佐武美
同　商工主任　桑原清起
札幌市嘱託　近藤直人

書記
札幌鐵道局書記　松本譲
札幌商工會議所書記　菊地忠義
札幌市書記　田中奥三郎
同　書記　小島國平
同　書記補　和田泰麿
同　技手　中村誠一

嘱託
札幌鐵道局書記　向幸次郎
亀井道子

四、会員名簿（設立時）

■交通業者及運送業者

名譽　定山溪鐵道株式會社　豊平
特二　北海道鐵道株式會社　白石村
名譽　札幌市電気局　南二西一一
特三　北海道自動車協會札幌支部　北二西五
特三　札幌駅特置自動車合資會社　北五西五
特三　札幌観江バス株式會社　北七東一
特四　札幌観光自動車合資會社　北五西六
正　札幌自動車合資會社　豊平三ノ八
特一　札幌運送社　北四西二

■札幌旅館（イロハ順）

特四　㋑岩手屋　北一西三
特四　㊐石川屋　北四西四
特四　北門館　北四西五
正　北海館　北四西四
特三　㊥加賀屋　北四西三
特四　中村屋　北三西三
特一　グランドホテル　北一西四
特二　㎡山形屋　北二西四
特三　㊙佐々木旅館　北一西三
正　松屋　北四西三
正　㊐岩崎旅館　北一西四
特四　中屋　北四西四
特四　阿部旅館　北一西五
正　㊤美和屋　北二西三
正　宮越屋　北二西三
特三　㊥敷島屋　北二西三
正　信陽館ホテル　北三西三
特四　静岡屋　北四西四

■定山溪温泉旅館（イロハ順）

特三　定山溪ホテル
特三　鹿の湯クラブ
特三　章月旅館
特四　定山園

■定山溪料理店

正　章月

■軽川瀧ノ澤温泉

特四　瀧ノ澤温泉

■百貨店（イロハ順）

名譽　㊝三越　南一西三
名譽　㊐今井　南一西二
特一　五番館　北四西三

■菓子舗（イロハ順）

特四　北譽豆製造所　南五西七
特四　大黒屋　南大通西三
正　多満屋　南一西四
正　松島屋　北五西一二
特一　株式會社古谷商店製菓工場　北六東一一
正　旭豆本舗　南二西三
正　愛信堂　南一西四
特四　三八菓子舗　南四西三
特四　千秋庵　南三西三

■乳肉製品販賣店（イロハ順）

特　一　北海道製酪販賣組合聯合會　苗穂町

特　一　明治製菓札幌賣店　南三西三

■果實賣店（イロハ順）

正　石田屋　北三西三

正　百留屋　南二西二

■ビール、清酒（イロハ順）

名　譽　大日本麦酒株式會社札幌支店　北二東四

特　一　㋮　西尾商店　南三東三

特　一　日本清酒株式會社　南三東五

■木工品（イロハ順）

特　四　北海みやけ　北大通西四

正　北海工藝講習所　南一東六

■海産物（イロハ順）

特　四　北海物産　南二西四

特　三　長冨樫商店　南二西一

特　四　州山形屋　北二西三

■写真館（イロハ順）

正　武林写真館　北一西七

正　青木写真館　南一西一

正　阿部写真館　南大通西二

正　三春写真館　南二西三

正　下野写真館　南五西六

正　森田写真館　南六西四

■カメラと薬局（イロハ順）

正　一條薬局　南一西四

正　一の中央薬局　南一西四

正　大西薬局　南二西四

■印刷所（イロハ順）

特　四　中西印刷所　南大通西五

正　山浦印刷所　北一西三

■其他（イロハ順）

特　一　北海道特殊鑄造工場　雁來町

特　四　吉田毛皮店　南四東五

正　第二フタバ　南四西九

正　谷口農場　北三東七

特　三　松内衣装店　南二西三

正　松井花園　南八西三

特　三　富貴堂　南一西三

正　札幌工業振興會　札幌市役所内

正　札幌種苗園　南一四西一四

特　三　赤塚洋服店　南三西三

■團体

特　二　札幌競馬倶楽部　北五西一二

特　一　札幌駅構内立賣營業組合　札幌駅

特　三　札幌スキー工業組合　豊平七ノ七

正　札幌スキー聯盟　北大

特　三　札幌護謨工業組合　北一東二

特　三　札幌市物産協會　札幌市役所内

正　札幌信用組合　南二西三

特　四　札幌養狐業組合　南二二西七

正　札幌菓子商組合　北四西六

特　三　札幌小賣組合同盟會　南一西五

特　四　札幌小賣市場協會　豊平五ノ二

正　札幌鱗卸賣市場　南四西一
特四　札幌市聯合見番　南四西四
正　札幌藝妓置屋組合　南六西五
特二　札幌カフェー自治組合　南六西五
正　札幌飲食店組合　南二西三
正　札幌麺業組合　北三西三
特一　狸小路聯合會　南二西三

■料理店及飲食店（イロハ順）

特二　いく代　南三西四
特三　東京庵　南二西四
特四　辰巳　南四西三
正　豊平館（西洋料理）　大通西一
正　ときわ（肉鍋専門）　南大通西三
特三　北野家（料理及仕出）　南二西五

■娯楽場（イロハ順）

特四　日活館　南二西五
正　宝榮座　南五西二
特四　松竹座　南四西三

■カフエー及喫茶（イロハ順）

正　白亜荘　南三西三
正　凡　南1西七
正　お坊ちゃん　南三西四
正　開陽　南三西三
特四　太陽　南四西三
正　燕　南三西五
正　国勢　南三西三
特四　ヱルム　南四西三
特四　サロン三越　南六西五
正　サロン原始林　南三西三
正　サロンガルボ　南三西三
賛　サロンX　南三西五
特四　キシン　南三西四
正　銀嶺　南三西三
正　金の星　南三西五
正　北の誉　南五西三
特四　ミミー　南五西五
正　マリモ　南四西三
正　姿　南四西四

五、札幌観光協会昭和十一年度収入支出予算

収入

科目		豫算額	種目	本年度豫算額	附記
一、會費		四、六〇〇円		四、六〇〇円	
	一、會費	四、六〇〇	一、會費	四、六〇〇	
二、補助金		一、三〇〇		一、三〇〇	
	一、補助金	一、三〇〇	一、補助金	一、三〇〇	札幌市補助一〇〇〇圓 札幌商工會議所補助三〇〇圓
三、寄附金		二〇〇		二〇〇	
	一、寄附金	二〇〇	一、寄附金	二〇〇	
四、廣告料		三〇〇		三〇〇	
	一、廣告料	三〇〇	一、廣告料	三〇〇	
五、雜收入		三〇		三〇	
	一、雜收入	三〇	一、雜收入	三〇	
合計		六、四三〇		六、四三〇	

支出

科目		豫算額	種目	本年度豫算額	附記
一、事務費		二、七三〇円		二、七三〇円	
	一、給料	一、二六五	一、書記給料	一、二六五	六五圓一人、五〇圓一人十一ケ月分
	二、雜給	八一三		八一三	
			一、手當	一三〇	時間外勤務手當
			二、旅費	三〇〇	
三、需用費		六三二			
	一、備品費	一六八	器具新調費		
	二、消耗品費	一八〇	諸用紙其ノ他消耗品費		
	三、通信運搬費	一一八	電話使用料六七圓五〇 通信運搬費五〇圓		
	四、點燈料	三六	電燈料		
	五、被服費	八〇	案内人被服費		
	六、雜費	五〇			
四、賞與		三五〇	延三〇人 一人一一〇錢		
三、備人料		三三			
二、會議費		五五〇			
	一、會議費	五五〇			
三、事業費		二、一六〇			
	一、總會費	五五〇			
	二、評議員會費	四五〇			
	三、理事及部會費	五〇			
一、講習講話懇談會費		一六〇			
	一、講習會費	一六〇			
	二、講話及懇談會費	一〇〇			
二、調査費		二〇〇			
	一、調査費	二〇〇			
三、印刷費		一、五〇〇			
	一、印刷費	一、五〇〇			
四、接待費		三〇〇			
	一、接待費	三〇〇			
四、建築費		八一〇			
一、建設費及設備費		八一〇			
	一、案内所建設費	一六〇	案内所新設費		
	二、設備費	六五〇	案内板二〇〇圓(二)標地杭一〇〇圓(二〇本)告知板三〇圓希望箱三圓(二〇ケ)電話架設二九〇圓(一)		
五、豫備費		二〇〇			
一、豫備費		二〇〇			
	一、豫備費	二〇〇			
合計		六、四三〇			

六、役職員名簿（昭和31年5月1日現在）

会長　札幌市長　高田富与

副会長　札幌商工会議所会頭　広瀬経一

今井百貨店社長　今井道雄

札幌旅館組合長　佐々木徳三郎

専務理事　山形屋社長　大竹敬太郎

札幌市経済部長　石林清

常任理事　株式会社電通支配人　吾郷幹夫

今井百貨店副支配人　佐藤林松

株式会社岩泉社長　岩泉正次郎

株式会社三八社長　小林彌三治

北海道新聞社事業部長　松谷富士麿

北海タイムス社文化部長　五十嵐久一

北海道料飲連盟専務理事　瓶子彦三郎

札幌市経済部次長　白石康平

札幌市商工課長　石田英夫

理事　三越百貨店札幌支店

雪印乳業株式会社

日本ビール札幌支店

古谷製菓株成会社

定山渓鉄道株成会社

北海道中央バス札幌支店

北海道拓殖銀行

ステーションデパート協同組合

北海道バター株式会社

五番館

株式会社宮越屋

札幌商工会議所専務理事

松源旅館

中西写真製版印刷株式会社

岩橋印刷株式会社

金星タクシー株式会社

フタバ堂総本店

監事　北海道銀行

〃　旅館

職員　札幌観光協会事務局長　石田英夫

事務局主事　宮城真琴

〃　三谷英晃

嘱託　札幌市観光係長　本間尚

北海道観光連盟会長　田中敏文

顧問　北海道大学長　杉野目晴貞

札幌営林局長　安岡博

札幌営林署長　目黒宗一

札幌陸運局長　杉田幸二

札幌鉄道管理局　公文広嗣

国有鉄道北海道支社長　今井四郎

札幌駅長　松田政治

札幌中央放送局長　長沢泰治

札幌スキー連盟会長（札医大内）　大野精七

札幌市議会議長　齋藤忠雄

日本交通公社北海道支社長　浜田義夫

定山渓観光協会長　小須田潤治

小樽観光協会長（商工会議所）　安達与五郎

豊平町長　本間義孝

石狩町長　飯尾円什

千歳観光協会長　山崎友吉

七、会員名簿（昭和31年5月1日現在）

(1) 交通運輸関係

日本交通公社札幌案内所	北三西三
株式会社北海道観光旅行会	北四西三
北海道中央バス株式会社札幌支店	北西西三
定山溪鉄道株式会社	豊平三の九
北海道交通株式会社	北四西三
金星自動車株式会社	南六西六
ヒラガ自動車株式会社	南四西三
北都ハイヤー株式会社	南四西六
帝産自動車株式会社	南五西一
大和交通株式会社	南七西三
北海道いすゞ自動車販売株式会社	豊平三の10
北海道鉄道荷物株式会社駅前営業所	北五西四

(2) 旅館、ホテル関係

旅館山形屋	北一西十四
旅館　丸惣	北一西三
阿部旅館	北一西五
旅館宮越屋	北二西三
すみれ旅館	北四西三
同　別館	北一西二
旅館北門館	北四西五
〇　旅館	南三西一
旅館札幌館	南七西一
(新)　旅館	南一西四
同　別館	南一西四
中村屋旅館	北三西三
南部屋旅館	北四西五
第一ホテル	北大通西十
薩摩屋旅館	北二西三
富士屋旅館	北三西三
藤島屋旅館	北四西五
越中屋旅館	北四西四
辰美旅館	北二西三
銀嶺荘	南十西一
津多屋旅館	南二西一
三条屋旅館	北三西三
(辰)　旅館	南三西一
旅館大刀館	北一西八
山本旅館	北十三西四
オサムラ旅館	北十二西四
正　旅館	南三東一
やまと旅館	南三西一
保坂屋旅館	北一西八
松喜旅館	菊水西八
東伯旅館	菊水西九
同　支店	菊水西九
札幌旅館組合	北一西一
グランドホテル	北一西四

(3) デパート、商店関係

(井)今井	南一西二
五番館	北四西三
三越札幌支店	南一西三

ステーションデパート　北五西四
金市館　南二西二
富貴堂　南一西三
藤井商店　南一西三
越山商店　北二西三
カナリヤ洋装店　南一西二
金野フトン店　南三西五
小原商店　南二西四
新日本物産館　北三西三
但馬屋　北三西三
西越商店　北三西三
唐金商店　大通西十八
岩井靴店　南一西二
加藤物産商会　北四西四
北宝商会　南二西三
グラフ商会　南一西四
田上光映堂　大通西四
名取写真巧芸社　北三西二
大西薬局　南二西四
関谷大学堂　南一西三
松吉商店札幌支店　北三西三
鉄道弘済会札幌支部　北二西二

(4) 工業、生産関係

雪印乳業株式会社　苗穂三六
クロバー乳業株式会社　北三西一
日本麦酒札幌支店　北三西四
日本清酒株式会社　南三東五
北の誉酒造株式会社　南三東三
中川酒造株式会社　南十四西九
札幌酒精工業株式会社　琴似町発寒
大同酒造株式会社　北三西二五
福山醸造株式会社　苗穂三七
帝国製麻札幌支店　北七東二
北光油脂化学工業所　琴似町八軒
札幌酪農牛乳株式会社　北一西一
北海木芸社　南一東六
寺尾スキー製作所　南三東四
富士写真フィルム札幌支店　大通西五

(5) 製菓関係

古谷製菓株式会社　北六東十一
森永製菓北海道駐在所　北一西二
明治商事札幌支店　南三西三
株式会社　三八　南一西十二
千秋庵製菓株式会社　南三西三
西村食品工業株式会社　北四西四
北誉製菓株式会社　北十五西四
株式会社　ロバパン　北三東四
花月堂札幌支店　南三西四
株式会社　壺屋　南一西四
協和製菓株式会社　北六西九
三印猪俣製菓株式会社　北二東十二
八千代堂　南九西十五
大黒屋　南九西十
長栄堂　南四西五

一炉庵　南一西十二
多満屋　大通西二五
松島屋　南四西二
愛信堂　南六西五
旭製菓株式会社　北四東二
塚本食糧興業株式会社　大通東十

(6) 飲食、料理関係

松源　南三西四
西の宮　南十西三
辰巳　南五西四
叶家支店　北二西二
ときわ　大通西三
精養軒　南一西三
呑んで食う家　南三西三
白ばら　南三西六
パーラ石田屋　北三西三
ニューサッポロ　北一西二

(7) 報道、印刷、広告関係

北海道新聞社　大通西二
北海タイムス社　大通西四
株式会社電通支社　北三西四
岩泉株式会社　南一西四
中西写真製版印刷株式会社　南一東四
山藤印刷株式会社　南二西六
興文社印刷株式会社　南八西八
岩橋印刷株式会社　大通西九
文栄堂印刷株式会社　北三東七
其水堂金井印刷株式会社　南二西五
北海石版所　南一西十五
三浦印刷株式会社　南九西六
フタバ堂総本店　南四西九
六書堂　北一西二
六八工芸社　南四西二
クラブ工芸社　南三西五
新光堂商会　南三西十
フタバ堂　北二西三
創芸社　南十四西八
三筆工芸社　北二東十

(8) 銀行、金庫関係

北海道拓殖銀行　大通西三
北海道銀行　南二西二
北洋相互銀行　大通西二
第一銀行札幌支店　大通西三
北陸銀行札幌支店　南一西三
富士銀行札幌支店　南一西三
日本興業銀行札幌支店　北一西五
住友銀行札幌支店　南一西四
協和銀行札幌支店　北一西四
三菱銀行札幌支店　南一西二
東京銀行札幌支店　南一西二
三和銀行札幌支店　北一西二
日本勧業銀行札幌支店　南一西三
三井銀行札幌支店　北一西四
大和銀行札幌支店　北一西三

秋田銀行札幌支店　大通西四
安田信託銀行札幌支店　大通西三
三菱信託銀行札幌支店　大通西三
三井信託銀行札幌支店　北三西四

(9) その他関係

札幌市　北一西四
札幌商工会議所　北一西四
札幌貿易協会　北一西四
札幌映画協会　南一西二
県市連絡協議会　大通東二
狸小路商店街協同組合　南二西四
日本中央競馬会札幌競馬場　北十四西一九
北海道料飲連盟　南三西六
北海道料飲納税協力会　南三西六
札幌食品衛生組合　南三西六
北海道割烹業組合連合会　南三西四
札幌割烹料理店組合　南三西四

(10) 名誉会員

近藤直人(前観光協会事務局長)　南十三西一四

八、札幌観光協会定款（現在）

第一章　総　則

（名　称）

第一条　本会は、社団法人札幌観光協会という。

（事務所）

第二条　本会は、事務所を札幌市に置く。

（目　的）

第三条　本会は、札幌市における、観光資源の開発と紹介宣伝、観光施設の整備改善、観光関係者の資質の向上等に努めることにより観光事業の健全な振興を図り、もって、観光旅行者の利便の増進、観光旅行の容易化、安全の確保及び市民生活の向上、繁栄に寄与することを目的とする。

（事　業）

第四条　本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

(1) 観光宣伝と観光客誘致促進
(2) 観光施設の整備、改善の促進
(3) 接遇の改善
(4) 観光関係者の資質の向上
(5) 郷土文化の育成
(6) 観光土産品の改善指導及び紹介宣伝
(7) 観光意識の普及向上
(8) 観光資源の保護及び活用の促進
(9) 美化運動の実施
(10) 観光事業の調査研究
(11) 観光関係情報の収集及び提供
(12) 観光関係諸機関との連絡
(13) その他本会の目的を達成するために必要な事業

第二章　会　員

（会員の種別等）

第五条　本会の会員は次のとおりとする。

(1) 正会員　観光関係団体、公共団体その他本会の趣旨に賛同するもの
(2) 名誉会員　本会に功労あるもの、または学識経験者であって会長が推せんし、理事会の承認を得たもの
(3) 賛助会員　本会の趣旨に賛同し賛助会費を負担するもの

（入　会）

第六条　本会の会員になろうとするものは、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を得なければならない。

（会費の納入等）

第七条　会員は総会において別に定めるところにより会費を納めなければならない。既納の会費及び会員としての義務に基づく金品は、これを返還しないものとする。

（資格の喪失）

第八条　会員は次の各号の一に該当するときは、その資格を失う。

(1)　死亡したとき

(2)　脱退したとき

(3)　除名されたとき

(4)　本会が解散したとき

（脱　退）

第九条　会員が脱退しようとするときは、脱退届を会長に提出しなければならない。

（除　名）

第十条　会員が次の各号の一に該当するときは、総会の決議によって除名することができる。

(1)　本会の名誉を汚し又は信用を失なうような行為があったとき

(2)　定款又は総会の決議を無視する行為があったとき

(3)　著しく会費を滞納したとき

（権利の喪失）

第十一条　脱退した者又は除名された者は会員としての一切の権利を失ないすでに納付した会費その他本会の資産に対する請求はできない。

第三章　役　員　等

（役　員）

第十二条　本会に次の役員を置く。

(1)　会　長　一名

(2)　副会長　七名以内

(3)　専務理事　一名

(4)　理　事　四〇名以内（会長、副会長及び専務理事を含む）

(5)　監　事　二名以内

（役員の選任）

第十三条　理事及び監事は総会において正会員のうちから選任する。ただし総会で必要と認めたときは会員以外から理事を若干名選任することができる。

二、会長、副会長、専務理事は理事の互選とする。

（役員の職務）

第十四条　会長は本会を代表し会務を総理する。

二、副会長は会長を補佐し会長に事故あるとき又は欠けたときは、会長があらかじめ定めた順位に従いその職務を代行する。

三、専務理事は会長及び副会長を補佐して本会の会務を処理し会長及び副会長に事故あるとき又は欠けたときはその職務を代行する。

四、理事は理事会を組織して会務を執行する。

五、監事は民法第五九条に定める職務を行う。

（役員の任期）

第十五条　役員の任期は二年とする。ただし再任を妨げない。

二、補欠により就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。

三、役員は任期満了後でも後任者が就任するまではなおその職務を行うものとする。

（役員の解任）

第十六条　役員が次の各号の一に該当するときは総会においてその役員を解任することができる。

(1)　心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき

(2)　職務上の義務違反その他役員たるにふさわしくない行為があると認められるとき

（役員の報酬）

第十七条　役員はすべて名誉職とする。ただし常勤の役員は有給とすることができる。

二、常勤の役員の報酬は理事会の議決を得て会長が定める。

（顧問、相談役及び参与）

第十八条　本会に、顧問、相談役及び参与を若干名置くことができる。

二、顧問及び相談役は理事会の議を得て学識経験者のうちから会長が委嘱する。

三、参与は理事会の議を得て関係各官公庁の職員及び学識経験者の中から会長が委嘱する。

四、顧問、相談役は会長の諮問に応じ意見を述べ又は会議に出席して意見を述べることができる。

五、参与は本会の重要会務に参画して意見を述べることができる。

第四章　会　議

（種　別）

第十九条　会議は総会及び理事会とする。

二、会議は会長が招集する。

三、総会の議長は総会において出席会員のうちから選出する。

四、理事会の議長は会長がこれにあたる。

（総　会）

第二十条　総会は通常総会及び臨時総会とする。

二、通常総会は毎事業年度終了後二カ月以内に招集する。

三、臨時総会は会長が必要と認めたとき招集する。

四、会長は正会員総数の三分の一以上から又は監事から会議の目的である事項を示して臨時総会の請求があったときはその請求のあった日から十日以内に招集しなければならない。

（総会の招集通知）

第二十一条　総会の招集は、会議の目的である事項、日時及び場所を示した書面により開催日の七日前までに会員に通知しなければならない。

（総会の議決事項）

第二十二条　総会はこの定款に別に定めるものの

ほか、次の事項を審議決定する。

(1) 毎年度の事業計画及び収支予算

(2) 前年度の事業報告及び収支決算

(3) 前各号のほか会長が必要と認めた重要事項

(総会の議決権及び定足数等)

第二十三条　会員はそれぞれ一個の議決権を有する。ただし名誉会員及び賛助会員は議決権を有しない。

二、総会は正会員総数の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

三、総会の議事はこの定款に別に定めるもののほか出席した正会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(議決権の代理行使)

第二十四条　総会に出席できない会員はあらかじめ通知された事項について書面をもって表決し又は他の会員に議決権の行使を委任することができる。この場合にはその会員は出席したものとみなす。

(議事録)

第二十五条　総会の議事については議事録を作成しなければならない。

二、議事録は議長が作成し次の事項を記載し、議長及び議長が指名した出席正会員二名以上がこれに署名押印するものとする。

(1) 会議の目的である事項、日時及び場所

(2) 会員数及び出席者数

(3) 議事の経過の概要及びその結果

三、前項の議事録は事務所に備え付けて置かなければならない。

(理事会)

第二十六条　理事会は理事をもって構成し、会長が必要と認めたとき招集する。

(理事会の議決事項)

第二十七条　理事会はこの定款に別に定めるもののほか次の事項を審議決定する。

(1) 総会の議決した事項の執行

(2) 総会に附議すべき事項

(3) その他総会の議決を要しない会務の執行

(規定の準用)

第二十八条　第二十三条から第二十五条までの規定は理事会に準用する。

第五章　専門委員会

(専門委員会)

第二十九条　会長は本会の事業の円滑な運営を図るため必要と認めるときは理事会の議決を得て専門委員会を置くことができる。

二、専門委員会に関する必要な事項は、理事会の議決を得て会長が別に定める。

第六章　事務局

(事務局)

第三十条　本会に事務局を置く。

二、事務局に関する規定は理事会の議決を得て会長が別に定める。

第七章　資産及び会計

（事業年度）

第三十一条　本会の事業年度は毎年四月一日から翌年三月三十一日までとする。

（資産の構成）

第三十二条　本会の資産は会費、事業収入及びその他の収入から成るものとする。

（資産の運用、管理）

第三十三条　本会の資産の運用及び管理については会長がこれにあたる。

（経費の支弁）

第三十四条　本会の経費は資産をもって支弁する。

（会計書類等）

第三十五条　会長は毎事業年度終了とともに次の書類を作成し、通常総会開催の十五日前までに監事に提出してその監査を受けなければならない。

(1)　事業報告書

(2)　収支に関する予算及び決算書類

(3)　財産目録

二、監事は前項の書類を受理したときは、これを監査し監査報告書を作成して総会に提出しなければならない。

三、会長は前項の書類及び報告書について総会の承認を得た後これを事務所に備え付けて置かなければならない。

第八章　定款の変更及び解散

（定款の変更）

第三十六条　本定款は総会において出席正会員の四分の三以上の議決を得、かつ札幌陸運局長の認可を受けなければ変更することができない。

（解　散）

第三十七条　本会は民法第六十八条第一項第二号から第四号まで、及び第二項の規定により解散する。

二、本会は総会において出席会員の四分の三以上の議決を得なければ解散することができない。

（残余財産の処分）

第三十八条　本会の解散にともなう残余財産の処分は総会において出席会員の四分の三以上の議決を得、かつ札幌陸運局長の許可を受けて本会と類似の目的をもつ団体に寄付するものとする。

第九章　雑　則

（細　則）

第三十九条　この定款に定めるもののほか本会の事業の運営上必要な細則は理事会の議決を得て会長が別に定める。

九、社団法人札幌観光協会役員名簿（昭和61年6月1日現在）

会長	今井道雄	丸井今井代表取締役社長
副会長	薩一夫	財界さっぽろ会長
〃	杉野重雄	札幌商工会議所・経済政策委員会委員長
〃	杉岡幸三郎	協同組合日専連札幌会理事長
〃	萩原次郎	三井観光開発取締役社長
〃	高橋松吉	札幌物産協会会長
〃	長谷信一	札幌乗用自動車協会会長
〃	小平博	札幌旅館協同組合理事長
専務理事	松本克士	専任
常務理事	津田光夫	専任
常任理事	若林ヤタロオ	日本航空札幌支店支店長
〃	井上龍吾	全日本空輸札幌支店取締役支店長
〃	高木正博	東亜国内航空札幌支店支店長
〃	鈴木秀明	丸井今井専務取締役
〃	大明達司	三越札幌店店長
〃	細田實	五番舘代表取締役社長
〃	重森直樹	札幌ターミナルビル代表取締役専務
〃	足羽収六	北海道観光事業取締役社長
〃	上田雅裕	日本交通公社札幌支店支店長
〃	来原正	日本旅行北海道営業本部本部長
〃	澤舘兼一	札幌グランドホテル取締役支配人
〃	稲岡七朗	札幌全日空ホテル常務取締役
〃	中島敏男	すみれホテル代表取締役社長
〃	安田雄二郎	サッポロビール札幌支店取締役支店長
〃	新谷義夫	北海道コカ・コーラボトリング常務取締役

〃	大場　実	北海道酒類販売常務取締役
〃	高橋英雄	札幌商工会議所常務理事
〃	後藤昌敏	ニッカウヰスキー北海道支店支店長
〃	平瀬周一	電通北海道支社支社長
〃	井上俊彌	北海道観光物産興社代表取締役
〃	鈴木伊佐夫	札幌地下街商店会理事長
〃	小森庄一	じょうてつ取締役社長
〃	峯廻幸夫	北海道中央バス常務取締役札幌支社長
〃	西　巌	札幌乗用自動車協会常務理事
〃	高田哲夫	雪印乳業取締役副社長北海道支社長
〃	金子寛	北海道電力取締役道央支店長
〃	石水　勲	石屋製菓代表取締役
〃	斎藤鶴雄	北海道観光社交事業協会札幌支部支部長
〃	久末聖治	北海道振興取締役社長
〃	海老江晃男	すすきの観光協会副会長
監事	三輪正輝	栄輪建物代表取締役
〃	美勢　薫	札幌リゾート開発公社代表取締役専務
理事	平瀬徹也	札幌振興公社社長
〃	小林定弥	日本国有鉄道北海道総局営業部旅客課長
〃	原田知良	札幌工芸品協会会長
〃	小山内信一	札幌パークホテル取締役支配人
〃	中川正道	札幌国際ホテル常務取締役総支配人
〃	坂井一郎	札幌プリンスホテル総支配人
〃	矢野義雄	札幌東急ホテル取締役総支配人
〃	関　光策	ホテルアルファ代表取締役
〃	中山博道	冨士屋ホテル代表取締役
〃	米澤一俊	札幌第一ホテル代表取締役専務

〃　村田有郷　ホテル札幌會舘代表取締役社長
〃　氏家甫　日本交通公社海外旅行札幌支店支店長
〃　西義信　近畿日本ツーリスト北海道営業本部長
〃　遠山英雄　北都交通常務取締役
〃　小林平八　三八取締役社長
〃　岡部卓司　千秋庵製菓取締役社長
〃　猪俣松三　札幌製菓代表取締役社長
〃　加藤元道　札幌そごう専務取締役店長
〃　亀山博光　北海道ダイエー代表取締役専務
〃　佐野仁　協同組合北海専門店会理事長
〃　神坂義明　北酒連取締役販売促進部長
〃　中田繁　サントリー札幌支店支店長
〃　門彌八郎　北の誉酒造代表取締役社長
〃　三浦弘　日本清酒取締役社長
〃　田淵勉　富士写真フィルム札幌営業所所長
〃　長谷川義一　札幌レストラン協会理事長
〃　中山康雄　特急印刷社長
〃　菊地日出男　ドリーム・フード社長
〃　阿部香作　北海道新聞社事業局長
〃　大宮次雄　北海タイムス社事業局長
〃　日下部弘明　北海道放送取締役事業局長
〃　伊坂重孝　札幌テレビ放送代表取締役副社長
〃　永渕修　北海道テレビ放送取締役業務局長
〃　渡辺寿　北海道文化放送営業局長
〃　岩泉正次郎　広告の岩泉代表取締役社長
〃　酒井清治　協同広告社会長
〃　野島和夫　北海道拓殖銀行業務開発部長
〃　辻正一　北海道銀行業務企画部長
〃　舞田博二　札幌中央アーバン専務取締役

十、社団法人札幌観光協会会員名簿（昭和61年6月1日現在）

1 交通観光事業関係

日本交通公社札幌支店	中央区北三西四	日生ビル
日本交通公社海外旅行札幌支店	中央区北三西三	大同生命ビル
北海道観光事業	中央区大通西一	
日本旅行北海道営業本部	中央区南一西四	
日本交通観光社北海道支社	中央区北四西二	コーヨー第三ビル
名鉄観光サービス札幌営業所	中央区北四西二	石垣ビル
東急観光札幌営業所	中央区北一西二	平和生命ビル
近畿日本ツーリスト北海道営業本部	中央区北四西三	北洋駅前ビル
京王観光北海道支店札幌営業所	中央区北四西四	伊藤加藤ビル
東武トラベル	中央区北四西七	札幌ホワイトビル
朝日トラベルエージェンシー札幌営業所	中央区南二西四	ダイエー札幌店内
札幌ツーリスト	中央区北一西二	札幌時計台ビル
いこいの旅北日本ツーリスト	中央区南一東一	日本生命ビル
日本航空札幌支店	中央区北二西四	三井ビル
全日本空輸札幌支店	中央区北四西四	伊藤加藤ビル
東亜国内航空札幌支店	中央区北二西四	三井ビル別館
日本近距離航空札幌支店	東区丘珠町	丘珠空港内
北海道航空	東区丘珠町	札幌空港内
日本通運札幌航空支店	中央区北一西四	東邦生命ビル
札幌通運	中央区北五西六	
北海道中央バス札幌支社	中央区大通東一	
じょうてつ	豊平区豊平四条九丁目	
札幌観光バス	豊平区里塚四五三の一	
北都交通トラベルサービス	豊平区月寒中央通十一丁目	

銀・嶺バス	西区曙二条四丁目四の六五
夕張鉄道札幌貸切サービスセンター	白石区菊水九条三丁目
道南バス札幌営業所	白石区菊水三条二丁目一の二三
時計台バス	白石区南郷通二十一丁目南三の一
東日本フェリー札幌本社	中央区南四西十一　ツタイビル
札幌乗用自動車協会	中央区南八西十五
金星自動車	豊平区北野一条一丁目九―一
北海道交通	豊平区平岸二条十六丁目
ダイコク交通	東区北三十三東一
第一小型ハイヤー	東区北二十四東十八
つばめ自動車	豊平区水車町三丁目五番二六号
明星自動車	南区南三十四西十一
昭和交通	東区東雁来五条一丁目四番一五号
まこと交通	白石区東札幌一条四丁目六の一九
光星ハイヤー	中央区北一西二十一
札幌個人タクシーエース会	中央区北三西四　日生ビル
すずらん観光	白石区中央二条三丁目九の四
トヨタレンタリース札幌	中央区北五東二
日産観光サービス北海道営業部	北区北七西四　東カンビル
北海道いすゞ自動車	中央区宮の森二条一丁目二―五五
新北海道三菱自動車レンタカー部	中央区南十西十
日産ディーゼル北海道販売	白石区厚別中央二条二丁目一―一
みずほ観光	西区富丘四条五丁目　大野繁雄方
ティネオリンピア	中央区北二西四　道ビル
定山渓高原観光	南区定山渓高原番外地
丸美観光ペケレット湖園営業所	北区篠路町篠路四二五
ふじの公園	南区藤野四条十丁目二五九番地

北海道林友観光　東区北九東二
ばんけい観光　中央区北一西三　札幌中央ビル
登別温泉ケーブル札幌支社　中央区北四西四　加森ビル
ハイジ牧場　夕張郡長沼町東九南二
交通公社トラベランド興業北海道事業部　中央区北三西四　日生ビル
中央旅行サービス　中央区大通東一　中央バスターミナルビル
日本交通事業社札幌支店　中央区北三西四　日生ビル
阪急交通社札幌営業所　中央区北四西五　林業会館
ジャパンデーターサービス　中央区北二西十四　白熊ビル
サッポロガイド　中央区南十四西六
北海ダイヤ観光　北区北二十四西五
札幌観光幌馬車　中央区南十四西九
札幌藤の沢すずらんゴルフ場　中央区南七西二　クボタビル
道央興発（ツキサップゴルフクラブ）　中央区北四西四　札幌日興ビル
島松ゴルフ場　中央区北二西四　道ビル
高雄観光　中央区北二西三　敷島ビル
個人タクシー・一一五会　豊平区美園七の三の四の二二
三ツ輪観光ライラック　東区北五十一東二
朝日交通　西区二十四軒四の一
ひがし北海道観光バス手配センター札幌事務所　北区北七西四　東カン札幌駅前ビル
ヤナセ札幌支店　中央区北二西二の一六
北海道ユニオンインターナショナル　中央区北二西三の一　正門館ビル
札幌トヨタ自動車　中央区北一西七

2　ホテル・旅館関係

札幌旅館協同組合　中央区北一西十
三井観光開発札幌グランドホテル　中央区北一西四
三井観光開発札幌パークホテル　中央区南十西三

札幌ローヤルホテル	中央区南七東一
センチュリーローヤルホテル	中央区北五西五
札幌国際ホテル	中央区北四西四
札幌プリンスホテル	中央区南二西十一
札幌全日空ホテル	中央区北三西一
札幌東急ホテル	中央区北四西四
ホテルアルファ	中央区南一西五
京王プラザホテル札幌	中央区北五西七
ホテルニューオータニ札幌	中央区北二西一
フジヤサンタスホテル	中央区北三西七
札幌東急イン	中央区南四西五
ホテル丸惣	中央区北一西三　第百生命ビル
すみれホテル	中央区北一西二
札幌第一ホテル	中央区大通西十
大刀館	中央区北一西八
中村屋旅館	中央区北三西七
ホテル札幌會舘	北区北十七西四
ホテル北十条	北区北十西一
ホテルゑびすや	北区北十二西四
大通公園ホテル	中央区大通西八
ホテルセンターパーク	中央区大通西八
ホテルリッチ札幌	中央区北一西三
札幌オリエンタルホテル	中央区南八西四
ふせ観光ホテル神宮閣	中央区南一西二十七
旅館おか本	中央区南八西三

十一屋ホテル　中央区北四西三
ホテル登方　中央区南五西七
都ホテル　中央区北四東二
Ⓢ札幌ステーションホテル　中央区北四西二
札幌不二ホテル　中央区南二西七
ホテルニューフロンティア　中央区北一西九
ホテルひぐま　中央区大通西十八
ホテルラインン　中央区南八西六
おさむら旅館　北区北十二西四
札幌ワシントンホテル　中央区北四西四
ホテルサンフラワー札幌　中央区南五西三
ビジネスホテルかねほん　中央区南九西三
マルシンホテル　中央区南一西四
チサンホテル札幌　中央区北一西二
ビジネスホテルトガワ　北区北二十五西五
桑園グリーンホテル　中央区北六西十四
ホテル近代　北区北二十西三
あけぼの旅館　北区北十三西四
水谷旅館　北区北十二西三
北栄館　北区北九西四
八重州ホテル　北区北七西三
八千代旅館　北区北七西五
兼正旅館　中央区南三東一
桑園旅館　中央区北四西十二
能登屋旅館　中央区南一西十六
泉屋別館　北区北七西六
ホテルリンカーン　中央区南六西二

ホテル牧	中央区南十三西七
参宮ホテル	中央区北大通西十五の二
中ノ殿ホテル	中央区南一西七
ホテルリバージュ札幌	中央区南八西三
水谷旅館別館	東区北十七東一
ホテルもなみ温泉	南区川沿九の一
鹿ノ湯グループ本社	中央区南二西二　札専会館
オークラホテル新潟札幌サービス・ステーション	中央区北三西四　日生ビル
近鉄・都ホテルチェーン札幌案内所	中央区北三西四　日生ビル
ホテル万世閣札幌案内所	中央区南一西五　郵政互助会札幌ビル
ニューー北海ホテル	中央区北一西九
札幌ホテルスタッセ	中央区南五西二
松浦旅館	北区北十三西三
千歳国際ホテル	千歳市本町四丁目四の四
オークホテル	中央区北三西二
ホテル法華クラブ札幌店	中央区北二西二
旅館幌南クラブ	中央区南二十西十三
太平ホテル北欧	中央区南一西九
インテリジェンスホテル ザ・ホテル札幌	中央区南八西三

3　製菓関係

三八	中央区南一西十二
千秋庵製菓	中央区南三西三
京田食品	南区石山二条三丁目一四―一
西村食品工業	西区八軒一条東二丁目
日糧製パン	豊平区月寒東一条十八丁目五―一
札幌製菓	中央区北二東十一
ニシムラ	中央区北四西四

壺屋　豊平区豊平五条五丁目
花月堂札幌支店　中央区北五西二十四
サザエ食品　中央区宮の森四の一の一の三五
石屋製菓　東区北九東三
松島屋　中央区北四西十四

4　デパート・商店関係

丸井今井　中央区南一西二
五番館　中央区北四西三
三越札幌店　中央区南一西三
札幌そごう　中央区北五西二
丸ヨ池内　中央区南一西二
長崎屋札幌店　中央区南一西一
金市館　中央区南二西二
北海道ダイエー　白石区厚別東二条二丁目三～一五
協同組合日専連札幌会　中央区南二西二　札専会館
協同組合北海専門店会　中央区南二西一　北専ビル
札幌信用販売　中央区南二西二
札幌市商店街振興組合連合会　中央区北一西二　経済センター
札幌狸小路商店街振興組合　中央区南二西二　札専会館
札幌四番街商店街振興組合　中央区南三西三　三信ビル
札幌地下街商店会　中央区南二西三　南拓銀ビル
北海道観光物産興社　中央区北一東十三
札幌民芸社　中央区北七西十九
松前屋　東区北二十一東一
青盤舎　中央区南七西四
北宝商会　中央区南二西三
加藤物産館　中央区北四西四

北海道物産センター札幌店	東区東苗穂一条三丁目五―二五
ハンズマン丸和	中央区南二西六
ハラダ	中央区北六西十八
後藤商事	中央区北二東十五
札幌テレビ塔観光みやげ品	中央区大通西一　テレビ塔
さっぽろ物産館	中央区南二西三　地下街ポールタウン
つばき	中央区南二西四　地下街ポールタウン
コウヤ	中央区北五西五　住友生命ビル
藤嶋羊商(肉の藤嶋)	中央区南二西六
北邦	中央区南二西三　サンビル
札幌メダル商会	中央区北一西三
山禮	中央区南一西七
グラフ商会札幌営業所	中央区南一西四
光映堂	中央区大通西四
北海道観光写真協会	東区北十三東五
北酒連	中央区南六西九
北海道酒類販売	中央区北三西二
フジキ食料品店	中央区北一西三
大丸藤井	白石区菊水三条一丁目
鉄道弘済会北海道支部	中央区北二西二
札幌駅立売商会	東区北八東二・一の五
小原商店	中央区南二西四　中心街ビル
中村商店	東区苗穂町四丁目四三番地
マリヤ手芸店	中央区北一西三
多加良屋	中央区北一東一
ブリヂストンスポーツ北海道販売	白石区菊水三条五丁目
北屋商店	中央区北一西三

地崎商事	中央区北二西三　敷島ビル
ぎょれん販売	中央区北十三西十九
泊水産	中央区南三東一
小熊商店	中央区南三東一
花の綱木商会	中央区南一西八
二条鈴木生花店	中央区南三東一
長谷川商店	中央区北五西二十八
渡辺商店札幌支店	東区北二十東一
丸亀	中央区北一西二十七
大高商店	中央区北四西七　北澱連ビル
マダムJ	中央区南二西三
明道香風園	中央区南八西二
稲村金物店	西区西野三の三の一の一
ベストサービス商事	中央区南一七西九　パークサイドコーポ
北王商事	豊平区中の島一条七丁目　京王もなみマンション一〇六号
北海道興産	中央区南十一西十七
札幌花の卸センター	白石区厚別町旭町四三二の二三四
愛衣裳店	中央区北五西十三
森田耀峰写真場	中央区南四西十五
やぶたに金物店	豊平区福住二条九丁目一五の一七
㈲中沢生花園	豊平区清田六条三丁目二の一
サンコー事務機	中央区大通東三　永工ビル

5　工業生産関係

雪印乳業北海道支社	東区苗穂町六丁目一の一
明治乳業北海道事業部	白石区東札幌一条三丁目五の四一
サッポロビール札幌支店	東区北七東九
北海道アサヒビール	白石区南郷通四の南一の一

キリンビール札幌支店	中央区北一西三　札幌東京海上ビル
ニッカウヰスキー北海道支店	中央区北二西四　道ビル
サントリー札幌支店	中央区北三西四　日生ビル
北の誉酒造	中央区南三東三
日本清酒	中央区南三東五の二番地
札幌酒精工業	西区発寒十の一の一
北海道コカ・コーラボトリング	豊平区清田一条一丁目二の一
北海道ペプシコーラボトリング	東区伏古十一条五丁目一―五〇
札幌ヤクルト	中央区大通西六　大通公園ビル
北海道キリンレモンサービス	豊平区平岸三条十二丁目一の三―三〇三
福山醸造	東区苗穂町二丁目三の一
キッコーマン札幌支店	中央区大通西四　道銀ビル十二階
今井醸造札幌支店	豊平区美園四の二の一の六
藤林食糧興業	白石区菊水八の一
東洋水産北海道事業部	西区手稲宮の沢四二一
北海道電力道央支店	中央区大通東一
大同電気工業	豊平区豊平五条八丁目七〇番地
北海道ガス	中央区北四東五
ほくさん	中央区北三西一
北海木工芸社	中央区南一東六
北日本民芸社	白石区中央二の五
富士写真フィルム札幌営業所	中央区北二西四　三井ビル別館
小西六写真工業札幌営業所	中央区北三西一　ナショナルビル
ユニ・フォト	中央区南一西九　藤枝ビル
地崎工業	中央区南四西七
丸彦渡辺建設	豊平区豊平六条六丁目三番一五号
北海道造園コンサルタント	中央区南二西十三　北海ビル

菊水	江別市工栄町一九番地六
種村配管工業	豊平区月寒中央通七丁目五番一一号
栗虫組	豊平区月寒西三の一〇
新生商事	西区二十四軒一の六　新生ビル
ヨコビ	中央区北二東二十
宝住メタル商会	東区北三十三東三
札幌地方石油業協同組合	豊平区平岸一の六　北海道石油会館
新北光石油	中央区南四東二
キング珈琲	白石区本通一七の北三の六五
北菱産業	中央区南一西四　大手町ビル
兜大友建設	西区山の手七の八
ミュージック・キャップ	中央区南九西三　彩木ビル
アド工房・東出	中央区宮の森四条十丁目九五
北海道堀川札幌営業所	中央区北十二西二十の三七　丸果ビル
伊藤塗工部	東区北十東十一
上島珈琲北海道支社	中央区北三西一
小林酒造札幌営業所	白石区南郷通十丁目南四の一五
鈴木イベントプロデュース	北区北二十四西六　チサンマンション三一

6　飲食料理関係

北海道観光社交事業協会	中央区南四西六　晴ばれビル
北海道観光社交事業協会札幌支部	中央区南四西六　晴ばれビル
札幌観光事業協会	中央区南六西一　ローズハイツ三〇二
経営者協会グリーンビル連合会	中央区南五西三　第四グリーンビル
雪印パーラー	中央区北三西三
石田屋商事	中央区北三西三
北海道産業観光	中央区北一西二　経済センター
はせ川観光	中央区南二西一　安藤ビル

日本食堂北海道支部	中央区北四西二　コーヨー第三ビル
海老江観光開発	中央区伏見二丁目四の一一
大丸物産	中央区南二西二　札専会館
八天庵	南区川沿十七条二丁目
天政	中央区南三西三
えぞ御殿	中央区南三西六　グランドビル
サイロ	中央区南五西三　北専プラザ
まりも茶屋	中央区南五西五
新星苑札幌支社	東区北六東九　サッポロビール札幌工場内
ドリーム・フード	中央区南八西四　大京ビル
屯田の館	中央区南三西六
魚河岸甚平	中央区北五西四　札幌駅名店街
宮の森ガーデン	中央区宮の森一の一五
百景園	豊平区平岸一の一八
東栄商興	豊平区福住三の一〇の二三一
松尾ジンギスカン薄野支店	中央区南四西五
杉乃目	中央区南五西五
みどり寿司	中央区南四西三
スナックインにれの木	中央区南四西三　第二グリーンビル
かに将軍札幌本店	中央区南四西二の一四
宝龍	中央区南六西三
龍鳳	中央区南十西八
アサヒビール園	白石区南郷通四丁目南一の一
さいとう	中央区南七西三
焼鳥の店・とり安	中央区南六西四　六・四ビル
横田商事	中央区南五西四
金谷観光	中央区南三西六

マルゲン観光　中央区北三西三
天屋　中央区南七西三　みつわビル
すなっくほっほ　中央区南四西三　第三グリーンビル
信和企業・ミカド　中央区南十西一
ドリームハウス　中央区南五西三　美松ビル

7 出版・印刷・広告関係

北海道新聞社　中央区大通西三
北海タイムス社　中央区南一西十
毎日新聞社北海道支社　中央区北四西六
日刊スポーツ新聞北海道本社　中央区南一西十　タイムスビル
北海道放送　中央区北一西五
札幌テレビ放送　中央区北一西八
北海道テレビ放送　豊平区平岸四条十三丁目
北海道文化放送　中央区北一西一四
財界さっぽろ　中央区南九西一
北海道観光百景　中央区南三西四　エイトビル
基水堂金井印刷　中央区南二西五
岩橋印刷　西区手稲東三南六の七
三陽印刷　西区手稲東三北二
佐藤印刷　西区曙二条五丁目二の四〇
サンケイ総合印刷　西区八軒十条西十二丁目二の四八
須田製版　西区二十四軒二の六
凸版印刷北海道事業部　西区二十四軒四の一
特急印刷　中央区南九西十二
六書堂　中央区北一西二
タケヤ工芸　中央区宮の森三の一の八六
電通北海道支社　中央区北大通西五

第一広告社札幌支店	中央区大通西九　丸菱ビル
博報堂札幌支社	中央区北一西一　安田生命ビル
広告の岩泉	中央区南一西四
協同広告社	中央区南一東二
ゼニヤ札幌支店	白石区菊水上町三の三の五二
司	中央区南二西十三
北海道PR通信社	中央区南一西二　第五藤井ビル
パブリックセンター	中央区北一東一　明治生命ビル
タスト	北区北七西四　東カンビル
協同案内企画	中央区南二東三
月刊北海道マービス	中央区南一西六　第二三谷ビル
札幌文学館	中央区南九西三　マジソンハイツ
黄金堂	中央区北十西二十一
大弘社印刷	西区西野一の二
北日本広告社札幌支社	中央区南一東一　太平洋興発ビル
北栄社	東区伏古五条四丁目四の一〇
学生援護会北海道支社	中央区北四西三　成友ビル
スタジオコム	中央区南二西一　安藤ビル
放送アートセンター	中央区北三東三・一の四

8　銀行関係

北海道拓殖銀行	中央区大通西三
北海道銀行	中央区大通西四
北洋相互銀行	中央区大通西三
北海道相互銀行	中央区大通西四
札幌信用金庫	中央区南二西三　札信ビル
第一勧業銀行札幌支店	中央区大通西三
日本興業銀行札幌支店	中央区北一西五

三菱銀行札幌支店	中央区北二西四　道ビル
東京銀行札幌支店	中央区大通西二
三井銀行札幌支店	中央区北一西四
大和銀行札幌支店	中央区北一西三
みちのく銀行札幌支店	中央区南二西六
青森銀行札幌支店	中央区北二西三
岩手銀行札幌支店	中央区北四西三　建設会館
富士銀行札幌支店	中央区北三西三
協和銀行札幌支店	中央区北一西四
秋田銀行札幌支店	中央区大通西四

9　諸会議場・その他

北海道振興	中央区北五西一一の一六　第一〇グリーンビル
栄輪建物	中央区南四西九　栄輪ビル
札幌ターミナルビル	中央区北四西三　北洋駅前ビル
南興ビル	中央区南五西四
北海道会館	中央区北一西六
ウェディングプラザ平安閣	豊平区水車町三の三の一
北海道ビル管理	中央区北五西十二　第五かじのビル
東洋実業	中央区北六西二十二
北海道厚生年金会館	中央区北一西十二
札幌パブリックサービス	中央区北一東一　サン経成ビル
札幌配ぜん人紹介所	中央区北一西九　内藤ビル
札幌中央アーバン	中央区南三西四
札幌中央プロダクション芸能家配ぜん人紹介所	中央区南二西四　乙井ビル

札幌勤労者職業福祉センター・札幌サンプラザ　北区北二四西五
札幌総合予約センター　中央区南六西一　ローズハイツ六〇一

10　団体関係

日本国有鉄道北海道総局　中央区北五西四
札幌市交通局　白石区大谷地四三四
札幌商工会議所　中央区北一西二　経済センター
定山渓観光協会　南区定山渓温泉東三
札幌物産協会　中央区北一西二　市役所内
札幌振興公社　中央区北一西二　経済センター
札幌リゾート開発公社　中央区北一西二　経済センター
札幌建設業協会　中央区北四西三　北海道建設会館
北海道旅館環境衛生同業組合温泉旅館部会　中央区北一西十　札幌旅館会館内
北海道酒造組合　中央区大通西七　酒造ビル
札幌狸小路観光協会　中央区南三西六　えぞ御殿
札幌工芸品協会　中央区南八西五　ハラダ観光商事内
藻岩観光開発協会　南区川沿八の二　藻岩連絡所内
札幌市記念事業振興会　中央区北二東九
在日本大韓民国居留民団北海道地方本部　中央区南九西四
北海道緑園会　中央区南一東一　太平洋興発ビル

11　賛助会員

民宿三八　中央区南三西八

十一、さっぽろ雪まつり一覧

回	開催年月日	主な雪像		観客数（万人）	備考
		（大通会場）	（真駒内会場）		
1	25・2・18―19	裸像、バルザック、首像、白熊			総経費二五四、一八五円
2	26・1・26―27	かがり火を持つヴィーナス、スフィンクス			文化展「雪の教室」併催
3	27・2・9―10	魔性、ハヤテ、波間の電光			主会場を大通西四に移動
4	28・2・7―8	昇天、乙女の祈り、野性の熊			大通西五、七丁目が主会場
5	29・1・28―31	雪の少女、郷愁、讃雪			大通西七、八丁目で大吹雪に見舞わる
6	30・2・27―28	栄光、タルシスの首、メノコと熊			自衛隊が雪像製作に参加
7	31・2・4―5	至誠、熊と闘う狩人、雪の少女			高校不参加、自衛隊員による雪戦会
8	32・2・2―3	七福神			会場を大通西三―七丁目に拡大
9	33・2・7―9	栄光三人像、白雪像			大通西三―八丁目に再拡大
10	34・2・7―8	南極船宗谷、牛若丸と弁慶、雪の時計台		五五	雪まつり実行委員会を組織
11	35・2・5―7	竜宮城、サイロのある風景		七〇	本州からの観光客増加
12	36・2・3―5	西遊記、雪の動物園			極端な雪不足に悩む
13	37・2・2―4	考える人、横綱大鵬の土俵入		八〇	大通西一―八丁目に拡大
14	38・2・1―3	ガリバー旅行記、シンデレラ姫、アラビアンナイト			真駒内でも自衛隊がスノーフェスティバル
15	39・1・31―2・2	おとぎの城、スフィンクス、オリンピックハイライト		一五〇	会場を大通西二～十丁目に
16	40・2・5―7	奈良の大仏、春告魚、新幹線ひかり号	大阪城冬の陣、古代動物園	二九七	真駒内も正式会場に
17	41・2・3―6	伐折羅（ばさら）、愛の泉	トロイの木馬、南極船ふじ		各国大公使ら八十人を招待

18	42・2・2―5	布袋（ほてい）、創世紀、十和田丸	松前城、ウルトラマン対マグラ	三七六
19	43・2・1―4	愛染明王、開拓使庁舎、旧札幌駅	北海道神宮、黒部第四ダム	三九〇
20	44・1・31―2・2	初江王像、一寸法師、ショーボート	万国博と札幌オリンピック、長和殿	四〇一
21	45・1・29―2・1	菩薩半迦像、浦島太郎、アブ・シンベル神殿	人類月に立つ、巨人の星	三一八
22	46・1・26―31	桃太郎の鬼退治、竹取物語、姫路城	平等院鳳凰堂、郷愁D51	四〇五
23	47・1・27―30	金太郎、ガリバー、法隆寺五重の塔	古代の情熱札幌に燃ゆ、清水寺	※一一一
24	48・2・1―5	大国主命、天安門、パンダ	首里城と守礼門、大宰府天満宮	一六一
25	49・2・1―5	さるかに合戦、モナリザと凱旋門	ネッシー、白雪姫、マジンガーZ	一六九
26	50・2・1―5	花咲爺さん、ウィーンの広場	ロボット遊園地、ムーミン谷	一七三
27	51・2・1―5	分福茶釜、ハポサポ像	フランダースの犬、謎のUFO	一七二
28	52・2・1―6	やまたのおろち、西郷さんと桜島	カリバー、コンバトラーV、藤娘	一八四
29	53・2・1―5	舌切り雀、大黒さん、くま牧場	飛べ孫悟空、サイボーグ007	一六二
30	54・2・1―5	桃太郎、明治村、宇宙戦艦ヤマト	アラジンと魔法のランプ、熊本城	一八七
31	55・2・1―5	かちかち山、ミーシャとくん太、西遊記	ドラエモン、旧札幌駅と弁慶号	一八五
32	56・2・4―8	めんそーれ沖縄、アルバータ州議事堂、はばたけ！ポートピア'81	大阪城、東大寺、怪物くん	一八八
33	57・2・3―7	イオラニ・パレス、カメハメハ大王、恐竜王国、博多祇園山笠	ミュンヘン聖丹教会、忍者ハットリくん	一八三
34	58・2・2―6	香港時計塔とスターフェリー、大阪城、セントメアリー大聖堂	シドニーオペラハウス、ピーターパン	一八八
35	59・2・1―5	すさのおの命、バッキンガム宮殿、ルパン三世	パイオニア・コートハウス、おしん	一七六
36	60・2・7―11	かぐや姫、隆恩門、コスモ星丸	南大門、坂本龍馬と高知城	一八五
37	61・2・5―9	宝島、金閣寺、国立博物館（オランダ）	ベネチア広場、植村直己物語	一九〇

総経費初めて一千万円オーバー	
外人観光客大巾に増加	
今回も直前まで雪不足	
大阪万博と札幌オリンピックをPR	
地下鉄工事で大通会場縮小	
※観客数の調査方法を大巾変更	
大通会場に北方領土コーナー設置	
初めて国際雪像コンクール実施	
開会式に全国各地のミス参加	
香港からの観光団が大挙来札	
さっぽろモード発表会が登場	
大雪に見舞れる。三日全面欠航	
岡本太郎がテーマ像をデザイン	
アフリカ・中近東五カ国大使来札	
国際色豊かな会場構成、人出最高	
ハワイ州政府観光局と姉妹提携	
シドニー観光協会が姉妹提携	
ポートランドとの姉妹都市提携二十五周年に因んでの雪像	
ソウル特別市観光協会と姉妹提携	
国際雪像コンクール十三カ国参加	

十二、札幌観光協会関係年表

		主なできごと	社会のできごと
昭和11年（一九三六）	5月16日	札幌観光協会創立総会と発会式を開く（札幌市公会堂）	・二・二六事件発生、高橋蔵相ら殺害
	7月15日	札幌駅構内に観光協会案内所開設	・オホーツク沿岸で皆既日食観測
	10月1日	天皇陛下陸軍特別大演習のため札幌行幸（6日まで）	・スペイン内乱勃発
		札幌市の人口初めて二十万人を突破（二〇一、一三六人）	・日独協定調印
昭和12年（一九三七）	1月20日	雑誌『観光の札幌』を発行	・文化勲章制定
	4月1日	札幌―東京間定期航空路開設（片道六十六円）、市庁舎移転	・藍溝橋事件発生（日中戦争始まる）
	6月10日	第五回冬季オリンピック大会札幌開催決まる	・日独防共協定にイタリアも参加
	7月17日	札幌市長に三沢寛一就任（観光協会第二代会長）	・北海道一斉防空演習実施
昭和13年（一九三八）	4月	絵はがき、リーフレット、写真グラフなど発行	・女優岡田嘉子がソ連に亡命
	7月15日	東京、札幌のオリンピック返上を政府決定	・国家総動員法公布
	8月15日	開道七十年記念式典が札幌神社外苑で挙行	・張鼓峰で日ソ軍衝突
	9月5日	ヒットラーユーゲント31名が来札	・三菱重工で零式艦上戦闘機完成
昭和14年（一九三九）	1月	第一回雪上体育祭が札幌神社外苑で開催	・ソモンハン事件起こる
	5月7日	カフェー、料飲関係者を集めて、「郷土料理」講習会	・関門海底トンネル開通
	5月	大通外十三区が風致地区に指定された	・アメリカ、日米通商条約廃棄を通告
		リーフレット二万部、札幌案内図五万部制作	・ドイツ軍ポーランド侵入
昭和15年（一九四〇）	4月23日	会員旅館の永年勤続従業員を表彰、十五年以上五人他	・ドイツ軍ノルウェー、オランダ侵入
	4月24日	日観連十周年記念功労者として、近藤直人主事表彰される	・米穀通帳配給制実施
		札幌エゾヌプリ会と共催で、ハイキング会をたびたび開催	・日本軍仏印へ進駐
	7月	鳥の巣箱を円山、中島、大通、植物園に五十個設置	・ダンスホール閉鎖
昭和16年（一九四一）	2月4日	第十一回明治神宮国民体育大会冬季大会、札幌ほかで開催	・大政翼賛会北海道支部結成
	4月30日	「札幌エゾヌプリ会」が「札幌健歩会」と改称し、観光協会と共催で、ハイキング、食料確保健歩の会などを次々と実施	・小学校を国民学校と改称
			・真珠湾攻撃、太平洋戦争始まる
昭和17年（一九四二）		雪中行軍、食料確保健歩の会、イモ掘り会などを実施	・衣料切符制実施
		健歩運動リーフレット、版画絵はがき、水彩絵はがきなど販売	・シンガポール占領

		皇軍慰問絵ハガキ二万部作製	
昭和18年（一九四三）	2月18日	豊平館と市公会堂が北部軍飛行第一師団に接収された	・道内の新聞が統合して北海道新聞に
	7月8日	大通公園の黒田清隆、永山武四郎、岩村通俊らの銅像を供出	・ガダルカナル島撤退、アッツ島全滅
	6月20日	写真グラフ『札幌』を発行、各方面に配布	・学徒と女子の動員始まる ・野球用語の日本語化決定
昭和19年（一九四四）	2月	時計台が北部軍通信隊に接収された	・新聞の夕刊廃止
	5月	大通公園約一万坪が畑になった リーフレット、絵はがきなどを販売、健歩の会も盛ん	・昭和新山の火山活動始まる ・サイパン日本軍全滅
昭和20年（一九四五）	4月23日	駅の観光案内所内に戦災疎開相談所を設置	・ヤルタ会談
	8月14日	札幌市長に上原六郎就任（観光協会第三代会長）	・広島、長崎に原爆投下、日本降伏
	10月5日	米第七十七師団八千人が札幌に進駐、豊平館など接収	・農地改革の指令が出る
昭和21年（一九四六）	4月25日	北海道観光連盟創立、札幌観光協会も加盟	・戦後第一回の総選挙実施
	5月17日	定山渓観光協会創立	・極東国際軍事裁判開廷
	6月17日	「北海道国立公園指定促進期成会」設立	・ビギニ原爆実験
昭和22年（一九四七）	4月7日	初代民選市長として高田富与就任（観光協会第四代会長）	・二・一ゼネスト、GHQ中止を命令
		会員わずか二十二名となる。札幌市の補助金もゼロに。	・第一回知事・市町村長、参議院選挙
	8月	狸小路の青空市場を除去し、市設露店を開く	・古橋選手、四〇〇㍍自由形で世界新
昭和23年（一九四八）	9月	観光協会の年度総会開催できず	・新制高技、新制大学発足
		高田会長の指示で、市経済部を中心に協会強化促進協議会設置	・真駒内にキャンプクロフォード完成
	10月18日	北大構内のクラーク胸像再建除幕式	・極東軍事裁判で東条元首相ら絞首刑
昭和24年（一九四九）	3月3日	第四回国体スキー大会札幌で開催	・中島児童会館、中島球場新設
	5月16日	支笏洞爺国立公園指定	・月寒種畜場が北海道農業試験場に
	7月10日	札幌創建八十周年自治制施行五十周年記念祝典	・下山事件、三鷹事件、松川事件続発
昭和25年（一九五〇）	2月18日	第一回さっぽろ雪まつり開催	・白石村が札幌市と合併
	6月17日	札幌観光案内所が駅前市交通局出張所内に開設	・朝鮮戦争ぼっ発
	9月1日	市経済部振興課に観光係が設置される	・札幌市の人口三十万人を突破
昭和26年（一九五一）	1月26日	第二回雪まつりに合わせ、今井デパートで「雪の生活展」開催	・第一回紅白歌合戦がラジオ放送
	5月5日	札幌市円山動物園開園	・マッカーサー元帥解任
	5月23日	市営定期観光バス運行開始	・対日講和条約、日米安保条約調印
	10月	民間航空再開、一番機〝もく星号〟千歳着	

昭和27年（一九五二）	7月18日	観光協会事務局が産業会館二階に移転、道観連と同居する	・白鳥事件起こる
	8月18日	農業試験場から羊ヶ丘への通行禁止を通告	・北海道初の民放ＨＢＣが放送開始
	8月31日	札幌グランドホテル接収解除（11月8日営業再開）	・札幌駅ステーションデパート開業
昭和28年（一九五三）	5月15日	ハワイ、ブラジルから戦後初の海外観光団来札	・朝鮮戦争終わる
	8月	大通花壇写真コンクール開催	・札幌―千歳間弾丸道路が完成
昭和29年（一九五四）	1月16日	世界スピードスケート選挙権大会、円山競技場で開催	・自衛隊発足
	7月19日	第一回札幌夏まつり開幕（8月に第一回狸まつりも）	・中島スポーツセンター完成
	8月21日	第九回国体秋季大会に天皇、皇后陛下ご来札	・洞爺丸事件、岩内大火
昭和30年（一九五五）	2月27日	第六回雪まつりに自衛隊が初めて大雪像をつくる	・札幌村が札幌市に合併
	6月12日	第十回日専連大会開かれ、大パレードが評判になる	・今井デパートにエスカレーター設置
昭和31年（一九五六）	5月18日	協会設立二十周年記念式典をグランドホテルで挙行する	・北日本航空の道内航空路開設
	6月9日	札幌テレビ塔着工（12月22日ＮＨＫテレビ放送開始）	・日ソ共同宣言
	12月25日	近藤直人協会事務局長退職	・原田康子の「挽歌」ベストセラーに
昭和32年（一九五七）	10月25日	大通西二丁目にバスセンター設置	・ソ連人工衛星スプートニクを打上げ
	12月1日	「第一回冬のさっぽろ」ポスターを募集	・札幌―東京間の即時通話開通
昭和33年（一九五八）	3月	第十五回国体スキー大会、札幌で開催	・王子製紙争議始まる
	7月5日	北海道大博覧会を札幌、小樽で開催	・一万円札発行
	12月23日	狸小路三丁目に初のアーケード完成	・北海道の人口、五百万人突破
昭和34年（一九五九）	5月2日	札幌市長に原田与作就任（観光協会第五代会長）	・札幌テレビ（ＳＴＶ）放送開始
	5月29日	第一回さっぽろライラック祭開催	・皇太子御成婚
	8月1日	さっぽろ夏まつりを「さっぽろ商工夏まつり」と改称	・札幌市が米ポートランドと姉妹提供
	9月18日	羊ヶ丘展望台が竣工開設した	・初のレコード大賞に「黒い花びら」
	12月24日	ＮＨＫ、キリスト教団体等と共催で、ホワイトクリスマス開催	
昭和35年（一九六〇）	5月30日	羊ヶ丘の参観が許可になる（6月1日から10月末まで）	・小児マヒ全道に猛威、死者一二四人
	6月4日	第一回スズラン祭り	・浅沼稲次郎社会党委員長、刺殺さる
	7月1日	藻岩山リフト運行開始	
昭和36年（一九六一）	5月1日	札幌市、豊平町と合併、人口六十二万人になる	・ソ連、世界初の人間衛星打上げ成功
	7月1日	札幌交響楽団発足	・函館―旭川にディーゼル特急走る
	10月30日	第一回札幌菊花展が市民会館で開かれる	

昭和37年（一九六二）	7月1日	羊ヶ丘展望台で試験放牧実施	
	11月	大通西二丁目の札幌中央郵便局が移転、取壊わし	・十勝岳大爆発 ・サリドマイド禍が広がる
昭和38年（一九六三）	6月13日	札幌神社が北海道神宮に昇格改称	・青函海底トンネル調査坑着工
	9月23日	観光誘致調査団を北陸地区に派遣	・帝国繊維札幌工場閉鎖
	10月29日	第一回さっぽろ菊花展を大通西七丁目で開催	・ケネディ米大統領暗殺
昭和39年（一九六四）	5月9日	二級国道札幌―虻田線改良舗装促進期成会を開く	・米軍ベトナムを攻撃
	5月26日	豊平館が国の重要文化財に指定される ローヤルホテル（5月）、ホテル三愛（7月）相次いでオープン	・東海道新幹線開通 ・オリンピック東京大会開催
昭和40年（一九六五）	2月5日	雪まつりに真駒内会場が正式参加	・米軍、ベトナム北爆開始
	3月11日	舟橋要が第六代観光協会会長に就任、民間人としては初	・函館本線小樽―旭川間の電化着工
	8月6日	夏まつりに、〝すすきのまつり〟と〝定山渓かっぱ祭り〟が参加	・シンザン五冠馬になる
昭和41年（一九六六）	1月11日	時計台の永久保存を札幌市議会に請願（12月市議会で決議）	・雪まつり帰りの全日空機墜落
	4月27日	冬季オリンピック大会の札幌開催決定	・中国で文化大改革始まる
	8月1日	観光協会30年記念誌『観光札幌』を発行	・ザ・ビートルズ来日
	8月8日	観光協会創立三十周年記念式典を、札幌グランドホテルで開く	
昭和42年（一九六七）	3月1日	札幌市、手稲町と合併、人口八十八万人になる	・東京都知事に美濃部亮吉当選
	8月26日	観光協会の事業として大通公園のトウキビ売りを始める	・北海道文学館設立
	10月29日	さっぽろ菊花展を「さっぽろ菊まつり」と改称	・吉田茂死去、戦後初の国葬
昭和43年（一九六八）	2月1日	雪まつりも開道百年にちなむ雪像が目立った	・東大、日大紛争始まる
	6月14日	北海道百年記念北海道大博覧会が真駒内公園で開幕	・札幌医大で日本初の心臓移植手術
	8月1日	札幌市創建記念式典開く、9月には北海道百年記念式典も	・ソ連などチェコ侵攻
昭和44年（一九六九）	2月7日	地下鉄南北線起工式	・アポロ11号、初の月面着陸に成功
	3月12日	北海道庁旧本庁舎（赤レンガ）が国の重要文化財に指定	・学生による北大封鎖を機動隊が解除
	10月31日	定山渓鉄道、電車を廃業（開業して五十二年間）	
昭和45年（一九七〇）	3月	札幌地下街ポールタウン着工、オーロラタウンは7月	・大阪千里で日本万国博開幕
	6月17日	時計台（旧札幌農学技演式場）が国の重要文化財に指定 札幌の人口百万人を突破	・日航よど号、赤軍派学生が乗取る ・三島由紀夫、自衛隊で割腹自殺
昭和46年（一九七一）	2月7日	札幌国際冬季スポーツ大会（プレオリンピック）開催	・TDA「ばんだい号」横津岳に激突
	4月15日	北海道開拓記念館開館	・円を変動相場制に、一ドル三〇八円

	5月2日	札幌市長に板垣武四が就任	
	10月31日	札幌市新庁舎完成、ロビーに島義勇像を置く	
	11月16日	札幌地下街「ポールタウン」「オーロラタウン」開業	
	12月16日	札幌地下鉄南北線北二十四条―真駒内間営業開始	
昭和47年（一九七二）	2月3日	第十一回冬季オリンピック札幌大会開幕	・沖縄返還協定調印
	4月1日	札幌政令都市に、区制施行	
	5月21日	第一回ミスさっぽろ四人を選出	・横井庄一元軍曹、グアム島で救出
	5月23日	観光協会第七代会長に今井道雄就任	・ニクソン米大統領訪中、田中首相も ・ウォーターゲート事件発生 ・赤軍派浅間山荘事件発生
昭和48年（一九七三）	8月11日	狸小路百年記念式典	・ベトナム和平協定調印
	8月25日	札幌観光協会が社団法人の認可を受ける（基本金八八四万円）	・金大中事件
	8月4日	夏まつりで各国スチュワーデス十七名のパレード	・第一次石油ショック発生
昭和49年（一九七四）	2月1日	雪まつりで初めて国際雪像コンクールを実施	・米大統領ニクソン辞任
	11月1日	さっぽろ菊まつりの会場を、札幌地下街に移す	・金権問題で田中首相辞任 ・北方圏環境会議を札幌で開催
昭和50年（一九七五）	1月31日	ミスさっぽろ審査会を雪まつり時期に繰上げる	・南ベトナム政府軍降伏
	7月1日	札幌市に観光部を設置	・沖縄海洋博覧会開幕
	7月10日	観光協会創立四十年記念式典を、札幌パークホテルで開催 香港に第一回親善使節団派遣	・第十三回日米市長、会頭会議札幌で
昭和51年（一九七六）	4月16日	羊ヶ丘展望台でクラーク博士銅像除幕式	・道庁ロビー爆破事件、二人死亡
	5月29日	姉妹都市ミュンヘンのマイバウム大通西十一丁目に設置	・ロッキード事件で田中前首相逮捕
	6月10日	札幌地下鉄東西線琴似―白石間営業開始	・ソ連二百カイリ水域設定を布告
	12月18日	時計台に「札幌歴史館」オープン	
昭和52年（一九七七）	2月1日	雪まつり前夜祭で「さっぽろモード発表会」を開催	・有珠山大爆発
	5月16日	香港で香港観光協会と姉妹提携を調印	・王貞治、本塁打世界最高記録を樹立
	7月21日	北海道近代美術館開館	・平均寿命、男女とも世界一となる
昭和53年（一九七八）	2月3日	雪まつりが大雪に見舞われる	・イラン革命始まる
	10月16日	時計台創建百年記念式	・成田空港使用開始
昭和54年（一九七九）	2月1日	第三十回記念雪まつりに、岡本太郎のシンボル大雪像製作	・初の国公立大共通一次試験実施
	2月20日	『さっぽろ雪まつり30年史』を刊行	・第二次石油ショック
	6月19日	沖縄県観光連盟と姉妹提携調印	

	7月21日	夏まつりにポートランド市からローズクィーンら参加	・ソ連軍、アフガニスタンへ侵攻
昭和55年（一九八〇）	7月1日	豊平川で二十五年ぶりにサケのそ上を確認	・山口百恵婚約発表
		「好きです。Sapporo」をテーマに、観光月間を設定	・ポーランドで自主労組「連帯」結成
		大通西一丁目から十三丁目まで掃除	・千歳空港駅開業
昭和56年（一九八一）	6月16日	JALの札幌―ホノルル直行便就行記念で、親善使節団を派遣	・中国残留日本人孤児、初の来日
	2月2日	札幌・香港親善協会を設立	・神戸で「ポートピア'81」開幕
	9月14日	大通公園西三丁目に石川啄木像と歌碑を建立	・黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん」
	12月12日	第一回ホワイトイルミネーションを大通西二丁目で点灯	
昭和57年（一九八二）	2月2日	雪まつり会場でハワイ州観光局との姉妹提携調印	・ホテルニュージャパン火災
	10月30日	さっぽろ菊まつり第二十回を迎える、『二十年のあゆみ』刊行	・日航機、羽田沖で逆噴射、死者二十四人
	11月	狸小路の新アーケード完成	・東北新幹線開業
昭和58年（一九八三）	2月2日	雪まつり会場でシドニー観光協会との姉妹提携調印	・東京ディズニーランド開園
	7月6日	オーストラリア親善使節団を派遣	・フィリピンのアキノ議員暗殺
	7月23日	第三十回さっぽろ夏まつり記念式典、『三十年記念誌』刊行	・大韓航空機サハリン沖で撃墜される
	11月17日	ソウル第一回親善使節団を派遣	・日本海中部沖地震で死者一〇四人
昭和59年（一九八四）	2月2日	羊ヶ丘展望台に羊ヶ丘ウエディングパレス完成	・三浦和義「ロス疑惑」騒ぎ始まる
	10月19日	日本文化デザイン会議札幌会議で、さっぽろ雪まつり実行委に地域文化デザイン賞が贈られた	・植村直己、マッキンリーで消息絶つ
	12月1日	第四回ホワイトイルミネーションを大通西二～西六に拡大	・グリコ社長誘拐、森永脅迫事件発生
昭和60年（一九八五）	2月7日	雪まつり会場でソウル特別市観光協会との姉妹提携調印	・筑波科学万博開幕
	6月28日	ホワイトイルミネーションに第二回札幌市都市景観賞	・有毒ワインの輸入、販売が問題化
	7月19日	羊ヶ丘展望台に新レストハウスがオープン	・日航ボーイング機墜落五二〇人死亡
昭和61年（一九八六）	5月15日	雪まつり実行委で、来年三十八回から、会期の二日間延長を決める	・天皇在位六十周年記念式典
	6月25日	観光協会創立五十年記念式典を、札幌グランドホテルで開く、記念誌『好きです。さっぽろ』を発行	・ソ連原発が炉心溶融事故

あとがき

早いもんですね、札観が誕生してから五十年、といってもお披露目してまもなく戦時体制に突入、〝観光〟どころではないと〝途中下車〟したかっこう。全国の観光協会の八割は解散。北海道では札観だけが看板を外さずに細々と生き永らえてきた。

札観が札観らしくなったのは、昭和二十五年からはじまった〝雪まつり〟をきっかけに今日まで、観光施設の整備、とりわけ羊ケ丘展望台は北海道らしい景観として評価を高めてきました。さらに国際交流の一環として海外観光協会との姉妹提携など多角的な、そして飛躍的な成長をすることができました。これも歴代会員、役職員はもとより、札幌市はじめ関係官庁諸団体、そして何よりも市民の皆さまのおかげです。厚くお礼申し上げるとともに、次なる五十年に向けて一層の努力を誓う次第です。

この機会に創立前後から現在までの歩みと、札幌の観光事情を一冊にまとめようということになり、仕事柄私が刊行委員会の責任者を仰せつかりました。しかし資料の収集整理と執筆編集などの実務は、札幌の昭和史を熱心に調べている阿部要介氏と、札幌を愛する写真家の伊丸岡秀蔵氏にお願いしました。

津田光夫常務、逆井浩係長ら観光協会事務局の諸君も、羊ケ丘展望台倉庫の天井裏には い上って、古い記録類を見つけるなど頑張ってくれました。札幌市観光部をはじめ、協力して下さった多くの皆さまにも、厚く御礼申し上げます。また、本書ではすべて敬称を略させていただきましたことを、ここでおわびしておきます。

創立後しばらくは観光に対する理解が不十分で、しかも戦中戦後の混乱期を挟んでいるため、資料などを完集することが難しく、不行届きの点も多々あることと存じます。しかし本書によって、観光協会と札幌市の発展について、多少なりともご理解いただけるよう切望して、あとがきといたします。

㈳札幌観光協会副会長　薩　一夫

謝辞

本書執筆にさいしては、札幌観光協会と札幌市の観光行政に関係し、あるいは関係された多くの方々から、証言やご協力をいただいたほか、近藤直康、楡金幸三、坂坦道、桐原酉次の各氏からも、貴重なお話を伺った。札幌市教育委員会文化資料室、札幌市交通局、北大図書館、北海道立図書館、同文書館、札幌市中央図書館、札幌グランドホテル、岩田建設㈱、㈱札幌都市開発公社、㈱マルサン企画、㈱ユニ・フォトからは、貴重な写真提供などの便宜をはかっていただいた。感謝する。

資料としては、札幌観光協会と札幌市の戦前からの各種刊行物をはじめ、旧北海道タイムス、小樽新聞、北海道新聞、北海タイムスその他の新聞記事が大変参考になり、いくつかは本文にも引用させていただいた。そのほか、札幌、北海道に関する多数の出版物、最近目立ってふえている昭和史関係の図書からもいろいろ教えていただき、記述にふくらみを持たせることができたと思う。新聞、パンフレットなどをのぞく参考図書のうち、主なものを以下に記載する（順不同）。

「観光の札幌」（札幌観光協会）昭和12年1月、「観光札幌―札幌観光協会30年記念誌」（札幌観光協会）昭和41年8月、「第十回さっぽろ雪まつり記念写真集」（札幌観光協会）昭和34年2月、「さっぽろ雪まつり20年の歩み」（札幌市）昭和44年9月、「さっぽろ雪まつり30年史」（札幌観光協会）昭和54年2月、「さっぽろ夏まつり三十年」（札幌市）昭和58年7月、「さっぽろライラックまつり二十五年のあゆみ」（札幌市）昭和59年5月、「さっぽろ菊まつり二十年の歩み」（札幌市）昭和57年11月、「クラークのすべて」（札幌観光協会）昭和51年4月、「啄木と札幌―石川啄木記念像建立記念誌」（札幌観光協会）昭和56年9月。

「札幌市史」（札幌市）昭和28年2月、「札幌市史概説年表」（札幌市）昭和30年8月、「豊平町史」（豊平町）昭和34年3月、「昭和十一年陸軍特別大演習並地方行幸記念写真帖」（北海道庁）昭和12年7月、「第11回オリンピック冬季大会札幌市報告書」（札幌市）昭和47年12月、「さっぽろの足」（札幌市交通局、毎日新聞社）昭和52年12月、「さっぽろの地下鉄・バス・電車」（札幌市交通局）昭和60年11月、「札幌地下鉄建設物語」（同刊行委員会）昭和60年11月、「札幌の観光の見直しと提言」（札幌商工会議所）昭和59年10月。

「札幌歴史地図」「札幌歴史写真集」「札幌生活文化史」（さっぽろ文庫別冊、札幌市教育委員会、北海道新聞社）昭和53年9月―61年2月。

《さっぽろ文庫》①「札幌地名考」（札幌市教育委員会、北海道新聞社＝以下同じ）昭和52年9月、⑤「札幌の詩」53年8月、⑥「時計台」53年10月、⑦「札幌事始」54年1月、⑨「札幌の短歌」54年6月、⑪「札幌の駅」54年12月、㉒「市電物語」57年9月、㉓「札幌の建物」57年12月、㉛「札幌食物誌」59年12月、㉜「大通公園」60年3月、㊱「狸小路」61年3月。

《ＨＴＢまめほん》②「ライラック」（辻井達一、北海道テレビ放送＝以下同じ）昭和45年5月、④「定山渓鉄道」（桐原酉次）45年10月、⑭「時計台」（遠藤明久）48年1月、⑱「狸小路」（金田一昌三）48年9月、㉓「豊平館」（遠藤明久）51年1月、㉕「北大植物園」（辻井達一）51年11月、㉘「羊ケ丘」（高畑滋）52年7月。

「札幌繁昌図録」（高崎龍太郎、函館銅版所）明治20年5月（財界さっぽろ復刻、昭和56年6月）、「札幌繁昌記」（木村昇太郎）明治24年9月、「札幌案内」（狩野信平、廣目屋）明治32年6月（みやま書房復刻、昭和49年12月―50年1月）、「さっぽろの昔話」（河野常吉編、みやま書房）昭和53年2月―3月、「北海道大百科事典（北海道新聞社）昭和56年8月、「北海道百年」（北海道新聞社）昭和43年7月、「北海道文学散歩・道央編」（木原直彦、北海道新聞社）昭和57年10月、「さっぽろ大通」（札幌の歴史を楽しむ会、新北海道教育新報社）昭和56年10月、「札幌の食いまむかし」（茜会、北海道教育社）昭和59年11月。

「開拓使事業報告」（大蔵省）明治18年11月、「北海道物産共進会報告」（北海道庁）明治25年12月、「開道五十年記念北海道博覧会事務報告」（北海道庁）大正9年3月、「国産振興博覧会誌」（北海タイムス社）昭和2年12月、「国産振興北海道拓殖博覧会々誌」（同博覧会）昭和7年8月、「北海道工業振興共進会写真帖」（同共進会）昭和10年12月、「北海道大博覧会誌」（北海道新聞社）昭和43年12月。

「札幌駅80年史」（札幌駅）昭和35年11月、「札幌テレビ塔二十年史」（北海道観光事業株式会社）昭和53年3月、「札幌地下街十年誌」（札幌都市開発公社・札幌地下街商店会）昭和56年11月、「札幌とともに半世紀―ＮＨＫ札幌放送局のあゆみ」（同上）昭和59年12月、「札幌グランドホテルの50年」（三井観光開発株式会社）昭和60年4月、「さなぶり東裏百年記念誌」（東裏親交会、楡書房）昭和55年3月、「私の50年」（原田与作、北海道新聞社）昭和51年4月、「阿寒国立公園の三恩人」（種市佐改、釧路観光連盟）昭和59年10月、「私の歩んだ道（舟橋要）」（産業研究所）昭和38年12月。

社団法人 **札幌観光協会・事業所**

事務局
中央区北１条西２丁目　札幌市役所内　２階
TEL　211－3341，231－1970
〒 060

羊ケ丘展望台
豊平区羊ケ丘１番地
TEL 851－3080
〒 004

羊ケ丘ウェディングパレス
豊平区羊ケ丘１番地
TEL 854－5342，854－5345
〒 004

札幌市観光案内所
中央区北５条西４丁目 札幌駅構内
TEL 221－0013，251－0828
〒 060

とうきびセンター
中央区大通西１丁目　北海道観光事業㈱内
TEL 241－1131
〒 060

札幌市ムイネ山荘
南区定山渓849番地
TEL 590－2122
〒 005

好きです。さっぽろ
札幌観光協会50年記念誌

昭和61年６月25日発行 頒布価格3,000円

編集者
阿部　要介

発行者
札幌観光協会50年記念誌刊行委員会

発行所
社団法人札幌観光協会
札幌市中央区北１条西２丁目札幌市役所内

印刷所
凸版印刷株式会社北海道事業部
札幌市西区二十四軒４条１丁目１番30号

定価
3,000円

©1986 社団法人札幌観光協会

定価3,000円